公益財団法人　大阪府文化財センター調査報告書　第 246 集

箕面市

止 々 呂 美 城 跡

高速自動車国道近畿自動車道名古屋神戸線建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2014 年 3 月

公益財団法人　大阪府文化財センター

公益財団法人　大阪府文化財センター調査報告書　第 246 集

箕面市

止 々 呂 美 城 跡

高速自動車国道近畿自動車道名古屋神戸線建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

公益財団法人　大阪府文化財センター

カラー図版 1

2011 年 1 月 31 日撮影

（下が北西）

カラー図版２

1　上止々呂美より池田方面を望む（中央上部に止々呂美城跡）　北東から

2　下止々呂美より池田方面を望む（中央左寄りに止々呂美城跡）　北東から

1　下止々呂美より余野方面を望む（中央下寄りに止々呂美城跡）　南西から

2　下止々呂美・上止々呂美集落と止々呂美城跡（中央に止々呂美城跡）　南西から

カラー図版 4

1　下止々呂美より川西方面を望む（中央下寄りに止々呂美城跡）　南東から

2　止々呂美城跡と背後の山稜（中央に止々呂美城跡）　北西から

1　止々呂美城跡近景　　北西から

2　止々呂美城跡近景（Ⅰ期地区完掘）　　南西から

カラー図版６

１　遠構え部全景　　南から

２　遠構え部　土層断面（Ｋライン）　　北から

1　36 堀切　　南東から

2　36 堀切　断面　　南西から

カラー図版８

16 土坑　釘・骨・炭化材検出状況

29 土坑　炭層検出状況

29 土坑　被熱痕跡

２土坑　石組み検出状況

序　　文

止々呂美城跡は箕面市北域の山間部止々呂美地区にある山城です。北摂山地の山塊から北西側にせり出した尾根の先端に位置しています。眼下には余野川が流れ、京都府亀岡市と大阪府池田市を結ぶ摂丹街道を見下ろすことができます。

北摂地方では中世から近世初頭にかけて大小多くの山城が築かれました。起伏の激しい山稜が連続する地形を有し、自然の要害として容易に利用できたことは言うにおよばず、大坂や京都に近く、これらの都市部から丹波、山陰地方へ通ずる道が発達していたことや、豊かな自然に恵まれ農林業、鉱業が盛んであったことから、当時、政治・経済的に重要な位置を占めていた地域であったということも大きな理由として挙げることができるでしょう。よって、当城が、街道を行きかう人々の眼前にそびえ立ち、軍権や交通路の掌握に睨みを利かせていたことは想像に難くありません。

さて、このたび、西日本高速道路株式会社により高速自動車国道近畿自動車道名古屋神戸線建設工事が施工されるにあたり、本工事に先立った埋蔵文化財発掘調査を実施する運びとなり、漠然とその存在が知られていただけであった当城に対し、初めて本格的な調査を行なうことができました。

調査の結果、尾根頂部でその付け根を切る形で掘削された溝２条を検出しましたが、これらの溝は城の遠隔地点に設けられた「遠構え」の堀切にあたると考えられます。この発見は、山城の規模と構造を考える上で、新たな視点を加えることになりました。また、尾根の頂部を中心に墓葬に関係すると考えられる、多くの木炭や人骨を含んだ焼土坑が検出されました。近隣では、中世墳墓群の小畑遺跡がありますが、止々呂美地区ではそれに次ぐ中世墓の発見ともなりました。今後、これらの調査成果が有効に活用され、地域の歴史像をより豊かにし、文化財に対する意識をさらに高めてくれることを希望します。

なお、現在の止々呂美地区は、緑豊かな山々に抱かれ、合戦にて跋扈した武者達の喧騒とは裏腹に、静寂な空気漂い、大阪府の都市部近郊では類まれな自然に満ち溢れた野生動植物の宝庫となっています。調査中、人家近くに野生のサルやシカの群れが平然とあらわれ、猛禽類が大空を舞うさまは、近代的な郊外都市である箕面市のイメージとはかけ離れ、驚かされたものです。

最後になりましたが、調査に際し、地元自治会、大阪府教育委員会、箕面市教育委員会、西日本高速道路株式会社をはじめ、皆様にご援助いただきましたことに感謝申し上げるとともに、今後とも当センターの文化財調査に一層のご理解とご協力をお願いする次第です。

2014年３月

公益財団法人　大阪府文化財センター
理　事　長　　田　邉　　征　夫

例　　言

1．本書は、大阪府箕面市下止々呂美に所在する止々呂美城跡（とどろみじょうあと）の発掘調査報告書である。調査名は、止々呂美城跡09‐１である。

2．現地調査は、「高速自動車国道近畿自動車道名古屋神戸線建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査（箕面市域）その２」として、西日本高速道路株式会社と財団法人大阪府文化財センター（現公益財団法人大阪府文化財センター）が、平成22年１月29日に委託契約を締結し、実施した。委託期間は平成22年２月１日から平成25年５月20日で、調査期間は平成22年３月25日から平成25年４月30日である。

報告書作成事業は、「高速自動車国道近畿自動車道名古屋神戸線建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査遺物整理（箕面市域）」として、西日本高速道路株式会社関西支社新名神大阪西事務所と公益財団法人大阪府文化財センターが、平成25年４月22日に委託契約を締結し、実施した。委託期間は、平成25年５月１日から平成26年３月31日である。

3．調査は以下の体制で実施した。

平成21（2009）年度　調査部長兼調査課長福田英人、調整グループ長金光正裕
調査グループ長寺川史郎、主査（中部総括）秋山浩三

平成22（2010）年度　調査部長兼調査課長福田英人、調整グループ長江浦　洋、主幹岡本茂史
調査グループ長岡戸哲紀、主査（中部総括）秋山浩三、副主査信田真美世

平成23（2011）年度　調査課長江浦　洋、調整グループ長岡本茂史
調査グループ長岡戸哲紀、主幹（新名神総括）金光正裕、副主査岡本圭司、同信田真美世、技師志田真吾

平成24（2012）年度　調査部長江浦　洋、調整課長岡本茂史
調査課長岡戸哲紀、主幹（新名神第一総括）金光正裕、
主査（新名神第二総括）亀井　聡、副主査岡本圭司、同信田真美世

平成25（2013）年度　事務局次長兼総務企画課長江浦　洋、調整課長岡本茂史
調査課長岡戸哲紀、調査第一課長補佐金光正裕、副主査岡本圭司、
同信田真美世、専門調査員片山彰一〔写真〕、同山口誠治〔保存〕

4．木製品、金属製品の保存処理は、保存室が行なった。

5．調査にあたり、大阪府教育委員会、箕面市教育委員会、下止々呂美自治会、上止々呂美自治会、箕面市止々呂美地域まちづくり協議会、止々呂美水利組合をはじめとする各機関、諸氏にご指導、ご協力を賜った。

6．城郭の調査に関し、元奈良女子大学・大阪大学教授村田修三氏より指導を受け、本報告書に玉稿を賜った。

7．人骨の鑑定・分析は、大阪市立大学医学部安部みき子氏に依頼した。

8．放射性炭素年代測定（ＡＭＳ法）は、株式会社パレオ・ラボに委託した。

9．本書の執筆、編集は、信田が行なった。

10．本調査に関わる写真、実測図などの記録類は、公益財団法人大阪府文化財センターにおいて保管している。広く利用されることを希望する。

凡　　例

1．遺構図の基準高は、東京湾平均海面（T.P.）からのプラス値で、すべてm単位である。
2．遺構図の座標は、世界測地系（測地成果2000）によって測量し、国土座標法による平面直角座標第Ⅵ系で示している。表記はすべてm単位である。
3．遺構図に付した方位は、すべて座標北である。
4．土層断面図の土色は、小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖』2008年版　農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修に準拠した。
5．遺構番号は、種類に関係なく通し番号を付した。ただし、山頂棚田部の棚田については、別途番号を付している。
6．地形図、遺構実測図、土層断面図の詳細は以下の通りである。
　・縮尺は、各図のスケールに明記している。
　・断面位置は、「└　　┘」によってその位置を示した。
7．遺物実測図・拓本の詳細は以下の通りである。
　・縮尺は、各図のスケールに明記している。
　　土器・陶磁器が１／３、珠・銭貨が１／１、釘が２／３、石塔が１／４等である。
　・土器・陶磁器実測図の直線のうち、実線は強い稜線、隙間を１箇所開けた線は調整の境、隙間を２箇所開けた線は調整の単位の境または弱い稜線を表現している。
　・番号は、実測図掲載順の通し番号である。付表にのみ掲載しているものは、実測図の最終番号に続く番号を付した。
8．付表に記している遺物の法量は、()を付したものは復元値、〈〉を付したものは残存値である。
9．図版の縮尺は統一していない。
10．付図１は、現況の航空測量図（原図１/500）に、付図２の調査地平面図（等高線の間隔は0.5ｍ）を合成したものである。
　付図２は、基盤層上面の航空測量図（原図１/50）である。ただし、山頂遠構え部及び北面斜面下位部については、基盤層上面ではなく、第２面である。

目　　次

カラー図版１～８
序文
例言
凡例
目次

第１章　位置と環境
　第１項　自然環境 …… 1
　第２項　歴史環境 …… 1

第２章　調査の経緯、経過と方法
　第１項　調査の経緯、経過 …… 9
　第２項　調査の方法 …… 9

第３章　調査成果
序　節　調査の概要 …… 11
第１節　山頂 …… 19
　第１項　棚田部 …… 19
　　１．第１面 …… 19
　　２．第２面 …… 31
　第２項　頂上部 …… 43
　　１．第１面 …… 43
　　２．第２面 …… 43
　第３項　遠構え部 …… 49
　　１．第１面 …… 52
　　２．第２面 …… 55
　　３．第３面 …… 63
第２節　南面斜面から谷 …… 64
　第１項　斜面部 …… 64
　第２項　谷部 …… 88
　　１．第１面 …… 88
　　２．第２面 …… 89
　　３．第３面 …… 92
第３節　北面斜面 …… 93
　第１項　上位から中位部 …… 93

第２項　下位部 …… 106
１．第１面 …… 109
２．第２面 …… 109
３．第３面 …… 109

第４章　自然科学による分析
第１節　止々呂美城跡火葬遺構出土人骨について ……（安部みき子）113
第２節　放射性炭素年代測定 ……（株式会社パレオ・ラボＡＭＳ年代測定グループ）115

第５章　総括 …… 121

付　論　発掘調査成果による止々呂美城の再評価 ……（村田修三）129

付表
図版
抄録

挿　図　目　次

図１　止々呂美城周辺の主要城郭 …… 2
図２　遺跡周辺地図（１）…… 3
図３　遺跡周辺地図（２）…… 6
図４　地区割図 …… 10
図５　地域割・土層断面位置図 …… 12
図６　Ｃライン　断面図 …… 13・14
図７　Ｄライン　断面図 …… 15・16
図８　Ｇライン　断面図 …… 17・18
図９　Ｅライン　断面図 …… 19
図10　棚田部　第１面　平面図 …… 20
図11　Ｃライン　断面図 …… 21・22
図12　Ｄライン　断面図 …… 23・24
図13　Ｅライン　断面図 …… 25・26
図14　Ｆライン　断面図 …… 27
図15　１溝、６・10石組　断面図 …… 29
図16　７石組　断面図 …… 30
図17　棚田部　第１面関連　出土遺物 …… 30
図18　棚田部　第２面　平面図 …… 32
図19　11・12土坑　平面・断面図 …… 33
図20　13・14土坑　平面・断面・立面図 …… 34
図21　16土坑　平面・断面図 …… 36
図22　16土坑　出土遺物 …… 37
図23　15・20土坑　平面・断面図 …… 38
図24　17土坑　平面・断面図 …… 39
図25　29土坑　平面・断面図 …… 41
図26　29土坑　出土遺物 …… 41
図27　25土坑　平面・断面図 …… 42
図28　Ｈライン　断面図 …… 44
図29　Ｇライン　断面図 …… 45・46
図30　頂上部　第２面　平面図 …… 47
図31　３土坑　平面・断面図 …… 48
図32　頂上部　出土遺物 …… 48
図33　遠構え部　第１面　平面図 …… 49
図34　Ｉライン　断面図 …… 50
図35　Ｊライン　断面図 …… 51
図36　Ｌライン　断面図 …… 52
図37　Ｋライン　断面図 …… 53・54
図38　31土坑　平面・断面図 …… 55
図39　遠構え部　第２面　平面図 …… 56
図40　遠構え部　第３面　平面図 …… 57
図41　32土坑　平面・断面図 …… 59
図42　33堀切、34溝　断面図 …… 60
図43　36堀切　断面図 …… 61
図44　35土坑　平面・断面図 …… 62
図45　48ピット、49集石　平面・断面図 …… 63
図46　畦状盛土　断面図 …… 64
図47　Ａライン　断面図 …… 65・66
図48　Ｂライン　断面図 …… 67・68

図49　Ｂライン　断面図（１／３）…… 69・70
図50　Ｂライン　断面図（２／３）…… 71・72
図51　Ｂライン　断面図（３／３）…… 73
図52　Ｃライン　断面図 …… 75・76
図53　Ｄライン　断面図 …… 77・78
図54　Ｇライン　断面図 …… 79・80
図55　南面斜面部（西部）　平面図 …… 81
図56　37・38土坑　平面・断面図 …… 82
図57　石塔出土地点Ａ・Ｂ
　　平面・立面・断面図 …… 84
図58　石塔出土地点Ａ・Ｃ　出土遺物 …… 85
図59　石塔出土地点Ｃ　平面・立面図 …… 85
図60　石塔出土地点Ｂ　出土遺物 …… 86
図61　土師器皿38・39　出土状況　平面図 …… 86
図62　南面斜面部　出土遺物 …… 87
図63　南面谷部　出土遺物 …… 88
図64　南面谷部　第１面、第２面　遺構平面図 … 89
図65　43・44土坑　平面・断面図 …… 90
図66　41・42・47土坑　平面・断面図 …… 91
図67　46土坑　平面・断面図 …… 92
図68　北面斜面　出土遺物 …… 93
図69　56土坑　平面・断面図 …… 93
図70　北面斜面上位から中位部（東部）　平面図… 94
図71　Ｃライン　断面図 …… 95・96
図72　Ｇライン　断面図 …… 97・98
図73　２土坑　平面・立面・断面図 ……100
図74　２土坑　北東半部骨片等出土状況
　　平面図 ……101
図75　２土坑　出土遺物（１）……102
図76　２土坑　出土遺物（２）……103
図77　50土坑　平面・断面図 ……104
図78　57・58土坑　平面・断面図 ……105
図79　北面斜面下位部　第１面　平面図 ……106
図80　石塔出土地点Ｄ　平面・断面図 ……107
図81　石塔出土地点Ｄ　出土遺物 ……107
図82　Ｍライン　断面図 ……108
図83　北面斜面　出土遺物 ……109
図84　北面斜面下位部　第２面　平面図 ……110
図85　61～63溝　断面図 ……111
図86　64・65ピット　平面・断面図 ……112
図87　北面斜面下位部　第３面　平面図 ……112
図88　暦年較正結果（１）……118
図89　暦年較正結果（２）……119
図90　止々呂美城　遠構え ……123
図91　山頂　第１面　平面図 …… 125・126

第１図　止々呂美城の地理的環境 ……130
第２図　止々呂美城縄張図 ……131
第３図　止々呂美城主体部復元推定図 ……131
第４図　中山の付城 ……132
第５図　余野本城 ……133
第６図　止々呂美城と道 ……135

表　目　次

表１　止々呂美城跡から出土した主な火葬人骨 …114
表２　測定試料及び処理 ……116
表３　放射性炭素年代測定及び暦年較正の結果 …117

写　真　目　次

写真１　遺跡周辺航空写真 …… 7
写真２　喰い違い虎口 …… 8
写真３　主郭 …… 8
写真４　北側の土塁 …… 8
写真５　空堀西南端と南側の土塁 …… 8
写真６　瓦質祠と石塔類 …… 8
写真７　石塔類 …… 8

付　表　目　次

付表１　掲載土器・陶磁器一覧表（１）……140
付表２　掲載土器・陶磁器一覧表（２）……141
付表３　出土木製珠一覧表 ……141
付表４　掲載釘一覧表（１）……142
付表５　掲載釘一覧表（２）……143
付表６　出土銭貨一覧表 ……143
付表７　掲載金属製品一覧表 ……143
付表８　出土石塔一覧表 ……144

図　版　目　次

図版１　全景（航空写真合成）
図版２　止々呂美城跡周辺航空写真（１）
図版３　止々呂美城跡周辺航空写真（２）
図版４　止々呂美城跡周辺
図版５　山頂　棚田部（１）　第２面
図版６　山頂　棚田部（２）　第２面
図版７　山頂　棚田部（３）　第２面
図版８　山頂　棚田部（４）　第２面
図版９　山頂　棚田部（５）　第２面
図版10　山頂　棚田部（６）　第２面
図版11　山頂　棚田部（７）　第２面
図版12　山頂　棚田部（８）　第２面
図版13　山頂　棚田部（９）　第２面
図版14　山頂　頂上部（１）
図版15　山頂　頂上部（２）
図版16　山頂　頂上部（３）　第１面
図版17　山頂　頂上部（４）　第２面
図版18　山頂　遠構え部（１）
図版19　山頂　遠構え部（２）　第１面
図版20　山頂　遠構え部（３）　第１面
図版21　山頂　遠構え部（４）　第２面
図版22　山頂　遠構え部（５）　第２面
図版23　山頂　遠構え部（６）　第２面
図版24　山頂　遠構え部（７）
図版25　山頂　遠構え部（８）
図版26　山頂　遠構え部（９）
図版27　山頂　遠構え部（10）　第２面
図版28　山頂　遠構え部（11）　第２面
図版29　山頂　遠構え部（12）　第２面
図版30　山頂　遠構え部（13）　第２面
図版31　山頂　遠構え部（14）　第２面
図版32　山頂　遠構え部（15）　第２面
図版33　山頂　遠構え部（16）　第２面
図版34　山頂　遠構え部（17）　第２面
図版35　山頂　遠構え部（18）　第２面
図版36　山頂　遠構え部（19）　第３面
図版37　山頂　遠構え部（20）　第３面
図版38　南面斜面から谷　斜面部（１）
図版39　南面斜面から谷　斜面部（２）
図版40　南面斜面から谷　斜面部（３）
図版41　南面斜面から谷　斜面部（４）
図版42　南面斜面から谷　斜面部（５）
図版43　南面斜面から谷　谷部（１）　第３面
図版44　南面斜面から谷　谷部（２）
図版45　北面斜面　上位から中位部（１）
図版46　北面斜面　上位から中位部（２）
図版47　北面斜面　上位から中位部（３）
図版48　北面斜面　上位から中位部（４）
図版49　北面斜面　下位部　第２面
図版50　山頂　出土遺物（１）
図版51　山頂　出土遺物（２）
　　南面斜面　出土遺物（１）
図版52　南面斜面　出土遺物（２）
図版53　南面斜面　出土遺物（３）
図版54　北面斜面　出土遺物（１）
図版55　北面斜面　出土遺物（２）
図版56　北面斜面　出土遺物（３）　南面谷　出土遺物

付　図　目　次

付図１　止々呂美城跡　平面図（Ｓ＝１：1,000）
付図２　止々呂美城跡　平面図（Ｓ＝１：300）

第１章　位置と環境

止々呂美（とどろみ）城跡は、大阪府の北西部、箕面市下止々呂美に位置する。

第１項　自然環境

近畿地方北部に広がる丹波高地の南東部を占める、摂丹山地に立地する。山地は標高400 ～ 600ｍの高原状で、断層（京都盆地西縁断層系）を境にして隆起したといわれている。千里丘陵等の丘陵地を挟み、南は淀川水系の大阪平野、東は京都盆地に接している。山地内部には河川沿いに沖積低地がみられ、止々呂美地区もそのひとつである。

余野（よの）川は、豊能町と亀岡市を限る鴻応（こうの）山に発し、南西流して池田市で猪名川に注いでいる。上流域では余野地区、中流域では止々呂美地区と流域で狭い平野を形成しているが、それ以外の大部分では両岸に山が迫る渓谷を呈している。

止々呂美地区は、周囲を明ヶ田尾山（あけだおやま・標高620ｍ）、鉢伏山（はちぶせやま・標高603ｍ）、青貝山（あおがいやま・標高391ｍ）等の山々に囲まれる。北東部は大字「上止々呂美」、南西部が「下止々呂美」である。余野川両岸の標高160 ～ 220ｍに水田が、山際及び余野川支流沿いの標高170 ～ 230ｍに集落が営まれている。集落の背後の斜面地は、果樹栽培等に利用されている。

止々呂美城跡の立地する字「宮山」は、下止々呂美集落の南西端を限る位置にある。余野川に向かい、南東から北西方向に迫り出す尾根である。平地はここまでで、これより下流は久安寺、伏尾まで渓谷となる。尾根は、北西を余野川に、南西を現在箕面有料道路となっている谷筋に、北東を余野川支流の奥山川に面し、三方が急斜面を呈している。「宮山」は標高228ｍで、北西の余野川沿いの平地（標高164ｍ）との比高差は64ｍである。奥山川沿いの谷筋は、標高170 ～ 200ｍで、「奥ノ所」（おくんじょ）と呼ばれる垣内（かいち）である。「宮山」と尾根続きの調査地最高所（標高231ｍ）と「奥ノ所」の比高差は約40ｍである。この調査地最高所より南東側が唯一、鉢伏山等と連なる山稜へと続く尾根筋となっている。

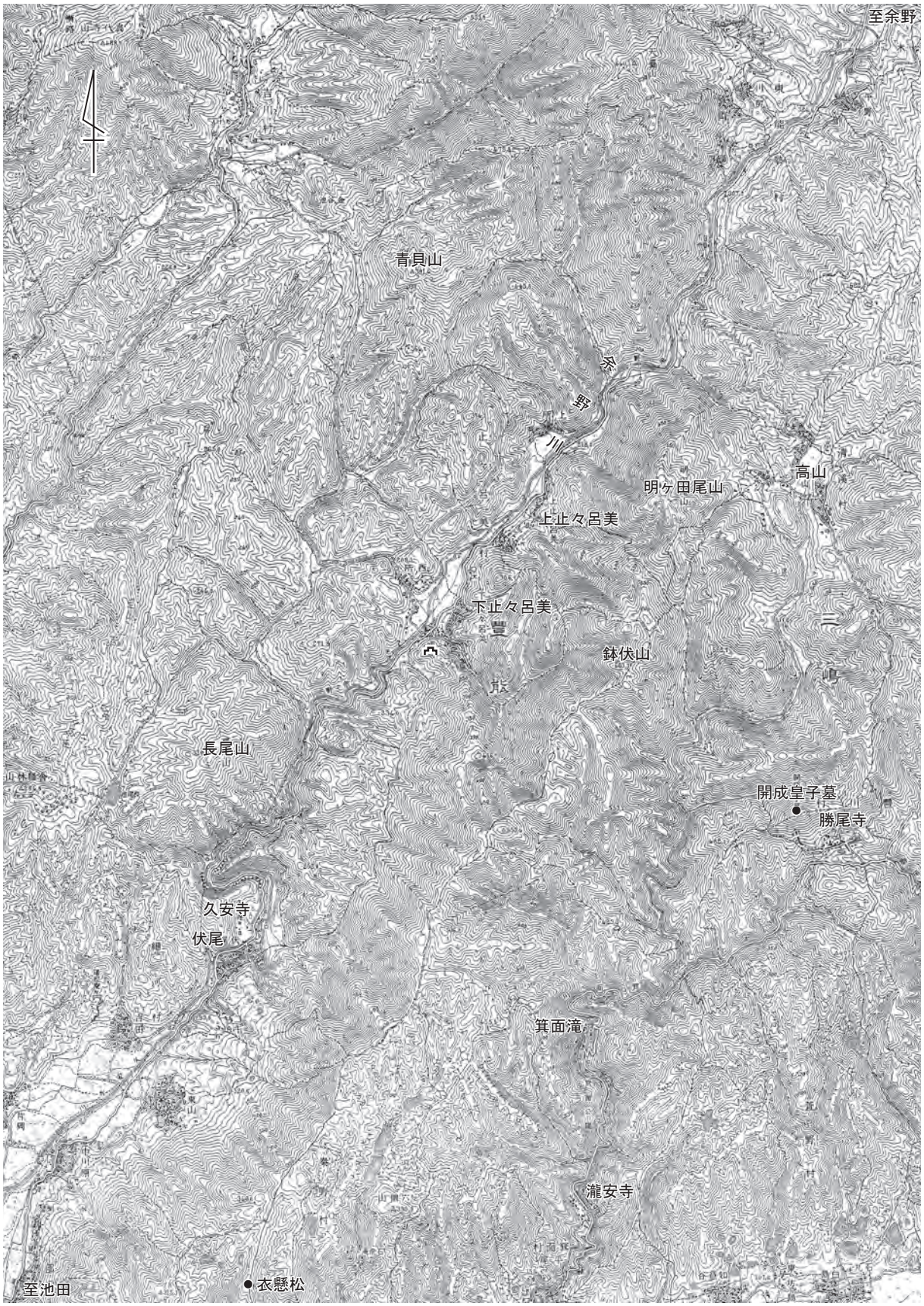
現在、余野川沿いに国道423号が通る。南西の池田市と北東の京都府亀岡市（旧亀山）を結ぶ、いわゆる摂丹街道（余野道）である。1920年以来府道池田亀岡線に指定され、大阪砲兵工廠から舞鶴港まで物資を運ぶ軍用道路として使用されたこともあったという。1965年には全線舗装が完成、1982年には国道に昇格した。『五畿内志』には「関明神越」と記されており、古くより摂津と丹波を結ぶ、重要なルートであった。

第２項　歴史環境

摂津国豊島（てしま）郡に属す。この地が史料上に表れるのは、まずは「美河原」としてである。美河原（みがわら・みかわら　真河原・真川原・直河原とも記される）は、1230（寛喜２）年閏１月27日の勝尾寺四至注文案（勝尾寺文書／箕面市史史料編１）に、「戌亥（北西隅）」の「石蔵」の所在地について「高山真川原両堺」とあるのが初見である。ただし、1333（元弘３）年12月18日雑訴決断所評定文案（勝尾寺文書／箕面市史史料編１）から、「直河原庄」を総持寺領とした、1125（天治２）年７月の摂津国司の免判、1169（嘉応元）年11月28日の宣旨の存在が知れる。

1．止々呂美城　2．丸山城　3．山田城　4．今西城　5．森上城
6．上杉城　7．宿野城　8．山辺城　9．片山城　10．野間城・野間氏居館
11．余野本城　12．余野城　13．高山城　14．山下城　15．新田城
16．上津城　17．加茂城　18．芥川山城　19．佐保城　20．佐保栗栖山砦
21．福井城　22．安威城　23．高槻城　24．普門寺城　25．太田城
26．茨木城　27．三宅城　28．池田城　29．吹田城

図１　止々呂美城周辺の主要城郭



大日本帝国陸地測量部発行 1/25,000 地形図
「廣根」を縮小して使用　1923 年測量

0　(1:40,000)　2 km

図２　遺跡周辺地図（１）

当荘は、同じく総持寺（そうじじ　茨木市）領で比叡山浄土寺門跡を領家とする、外院荘（箕面市）、高山荘（豊能町）、とともに「三ヶ庄」として史料に表れることが多い。現存する勝尾寺の石蔵の位置から、箕面滝上流の箕面川西側山地から止々呂美にかけてが美河原荘で、明ヶ田尾山の稜線を境に高山荘と接していたと考えられている。1250（建長２）年12月の摂津国美河原庄田畠検注目録（勝尾寺文書／箕面市史史料編１）によれば、合計９町５反余の田畠を有す。

1260（文応元）年11月の勝尾寺衆徒等訴状案（勝尾寺文書／箕面市史史料編１）によると、勝尾寺は当荘に仏性（仏聖）米３石６斗の権利を持っているが、洪水による損失を理由に、仏性米の納入が滞るようになったという。これ以降、1200年代末（正応～正安年間）頃に一応の決着をみるまで、勝尾寺と当荘定使・雑掌との相論が続くことになる。

下って1325（正中２）年２月29日の後醍醐天皇綸旨案（勝尾寺文書／箕面市史史料編１）からは、これ以前に三ヶ荘の領有をめぐって浄土寺門跡と勝尾寺との相論がおこっていたことがわかる。上述の仏性米は、あくまで領家である浄土寺門跡より、徴収した年貢からの得分権を寄進されたものであり、地主権ではなかった。しかしこの頃より、勝尾寺寺僧らは三ヶ荘の地下に「濫妨」し、門跡領を実力で押領しはじめたのである。

「止々呂美」としては、1345（康永４）年８月11日条「摂津国止々岐庄堺事」（師守記）が初見である。これを豊中市轟木とする説もあるが、下止々呂美の薬師堂に建つ宝篋印塔（大阪府指定文化財）に刻まれた「止止呂岐庄沙汰人百姓正平七（1352）年二月」銘から、師守記の「止々岐庄」も止々呂美である可能性が高いと考えたい。また、1349（貞和５）年11月の鳥居造立条々注文（勝尾寺文書／箕面市史史料編２）には「止々呂美上下」とあり、この頃から現在と同じく上下にわかれていたことがわかる。1408（応永15）年12月の勝尾寺寺僧等申状案（勝尾寺文書／箕面市史史料編２）では、高山荘をめぐる勝尾寺と浄土寺門跡との相論に際して「隣庄止々呂岐上庄公文金屋」名がみえる。荘名としても「止々呂岐上庄」と表わされている点が興味深い。なお、1464（寛正５）年９月の勝尾寺領散在田畠目録（勝尾寺文書／箕面市史史料編２）に「轟見之庄」とみえるが、「上分米本升三石六斗也」と注記がある。美河原荘仏性米が「三石六斗」であったことから、美河原荘が「轟見之庄」・「止々呂岐庄」と呼ばれるようになったと考えられている。

さて、1997～98年、財団法人大阪府文化財調査研究センターにより、下止々呂美の字「小畑」所在の小畑遺跡の発掘調査が実施された。平野部を望む余野川右岸の尾根先端に営まれた墓地の遺跡である。検出された墓の総数は203基を数える。隅丸方形や円形の墓壙上に石組みを伴い、内部に多量の炭化物や火葬骨を含むものを基本とし、壁面に被熱痕跡が認められるものもある。五輪塔部材、石仏16体（うち15体が阿弥陀如来）も検出されており、墓上に設置されていたと思われる。副葬品を持つものは少ないが、土師器皿、丹波型瓦器椀、東播系須恵器鉢、青磁盤片、短刀等があり、13世紀後葉～15世紀の時期が与えられる。

小畑遺跡の墓地は、まさに上述の美河原荘、止々呂岐荘が史料上に表れている時期に相当する。田畠や集落があったであろう平野部を見下ろす、尾根上に営まれていた集団墓地は、荘園史料では窺い知ることのできない在地の地縁関係を具体的に示すものである。なお、止々呂美地区内には、小畑遺跡周辺以外にも同様な石仏が点在しており、ほかにも墓の遺跡が存在している可能性が高いと思われる。

今回の調査は、止々呂美における小畑遺跡以来の埋蔵文化財発掘調査である。しかし、対象となった「止々呂美城」に関する資料は少ない。『摂陽群談』は、上止々呂美に「止々呂美古城」、下止々呂美に「塩

山古城」があり、前者は多田満政の苗裔、馬場兵衛信高在城、後者は城主塩山肥前守源景信と記す。『日本城郭大系』も同じく、下止々呂美の城を「塩山城」とする。しかし、大阪府教育委員会では、今回調査を実施した下止々呂美の城を「止々呂美城跡」として登録しているのみであり、本書でもこれを「止々呂美城跡」として報告する。

止々呂美城跡の立地は、自然環境で述べた通りである。字「宮山」は、日枝神社の跡地で、現地表に城郭遺構を残す。東側に隣接する広い平坦地には、小規模なマウンド上に瓦質祠が据えられており、周囲に石仏、五輪塔部材が集積されている。調査地はそのさらに南東へ続く尾根筋である。

図１に、周辺地域の城郭を示した。止々呂美城近傍では、高山城（豊能町高山）や、余野本城（豊能町余野）、余野城（同前）等がある。高山城は、止々呂美と明ヶ田尾山で隔てられた、高山集落の北西側山上に立地する山城である。高山荘の土豪であった高山氏のものとされる。余野本城及び余野城は、ともに余野川上流の余野小盆地を望む山上に立地し、余野本城は右岸、余野城は左岸から摂丹街道を見下ろす。能勢氏が築いたといわれる余野本城が古いとされ、余野城は能勢氏配下の余野氏が築き、その南麓に館を構えたといわれている。

戦国時代、この地域で力を振るっていたのは、能勢氏である。鎌倉時代以来、能勢郡に勢力を持つ国人で、戦国時代には守護細川氏の被官となった。永正年間（1504 ～ 1521年）には、細川高国が摂津国支配の要として築いた芥川山城（高槻市）を任されている。地黄（じおう）の丸山城（能勢町）を本拠とした。この能勢氏と勢力圏を接していたのが、西の川西盆地を支配していた塩川氏である。鎌倉時代後期には多田院御家人の筆頭であり、一庫（ひとくら）の山下城（川西市）を本拠とした。1586（天正14）年、豊臣秀吉によって滅ぼされる。戦国時代における止々呂美城をめぐる動向は、この両者の攻防に起因しているといえる。

最後に、現在の止々呂美地域について、記しておく。上・下止々呂美は、それぞれ垣内（かいち）と呼ばれる小単位で構成されている。上止々呂美は、北から「上ノ所（かみんじょ）」、「北ノ所（きたんじょ）の上」、「北ノ所の下」、「馬場ノ所（ばばんじょ）」、下止々呂美は、「前ノ所（まえのしょ）」、「下ノ所（しものしょ）」、「奥ノ所（おくんじょ）」、「西ノ所（にしんじょ）」等にわかれている。

寺院は、上止々呂美に浄土宗養谷寺、下止々呂美に曹洞宗青龍寺があるが、1872年までは上止々呂美に真言宗玉泉寺もあった。ほかに、下止々呂美に前述の宝篋印塔を有する薬師堂がある。薬師堂背後の山は「堂山」と呼ばれ、豊楽寺（ぶらくじ）跡との伝承が残る。永禄年間（1558 ～ 1570年）に焼失したと、池田市の西光寺との観音像をめぐる因縁とともに言い伝えられている。下止々呂美の檀那寺は、青龍寺とこの浄土宗西光寺である。また、上止々呂美の共同墓地には、釈迦堂とともに一石六地蔵、逆修衆石仏がある。逆修衆石仏は「天正十三（1585）年四月廿八日」銘を持つ。

神社は、上止々呂美に素戔嗚尊神社、天満宮社、下止々呂美に山王社（1872年からは日枝神社）があったが、1907年に合祀され、素戔嗚尊神社が止々呂美神社となった。

〔参考文献〕

箕面市史編集委員会　1964　『箕面市史　第一巻（本編）』
箕面市史編集委員会　1968　『箕面市史　史料編一　勝尾寺文書（上）』
箕面市史編集委員会　1972　『箕面市史　史料編二　勝尾寺文書（下）』
1981　『日本城郭大系　第12巻　大阪・兵庫』　新人物往来社

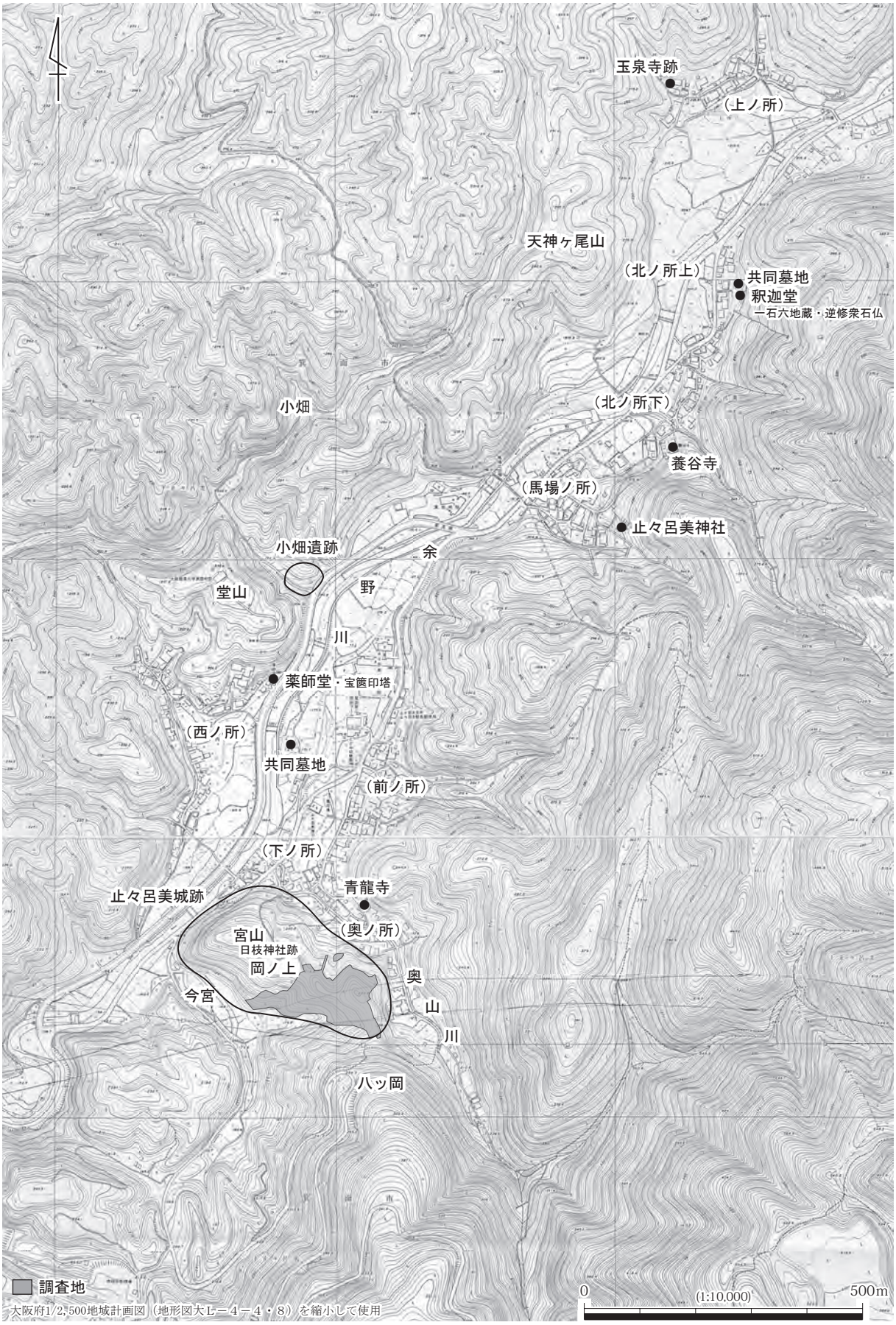
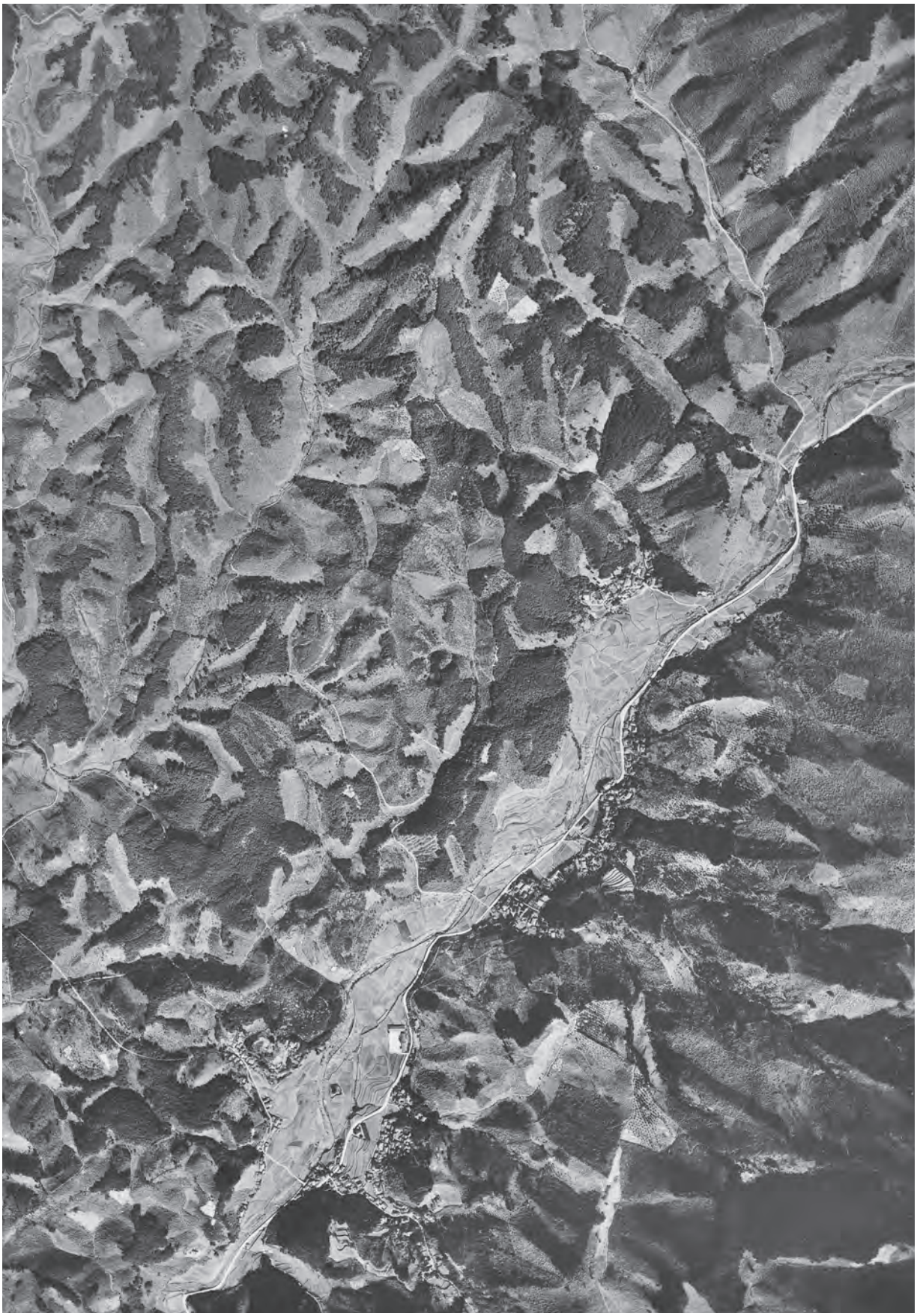

玉泉寺跡
（上ノ所）
天神ヶ尾山
（北ノ所上）
共同墓地
釈迦堂
一石六地蔵・逆修衆石仏
小畑
（北ノ所下）
養谷寺
（馬場ノ所）
止々呂美神社
小畑遺跡
余
野
堂山
川
薬師堂・宝篋印塔
（西ノ所）
共同墓地
（前ノ所）
（下ノ所）
止々呂美城跡
青龍寺
（奥ノ所）
宮山
日枝神社跡
岡ノ上
今宮
奥
山
川
八ッ岡
調査地
0
(1:10,000)
500m
大阪府1/2,500地域計画図（地形図大L－4－4・8）を縮小して使用

図３　遺跡周辺地図（２）



1948 年３月撮影

※国土地理院所有（M 33-5-148）（上が北）

写真１　遺跡周辺航空写真

「角川日本地名大辞典」編纂委員会　竹内理三編　1983 『角川日本地名大辞典　27　大阪府』 角川書店
平凡社地方資料センター編　1986 『日本歴史地名大系　第二八巻　大阪府の地名』 平凡社
大阪府教育委員会　1990 『西国・丹波街道』歴史の道調査報告書　第６集
財団法人大阪府文化財調査研究センター　1997 『箕面北部丘陵地区埋蔵文化財発掘調査報告書』
財団法人大阪府文化財調査研究センター　1998 『小畑遺跡』
箕面市文化財総合調査団・箕面市教育委員会　2002 『箕面市文化財総合調査報告書Ⅱ　旧箕面地区・旧止々呂美地区』

※ 城郭遺構については付論参照

写真２　喰い違い虎口　　南東から

写真３　主郭（左は主郭に食いこむ土塁）　南東から

写真４　北側の土塁　　南東から

写真５　空堀西南端と南側の土塁　　北東から

写真６　瓦質祠と石塔類（調査地西側 山頂平坦地）　南東から

写真７　石塔類（調査地北西側 山頂より下る里道端）　北東から

第２章　調査の経緯、経過と方法

第１項　調査の経緯、経過

今回の調査は、西日本高速道路株式会社による高速自動車国道近畿自動車道名古屋神戸線（以下「新名神高速道路」とする）建設に伴うもので、止々呂美城跡における初めての発掘調査である。新名神高速道路箕面インターチェンジ工事に先立ち、大阪府教育委員会文化財保護課の指導の下に実施した。

調査は当初、調査範囲全域の雑木を一括して伐採した後、引き続き発掘調査を実施する工程で計画されていた。しかし、西日本高速道路株式会社（以下事業者とする）による砂防等許認可の手続きの結果、調査範囲をⅠ期地区とⅡ期地区に２分割し、Ⅰ期地区の雑木伐採及び発掘調査終了後、Ⅱ期地区の同作業を実施する工程に変更された。さらにⅠ期地区、Ⅱ期地区それぞれの調査開始前に、事業者による砂防工事の施工が必要とされた。それに伴い、事業者との契約期間が当初の平成22年２月１日から平成24年９月28日までから、平成25年５月20日までに延長された。

Ⅰ期地区（１～５区）は、雑木林伐採工を平成22年10月26日から平成23年１月21日まで実施した後、発掘調査に先立って現況で城郭の構造を把握するため、セスナ機による航空測量を平成23年１月31日に行ない、地形図（１/500）を作成した。その後、新名神高速道路箕面インターチェンジ工事施工業者（以下本体工事業者とする）による砂防工事施工完了を待って、発掘調査を平成23年３月30日から平成24年８月10日に実施した。

なお、Ⅰ期地区の雑木林伐採終了後、城郭の調査で重要となる、縄張りの把握をするため、元奈良女子大学・大阪大学教授村田修三氏に、現地にて調査指導を受けた。

Ⅱ期地区（６～10区）は、本体工事業者による工事用進入路設置を待ち、雑木林伐採工を平成24年９月19日から10月22日まで行なった。セスナ機による航空測量は、平成24年10月24日に実施した。本体工事業者による砂防工事の施工完了後、発掘調査を平成24年10月29日から平成25年４月30日まで行なった。

なお、Ⅰ期地区の調査成果を踏まえ、大阪府教育委員会文化財保護課の判断により、当初計画より一部調査範囲が変更となった。調査地南東部の斜面等、及び北東側斜面について、調査範囲が縮小された。総調査面積は、15,580㎡である。

第２項　調査の方法

『遺跡調査基本マニュアル』（財団法人大阪府文化財センター　2010年12月）に基づいて実施した。調査名は、止々呂美城跡09－１である。

遺構面の平面図は、主要な遺構面については、ヘリコプターによる航空写真測量により、１/50で作成した。それ以外の遺構面については、写真測量と同一の測量成果を用いて平板測量及び水準測量を実施した。調査区の基本層序等を記録するための土層断面図（１/20）、個別の遺構図等も、写真測量と同一の測量成果を用いて作成した。写真撮影には、６×７カメラ（モノクロ・リバーサル）、35ミリカメラ（モノクロ・リバーサル）、デジタルカメラを使用した。出土遺物には、層位名、遺構名、登録番号等のほか、図４に示した５ｍまたは10ｍ区画の地区割を記入したラベルを付している。遺物への注記は、「トドロミ09－１－」の後に登録番号である。図面、写真、出土遺物は、登録し、台帳を作成している。

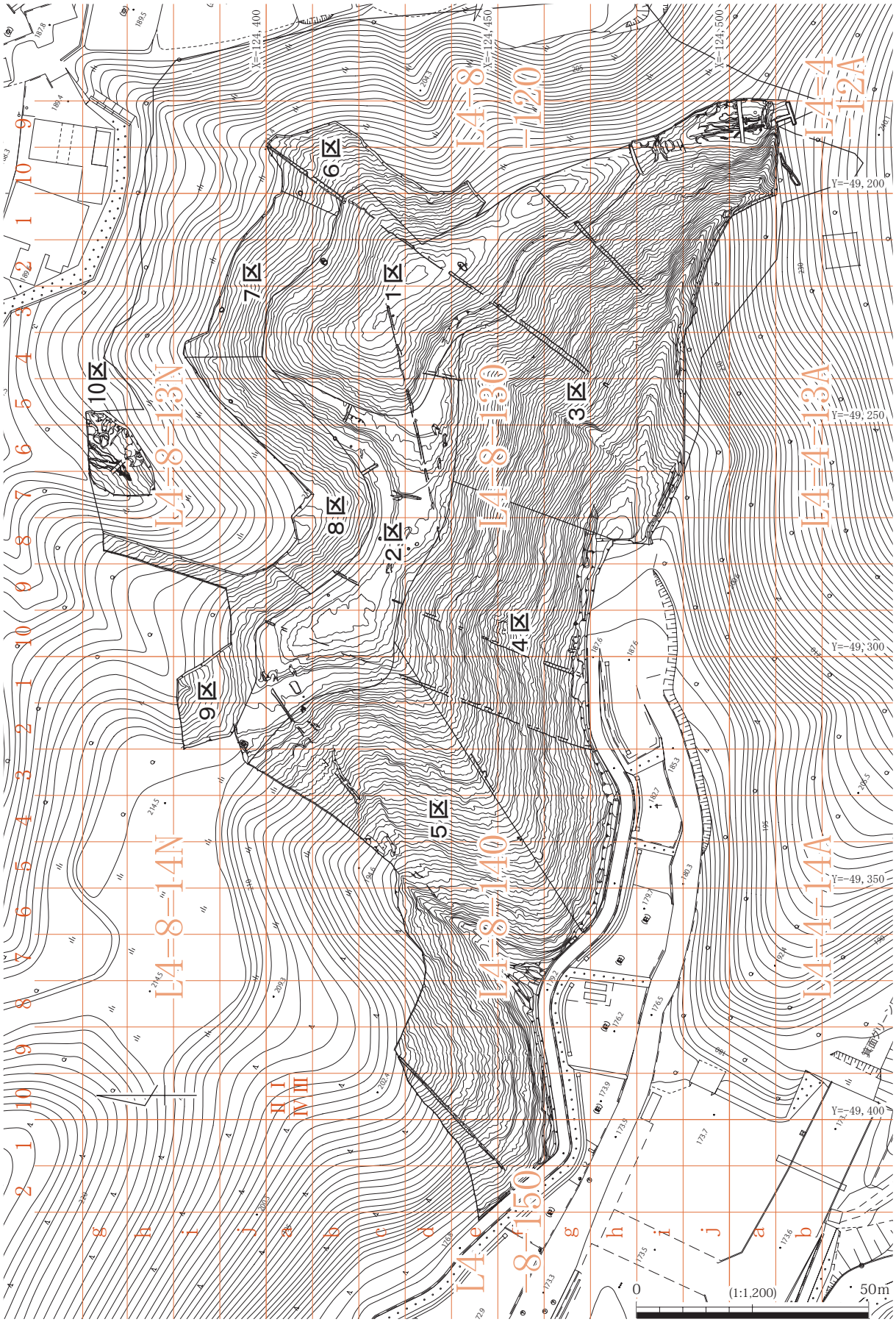

1区
2区
3区
4区
5区
6区
7区
8区
9区
10区
L4−8−13N
L4−8−13O
L4−8−12O
L4−8−14N
L4−8−14O
L4−8−15O
L4−4−13A
L4−4−12A
L4−4−14A
X=−124,400
X=−124,450
X=−124,500
Y=−49,200
Y=−49,250
Y=−49,300
Y=−49,350
Y=−49,400
0
(1:1,200)
50m

図４　地区割図

第３章　調査成果

序節　調査の概要

止々呂美城跡の立地する尾根は、北西を余野川に、南西を現在箕面有料道路となっている谷筋に、北東を余野川支流の奥山川に面し、三方が急斜面を呈している。南東側が唯一、鉢伏山等と連なる山稜へと続く尾根筋である。

尾根の北西端部にあたる余野川に面した字「宮山」（標高228ｍ）が、日枝神社跡地で、現地表に城郭遺構の認められる箇所である。ここは新名神高速道路建設予定地から外れ、独立してみえる尾根筋の南東半分が調査地である。

調査地の地形は、おおまかには尾根頂部、南西側の谷筋に面する斜面から谷部、北東側の奥山川沿いの谷筋に面する斜面部からなる。本書では、それぞれ「山頂」、「南面斜面から谷」、「北面斜面」と呼称する（図５～８）。

山頂のうち、字「宮山」に近い調査地北西部は字「岡ノ上」で、現況棚田であった。棚田造成の際に大規模な切土、盛土が施されており、基本層序は、表土層、作土層、棚田造成時の盛土層である。表土を除去した第１面では、棚田とそれに伴う水路、石組等を検出した。盛土層を除去した基盤層上面の第２面では、炭片を埋土に含む土坑群を検出した。被熱痕跡が認められるものもみられ、うち２基は骨片や釘が出土したことから、火葬遺構と考えられる。

棚田部の南東側は調査地の最高所（標高231ｍ）で、自然地形を残す頂上部である。ただし、棚田部南東端とほぼ標高を同じくする南西側の斜面部分には、切土、盛土により平坦面が設けられ、棚田へ導水する水路が通っていた（第１面）。基盤層上面の第２面では、頂部で土坑を検出し、瓦器椀が出土している。

調査地の南東端部にあたる尾根の付け根部分では、２本の堀切等を検出した。止々呂美城の「遠構え」として位置付けられる。上下２層の盛土層が存在し、上層盛土層上面（第１面）には北西の棚田に導水するための水路が通っていた。下層盛土層上面（第２面）が、遠構えの設けられていた面である。

南面斜面は、急傾斜である。尾根状を呈する箇所には堆積層はなく、それ以外の箇所では、特に谷筋状を呈する箇所で顕著であったが、山頂の棚田造成時の盛土等が流出したと思われる堆積層が比較的厚く認められた。尾根状を呈する箇所において、基盤層上面で被熱痕跡を有する土坑等を検出したほか、中世の遺物が出土した。それ以外の箇所では、土器、銭貨のほか、石仏、五輪塔部材等が出土している。

南の谷筋では、斜面より流出したと思われる、厚み４ｍ余の堆積がみられた。土壌層が複数認められ、堆積の過程が窺われる。上部の土壌層に伴い、土坑を検出した。銘を有する伏鉦も出土している。

奥山川の形成した谷筋に面する北面斜面は、先に記した南面斜面に比べれば、傾斜の角度が緩やかである。山頂頂上部に接する箇所では、被熱痕跡を有する土坑群を検出した。うち１基は、骨片や釘が出土したことから、火葬遺構と考えられる。

北面斜面の下位部分は、谷筋にあたり、斜面流出土が比較的厚く堆積していた。下止々呂美の「奥ノ所」集落の裏山にあたり、表土層直下の第１面では切土、盛土によって設けられた道を検出している。堆積層中に土壌層が認められ、その下面である第２面で溝等を検出している。

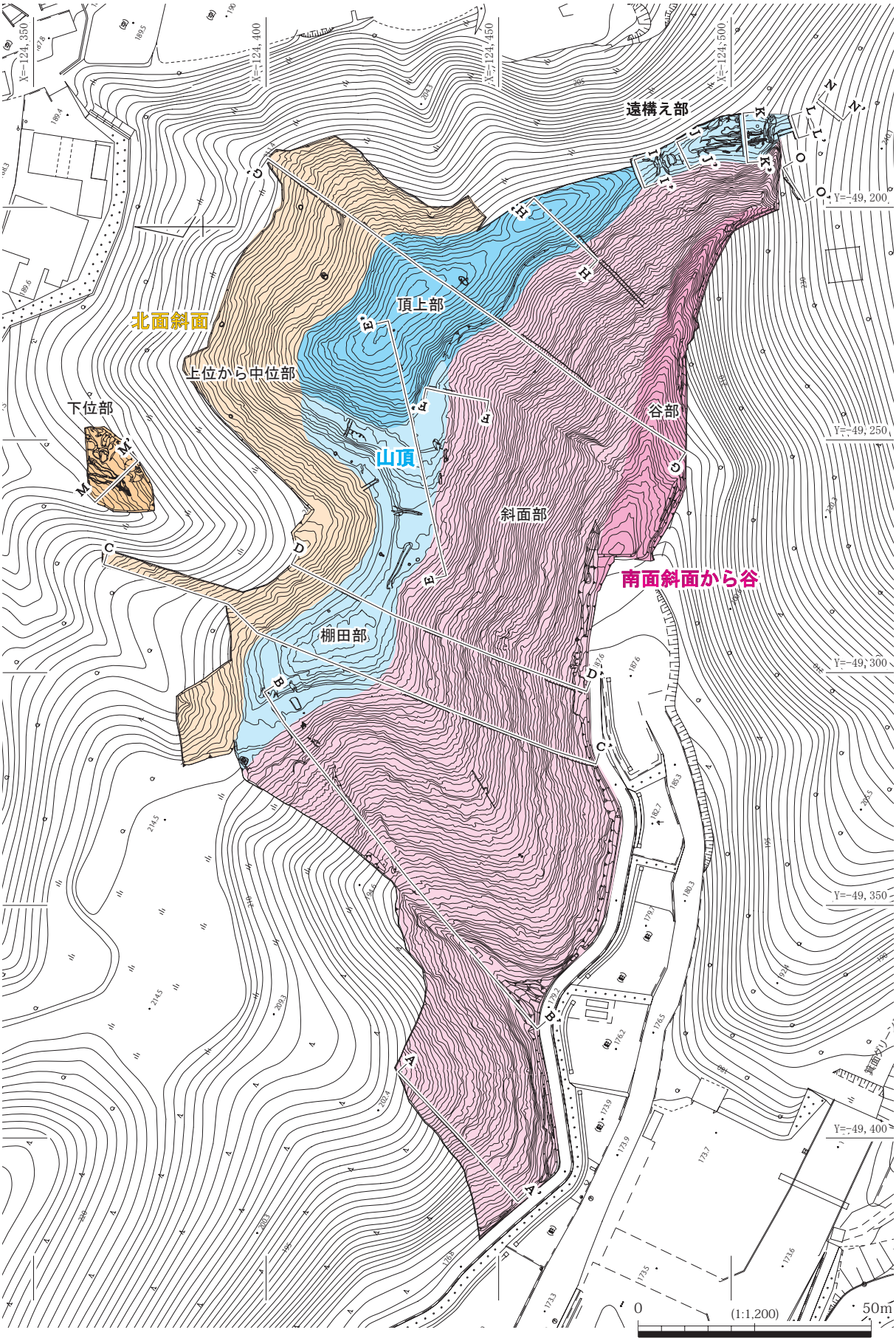


図５　地域割・土層断面位置図

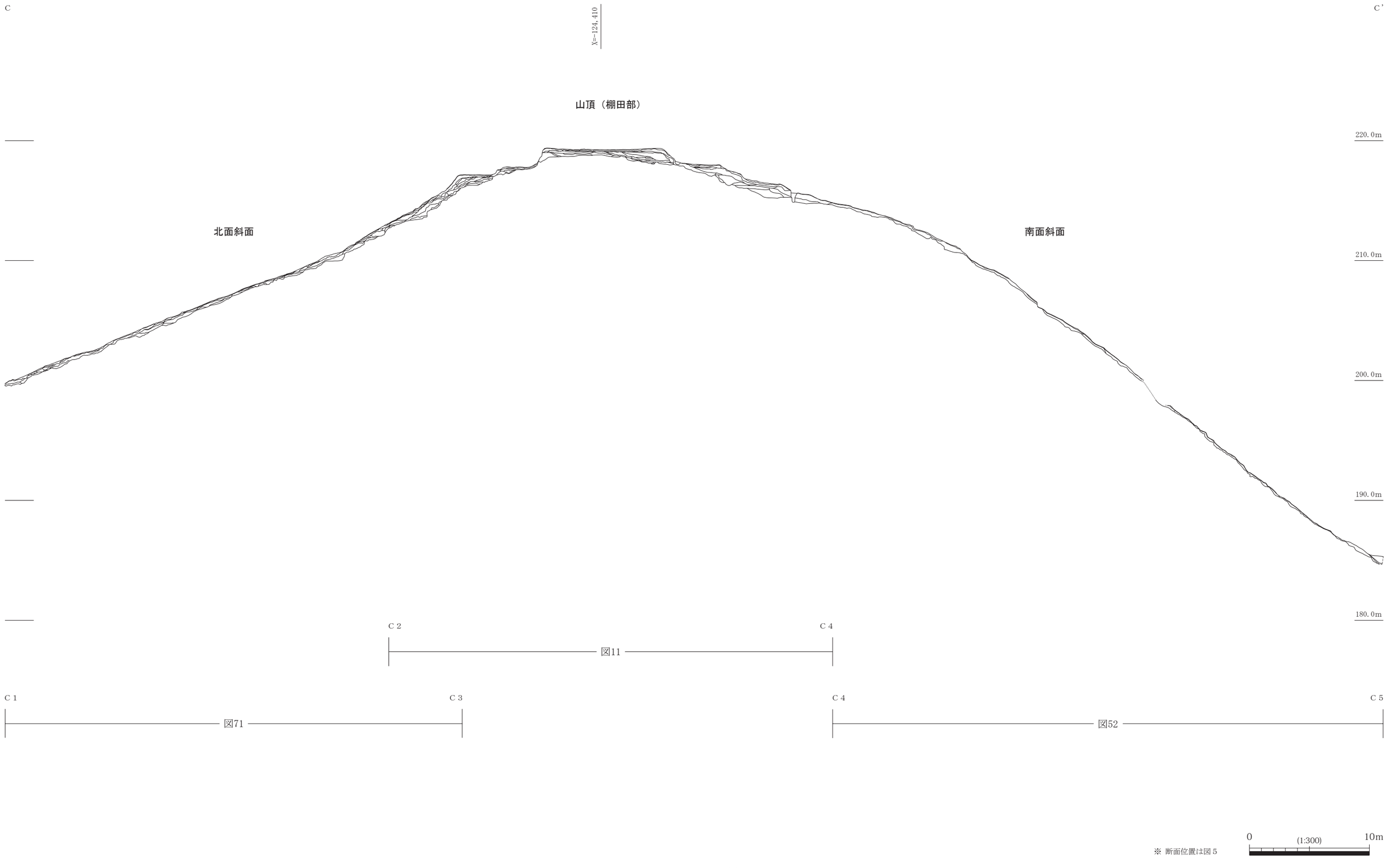

C
C'
X=−124,410
山頂（棚田部）
220.0m
210.0m
200.0m
190.0m
180.0m
北面斜面
南面斜面
C 2
C 4
図11
C 1
C 3
図71
C 4
C 5
図52
0
(1:300)
10m
※ 断面位置は図５

図６　Ｃライン　断面図

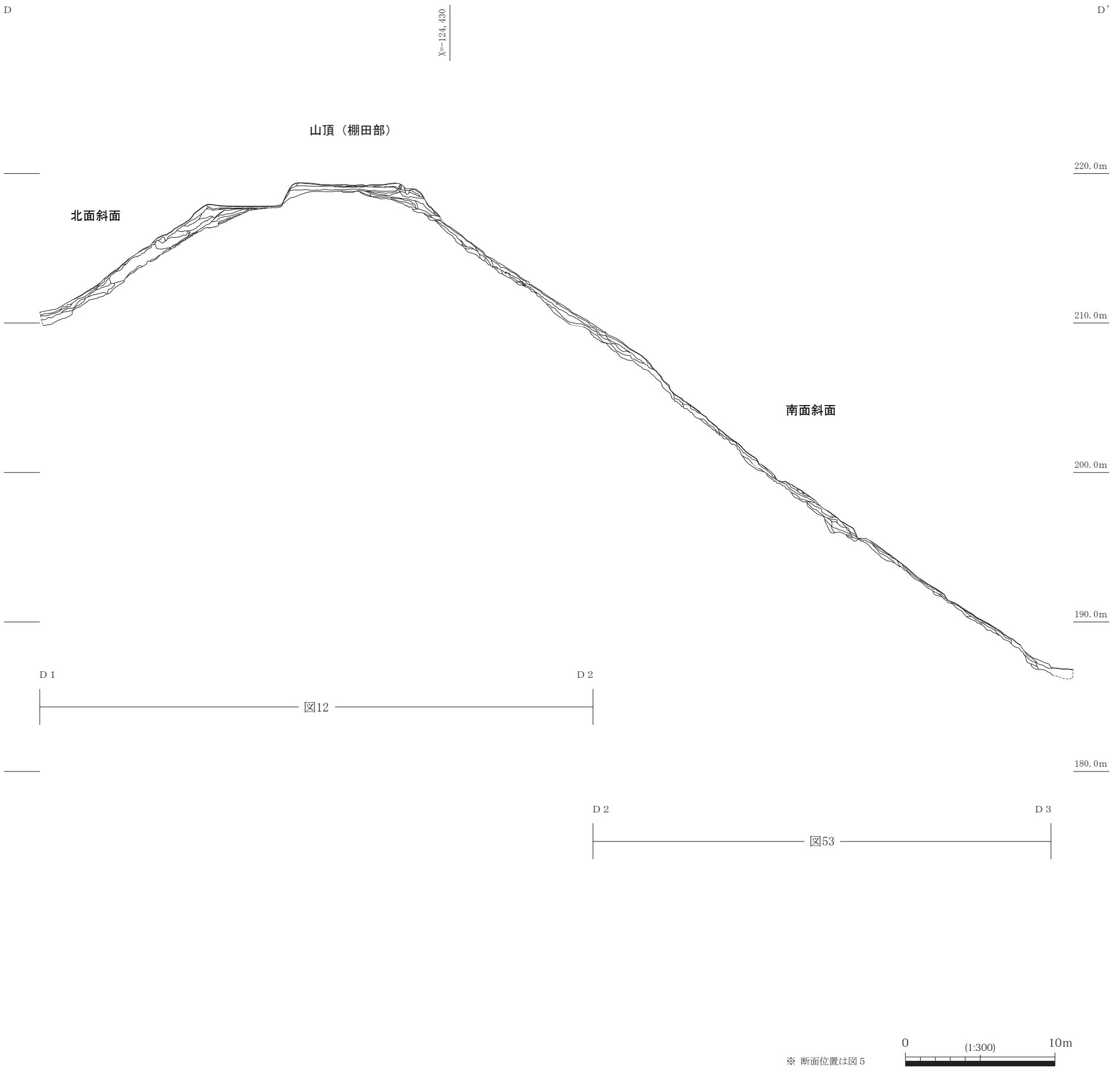

D
D'
X=124,430
山頂（棚田部）
北面斜面
南面斜面
220.0m
210.0m
200.0m
190.0m
180.0m
D 1
D 2
図12
D 2
D 3
図53
0
(1:300)
10m
※ 断面位置は図５

図７　Ｄライン　断面図

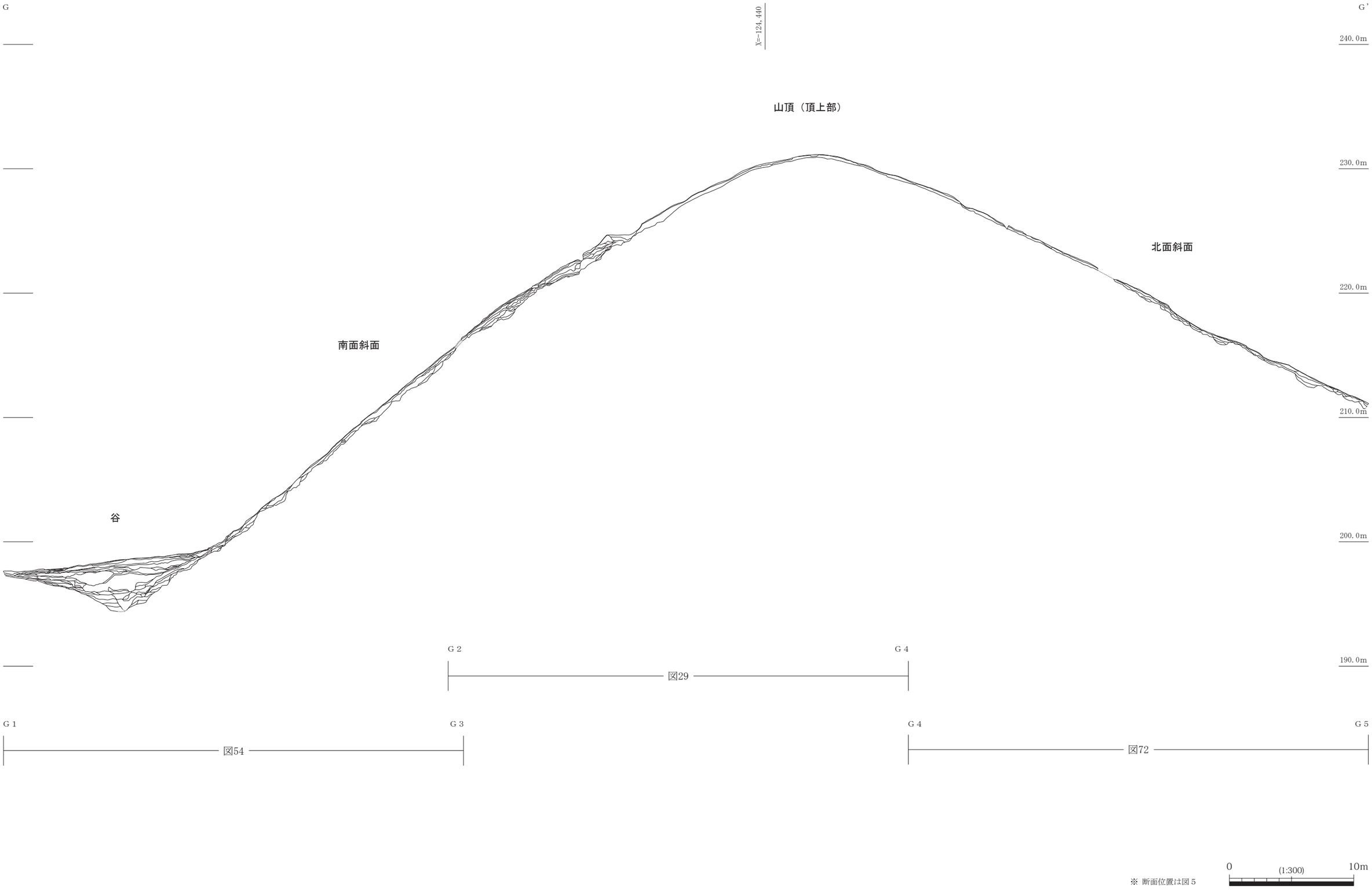

G
G'
X=-124,440
240.0m
230.0m
220.0m
210.0m
200.0m
190.0m
山頂（頂上部）
北面斜面
南面斜面
谷
G 2
G 4
図29
G 1
G 3
図54
G 4
G 5
図72
※ 断面位置は図５
0
(1:300)
10m

図８　Ｇライン　断面図

第１節　山頂

北西‐南東方向の尾根筋の頂部である。現地表に城郭遺構を残す字「宮山」に近い方から、調査地北西部を「棚田部」（２区）、中央部を「頂上部」（１区）、南東部を「遠構え部」（３区山頂部）として、以下に報告する（図５・９）。

第１項　棚田部

山頂北西部は、字「岡ノ上」といい、現況棚田であった。しかし、竹の根が繁茂し、水路は埋没し、棚田斜面等にみられる石組は崩壊している状況で、耕作放棄されたのが近年ではないことが窺われた。なお、北西側の調査地外は比較的広い平坦地であるが、畝立が遺存しており、耕作地であったと考えられる。瓦質の祠があり、周囲に石仏、五輪塔部材が集積されている。

棚田造成の際に、大規模な切土、盛土が施されており、基本層序は、表土層、作土層、棚田造成時の盛土層である。表土層を除去した、棚田が営まれていた面を第１面、盛土層を除去した、基盤層上面を第２面とした。

１．第１面（図10 ～ 17）

表土層を除去し、作土層上面を検出した。図10は、樹木伐採後の現況を航空測量して作成した等高線図に、第１面の平板測量図を重ねたものである。

棚田を８筆（棚田１～８）検出した。水田面は、頂上部に接する東側が高く、字「宮山」に近い西側、北面斜面に面する北側が低くなる。各水田面の標高は、図11 ～ 14の断面図に詳しい。

断面図から、原地形の高い部分は切土、低い部分は盛土を施し、平坦面を造成していることがみてとれる（図13・14等）。原地形の傾斜が急であるため、盛土が狭い範囲に厚く盛られている。断面図に、基盤層が階段状を呈している箇所が認められるが、基盤層に刻みを入れて、

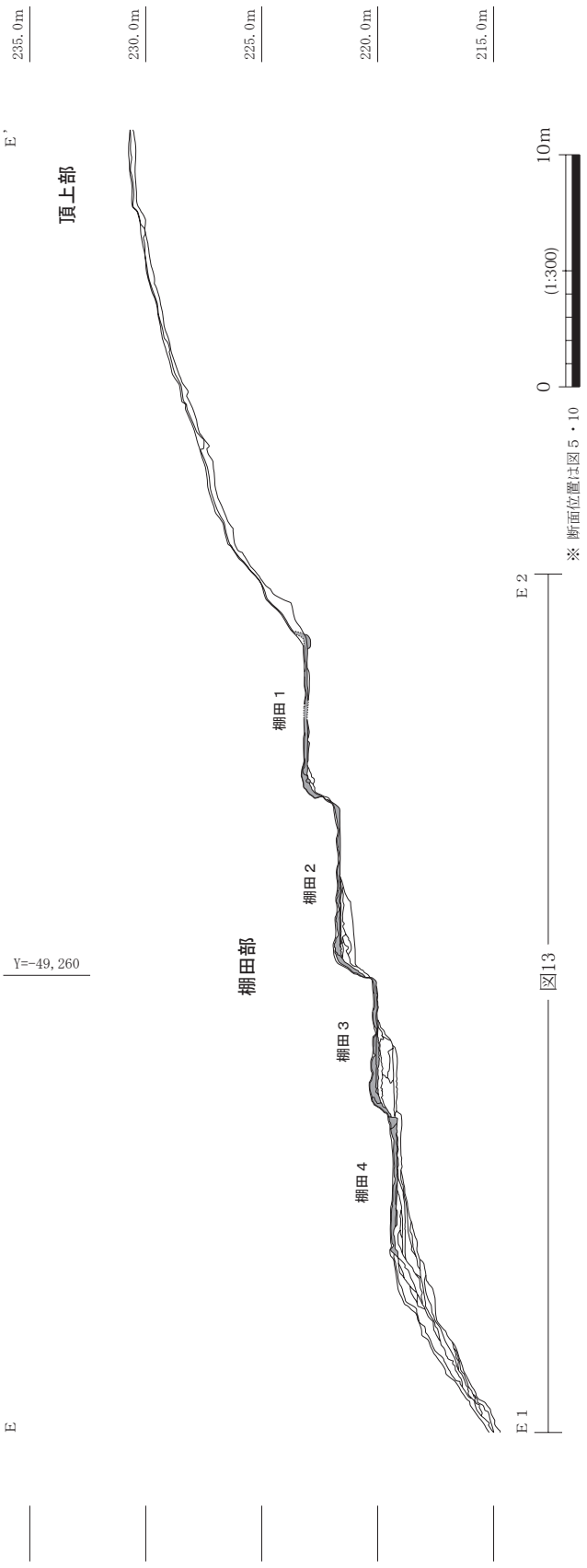


図９　Ｅライン　断面図

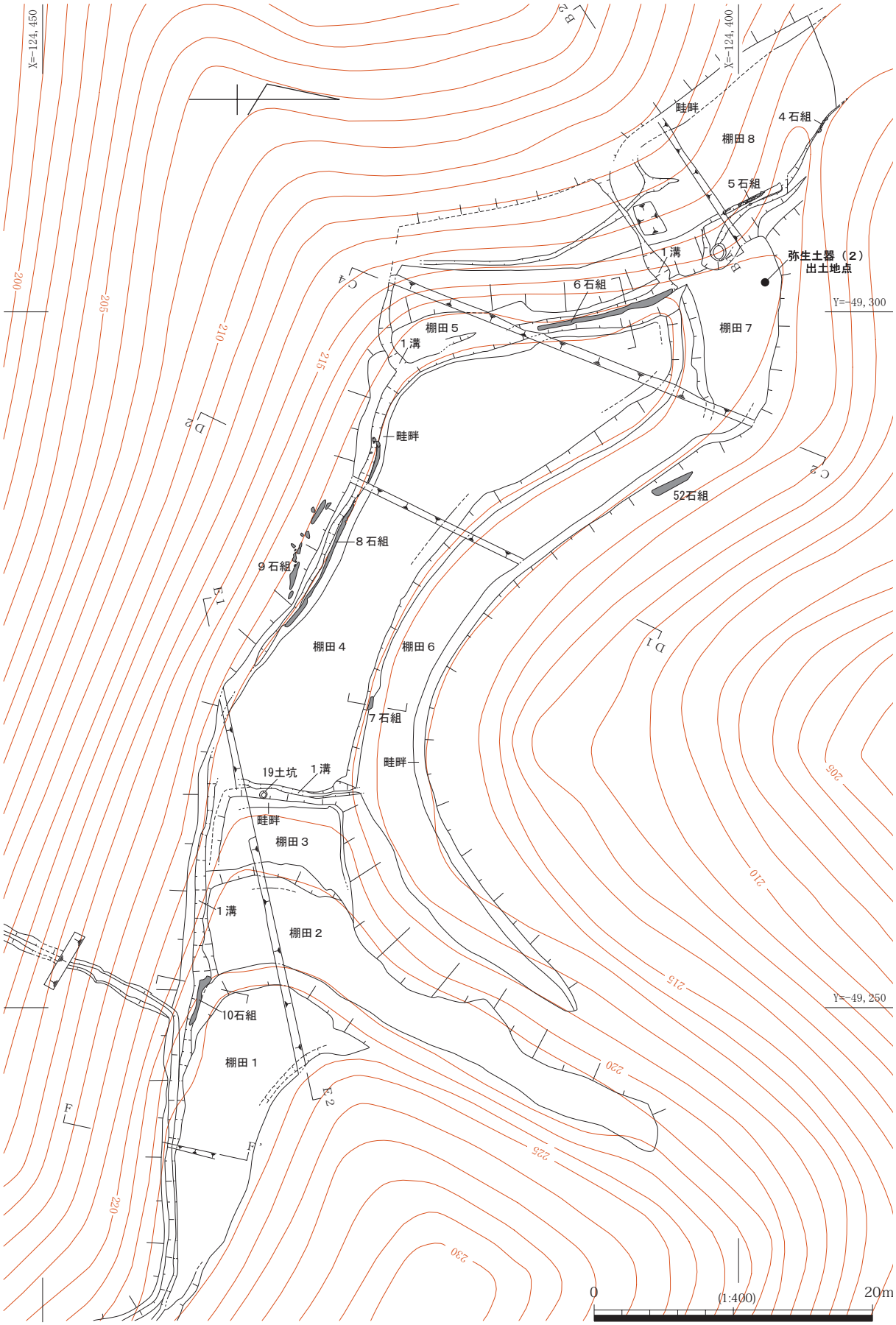
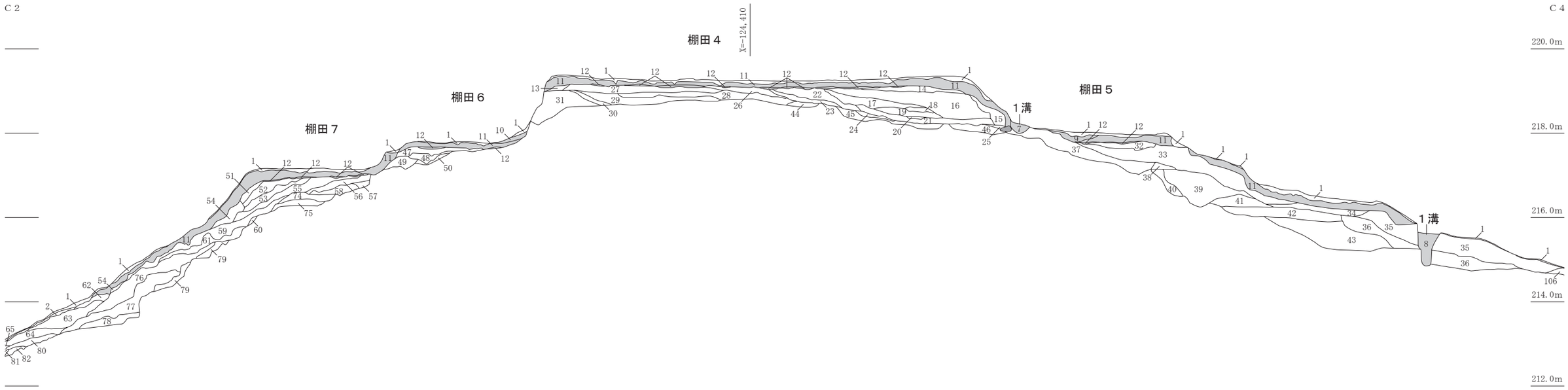


図 10　棚田部　第１面　平面図

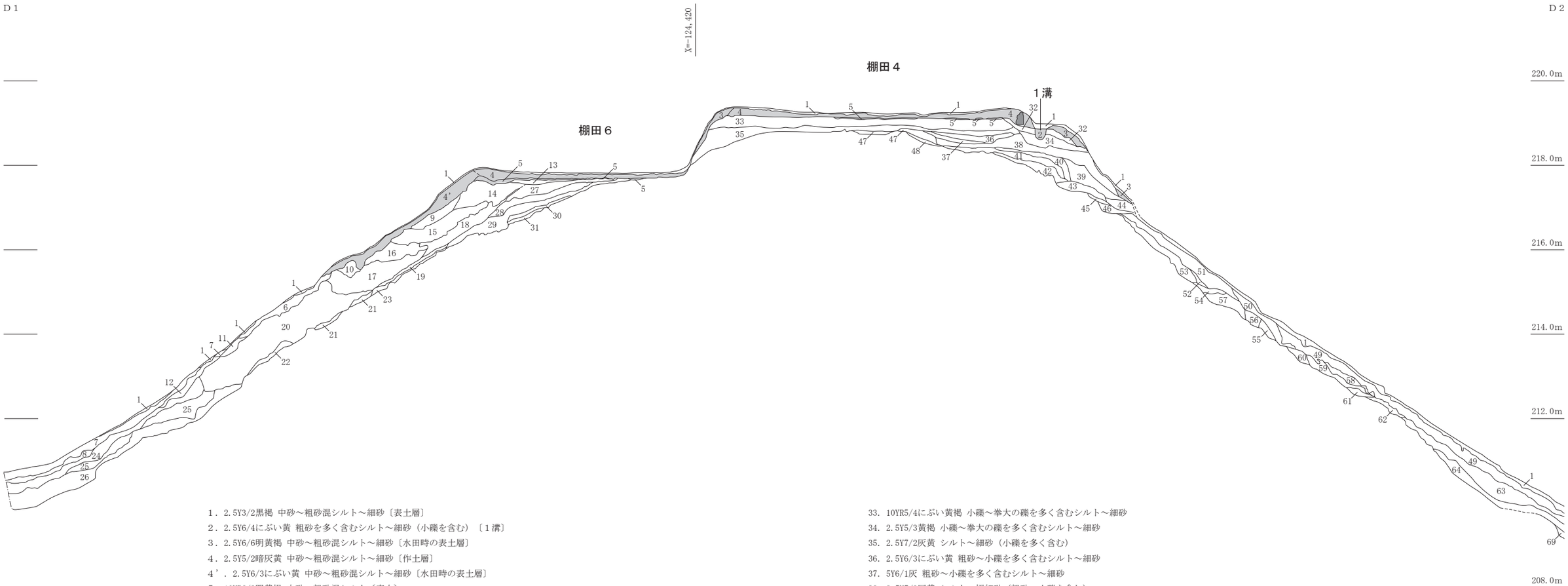


1．10YR3/1黒褐 シルト～細砂（中砂～粗砂を含む）〔表土層〕
2．10YR5/2灰黄褐 小礫を多く含むシルト～細砂
7．2.5Y4/1黄灰 シルト～細砂（中砂～小礫を含む）〔１溝〕
8．10YR3/2黒褐 細砂～粗砂混シルト（小礫を含む）〔１溝〕
9．5Y5/2灰オリーブ シルト～細砂（中砂～粗砂を含む）〔溝〕
10．2.5Y4/1黄灰 シルト～細砂（中砂～粗砂を多く含む）〔溝〕
11．2.5Y5/1黄灰 シルト～細砂（中砂～粗砂を含む）〔作土層〕
12．10YR6/6明黄褐 シルト～細砂〔床土〕
13．5Y5/1灰 粗砂～小礫混シルト～細砂
14．2.5Y6/4にぶい黄 粗砂～小礫混シルト
15．2.5Y5/3黄褐 粗砂～小礫・５㎝大までの礫を含むシルト～細砂
16．2.5Y5/3黄褐 粗砂～小礫・拳大までの礫を多く含むシルト～細砂
17．5Y5/3灰オリーブ 粗砂～小礫・３㎝大までの礫を多く含むシルト～細砂
18．2.5Y5/3黄褐 粗砂～小礫を非常に多く含むシルト～細砂
19．2.5Y6/3にぶい黄 粗砂～小礫混シルト～細砂
20．5Y5/2灰オリーブ 粗砂～小礫混シルト～細砂
21．2.5Y7/2灰黄 シルト～細砂（５㎝大までの礫を含む）
22．2.5Y7/4浅黄 粗砂～小礫混シルト～極細砂
23．2.5Y7/3浅黄 粗砂～小礫を多く含むシルト～細砂
24．2.5Y6/6明黄褐 粗砂～小礫を非常に多く含むシルト～中砂
25．2.5Y5/2暗灰黄 粗砂～小礫を非常に多く含むシルト～細砂
26．2.5Y7/4浅黄 粗砂～小礫混シルト
27．2.5Y6/2灰黄 小礫～５㎝大の礫を多く含むシルト～細砂
28．2.5Y6/6明黄褐 小礫を多く含むシルト～極細砂
29．2.5Y6/3にぶい黄 小礫を非常に多く含むシルト～細砂（拳大までの礫を含む）
30．10YR6/8明黄褐 粗砂～小礫を非常に多く含むシルト～細砂
31．5Y5/3灰オリーブ 粗砂～小礫・５㎝大までの礫を非常に多く含むシルト～細砂
32．2.5Y6/3にぶい黄 中砂～粗砂混シルト（小礫を含む）
33．2.5Y6/3にぶい黄 中砂～粗砂混シルト（拳大までの礫を含む）
34．2.5Y6/4にぶい黄 シルト～極細砂（粗砂～小礫を含む）
35．2.5Y5/6黄褐 中砂～粗砂混シルト～細砂（小礫～拳大の礫を多く含む）
36．5Y5/2灰オリーブ 粗砂～小礫を多く含むシルト～細砂
37．2.5Y6/3にぶい黄 細砂～中砂混シルト（小礫～拳大の礫を多く含む）
38．2.5Y8/3淡黄 シルト～極細砂（小礫を含む）
39．2.5Y6/4にぶい黄 粗砂～小礫を非常に多く含む細砂～中砂混シルト（拳大までの礫を含む）
40．2.5Y5/4黄褐 小礫～拳大の礫を非常に多く含む細砂～中砂混シルト
41．2.5Y5/4黄褐 粗砂～小礫を非常に多く含むシルト～細砂
42．2.5Y6/2灰黄 粗砂～小礫を非常に多く含む細砂～中砂混シルト
43．2.5Y5/4黄褐 小礫～拳大の礫を非常に多く含む細砂～中砂混シルト
44．2.5Y7/4浅黄 小礫を多く含むシルト～細砂
45．2.5Y6/6明黄褐 小礫～３㎝大の礫を非常に多く含むシルト～極細砂
46．2.5Y6/4にぶい黄 小礫～拳大の礫を非常に多く含むシルト～細砂
47．2.5Y6/4にぶい黄 中砂～粗砂混シルト～極細砂
48．2.5Y6/2灰黄 粗砂～小礫を多く含むシルト～細砂
49．2.5Y7/3浅黄 粗砂～小礫混シルト～細砂
50．2.5Y8/3淡黄 粗砂混シルト～細砂（小礫を含む）
51．2.5Y7/3浅黄 粗砂混シルト
52．2.5Y7/4浅黄 粗砂～小礫混シルト
53．2.5Y7/4浅黄 小礫を多く含むシルト
54．2.5Y7/1灰白 粗砂混シルト～細砂（小礫を少し含む）
55．2.5Y7/4浅黄 小礫混シルト
56．2.5Y6/2灰黄 小礫を多く含むシルト～細砂
57．2.5Y6/6明黄褐 粗砂～小礫を多く含むシルト～細砂
58．5Y7/4浅黄 粗砂混シルト（小礫を含む）
59．10YR6/2灰黄褐 粗砂～小礫混シルト
60．2.5Y6/3にぶい黄 小礫を多く含むシルト～細砂
61．2.5Y6/2灰黄 小礫～５㎝大の礫を多く含むシルト～極細砂
62．2.5Y6/4にぶい黄 小礫混シルト～極細砂
63．2.5Y6/4にぶい黄 小礫を多く含むシルト～極細砂（５㎝大までの礫を含む）
64．2.5Y6/3にぶい黄 小礫を多く含むシルト～細砂（５㎝大までの礫を多く含む）
65．2.5Y6/4にぶい黄 小礫を多く含むシルト（５㎝大までの礫を少し含む）
74．2.5Y6/4にぶい黄 粗砂～小礫を多く含むシルト～細砂
75．2.5Y6/6明黄褐 粗砂～小礫混シルト～細砂
76．2.5Y6/4にぶい黄 小礫～４㎝大の礫を非常に多く含むシルト～極細砂（拳大までの礫を少し含む）
77．2.5Y5/3黄褐 粗砂～小礫を非常に多く含むシルト～細砂（人頭大までの礫を含む）
78．2.5Y5/4黄褐 粗砂～小礫（隙間をシルト～細砂が充填　拳大までの礫を含む）
79．2.5Y6/6明黄褐 粗砂～小礫を多く含むシルト～極細砂
80．2.5Y6/4にぶい黄 粗砂～小礫を非常に多く含む極細砂～細砂
81．2.5Y7/3浅黄 小礫～３㎝大の礫を含むシルト～極細砂（拳大までの礫を少し含む）
82．2.5Y7/3浅黄 粗砂～小礫混粘土～シルト
106．2.5Y5/4黄褐 シルト～細砂（中砂～粗砂・小礫を含む）

※ 断面位置は図５・６・10

0　(1:100)　5m

図 11　Ｃライン　断面図

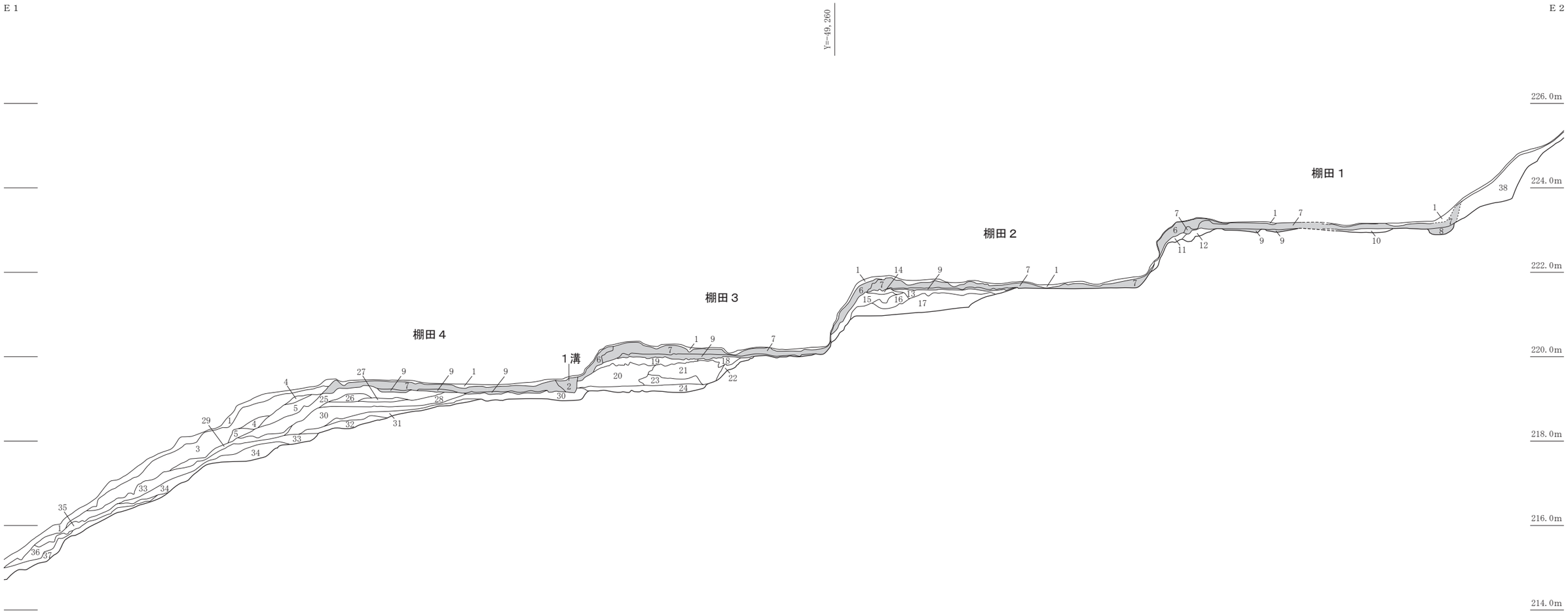


１．2.5Y3/2黒褐 中砂～粗砂混シルト～細砂〔表土層〕
２．2.5Y6/4にぶい黄 粗砂を多く含むシルト～細砂（小礫を含む）〔１溝〕
３．2.5Y6/6明黄褐 中砂～粗砂混シルト～細砂〔水田時の表土層〕
４．2.5Y5/2暗灰黄 中砂～粗砂混シルト～細砂〔作土層〕
４’．2.5Y6/3にぶい黄 中砂～粗砂混シルト～細砂〔水田時の表土層〕
５．10YR6/8明黄褐 中砂～粗砂混シルト〔床土〕
６．2.5Y6/3にぶい黄 細砂混シルト（小礫を含む）
７．2.5Y6/2灰黄 小礫を多く含む細砂混シルト
８．2.5Y6/3にぶい黄 小礫～５㎝大の礫を含む細砂混シルト
９．2.5Y6/4にぶい黄 小礫を多く含むシルト～細砂
10．10YR6/4にぶい黄橙 小礫～５㎝大の礫を含む細砂混シルト
11．2.5Y6/4にぶい黄 小礫を多く含む細砂混シルト
12．2.5Y6/3にぶい黄 小礫を含む細砂混シルト
13．2.5Y6/3にぶい黄 粗砂～小礫を多く含むシルト～細砂
14．2.5Y6/6明黄褐 小礫を多く含むシルト～細砂（拳大までの礫を少し含む）
15．2.5Y6/6明黄褐 粗砂～小礫・拳大までの礫を非常に多く含むシルト～細砂
16．10YR6/6明黄褐 小礫～５㎝大の礫を多く含む細砂混シルト
17．2.5Y6/2灰黄 粗砂～小礫混シルト
18．2.5Y6/1黄灰 粗砂混シルトと2.5Y7/2灰黄 粗砂～小礫混シルト～細砂がブロック状に混じる
19．2.5Y6/1黄灰 粗砂～小礫を多く含むシルト～細砂
20．10YR6/3にぶい黄橙 小礫を多く含む細砂混シルト
21．10YR6/3にぶい黄橙 小礫～拳大の礫を多く含む細砂混シルト
22．10YR6/3にぶい黄橙 小礫～拳大の礫を多く含むシルト～細砂
23．2.5Y6/4にぶい黄 粗砂～小礫混シルト
24．10YR6/6明黄褐 粗砂～小礫混シルト（５㎝大までの礫を少し含む）
25．10YR6/6明黄褐 粗砂～小礫を多く含むシルト（拳大までの礫を含む）
26．2.5Y6/4にぶい黄 粗砂～小礫・拳大までの礫を非常に多く含むシルト～細砂
27．2.5Y7/4浅黄 粗砂～小礫を多く含むシルト～細砂（拳大までの礫を含む）
28．2.5Y7/6明黄褐 粗砂～小礫混シルト～細砂
29．2.5Y7/6明黄褐 シルト～細砂（小礫を多く含む）
30．2.5Y7/6明黄褐 極細砂～細砂（粗砂を含む）
31．2.5Y7/6明黄褐 シルト～細砂（粗砂～小礫を少し含む）
32．2.5Y7/4浅黄 粗砂～小礫混シルト
33．10YR5/4にぶい黄褐 小礫～拳大の礫を多く含むシルト～細砂
34．2.5Y5/3黄褐 小礫～拳大の礫を多く含むシルト～細砂
35．2.5Y7/2灰黄 シルト～細砂（小礫を多く含む）
36．2.5Y6/3にぶい黄 粗砂～小礫を多く含むシルト～細砂
37．5Y6/1灰 粗砂～小礫を多く含むシルト～細砂
38．2.5Y7/2灰黄 シルト～極細砂（粗砂～小礫を含む）
39．2.5Y6/3にぶい黄 粗砂～小礫を多く含むシルト～細砂
40．2.5Y6/4にぶい黄 小礫～３㎝大の礫を多く含むシルト～細砂
41．2.5Y7/6明黄褐 粗砂～小礫を多く含むシルト～細砂
42．2.5Y8/4淡黄 シルト～細砂（粗砂～小礫を含む）
43．2.5Y6/3にぶい黄 粗砂～小礫・５㎝大までの礫を非常に多く含むシルト～細砂
44．2.5Y7/4浅黄 粗砂～小礫混シルト～細砂
45．2.5Y7/4浅黄 粗砂混シルト～細砂
46．2.5Y6/4にぶい黄 小礫を非常に多く含むシルト～細砂
47．5Y6/1灰 小礫を非常に多く含むシルト～細砂
48．5Y6/3オリーブ黄 粗砂～小礫を非常に多く含むシルト～細砂
49．2.5Y7/4浅黄 シルト～細砂（粗砂～小礫を含む）
50．2.5Y5/4黄褐 シルト～細砂（小礫を少し含む）
51．2.5Y6/4にぶい黄 シルト～細砂（小礫～６㎝大の礫を含む）
52．2.5Y4/4オリーブ褐 シルト～細砂（小礫を多く含む　５㎝大までの礫を含む）
53．2.5Y5/3黄褐 シルト～細砂（粗砂～小礫・５㎝大までの礫を多く含む）
54．2.5Y5/4黄褐 シルト（中砂～粗砂を多く含む　小礫～３㎝大の礫を少し含む）
55．10YR4/2灰黄褐 小礫を非常に多く含むシルト
56．2.5Y5/2暗灰黄 シルト～極細砂（中砂～粗砂を多く含む　拳大の礫を含む）
57．2.5Y4/1黄灰 シルト～細砂（粗砂～小礫を非常に多く含む）
58．2.5Y5/2暗灰黄 シルト～細砂（粗砂～小礫を含む）
59．2.5Y6/4にぶい黄 シルト～細砂（粗砂～小礫を含む　３～４㎝大の礫を少し含む）
60．2.5Y4/2暗灰黄 中砂～粗砂を非常に多く含むシルト（粗砂～小礫を含む）
61．2.5Y6/3にぶい黄 シルト～細砂（小礫を含む）
62．5Y5/2灰オリーブ シルト～中砂（粗砂～小礫を含む）
63．2.5Y6/2灰黄 シルト～細砂（小礫を含む）
64．2.5Y5/2暗灰黄 中砂～粗砂を多く含むシルト（拳大までの礫を多く含む）
69．5Y5/2灰オリーブ シルト～細砂（小礫～４㎝大の礫を多く含む）

※ 断面位置は図５・７・10

0　(1:100)　5m

図 12　Dライン　断面図

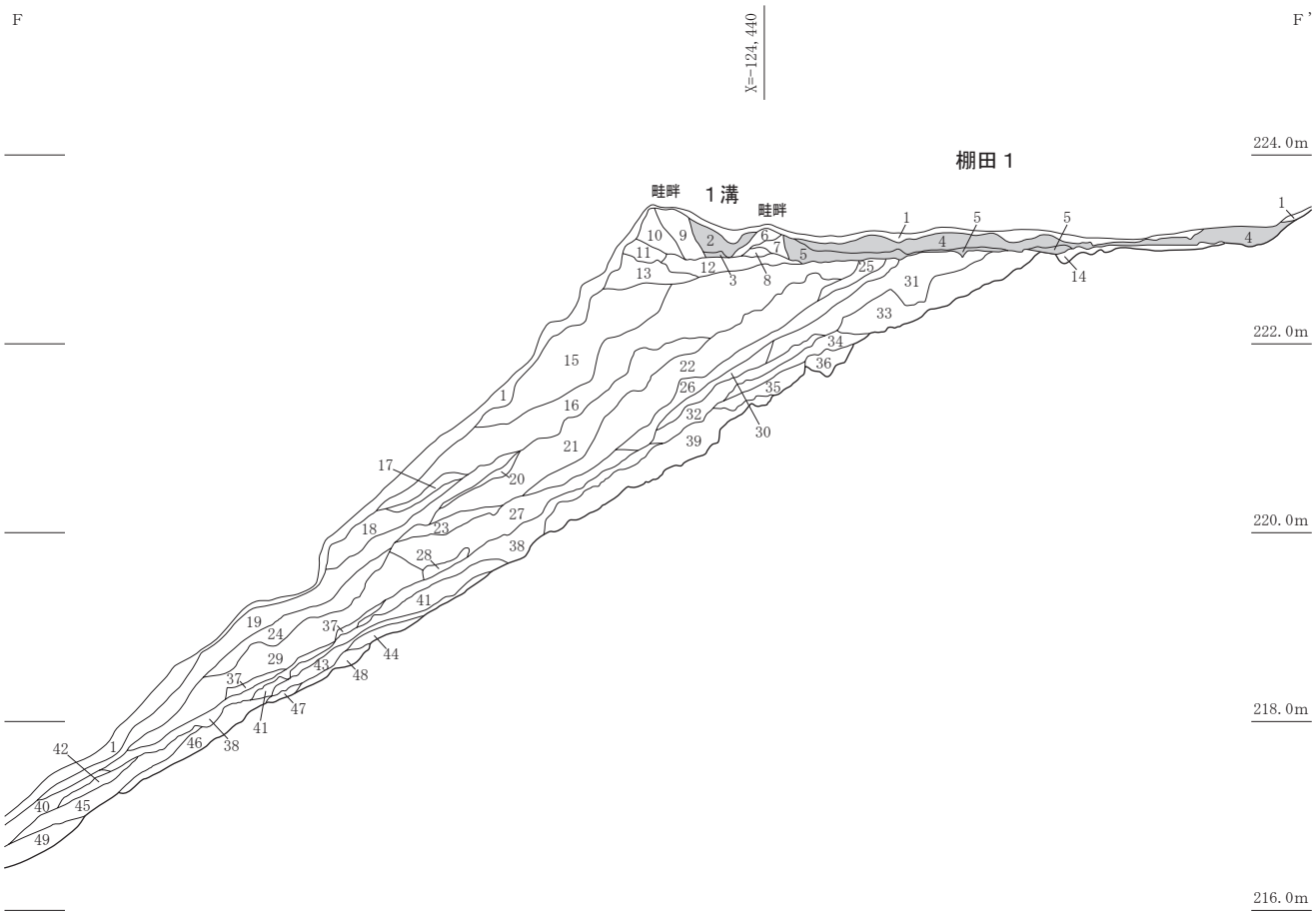


1．10YR4/1褐灰 シルト～細砂（粗砂～小礫を含む）〔表土層〕
2．2.5Y4/2暗灰黄 粗砂～小礫混シルト～細砂〔１溝〕
3．2.5Y5/2暗灰黄 粗砂～小礫混シルト～細砂
4．2.5Y6/3にぶい黄 粗砂～小礫混シルト～細砂
5．2.5Y6/2灰黄 粗砂～小礫・３㎝大までの礫を多く含むシルト～細砂
6．2.5Y6/2灰黄 シルト～細砂（粗砂～小礫を多く含む）〔水田時の表土層〕
7．2.5Y6/2灰黄 シルト～細砂（粗砂～小礫を含む）〔作土層〕
8．2.5Y6/4にぶい黄 シルト（粗砂～小礫・拳大までの礫を多く含む）〔溝〕
9．10YR6/6明黄褐 シルト～細砂（粗砂～小礫を少し含む）〔床土〕
10．2.5Y6/4にぶい黄 粗砂～小礫混シルト～細砂
11．2.5Y7/6明黄褐 粗砂～小礫混シルト～細砂と2.5Y6/2灰黄 粗砂～小礫混シルト～細砂がブロック状に混じる
12．2.5Y7/4浅黄 シルト～極細砂（粗砂～小礫を少し含む）
13．2.5Y6/4にぶい黄 粗砂～小礫混シルト～細砂
14．2.5Y6/2灰黄 粗砂～小礫を多く含むシルト～細砂
15．2.5Y6/3にぶい黄 粗砂～小礫を多く含むシルト～細砂（４～５㎝大の礫を含む）
16．2.5Y6/4にぶい黄 シルト～細砂（２～３㎝大の礫を含む）
17．2.5Y6/2灰黄 粗砂～小礫・３㎝大までの礫を非常に多く含むシルト～細砂
18．2.5Y6/4にぶい黄 小礫～拳大の礫を多く含むシルト～中砂
19．2.5Y6/3にぶい黄 ２～３㎝大の礫を多く含むシルト～細砂
20．2.5Y7/6明黄褐 シルト～細砂（小礫～５㎝大の礫を含む）
21．2.5Y6/4にぶい黄 ４～５㎝大の礫を非常に多く含むシルト～中砂
22．2.5Y5/2暗灰黄 小礫混シルト～細砂
23．2.5Y6/6明黄褐 ２～３㎝大の礫を非常に多く含むシルト～中砂（シルトのブロックを含む）
24．2.5Y6/2灰黄 小礫を多く含むシルト～細砂（シルトの小ブロックを含む）
25．2.5Y7/3浅黄 シルト～細砂（小礫を多く含む）
26．2.5Y6/4にぶい黄 小礫～５㎝大の礫を非常に多く含むシルト～細砂
27．2.5Y7/6明黄褐 シルト～細砂（小礫～３㎝大の礫を含む）
28．2.5Y7/2灰黄 シルト～極細砂（小礫を多く含む）
29．2.5Y7/4浅黄 粗砂～小礫を多く含むシルト～細砂
30．10YR6/4にぶい黄橙 粗砂～小礫・３㎝大までの礫を多く含むシルト～細砂
31．2.5Y7/6明黄褐 シルト～細砂（小礫を多く含む）
32．2.5Y6/3にぶい黄 粗砂～小礫を非常に多く含む極細砂～細砂
33．2.5Y8/6黄 極細砂～細砂（シルトのブロックを含む　粗砂～小礫を含む）
34．2.5Y6/4にぶい黄 粗砂～小礫・３㎝大までの礫を非常に多く含む極細砂～細砂
35．2.5Y6/3にぶい黄 シルト～極細砂（小礫を含む）
36．2.5Y6/2灰黄 シルト～極細砂（中砂～粗砂を多く含む　小礫～３㎝大の礫を含む）
37．2.5Y6/4にぶい黄 シルト～極細砂（粗砂～小礫・５㎝大までの礫を含む）
38．2.5Y6/4にぶい黄 シルト～極細砂（小礫～拳大の礫を多く含む）〔第１層〕

※ 断面位置は図５・９・10

0 (1:100) 5m

図 13　Ｅライン　断面図



１．2.5YR2/1赤黒 シルト～細砂（粗砂を多く含む）〔表土層〕
２．2.5Y5/3黄褐 シルト～細砂〔１溝〕
３．2.5Y5/4黄褐 中砂～小礫を多く含むシルト〔１溝〕
４．5Y6/1灰 シルト～細砂（粗砂～小礫を含む）〔作土層〕
５．7.5YR6/8橙 シルト〔床土〕
６．2.5Y5/4黄褐 シルト～細砂（小礫を含む）
７．2.5Y6/2灰黄 シルト～細砂（中砂～粗砂・小礫を含む）
８．2.5Y5/3黄褐 シルト～細砂
９．2.5Y6/3にぶい黄 シルト～中砂（小礫を多く含む）
10．2.5Y7/3浅黄 シルト～細砂（小礫を含む）
11．2.5Y6/3にぶい黄 シルト～細砂（小礫を含む　５㎝大のシルトブロックを含む）
12．2.5Y6/2灰黄 シルト～細砂（小礫を僅かに含む）
13．2.5Y6/4にぶい黄 シルト～細砂（小礫を含む）
14．5Y6/3オリーブ黄 シルト～細砂（小礫を多く含む）
15．2.5Y5/4黄褐 中砂を多く含むシルト（３㎝大までの礫を多く含む）
16．2.5Y5/3黄褐 中砂～粗砂を多く含むシルト
（３㎝大までの礫を多く含む　拳大の礫を含む　10㎝大のシルトブロックを含む）
17．2.5Y6/4にぶい黄 シルトブロックと粗砂～小礫
18．2.5Y5/3黄褐 粗砂～小礫
19．2.5Y7/6明黄褐 粗砂～小礫を多く含むシルト～細砂
20．2.5Y6/3にぶい黄 小礫を非常に多く含むシルト～細砂
21．2.5Y6/3にぶい黄 中砂～粗砂を多く含むシルト（小礫を含む）
22．2.5Y6/6明黄褐 シルト～中砂（粗砂～小礫を多く含む　５㎝大までの礫を含む）
23．2.5Y6/4にぶい黄 シルト（小礫を少し含む）
24．2.5Y6/6明黄褐 粗砂～小礫を多く含むシルト～中砂
25．2.5Y6/4にぶい黄 シルト～細砂（小礫を含む）
26．2.5Y5/2暗灰黄 中砂～粗砂を多く含むシルト（小礫を多く含む）
27．2.5Y6/4にぶい黄 小礫～５㎝大の礫を非常に多く含むシルト～中砂
（拳大までの礫を含む）
28．2.5Y7/4浅黄 シルト～極細砂（小礫を少し含む）
29．2.5Y7/4浅黄 粗砂～３㎝大の礫を非常に多く含むシルト～中砂
30．2.5Y6/2灰黄 拳大までの礫（隙間をシルトが充填　粗砂を多く含む）
31．2.5Y6/6明黄褐 シルト～細砂（５㎝大までの礫を含む）
32．N7/0灰白 シルト～細砂（小礫を含む）
33．2.5Y7/2灰黄 シルト～細砂（粗砂を含む　小礫を少し含む）
34．2.5Y6/3にぶい黄 粗砂～小礫を多く含むシルト
35．2.5Y7/2灰黄 中砂を多く含むシルト（小礫を少し含む）
36．2.5Y7/3浅黄 シルト～細砂（小礫を含む）
37．2.5Y7/6明黄褐 粗砂混シルト
38．5Y7/2灰白 シルト～極細砂（粗砂～小礫を少し含む）
39．2.5Y6/3にぶい黄 シルト（小礫を僅かに含む）
40．2.5Y6/4にぶい黄 小礫混シルト～細砂
41．5Y6/1灰 小礫を非常に多く含むシルト（拳大までの礫を含む）
42．2.5Y6/2灰黄 粗砂～小礫を含むシルト～極細砂
43．5Y6/2灰オリーブ 粗砂混シルト（小礫を少し含む）
44．2.5Y6/2灰黄 粗砂～小礫を多く含むシルト～中砂
45．2.5Y6/2灰黄 小礫混シルト（３～４㎝大の礫を少し含む）
46．2.5Y5/2暗灰黄 小礫を非常に多く含むシルト（拳大までの礫を少し含む）
47．5Y6/2灰オリーブ 小礫を多く含むシルト
48．5Y6/1灰 小礫混シルト～細砂
49．2.5Y6/2灰黄 粗砂～小礫を多く含むシルト（拳大までの礫を含む）

※ 断面位置は図５・10

0　(1:80)　5m

図14　Ｆライン　断面図

盛土流出を防ぐ工夫をしている可能性がある。また、一旦切土をした上に、盛土を施している箇所もみられる。推定される原地形に対し、１筆の面積が広く確保されており、大規模な造成が施工されたと想定できる。

なお、調査地北西端部にあたる棚田８の北西部分では、棚田８の基盤となる盛土層の直下でも作土層を検出し、より古い段階には上下２段の棚田であったことを確認している。第１面の平面図には下面の棚田は表現していないが、おおよそ第２面29土坑周辺の平坦部分が古い段階の棚田の下段に該当する（図18）。上下２段の棚田となっていたのを盛土によりかさ上げし、１筆にしたと思われる。この下面の棚田は北西側の調査区外へと続いており、字「宮山」と隣接する広い平坦地においても、少なくとも２度の造成を経て平坦面が拡張されていることがわかる。

作土層及び盛土層から出土した遺物は比較的少なく、かつ小片である。土師器、陶器、染付等がある（図17）。染付片には二重網目文を持つもの（１）が目立つ等、全体的に18世紀のものを中心としている。染付筒型碗（３）は、口縁部内面に四方襷文を、外面には格子文に菊花文と丸窓幾何学文を、見込みには五弁花文を、高台内には渦「福」銘を有す。棚田８の基盤となっている南西斜面盛土層内より出土したものであり、棚田造成時期の上限が18世紀中葉であることを示している。なお、弥生時代の甕底部片（２）が棚田７の盛土層内より出土している（図10・49）。今回の調査において、この時代の遺物はこの１点以外には出土しておらず、磨耗著しい状態である。

１溝（図10～15）

山頂を南東‐北西方向に縦断する。南東側調査区外から遠構え部の痩せ尾根上を通り、頂上部の南裾から、棚田部南縁にいたり、棚田部の何箇所かで分岐する。分岐した部分も含め、１溝と呼称している。ここでは棚田部に属する部分についてのみ報告する。

現況でも埋没はしているものの、帯状の窪みとなっていたため、ほとんどの箇所で溝として認識できた。幅は0.3ｍ程度の箇所が多いが、斜面部等では0.8ｍ前後まで広がっている。

東から棚田１～４の南縁に沿って西行する。途中、棚田３の段下にあたる棚田４の東縁に沿って北へ分岐し、棚田６にいたる。棚田４の南縁に沿って進んだ先は、棚田５の南縁にいたって西と北に分岐する。西への分岐は、棚田８の南縁へ向かい棚田５の段下にあたる斜面を降下する。北への分岐は、棚田４の段下にあたる棚田５の東縁に沿って進み、棚田７の南西隅に行き当たって西へ折れ、棚田５の段下にあたる斜面を降下する。棚田８中央を通り、西側斜面へ開口している。なお、棚田４南東部ではこの溝を検出できなかったが、図13の断面図にみられる通り棚田縁部が盛土流出により崩壊したためである。

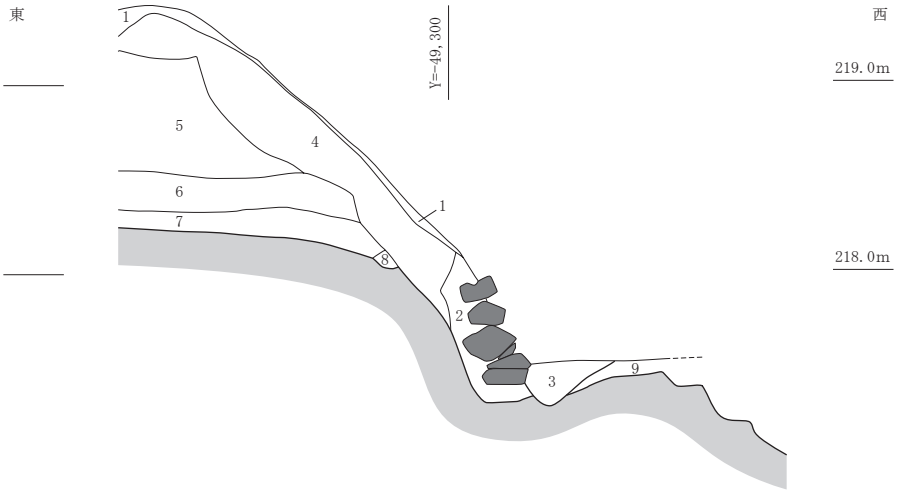
棚田との位置関係からみて、灌漑用水路と考えられる。東から西へ低くなる地形を通っており、東から導いてきた水を、各棚田へと分岐しながら配水していたと思われる。排水については、棚田６から北側斜面へ、棚田８から南西側斜面へ落としていたとみられる。

図14断面図から、溝と作土層、畦畔との関係がみてとれる。あわせて、それらすべてが厚い盛土上に形成されていることもわかる。溝の埋土については、上部は現表土の落ち込み、下部は小礫を含む細砂～シルト等である。なお、図15断面図からは、近代に盛土を重ね、石組を積んで水路を造り直していることがわかる。遺物は、出土していない。

４～10・52石組（図10～12・15・16）

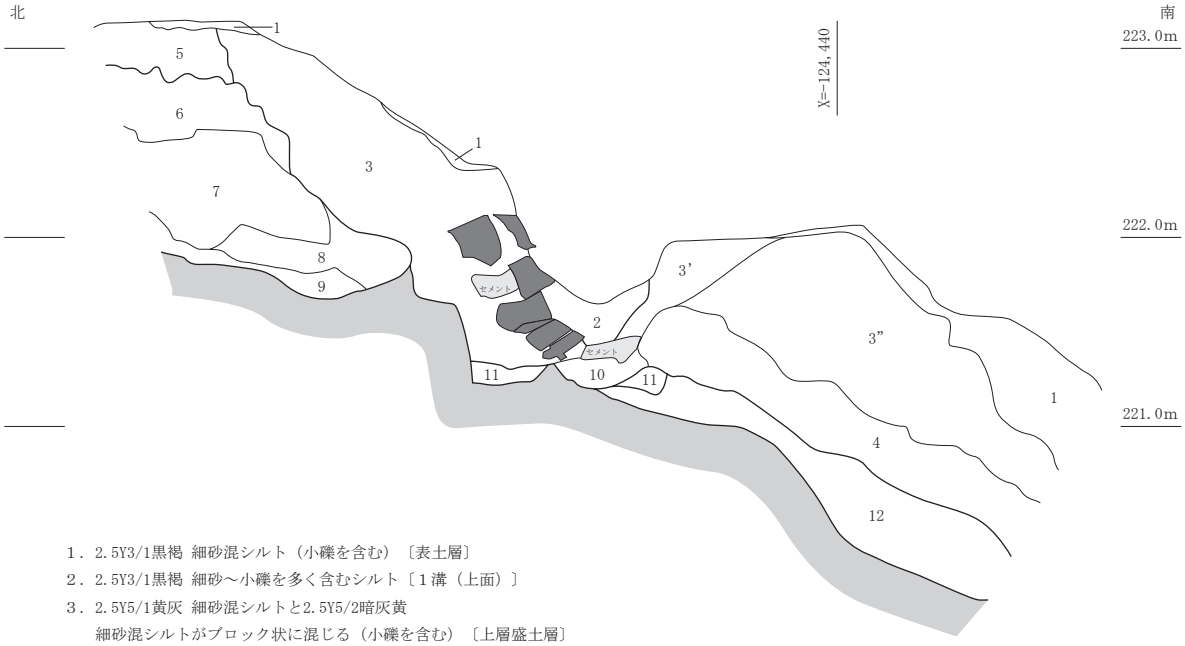
棚田の斜面を中心に、８箇所で石組を検出した。現況で存在を確認できるものもあったが、表土層を除去した段階で全形を検出したものが多く、作土層を除去して検出したものもある。城郭に伴うものか

１溝、６石組



１．10YR4/1褐灰 粗砂混シルト〔表土層〕
２．10YR5/2灰黄褐 粗砂～小礫混シルト〔石組裏込〕
３．10YR3/1黒褐 粗砂混シルト〔１溝〕
４．10YR6/2灰黄褐 粗砂～小礫混シルト〔水田時の表土層〕
５．10YR5/4にぶい黄褐 粗砂～５cm大の礫を多く含むシルト〔盛土層〕
６．10YR5/2灰黄褐 粗砂～３cm大の礫を含むシルト〔盛土層〕
７．10YR5/1褐灰 粗砂混シルト〔盛土層〕
８．2.5Y8/4淡黄 粗砂～３cm大の礫を非常に多く含むシルト
９．10YR6/3にぶい黄橙 シルト～粗砂
基盤層．2.5Y6/4にぶい黄 粗砂～３cm大の礫を非常に多く含むシルト～中砂

１溝、10石組



１．2.5Y3/1黒褐 細砂混シルト（小礫を含む）〔表土層〕
２．2.5Y3/1黒褐 細砂～小礫を多く含むシルト〔１溝（上面）〕
３．2.5Y5/1黄灰 細砂混シルトと2.5Y5/2暗灰黄
　細砂混シルトがブロック状に混じる（小礫を含む）〔上層盛土層〕
３’．2.5Y4/2暗灰黄 粗砂混シルト（小礫を含む）〔上層盛土層〕
３”．2.5Y5/3黄褐 粗砂～小礫混シルト～細砂（５cm大までの礫を含む）〔上層盛土層〕
４．5Y6/2灰オリーブ 細砂混シルト（小礫～５cm大の礫を少し含む）〔上層盛土層〕
５．2.5Y6/2灰黄 細砂混シルト（小礫を少し含む）〔作土層〕
６．5Y5/2灰オリーブ 粗砂～小礫を多く含むシルト（３cm大までの礫を含む）〔下層盛土層〕
７．5Y5/2灰オリーブ 粗砂～小礫を多く含むシルト（５cm大までの礫を含む）〔下層盛土層〕
８．2.5Y6/2灰黄 極細砂混シルト（小礫を少し含む）〔下層盛土層〕
９．2.5Y6/3にぶい黄 粗砂～小礫混シルト～細砂（３cm大までの礫を含む）〔下層盛土層〕
10．2.5Y6/3にぶい黄 粗砂～小礫混シルト～細砂（５cm大までの礫を含む）〔上層盛土層〕
11．2.5Y4/2暗灰黄 粗砂～小礫混シルト～中砂（６cm大までの礫を含む）〔１溝（下面）〕
12．2.5Y5/4黄褐 粗砂～小礫混シルト～中砂（８cm大までの礫を含む）〔下層盛土層〕
基盤層．10YR7/6明黄褐 粗砂～小礫を多く含むシルト～細砂

※ 断面位置は図10

0　(1:40)　2m

図15　１溝、６・10石組　断面図

判断するため、すべての石組設置箇所において土層断面を確認したが、以下に報告するように、検出したすべての石組が棚田に付随するものであった。

４・５石組は、棚田８北東縁に沿って検出した。棚田に接する斜面下端に積み置かれている。石組４は遺存状況が悪いが、石組５は比較的大きな礫を置き並べ、その上により小さな礫を載せている。裏込め土は表土層と酷似する腐植土であり、それほど古くはない時期に構築されたとみられる。棚田８縁部の土留めと思われる。**６石組**（図15）は、棚田５の東縁を通る、１溝東肩部で検出した。１溝東肩は棚田４西縁の段下斜面にあたるが、高さ２ｍ弱の斜面下端からおおよそ１／３の高さまで角礫が粗雑に積まれている。１溝の護岸として築かれたと思われる。**７石組**（図16）は、棚田４北縁の段下にあたる棚田６の南縁で検出した。高さ約1.3ｍの斜面下部に礫が２・３段積み置かれている。棚田の斜面

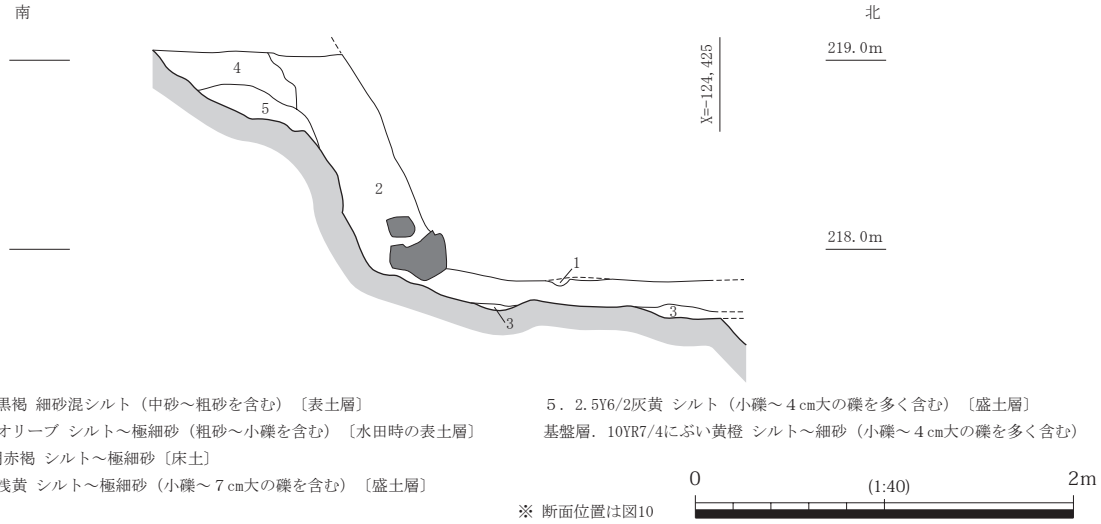


図 16　７石組　断面図

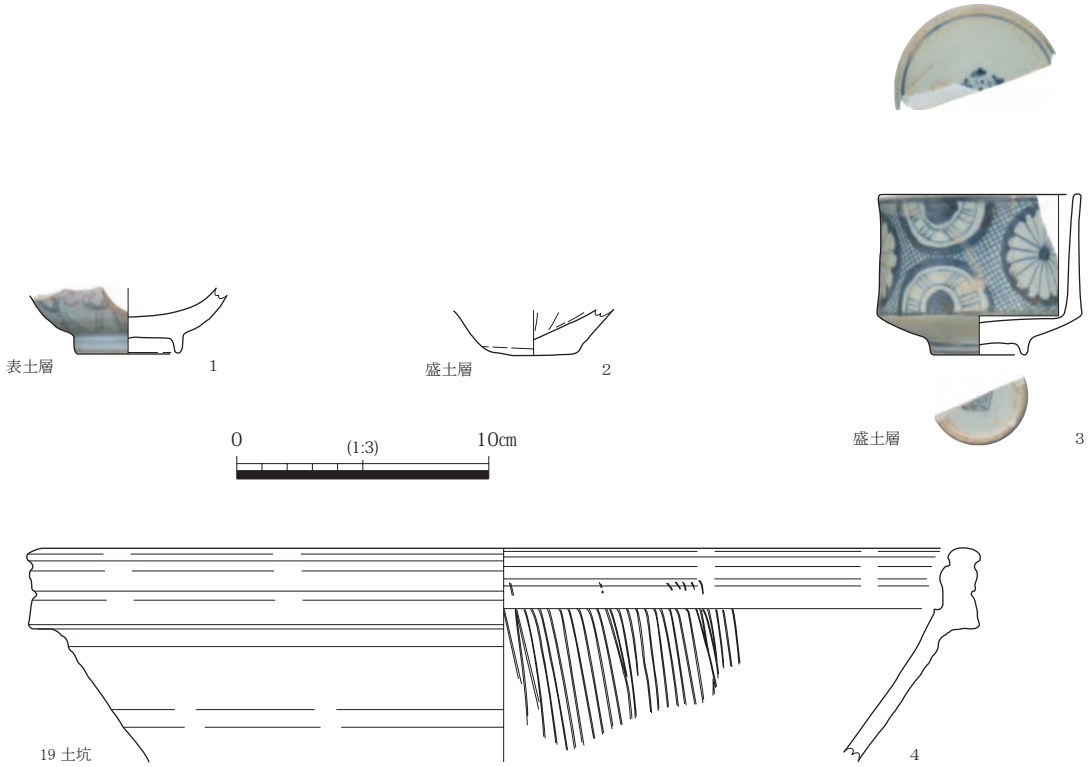


図 17　棚田部　第１面関連　出土遺物

を造成するため、下部に切土、上部に盛土を施している箇所にあたる。土留めのために置かれたかと思われる。**８石組**は、棚田４の南縁に沿う１溝北肩に礫を列状に置き並べたものである。断面図（図12）で確認できるように、１溝北側の作土層内に埋もれている。畦畔の箇所にあたり、１溝肩及び棚田４南縁を保護していたと考えられる。**９石組**は、８石組の直下の斜面で検出した。崩壊して原位置を留めていない礫が多く、詳細は不明である。棚田４の南縁は厚い盛土からなっており、土留めのために礫が積まれていたと考えられる。**10石組**（図15）は、棚田１南西隅の段下にあたる、１溝北肩で検出した。１溝の項で記した通り、近代の所産である。**52石組**は、棚田６北縁の斜面で検出した。盛土により造成された斜面に積まれており、土留めであったと思われる。

19土坑（図10・17）

棚田３の西側斜面に位置する。棚田時の斜面表土層を除去し、盛土層上面で検出した。径約0.6ｍ、深さ約0.3ｍである。４の陶器擂鉢片が出土している。堺擂鉢または明石擂鉢と考えられているもので、18世紀中・後葉の時期が与えられる。

２．第２面（図11～14・18～27　カラー図版８　図版５～13・50）

第１面棚田のベースである盛土層をすべて除去した、基盤層上面である。東から西に低くなる尾根筋の頂部である。棚田造成時に切土された箇所は削平を受けている。盛土された棚田縁辺部のみが原地形を留めているが、旧表土層は全く認められなかった。斜面部分は傾斜が急であり、表土層が流出しやすいためと考えられる。

大規模な削平を免れた尾根筋頂部の縁辺において、土坑を10基検出した。いずれも埋土に炭を含み、被熱痕跡の認められるものが目立つ。

11土坑（図18・19　図版６・８）

尾根筋の南縁部に位置し、南面斜面を望む立地である。不整な楕円形で、長径約0.2ｍ、短径約0.1ｍ、深さ0.03ｍである。第１面棚田造成時に削平を受け、底部のみが遺存していると思われる。埋土に炭片を多く含む。被熱痕跡は確認していない。埋土をすべて洗浄したが、遺物は含まれていなかった。

１層内の炭片について放射性炭素年代測定を実施した結果、15世紀末～17世紀中葉の年代が示されている（第４章第２節）。

12土坑（図18・19　図版６・８）

尾根筋の北縁部に位置し、北面斜面を望む立地である。不整な円形で、径約0.4ｍ、深さ0.04ｍである。第１面棚田造成時に、上部が削平を受けたと思われる。埋土下層に炭片を多く含む。被熱痕跡は確認していない。埋土をすべて洗浄したが、遺物は含まれていなかった。

３層内の炭片について放射性炭素年代測定を実施した結果、15世紀後葉～17世紀中葉の年代が示されている（第４章第２節）。

13土坑（図18・20　図版６・９）

尾根筋の北縁部に位置し、北面斜面を望む立地である。不整な円形で、径約0.7ｍ、深さ約0.1ｍである。第１面棚田造成時に、上部が削平を受けたと思われる。埋土上層に拳大までの礫を含み、下層に炭片を多く含む。壁面上部の基盤層が赤色化しており、被熱していると思われる。

南西側に14土坑が隣接している。埋土をすべて洗浄したが、遺物は含まれていなかった。

３層内の炭片について放射性炭素年代測定を実施した結果、15世紀中葉～17世紀前葉の年代が示さ

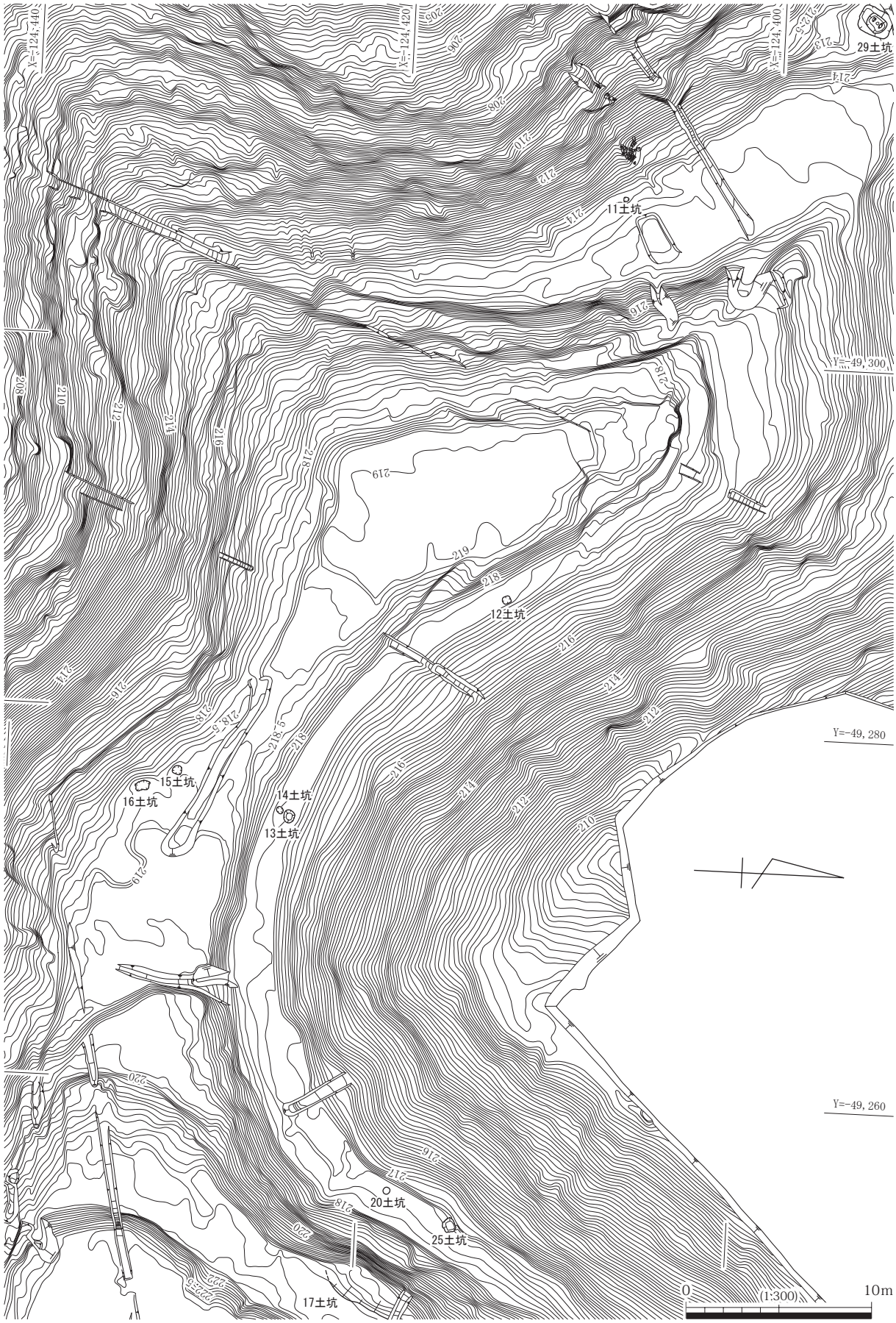
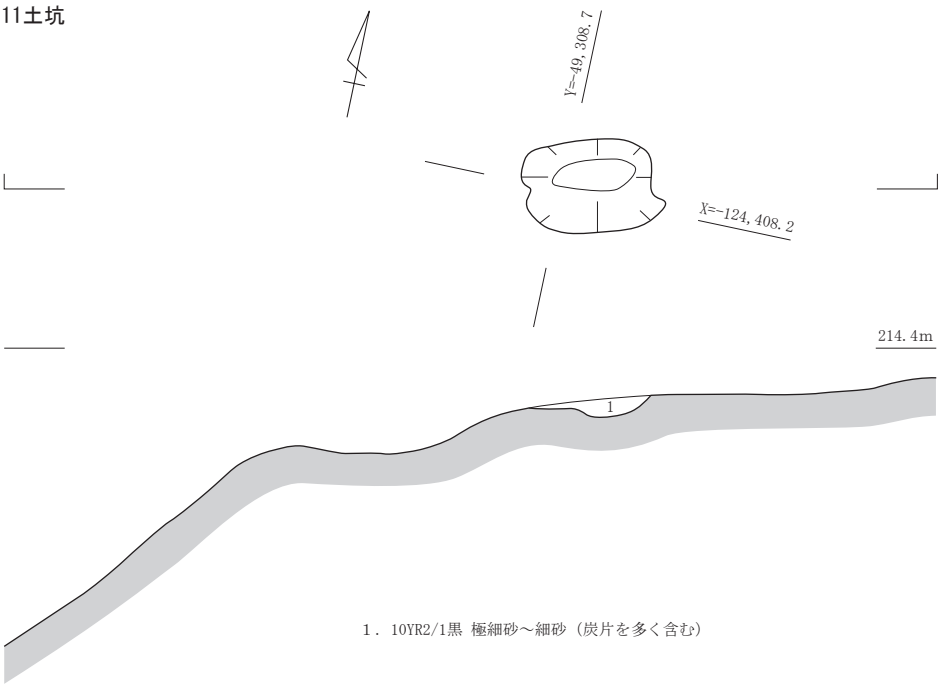


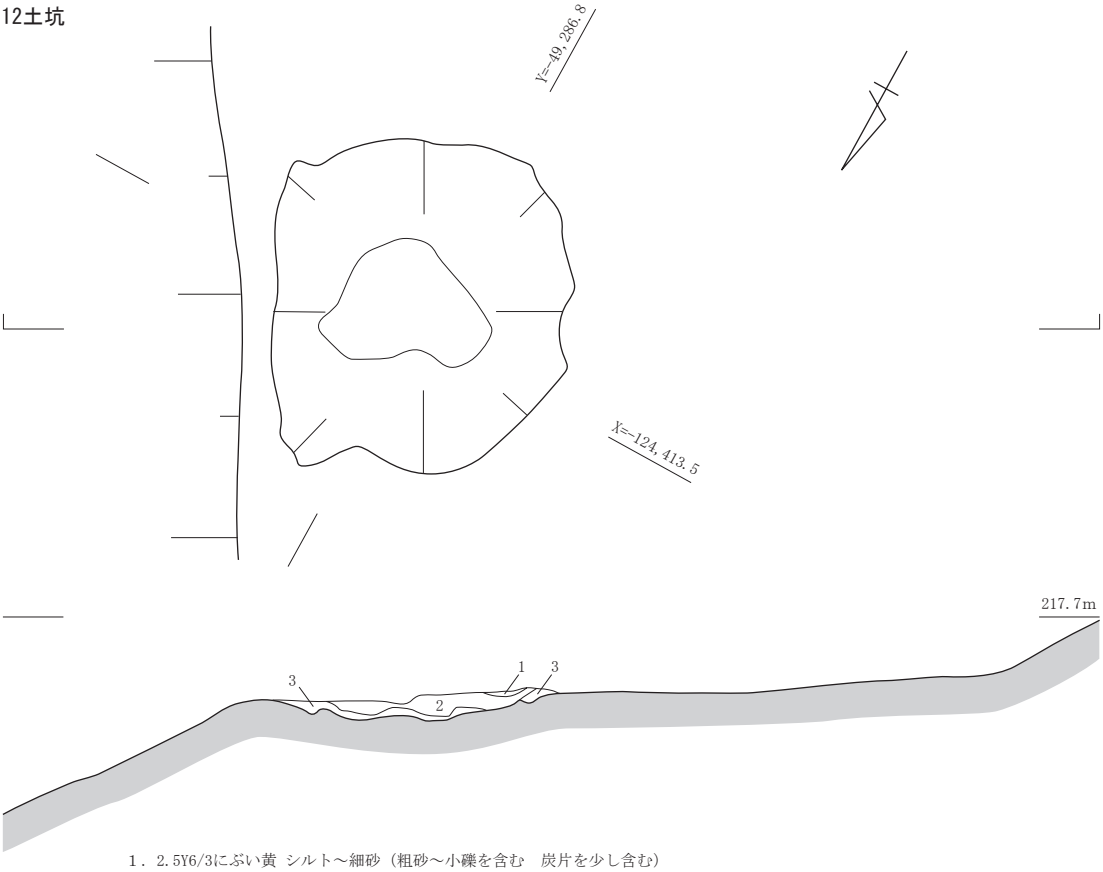
図 18　棚田部　第２面　平面図

11土坑



１．10YR2/1黒 極細砂～細砂（炭片を多く含む）

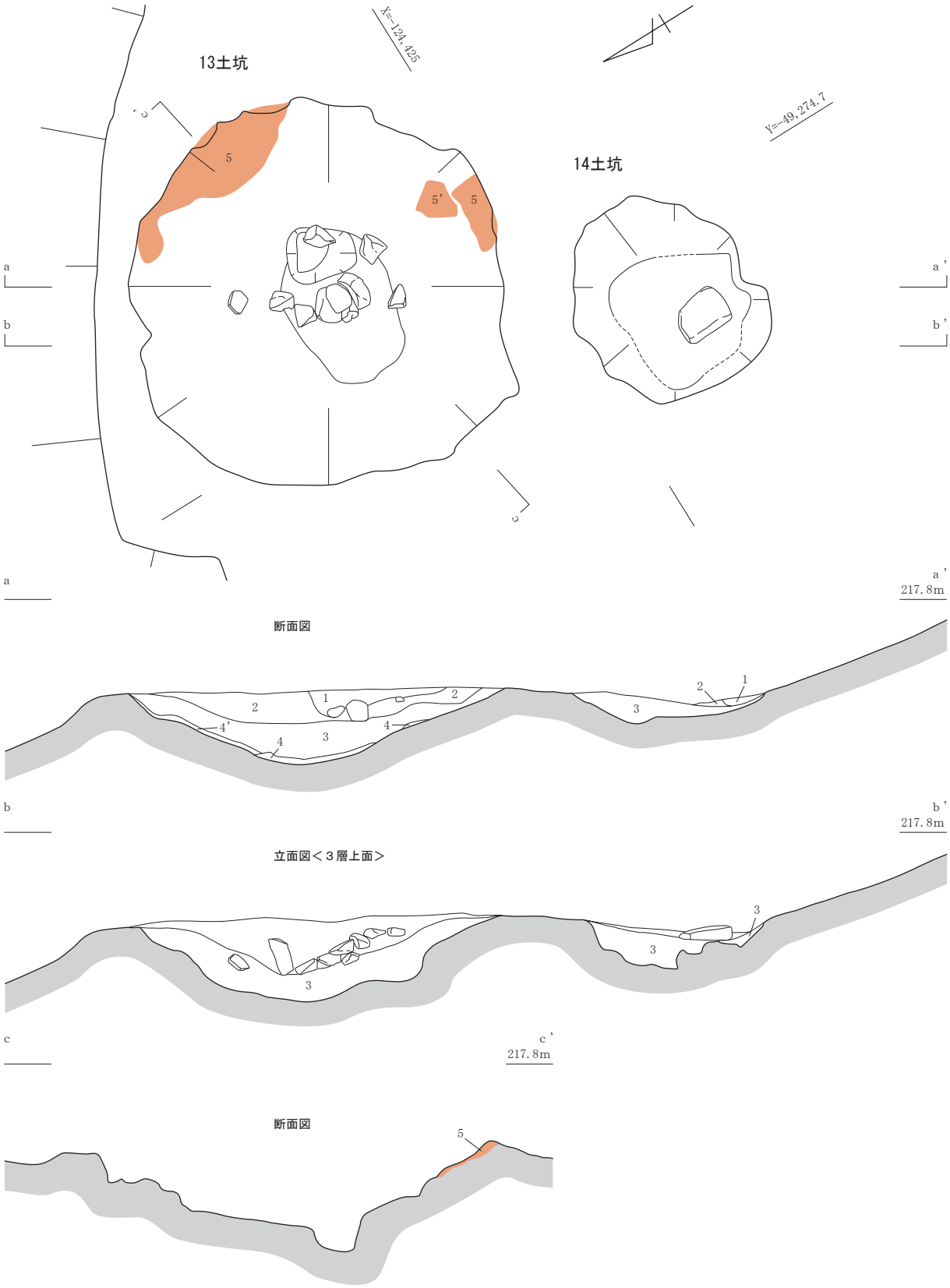
12土坑



１．2.5Y6/3にぶい黄 シルト～細砂（粗砂～小礫を含む　炭片を少し含む）
２．2.5Y6/2灰黄 シルト～極細砂（３㎝大までの礫を含む　粗砂～小礫を少し含む　炭片を含む）
３．2.5Y4/1黄灰 シルト～極細砂（粗砂～小礫を含む　炭片を多く含む）

0　(1:10)　0.5m

図 19　11・12 土坑　平面・断面図



１．2.5Y6/2灰黄 シルト～細砂（粗砂～小礫を多く含む　炭小片を僅かに含む）
２．2.5Y6/1黄灰 シルト～細砂（拳大までの礫を含む　炭小片を含む）
３．5Y4/1灰 シルト～極細砂（小礫を含む　炭小片を多く含む）
４．5Y2/1黒 シルト～極細砂（炭小片を非常に多く含む）
４'．N4/4灰 シルト～極細砂（炭小片を多く含む）
５．10R4/6赤 シルト～極細砂（粗砂～小礫を含む）〔基盤層　被熱痕跡〕
５'．10Y3/1オリーブ黒 シルト〔基盤層　被熱痕跡〕

0　(1:10)　0.5m

図 20　13・14 土坑　平面・断面・立面図

れている（第４章第２節）。

14土坑（図18・20　図版６・９）

尾根筋の北縁部に位置し、北面斜面を望む立地である。不整な円形で、径約0.3ｍ、深さ約0.1ｍである。第１面棚田造成時に、上部が削平を受けたと思われる。埋土に炭片を多く含む。被熱痕跡は確認していない。

北東側に隣接する13土坑と埋土が同様である。13土坑よりも原地形が高い位置にあたっており、より削平の影響を受けていることが想定できる。原形は13土坑と近似していた可能性が高い。

埋土をすべて洗浄したが、遺物は含まれていなかった。

15土坑（図18・23　図版７・10）

尾根筋の南縁部に位置し、南面斜面を望む立地である。不整な円形で、径約0.5ｍ、深さ約0.1ｍである。第１面棚田造成時に、上部が削平を受けたと思われる。埋土下層に炭片を多く含む。被熱痕跡は確認していない。埋土をすべて洗浄し、土師器細片を検出している。

南東側に16土坑が隣接している。

16土坑（図18・21・22　カラー図版８　図版７・11・50）

尾根筋の南縁部に位置し、南面斜面を望む立地である。不整な楕円形で、長径約0.8ｍ、短径約0.5ｍ、深さ0.05ｍである。

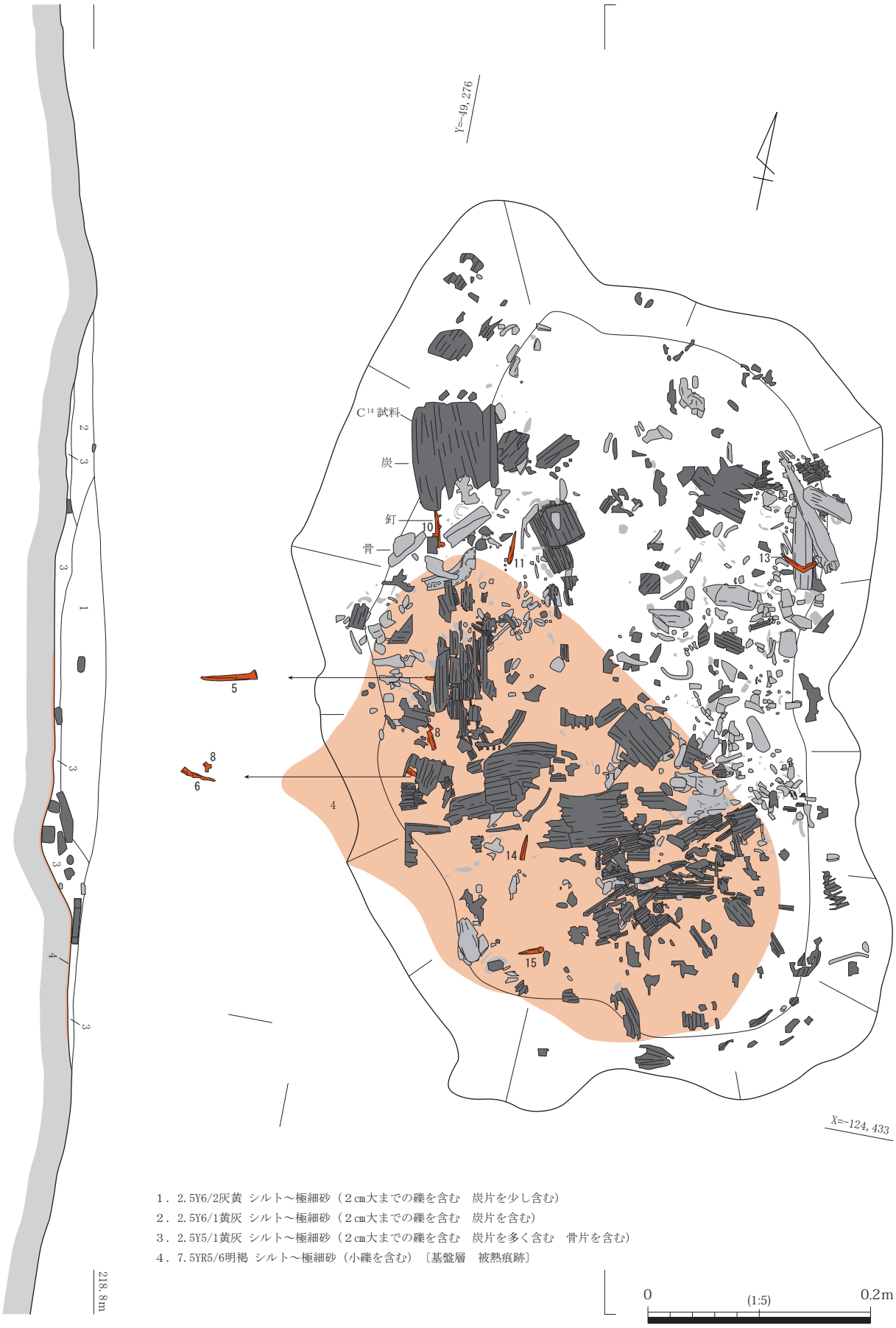
第１面棚田の盛土層を除去して検出した。直上の盛土層に、遺構埋土中のものと同様の炭片が相当量みられたことから、棚田造成時に上部が削平を受けたと思われる。

最下層である３層に炭片を多く含み、その層内にあたる底部において、骨片、炭片、釘を検出した。骨はいずれも小片で焼けており、底部全体に分布している。炭片も同様に底部全体に分布しているが、一部に板材状を呈しているものがみられる。西辺に沿う位置に南北方向の木目のもの、中央南寄りに東西方向の木目のものが認められる。幅は最大８㎝程度で、いずれも厚みは遺存状態の良い箇所で約１㎝である。釘は15本出土しているが、うち４本は土坑直上の棚田盛土層、１本は上層である１層に含まれていたものである。３層出土で位置を記録しているのは８本であるが、東辺部の骨片上に載っていた１本以外は、西半部出土である。

南西部の底面を中心に基盤層が褐色化しており、被熱していると思われる。あわせて焼骨が出土していることから、火葬の遺構であると考えられる。釘は木棺に使用されていたものと想定できる。板材状を呈する炭片は、その形状と土坑内での分布状況から、木棺部材である可能性も考えられる。西辺に沿う炭化材と、釘の分布範囲が重なることから、その辺りが木棺の側面にあたっていたとも推測できる。

炭化材と釘がみられる土坑南西部とは対照的に、北東部では炭小片と骨片が散在している。北東隅部では骨片と釘が重なり合っている状況もみられる。土坑南西部が火葬直後の原位置を比較的留めているとすれば、北東部は攪拌されたとも考えられる。すなわち北東部において、拾骨が行なわれたと仮定することも可能である。この範囲で土坑底面に被熱痕跡が認められないのも、攪拌されたことによるとも考えられる。また、土坑の南西側は急斜面となっており、作業スペースが北東側にしか確保できないこともこの仮説を補強すると思われる。

出土遺物は、釘のみである。５は完形で、長さ4.7㎝（約１寸５分）、頭部幅0.7㎝、基部幅0.3㎝、基部厚さ0.2㎝である。頭部の形状が確認できるものは、すべて頭巻（かしらまき）釘である。一端を鍛打によって扁平にし、折り返して成形されている。基部の断面形は、方形のものもあるが、長方形の



1．2.5Y6/2灰黄 シルト～極細砂（２cm大までの礫を含む　炭片を少し含む）
2．2.5Y6/1黄灰 シルト～極細砂（２cm大までの礫を含む　炭片を含む）
3．2.5Y5/1黄灰 シルト～極細砂（２cm大までの礫を含む　炭片を多く含む　骨片を含む）
4．7.5YR5/6明褐 シルト～極細砂（小礫を含む）〔基盤層　被熱痕跡〕

図 21　16 土坑　平面・断面図

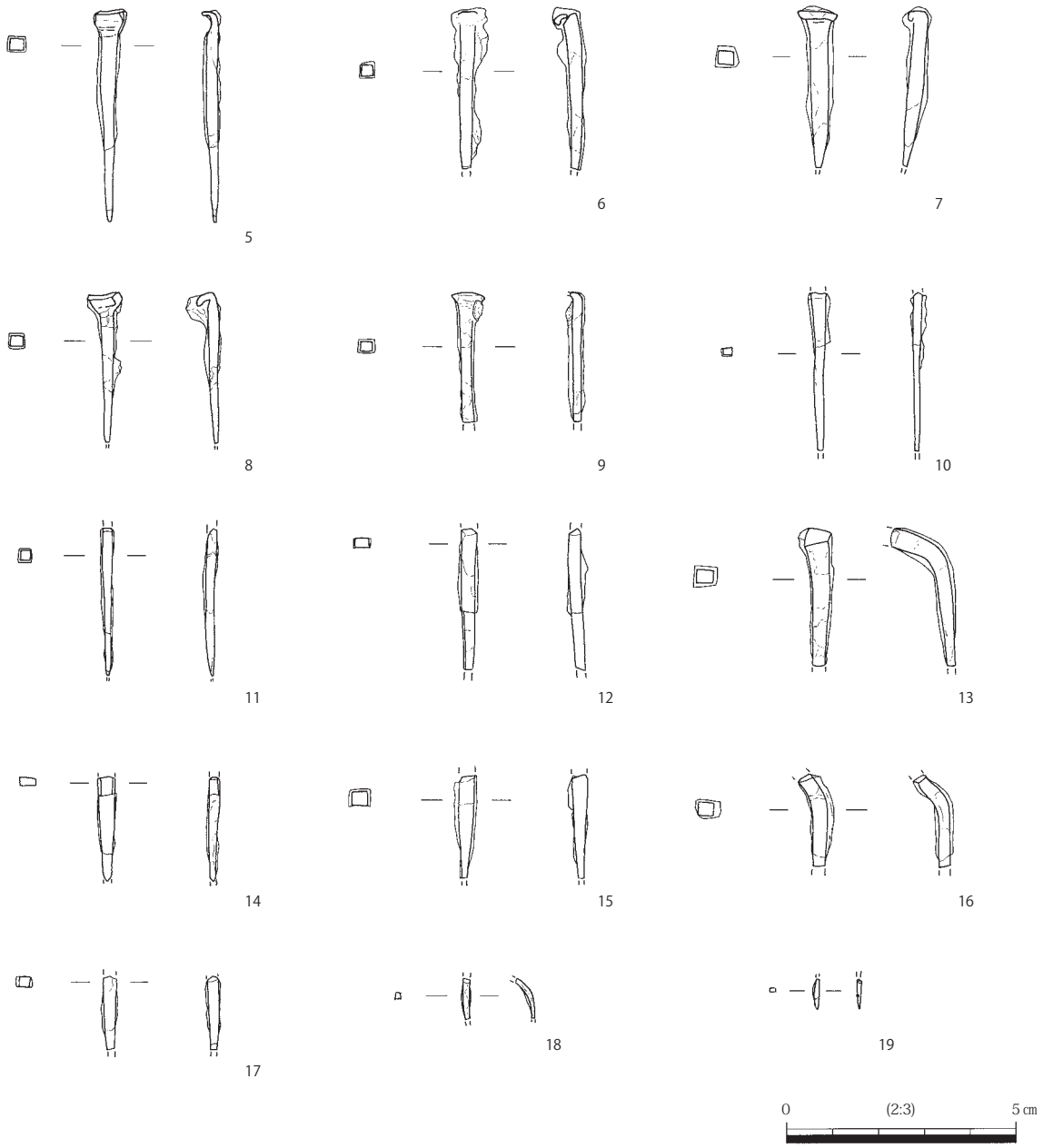


図 22　16 土坑　出土遺物

ものが多くを占める。なお、埋土をすべて洗浄したが、骨片、釘以外のものは含まれていなかった。

北西側に15土坑が隣接しているが、関係は不明といわざるを得ない。

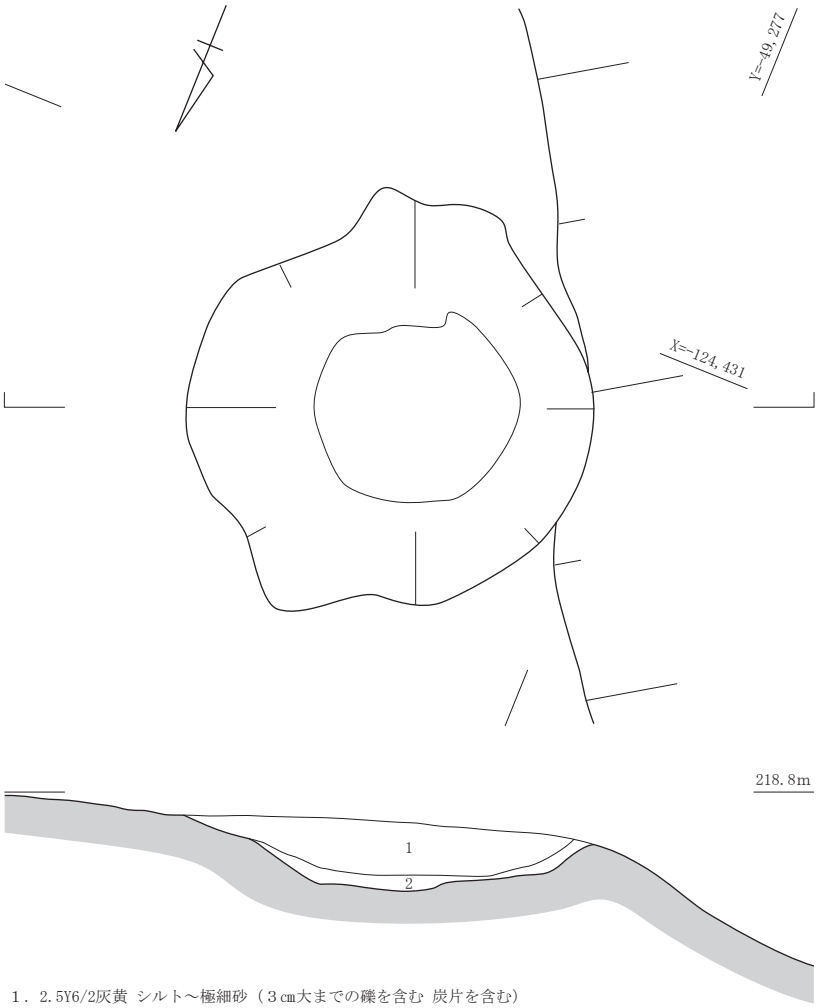
骨片はいずれも細片で、被熱による収縮と歪みが大きい。安部みき子氏に鑑定を依頼した（第４章第１節）。部位が同定されたのは、左上顎の第２大臼歯、手または足の末節骨の２点である。

また、３層検出の炭化材について、放射性炭素年代測定を実施した結果、16世紀前葉～ 17世紀中葉の年代が示されている（第４章第２節）。

17土坑（図18・24　図版８）

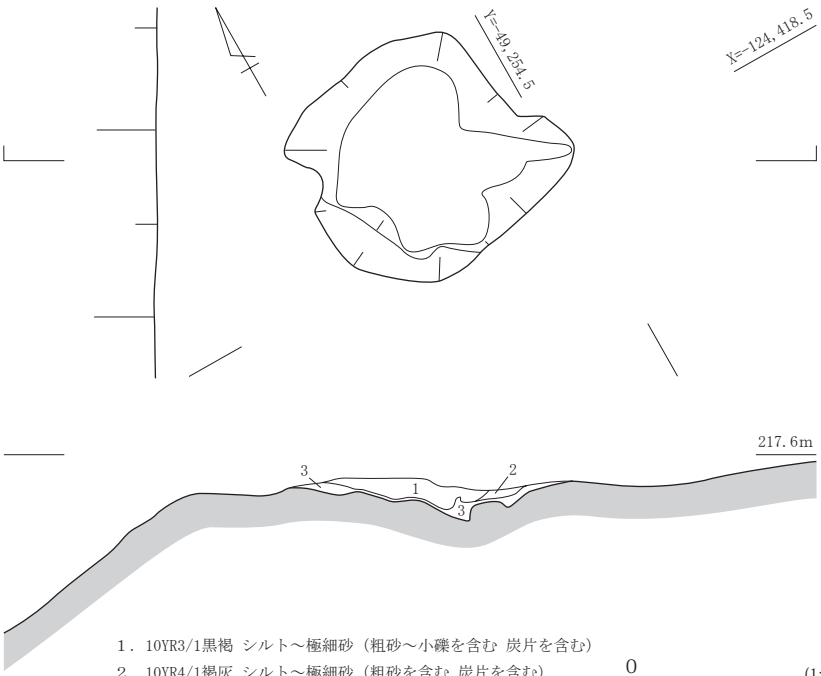
尾根筋の北縁部に位置し、北面斜面を望む立地である。北西側の斜面に開口する落ち込み状を呈する。長さ3.3ｍ以上、最大幅約1.9ｍである。棚田盛土層を除去して検出した。埋土に炭片、焼土片を含む。底面中央部の一部が赤黒色化しており、被熱していると思われる。被熱痕跡周囲に炭片、焼土片を含む層（３・３´層）がみられる。

15土坑



１．2.5Y6/2灰黄 シルト～極細砂（３㎝大までの礫を含む 炭片を含む）
２．2.5Y7/2灰黄 シルト～極細砂（３㎝大までの礫を含む 炭片を多く含む）

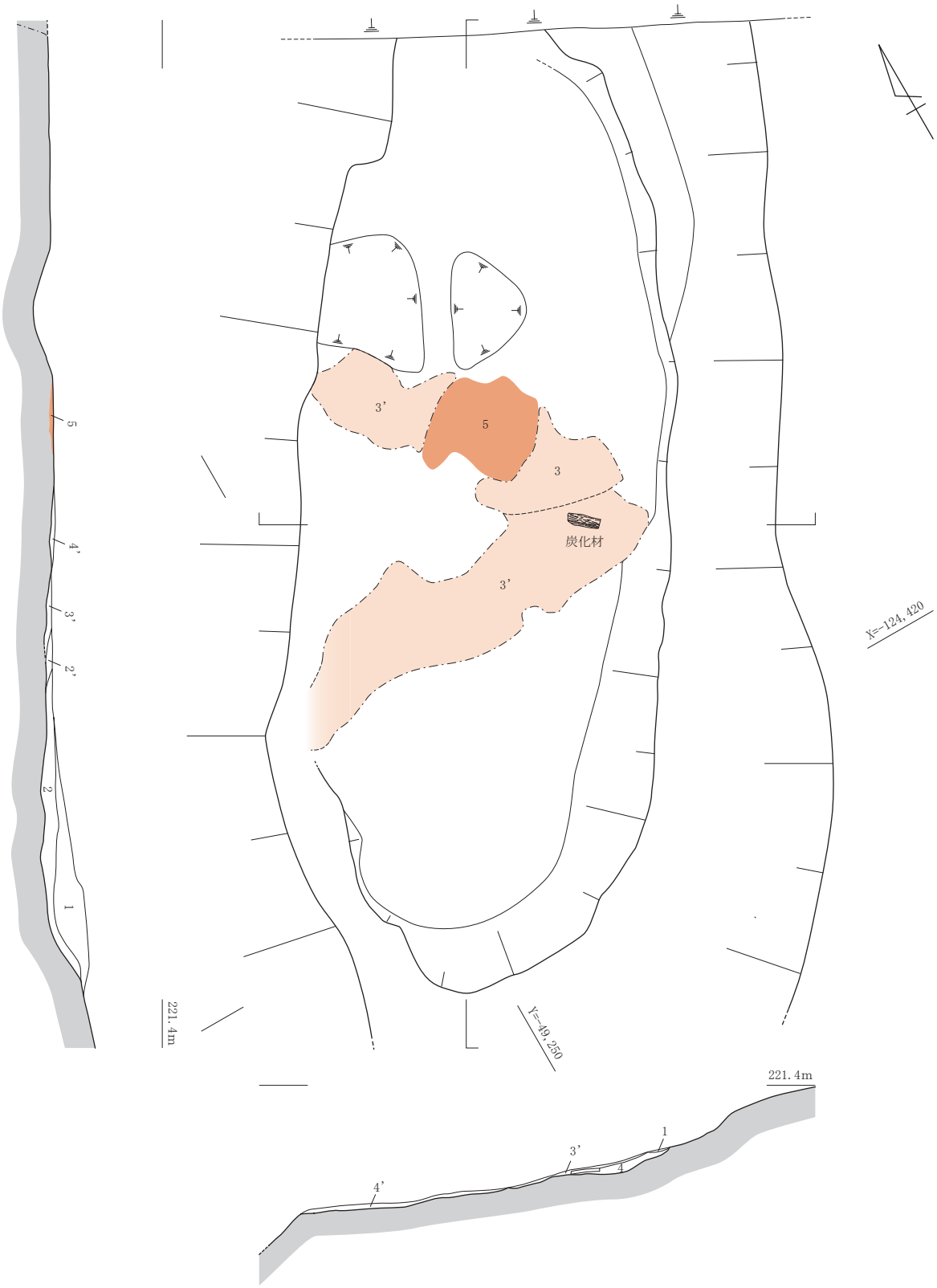
20土坑



１．10YR3/1黒褐 シルト～極細砂（粗砂～小礫を含む 炭片を含む）
２．10YR4/1褐灰 シルト～極細砂（粗砂を含む 炭片を含む）
３．10YR6/2灰黄褐 シルト～細砂（小礫を含む 炭片を少し含む）

0　(1:10)　0.5m

図 23　15・20 土坑　平面・断面図



１．2.5Y7/4浅黄 シルト～極細砂（粗砂～小礫を多く含む）
２．2.5Y5/1黄灰 シルト～極細砂（粗砂～小礫を含む　炭小片を少し含む）
２’．10YR5/2灰黄褐 シルト～極細砂（粗砂～小礫を含む　炭小片を含む）
３．2.5YR2/1赤黒 シルト～極細砂（小礫を含む　炭小片・焼土小片を含む）
３’．2.5YR3/1暗赤灰～2.5YR3/2暗赤褐 シルト～極細砂
（小礫を含む　炭小片・焼土小片を含む）
４．2.5Y6/2灰黄 シルト～細砂（小礫を含む）
４’．2.5Y6/3にぶい黄 シルト～細砂（小礫を含む）
５．2.5YR1.7/1赤黒 シルト～極細砂（小礫を含む　上面に炭小片・焼土小片）
〔基盤層　被熱痕跡〕
基盤層．2.5Y6/6明黄褐 シルト～細砂（小礫を含む　３～４㎝大の礫を少し含む）

0　(1:20)　1 m

図 24　17 土坑　平面・断面図

３´層から長さ約11㎝、幅約４㎝、厚さ約１㎝の炭化材が１点出土した。埋土をすべて洗浄したが、これ以外に遺物は含まれていなかった。検出した炭片について放射性炭素年代測定を実施した結果、17世紀後葉～20世紀中葉の年代が示されている（第４章第２節）。

20土坑（図18・23　図版７・９）

尾根筋の北縁部に位置し、北面斜面を望む立地である。不整な円形で、径約0.3ｍである。第１面棚田造成時に削平を受け、底部のみが遺存していると思われる。埋土に炭片を含む。被熱痕跡は確認していない。埋土をすべて洗浄したが、遺物は含まれていなかった。

25土坑（図18・27　図版７・10）

尾根筋の北縁部に位置し、北面斜面を望む立地である。隅丸長方形で、長さ約0.8ｍ、幅約0.6ｍ、深さ約0.1ｍである。南東部分を中心に、第１面棚田造成時に上部が削平を受けていると思われる。他辺に比べて北西辺の壁の立ち上がりが低く、斜面に向かって開口しているような形状を呈する。北西辺以外の３辺の壁面上部で基盤層が褐色化しているのが認められ、被熱していると思われる。埋土に炭小片を含む。埋土をすべて洗浄したが、遺物は含まれていなかった。

29土坑（図18・25・26　カラー図版８　図版12・13・50）

尾根筋の南縁部に位置し、南面斜面を望む立地である。隅丸長方形で、長さ約1.8ｍ、幅約1.4ｍ、深さ約0.3ｍである。この部分には第１面棚田の基盤となる盛土層下にさらに作土層が存在しており、それに伴う床土を除去した、基盤層上面で検出した。

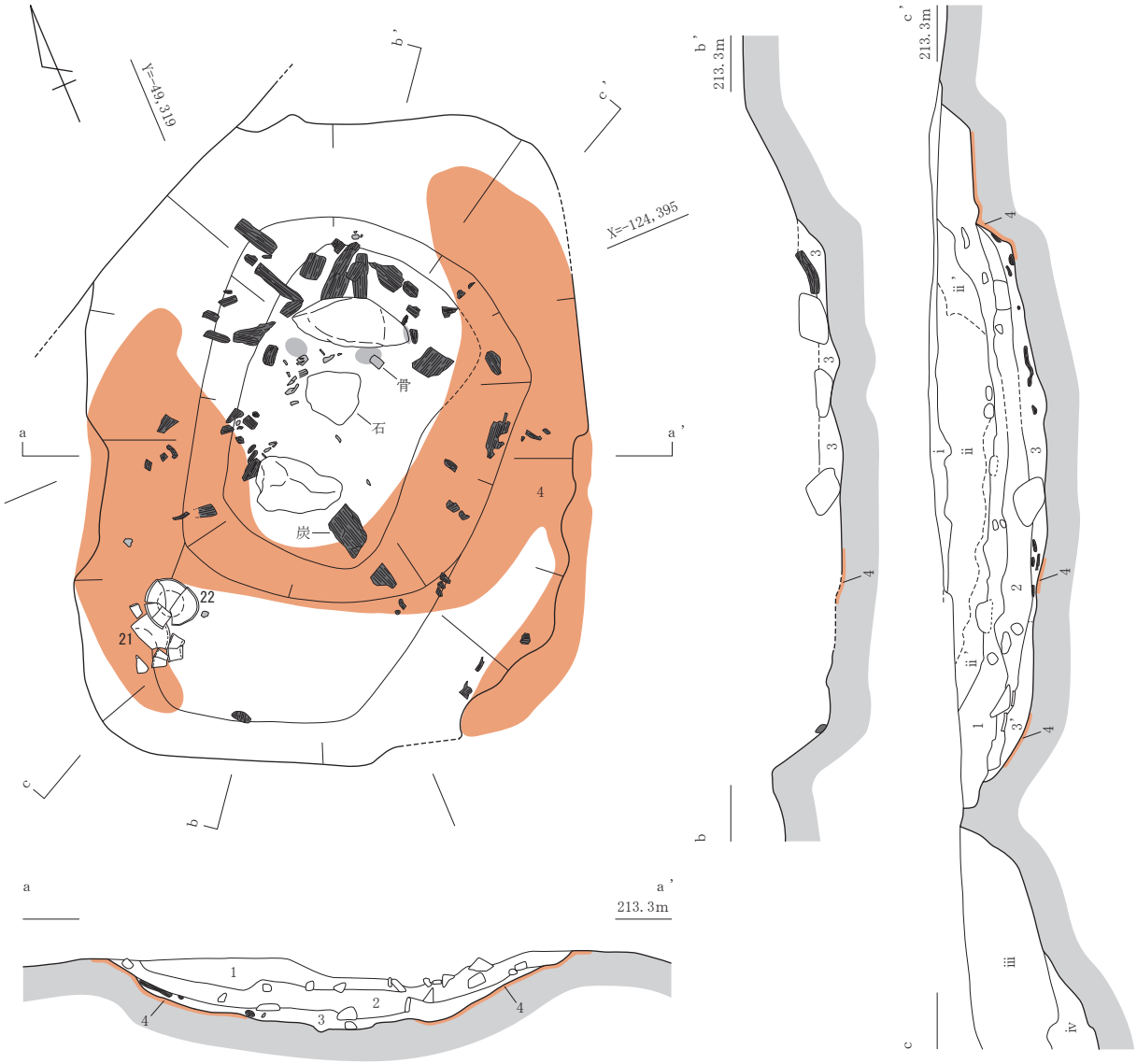
埋土は拳大までの礫を多く含むシルトである。周囲の基盤層に礫が非常に多く含まれていることから、埋土中の礫も遺構に伴うものではないと思われる。なお、最上層は棚田盛土層と近似しており、棚田造成時に埋め戻された可能性が高い。

土坑壁面の立ち上がりは緩やかである。底面中央やや北東寄りの長さ約1.1ｍ、幅約0.9ｍの範囲が一段低くなっており、底面で石を３個検出した。北東・中央・南西と間隔を置いて並んでおり、中央の石が両サイドの石に比べて小さい。底面の基盤層に接しており、土坑掘削後すぐに据え置かれたと考えられる。

最下層である３層に炭片を多く含み、その層内にあたる底部において、骨片、炭片を検出した。骨片、炭片ともに底部を中心に散在しているが、北東部に多く、特に北東に据え置かれた石の周囲に集中している。骨片は石の南西側に多く、いずれも小片で焼けている。炭片は石の北東側に多く、棒状を呈するものが認められる。

長辺の壁面及び底面中央の一段低くなっている部分の南西半部の壁面を中心に、基盤層が褐色化しており、被熱していると思われる。焼骨の出土とあわせ、火葬の遺構であると考えられる。底面に据え置かれた３個の石は、棺台の可能性が高い。中央の小さめの石はやや低いが、両端の石の上面のレベルはほぼ同じであり、水平に棺を載せることが可能である。周囲に骨片と炭片が集中していた北東側の石は、上面の一部が黒色ガラス質化しており、高熱を受けたことが窺える。炭化材は、断面が三角形等で棒状を呈することから、燃料の薪であった可能性を指摘できる。

土坑南西隅で、土師器皿が出土している。22はほぼ完形で出土したが、伏せた状態であった。21は破片であったが、上層の１・２層中に含まれていた破片と合わせ、完形に復元できた。３層上面に載っており、被熱痕跡は認められない。火葬が終わった後、置かれたものと思われる。なお、20は破片で２層に含まれていた土師器皿である。ほかにも少数の小片が出土している。



1．2.5Y5/1黄灰　小礫混シルト（拳大までの礫を含む　炭小片を少し含む　骨片を含む）
2．2.5Y4/1黄灰　粗砂～小礫を多く含むシルト（拳大までの礫を含む　炭小片を含む）
3．2.5Y4/2暗灰黄　小礫混シルト
　（３cm大までの礫を多く含む　炭片を多く含む　骨小片を含む）
3'．３より炭片の含有少ない
4．7.5YR5/4にぶい褐　小礫～人頭大の礫を多く含むシルト～極細砂〔基盤層　被熱痕跡〕
基盤層．2.5Y6/6明黄褐　小礫～人頭大の礫を多く含むシルト～極細砂

i．7.5YR6/6橙　シルト（粗砂～小礫を少し含む）〔床土〕
ii．2.5Y6/3にぶい黄　シルト（粗砂～小礫を少し含む）〔盛土層〕
ii'．2.5Y6/2灰黄　小礫混シルト（土坑埋土のまき上げを多く含む）〔盛土層〕
iii．2.5Y5/2暗灰黄　５cm大までの礫を非常に多く含むシルト～細砂〔盛土層〕
iv．2.5Y6/4にぶい黄　３cm大までの礫を多く含むシルト～中砂〔盛土層〕

0　(1:20)　1 m

図 25　29 土坑　平面・断面図

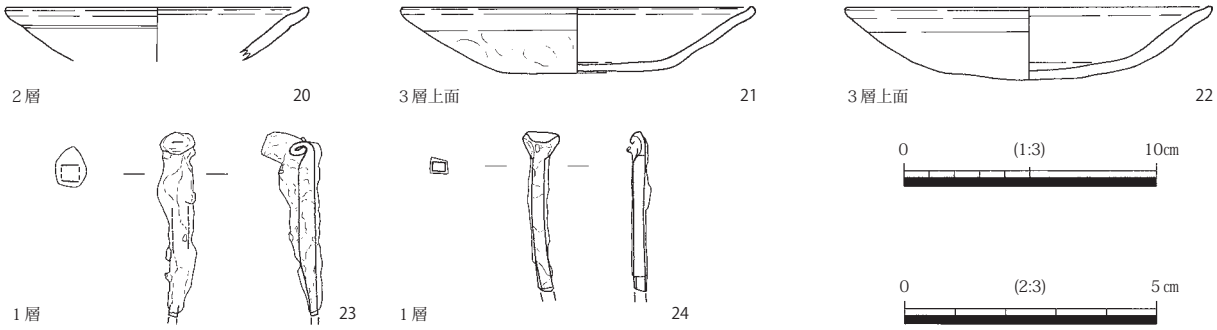


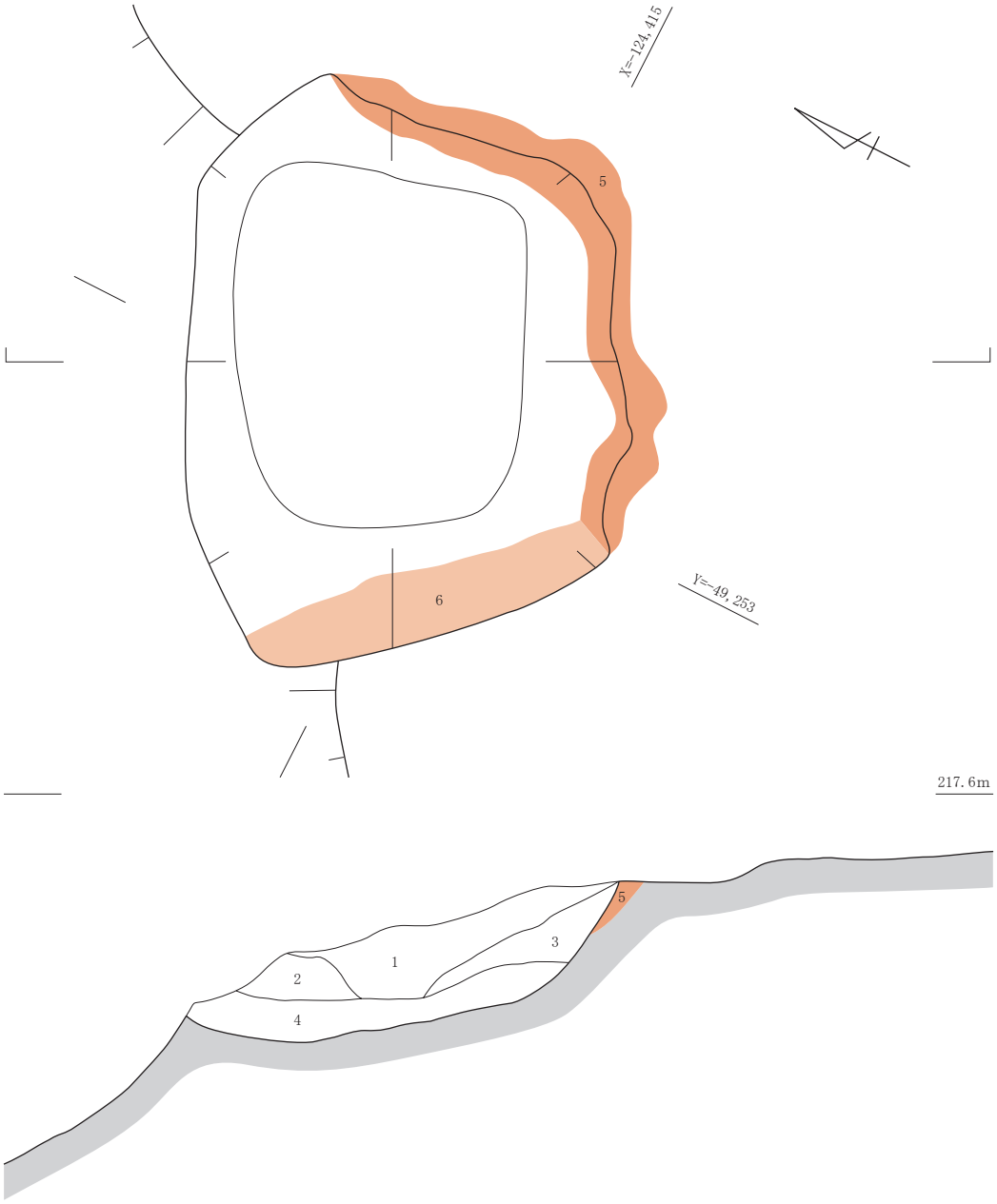
図 26　29 土坑　出土遺物

釘（23・24）が２本、１層から出土している。一端を鍛打によって扁平にし、折り返すことにより頭を成形した、頭巻釘である。木棺に使用されていたものと想定できる。なお、埋土をすべて洗浄したが、炭片、骨片、土師器片、釘以外のものは含まれていなかった。

土師器皿からは、15世紀中葉の時期が与えられる。

骨片について、安部みき子氏に鑑定を依頼した（第４章第１節）。咬耗の無い下顎の第２大臼歯または第３大臼歯の歯冠が同定されたことから、被葬者は成年（15～20歳）との結果を得ている。

また、３層上面で検出した炭化材について放射性炭素年代測定を実施した結果、14世紀前葉～15世紀中葉の年代が示されている（第４章第２節）。



１．2.5Y6/4にぶい黄 小礫混シルト～細砂（炭小片を含む）
２．10YR6/2灰黄褐 小礫混シルト～極細砂
（５cm大までの礫を含む　炭小片を少し含む）
３．5YR4/1褐灰 小礫混シルト～極細砂（焼土小片・炭小片を含む）
４．10YR4/1褐灰 小礫混シルト～極細砂（炭小片を含む）
５．5YR4/2灰褐 小礫混シルト～極細砂〔基盤層　やや強い被熱痕跡〕
６．7.5YR4/2灰褐 小礫混シルト～極細砂〔基盤層　弱い被熱痕跡〕
基盤層．2.5Y6/4にぶい黄 小礫混シルト～極細砂

0　(1:10)　0.5m

図 27　25 土坑　平面・断面図

第２項　頂上部

北西‐南東方向の尾根で、調査地における最高所（標高231ｍ）である。現況は、ヒノキ等の樹木が林立していた。南西側斜面には、北西に隣接する棚田部から南東に隣接する遠構え部と呼称する尾根筋まで、幅約２ｍの帯状の平坦面が続いていた。

平坦面は、北東側を切土し、南西側に大規模な盛土を施すことにより構築されている（図28・29）。この部分における基本層序は、表土層、盛土層である。表土層を除去した、盛土層上面を第１面、盛土層を除去した、基盤層上面を第２面とした。

それ以外の部分は自然地形を残しており、表土層直下が基盤層である。ただし、山頂部分では表土層直下に非常に弱くではあるが土壌化している層が認められ、それを第１層として除去した、基盤層上面を第２面とした。斜面部では急傾斜であるために、表層が流出し、第１層が遺存していないと思われる。

１．第１面（図28・29・32・91　図版14 ～ 16・51）

南西側斜面の平坦面部において、表土層を除去し、盛土層上面を検出した。平坦面は幅約２ｍで、南西斜面側の縁部が畦状に盛り上がっている。北東側の切土痕跡は、北西半部において顕著である。１溝を検出した。

平坦面部を中心に、表土層から、陶器片、染付片、瓦片、銭貨等が少量出土している。28 ～ 30は寛永通寶である。28･29は平坦面出土の新寛永、30は山頂部出土の古寛永である。27は、青白磁片である。器壁の薄さから小形製品の把手と思われるが、器種は不明である。釉薬、成形技法等から、中世以前の景徳鎮窯等の製品である可能性が指摘できる。なお、盛土層から遺物は出土していない。

１溝（図28・29・91　図版14 ～ 16）

前項の棚田部で記した通り、山頂を南東‐北西方向に縦断している、棚田へ導水する水路である。ここでは頂上部南裾部に属する部分について報告する。

一部で平坦面の北東側が一段低くなっているが、おおよそ平坦面の全幅約２ｍが同じ埋土で埋没しており、この幅の溝であったと思われる。埋土から遺物は出土していない。

２．第２面（図28 ～ 32　図版14・15・17・51）

基盤層上面である。第１面の平坦面造成時に切土された箇所以外は、自然の尾根地形を残す。

最高地点やや北西寄りの北面斜面及び奥山川の谷筋を望む位置で、第１層から瓦器椀（26）が１点出土した。丹波型で13世紀後葉のものである。３土坑からも同時期の瓦器椀が出土しており、同様な遺構が存在した可能性がある。出土地点周辺は隣接する木の根に攪乱され、精査しても不明瞭な状況であった。第１層からはこれ以外に、L4-8-13O-4d で13世紀の瓦器椀高台細片が出土している。

３土坑（図30 ～ 32　図版17・51）

最高地点よりやや南寄りの尾根筋頂部に位置する。尾根筋に直交する方向に長軸を持つ、平面長方形の土坑である。北東小口が頂部に、南西小口は南西側の斜面にやや下る位置にあり、南面斜面及び谷筋を望む立地である。長さ約2.4ｍ、幅約1.1ｍ、深さ約0.3ｍである。ただし、北東半分は、検出面を下げ過ぎたために輪郭を正確に捉えられていない。56㎝ ×29㎝の礫が埋土上に載っていた。周辺にこの大きさの礫はみられないことから、土坑上に置かれた可能性がある。

遺物は、ほぼ完形の瓦器椀（25）が１点出土している。和泉型で、13世紀後葉のものである。

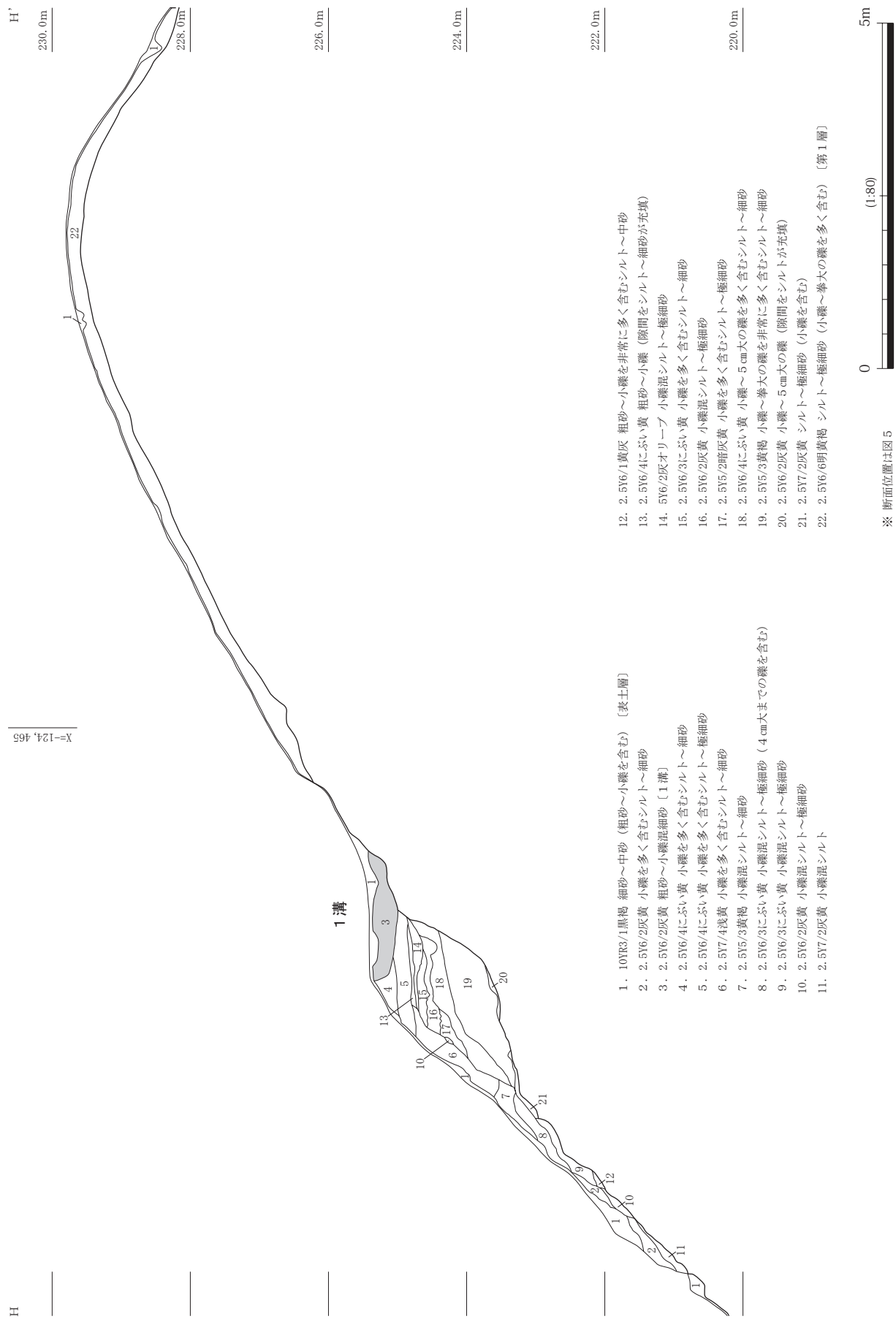
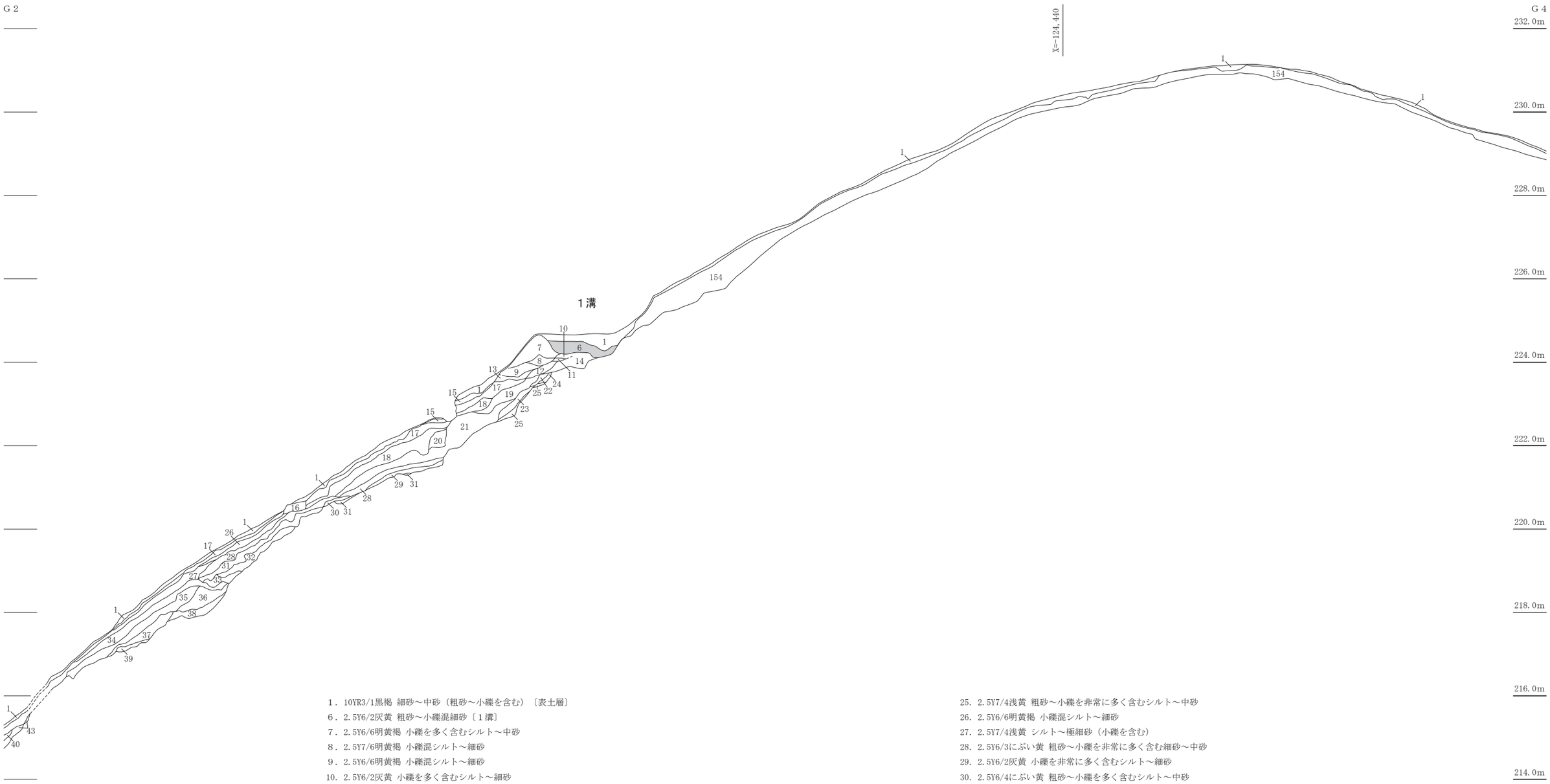

H
H'
230.0m
228.0m
226.0m
224.0m
222.0m
220.0m
X=-124,465
1溝
1. 10YR3/1黒褐 細砂～中砂（粗砂～小礫を含む）〔表土層〕
2. 2.5Y6/2灰黄 小礫を多く含むシルト～細砂
3. 2.5Y6/2灰黄 粗砂～小礫混細砂〔１溝〕
4. 2.5Y6/4にぶい黄 小礫を多く含むシルト～細砂
5. 2.5Y6/4にぶい黄 小礫を多く含むシルト～極細砂
6. 2.5Y7/4浅黄 小礫を多く含むシルト～細砂
7. 2.5Y5/3黄褐 小礫混シルト～細砂
8. 2.5Y6/3にぶい黄 小礫混シルト～極細砂（４cm大までの礫を含む）
9. 2.5Y6/3にぶい黄 小礫混シルト～極細砂
10. 2.5Y6/2灰黄 小礫混シルト～極細砂
11. 2.5Y7/2灰黄 小礫混シルト
12. 2.5Y6/1黄灰 粗砂～小礫を非常に多く含むシルト～中砂
13. 2.5Y6/4にぶい黄 粗砂～小礫（隙間をシルト～細砂が充填）
14. 5Y6/2灰オリーブ 小礫混シルト～極細砂
15. 2.5Y6/3にぶい黄 小礫を多く含むシルト～細砂
16. 2.5Y6/2灰黄 小礫混シルト～極細砂
17. 2.5Y5/2暗灰黄 小礫を多く含むシルト～極細砂
18. 2.5Y6/4にぶい黄 小礫～５cm大の礫を多く含むシルト～細砂
19. 2.5Y5/3黄褐 小礫～拳大の礫を非常に多く含むシルト～細砂
20. 2.5Y6/2灰黄 小礫～５cm大の礫（隙間をシルトが充填）
21. 2.5Y7/2灰黄 シルト～極細砂（小礫を含む）
22. 2.5Y6/6明黄褐 シルト～極細砂（小礫～拳大の礫を多く含む）〔第１層〕
※ 断面位置は図５
0
(1:80)
5m

図 28　Ｈライン　断面図



1．10YR3/1黒褐 細砂～中砂（粗砂～小礫を含む）〔表土層〕
6．2.5Y6/2灰黄 粗砂～小礫混細砂〔１溝〕
7．2.5Y6/6明黄褐 小礫を多く含むシルト～中砂
8．2.5Y7/6明黄褐 小礫混シルト～細砂
9．2.5Y6/6明黄褐 小礫混シルト～細砂
10．2.5Y6/2灰黄 小礫を多く含むシルト～細砂
11．2.5Y8/6黄 小礫混シルト
12．2.5Y6/4にぶい黄 小礫を多く含むシルト（細砂を含む）
13．2.5Y6/4にぶい黄 小礫混シルト～細砂
14．2.5Y6/3にぶい黄 粗砂～小礫を非常に多く含むシルト～細砂
15．2.5Y6/4にぶい黄 小礫を多く含むシルト～中砂
16．2.5Y6/4にぶい黄 極細砂～細砂（粗砂～小礫を含む）
17．2.5Y6/6明黄褐 小礫混シルト～細砂
18．2.5Y6/4にぶい黄 小礫を多く含むシルト～細砂
19．2.5Y7/6明黄褐 小礫混シルト～極細砂
20．2.5Y6/2灰黄 粗砂～小礫を多く含む細砂～中砂
21．2.5Y6/4にぶい黄 粗砂～小礫を多く含むシルト～中砂
22．2.5Y7/3浅黄 小礫混シルト～極細砂
23．2.5Y6/3にぶい黄 粗砂～小礫を非常に多く含むシルト～中砂
24．2.5Y7/4浅黄 シルト～極細砂（小礫を含む）
25．2.5Y7/4浅黄 粗砂～小礫を非常に多く含むシルト～中砂
26．2.5Y6/6明黄褐 小礫混シルト～細砂
27．2.5Y7/4浅黄 シルト～極細砂（小礫を含む）
28．2.5Y6/3にぶい黄 粗砂～小礫を非常に多く含む細砂～中砂
29．2.5Y6/2灰黄 小礫を非常に多く含むシルト～細砂
30．2.5Y6/4にぶい黄 粗砂～小礫を多く含むシルト～中砂
31．2.5Y7/4浅黄 粗砂混シルト～極細砂（小礫を含む）
32．2.5Y7/4浅黄 シルト（小礫を少し含む）
33．2.5Y7/3浅黄 小礫混シルト～極細砂
34．2.5Y6/4にぶい黄 小礫混シルト～細砂（拳大までの礫を含む）
35．2.5Y6/3にぶい黄 小礫～拳大の礫を多く含むシルト～極細砂
36．2.5Y6/2灰黄 小礫～拳大の礫を非常に多く含むシルト～極細砂
37．2.5Y6/3にぶい黄 小礫を非常に多く含むシルト～極細砂（拳大までの礫を含む）
38．2.5Y6/4にぶい黄 粗砂～小礫・拳大までの礫（隙間をシルトが充填）
39．2.5Y7/4浅黄 シルト～極細砂（小礫を少し含む）
40．2.5Y5/3黄褐 小礫混シルト～細砂
43．2.5Y5/3黄褐 小礫を非常に多く含むシルト～細砂
154．2.5Y6/6明黄褐 シルト～極細砂（小礫～拳大の礫を多く含む）〔第１層〕

※ 断面位置は図５・８

0 (1:100) 5m

図 29　Gライン　断面図

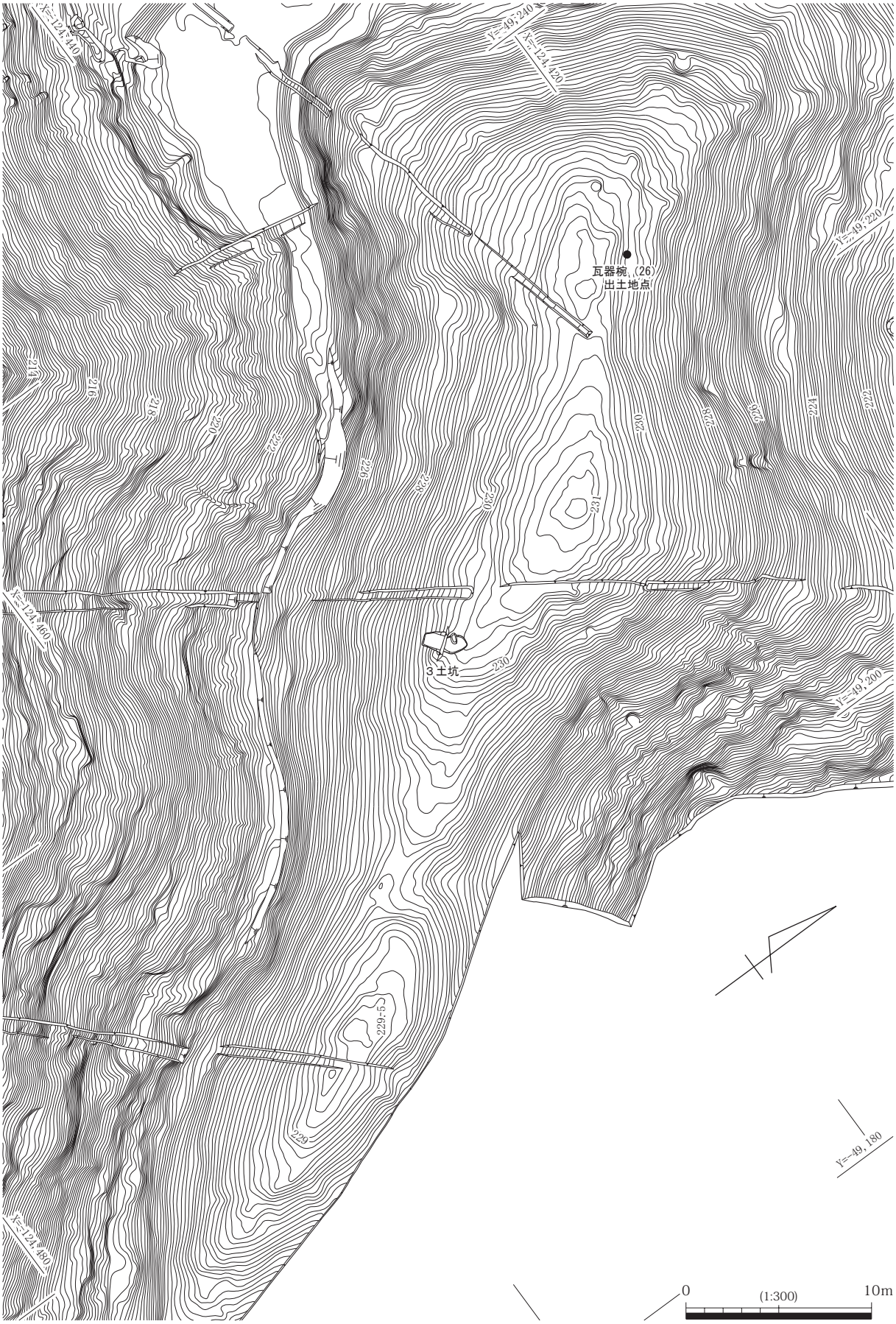


図 30　頂上部　第２面　平面図

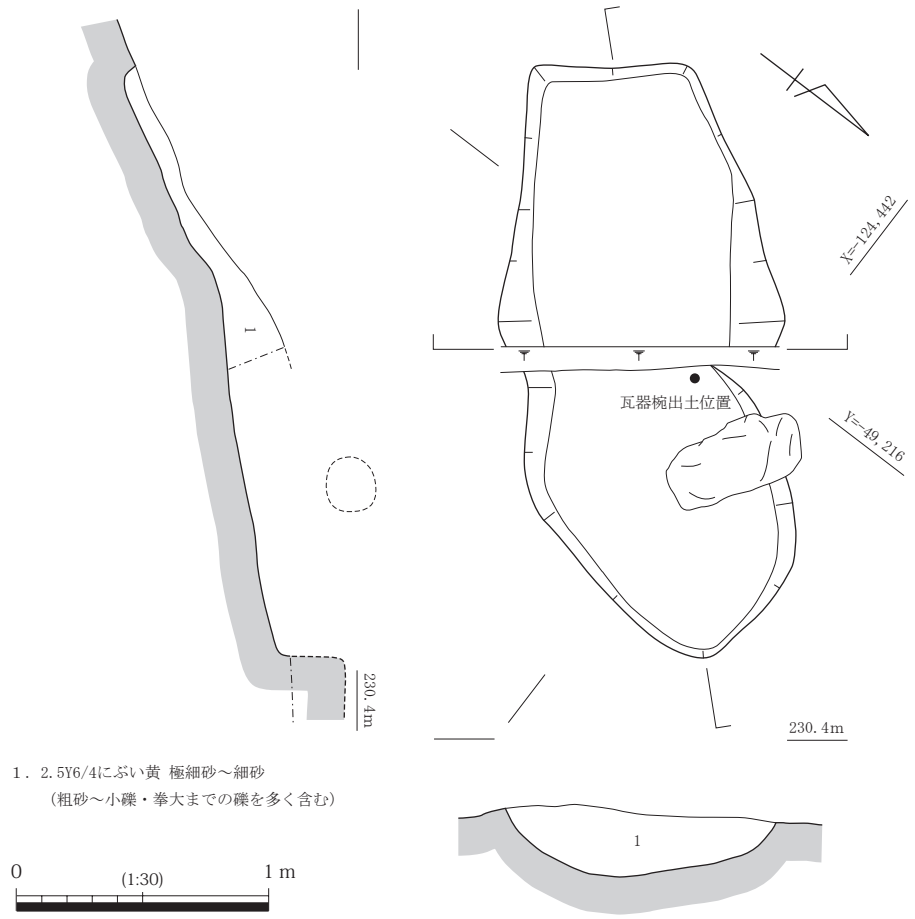


図 31　３土坑　平面・断面図

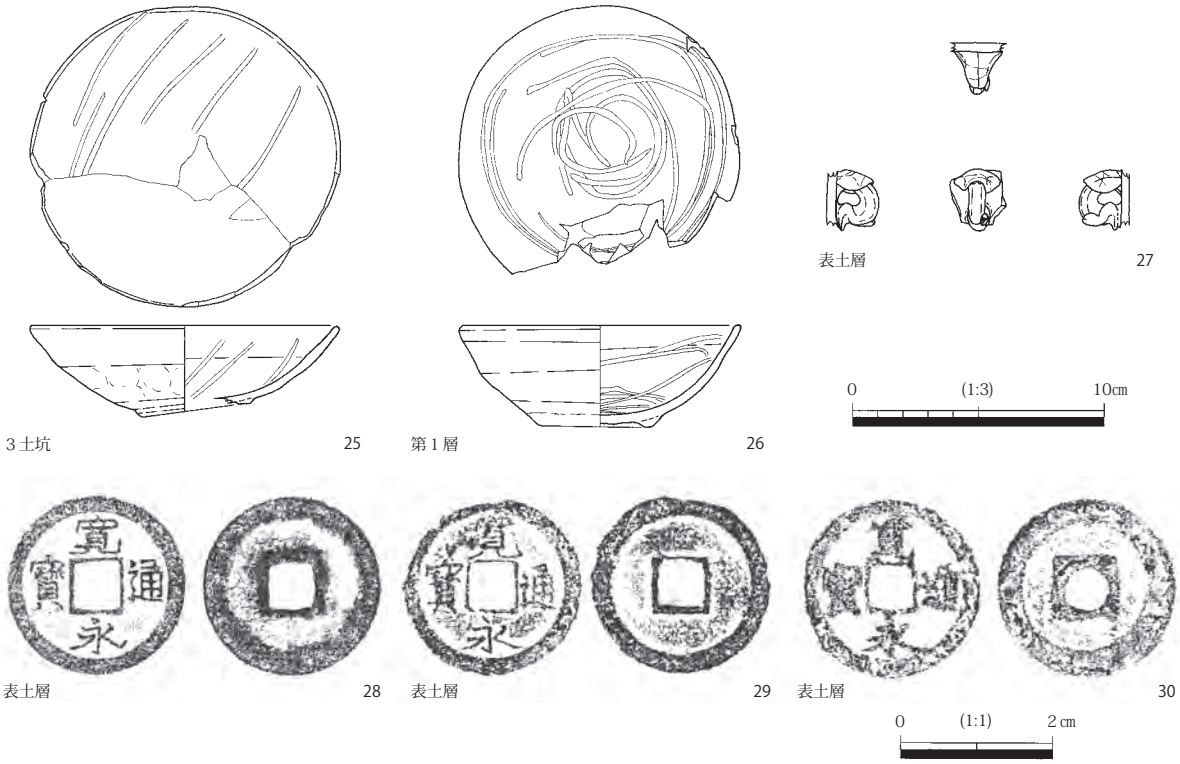


図 32　頂上部　出土遺物

第３項　遠構え部

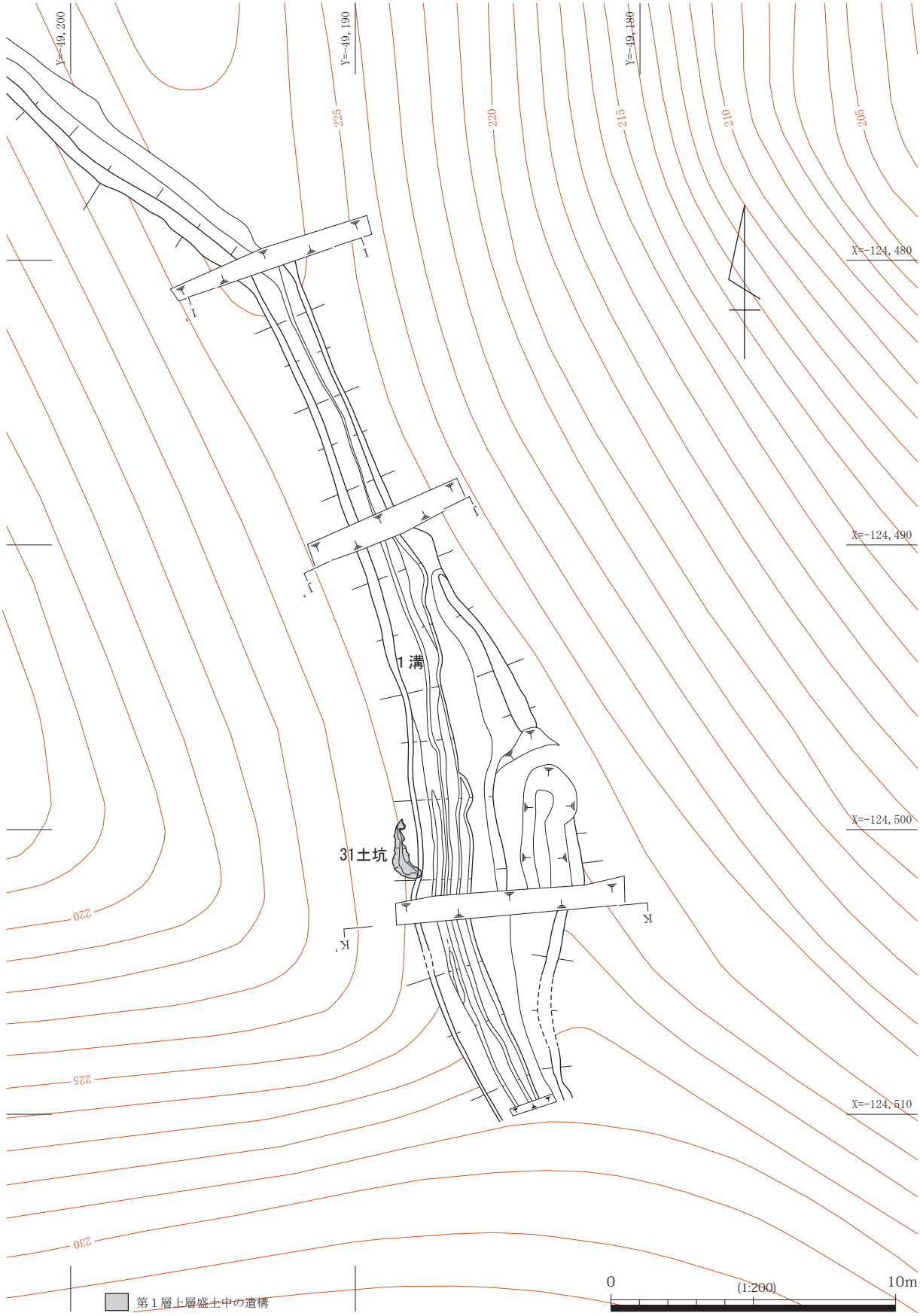


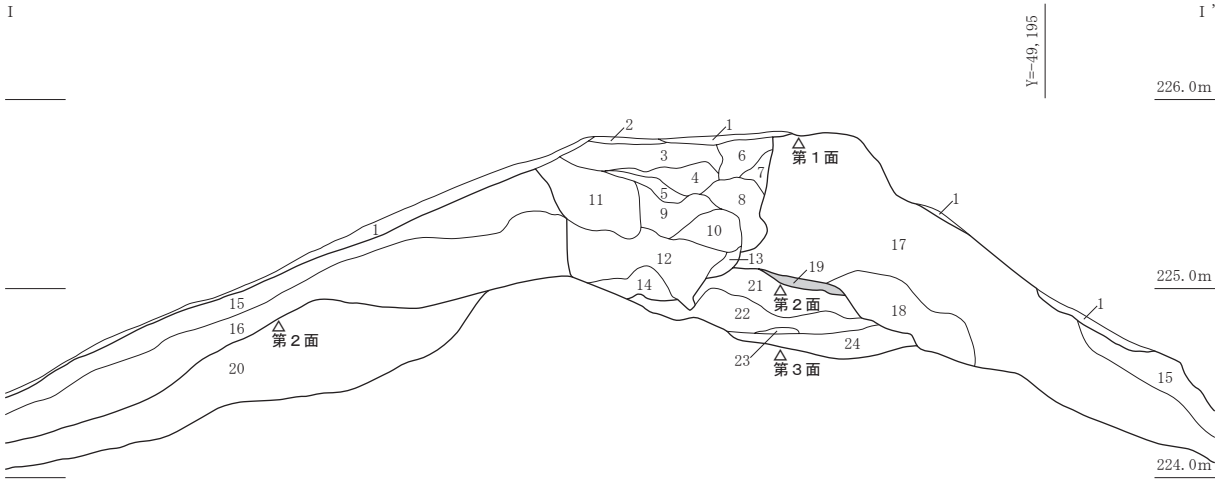
図 33　遠構え部　第１面　平面図

調査地の南東端部にあたる。字「宮山」を先端として独立状を呈する尾根が、鉢伏山等へと連なる山稜と結合する根元部分である。北北西-南南東方向の痩せ尾根で、ここで尾根頂部の幅は最も狭くなる。頂部の幅は、北部で1.5～２m、南部で約５mである。尾根頂部の標高は、頂上部北西寄りの最高所（標高231m）より南東へと低くなり、この遠構え部北部が標高226mで最低地点である。南部では標高227mであり、山稜との結合部分へと若干高くなっている。尾根の両側は急峻な斜面となっており、東側は奥山川沿いの谷筋に、西側は調査地南部の谷筋東端部に面する。

現況は、頂上部南西裾部から平坦面が続いていた（図版18）。尾根頂部の幅が狭い北部では、西縁部が畦状に盛り上がっている以外、ほぼ全幅が平坦である。南部では西半が平坦で、その西縁部が盛り上がっているほか、東半も高くなっている。平坦面の両縁部には樹木が並んでいた。痩せ尾根が山稜に取り付いた調査地南端以南は、急に標高が高くなる。平坦面は、奥山川の谷筋に面する斜面を南東方向へ少しずつ標高を上げながら続いているが、倒木等のため通行困難で、先を確認することはできなかった。

層序は、Ｉ～Ｌライン（図34～37）断面等で確認した。基盤層上に厚い盛土が認められるが、土壌層を挟んで上・下層に分けられる。また、一部で土壌層上に作土かと思われる層が認められる。基本層序は、表土層、第１層上層盛土層、第２層作土層、第３層土壌層、第４層下層盛土層である。

第１層上層盛土層は、にぶい黄色の小礫を多く含む細砂等からなる。第１面の基盤となる造成土である。第２層は、Ｋライン（図37）周辺にのみ認められた。この層の下面にあたる基盤層上面で、この



１．2.5Y3/1黒褐 小礫を多く含むシルト～細砂〔表土層〕
２．2.5Y7/4浅黄 シルト（小礫を含む）〔第１面１溝〕
３．2.5Y6/2灰黄 粗砂～小礫混シルト～細砂〔第１面１溝〕
４．2.5Y5/2暗灰黄・2.5Y6/3にぶい黄 細砂～中砂
（粗砂～小礫を含む　ラミナあり）〔第１面１溝〕
５．2.5Y5/1黄灰 小礫混シルト～極細砂〔第１面１溝〕
６．2.5Y6/3にぶい黄 シルト～細砂（小礫を含む）〔第１面１溝〕
７．2.5Y6/4にぶい黄 小礫を多く含むシルト～細砂〔第１面１溝〕
８．2.5Y7/4浅黄 小礫混シルト～極細砂〔第１面１溝〕
９．2.5Y6/3にぶい黄 小礫を多く含むシルト～細砂〔第１面１溝〕
10．2.5Y6/2灰黄 小礫を非常に多く含むシルト～細砂〔第１面１溝〕
11．2.5Y6/3にぶい黄 小礫を多く含む極細砂～細砂〔第１面１溝〕
12．2.5Y7/3浅黄 小礫混シルト～極細砂〔第１面１溝〕
13．2.5Y6/2灰黄 小礫を多く含むシルト～極細砂〔第１面１溝〕
14．2.5Y6/4にぶい黄 粗砂～小礫（隙間をシルト～極細砂が充填）
〔第１面１溝〕
15．2.5Y6/4にぶい黄 小礫混シルト～細砂〔第１層　上層盛土〕
16．2.5Y6/4にぶい黄 小礫を多く含む極細砂～細砂〔第１層　上層盛土〕
17．2.5Y6/4にぶい黄 小礫を多く含む極細砂～細砂と
2.5Y6/2灰黄 粗砂～小礫混シルト等がブロック状に互層になっている
〔第１層　上層盛土〕
18．2.5Y6/4にぶい黄 粗砂～小礫を多く含む極細砂〔第１層　上層盛土〕
19．10YR6/1褐灰 粗砂～小礫を非常に多く含む細砂〔第３層　土壌層〕
20．2.5Y6/4にぶい黄 小礫～拳大の礫を非常に多く含む極細砂～細砂
〔第４層　下層盛土〕
21．10YR6/4にぶい黄橙 粗砂～小礫を非常に多く含む細砂
〔第４層　下層盛土〕
22．10YR6/4にぶい黄橙 粗砂～小礫（隙間をシルト～極細砂が充填）
〔第４層　下層盛土〕
23．10YR6/4にぶい黄橙 粗砂～小礫〔第４層　下層盛土〕
24．10YR6/6明黄褐 粗砂～小礫（隙間を細砂～中砂が充填）
〔第４層　下層盛土〕
基盤層．10YR6/6明黄褐 小礫～人頭大の礫（隙間をシルト～細砂が充填）

※ 断面位置は図５・33・39・40

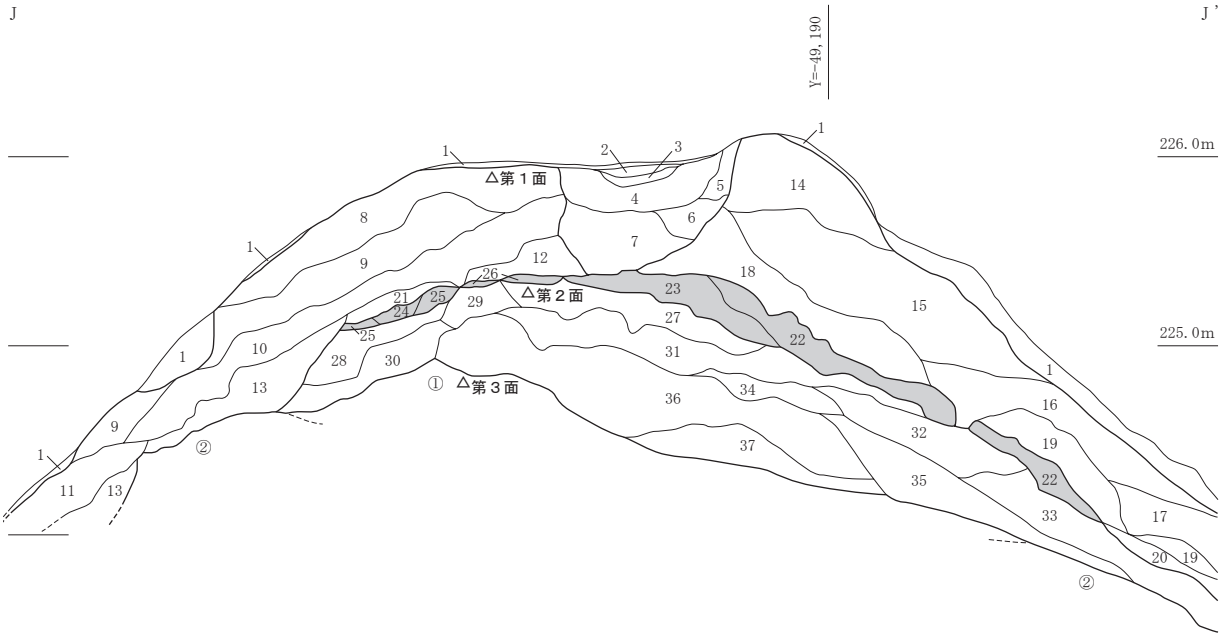
0　(1:40)　2m

図 34　Ｉライン　断面図

層が埋土として落ち込む、並行する細溝群を検出している（図39　図版20）。細溝群を耕作に伴うものとすれば、第２層は作土層とも考えられる。暗灰黄色のシルト～極細砂である。

第３層土壌層は、暗灰黄色粗砂～小礫混じりのシルト～細砂等である。第４層下層盛土層の表層部が土壌化したと思われる。第４層下層盛土層は、明黄褐色の粗砂～小礫を多く含むシルト～細砂等からなる。第１層上層盛土層に比べ、基盤層に酷似している。基盤層は、明黄褐色の小礫を多く含むシルト～細砂等である。

表土層を除去した第１層上層盛土層上面を第１面、第３層土壌層を除去した第４層下層盛土層上面を第２面、第４層を除去した基盤層上面を第３面とした。



１．2.5Y3/1黒褐 小礫を多く含むシルト～細砂〔表土層〕
２．2.5Y6/4にぶい黄 粗砂～小礫を多く含む細砂～中砂〔第１面１溝〕
３．2.5Y7/6明黄褐 小礫を多く含むシルト～極細砂〔第１面１溝〕
４．10YR6/3にぶい黄橙 粗砂～小礫混シルト～極細砂と
10YR6/3にぶい黄橙 粗砂～小礫を多く含むシルト～細砂がブロック状に混じる
〔第１面１溝〕
５．2.5Y6/4にぶい黄 粗砂～小礫混シルト～細砂〔第１面１溝〕
６．2.5Y7/4浅黄 粗砂～小礫を非常に多く含むシルト～中砂（ブロック状）
〔第１面１溝〕
７．2.5Y6/4にぶい黄 小礫混シルト～極細砂に
2.5Y6/2灰黄 粗砂～小礫混シルト～細砂がブロック状に混じる〔第１面１溝〕
８．2.5Y6/6明黄褐 粗砂～小礫を多く含む細砂～中砂〔第１層　上層盛土〕
９．2.5Y6/4にぶい黄 粗砂～小礫混細砂〔第１層　上層盛土〕
10．2.5Y6/3にぶい黄 粗砂～小礫混極細砂～細砂〔第１層　上層盛土〕
11．2.5Y6/4にぶい黄 小礫混シルト～細砂〔第１層　上層盛土〕
12．2.5Y6/4にぶい黄 粗砂～小礫を多く含むシルト～細砂〔第１層　上層盛土〕
13．2.5Y6/3にぶい黄 粗砂～小礫を多く含むシルト～細砂〔第１層　上層盛土〕
14．2.5Y6/6明黄褐 粗砂～小礫を非常に多く含むシルト～極細砂
〔第１層　上層盛土〕
15．2.5Y7/4浅黄 粗砂～小礫を多く含むシルト～極細砂〔第１層　上層盛土〕
16．2.5Y6/4にぶい黄 小礫混シルト～細砂〔第１層　上層盛土〕
17．2.5Y6/3にぶい黄 粗砂～小礫を多く含むシルト～極細砂〔第１層　上層盛土〕
18．2.5Y6/2灰黄 粗砂～小礫混シルト～極細砂
（粗砂～小礫をブロック状に含む）〔第１層　上層盛土〕
19．2.5Y6/3にぶい黄 粗砂～小礫を多く含むシルト～細砂〔第１層　上層盛土〕
20．2.5Y5/3黄褐 小礫を多く含むシルト～極細砂〔第１層　上層盛土〕
21．2.5Y5/3黄褐 小礫混シルト～極細砂
22．2.5Y5/2暗灰黄 粗砂～小礫を多く含むシルト～極細砂〔第３層　土壌層〕
23．2.5Y5/1黄灰 粗砂～小礫混シルト～極細砂〔第３層　土壌層〕
24．10YR3/1黒褐 粗砂～小礫混シルト～極細砂〔第３層　土壌層〕
25．2.5Y5/2暗灰黄 粗砂～小礫混シルト～極細砂〔第３層　土壌層〕
26．2.5Y6/2灰黄 粗砂～小礫混シルト～極細砂〔第３層　土壌層（下部か）〕
27．2.5Y6/6明黄褐 小礫を多く含むシルト～極細砂と
2.5Y5/1黄灰 小礫を多く含むシルト～極細砂がブロック状に混じる
（５cm大までの礫を含む）〔第４層　下層盛土〕
28．2.5Y5/4黄褐 小礫混シルト～極細砂〔第４層　下層盛土〕
29．2.5Y5/4黄褐 粗砂～小礫混シルト～細砂〔第４層　下層盛土〕
30．2.5Y5/4黄褐 粗砂～小礫を多く含むシルト～細砂〔第４層　下層盛土〕
31．2.5Y6/6明黄褐 粗砂～小礫を多く含むシルト～極細砂〔第４層　下層盛土〕
32．2.5Y5/6黄褐 粗砂～小礫を多く含むシルト～細砂〔第４層　下層盛土〕
33．2.5Y5/3黄褐 粗砂～小礫を非常に多く含むシルト～細砂
（拳大までの礫を含む）〔第４層　下層盛土〕
34．2.5Y6/4にぶい黄 粗砂～小礫を非常に多く含むシルト～極細砂
〔第４層　下層盛土〕
35．2.5Y5/4黄褐 粗砂～小礫を非常に多く含むシルト～細砂
（拳大までの礫を含む）〔第４層　下層盛土〕
36．2.5Y6/4にぶい黄 粗砂～小礫を非常に多く含むシルト～極細砂
（拳大までの礫を含む）〔第４層　下層盛土〕
37．2.5Y5/6黄褐 粗砂～小礫
（隙間をシルト～中砂が充填　拳大までの礫を含む）〔第４層　下層盛土〕
基盤層①．2.5Y5/6黄褐 中砂～粗砂・小礫
基盤層②．5Y7/4浅黄 小礫混シルト～極細砂

※ 断面位置は図５・33・39・40

0　(1:40)　2m

図35　Ｊライン　断面図

１．第１面（図33 ～ 38　カラー図版６　図版19・20・24 ～ 26）

表土層を除去した、第１層上層盛土層上面である。第１層はほぼ全域で認められ、厚い箇所では１ｍを超える。この盛土層によって造成された面である。

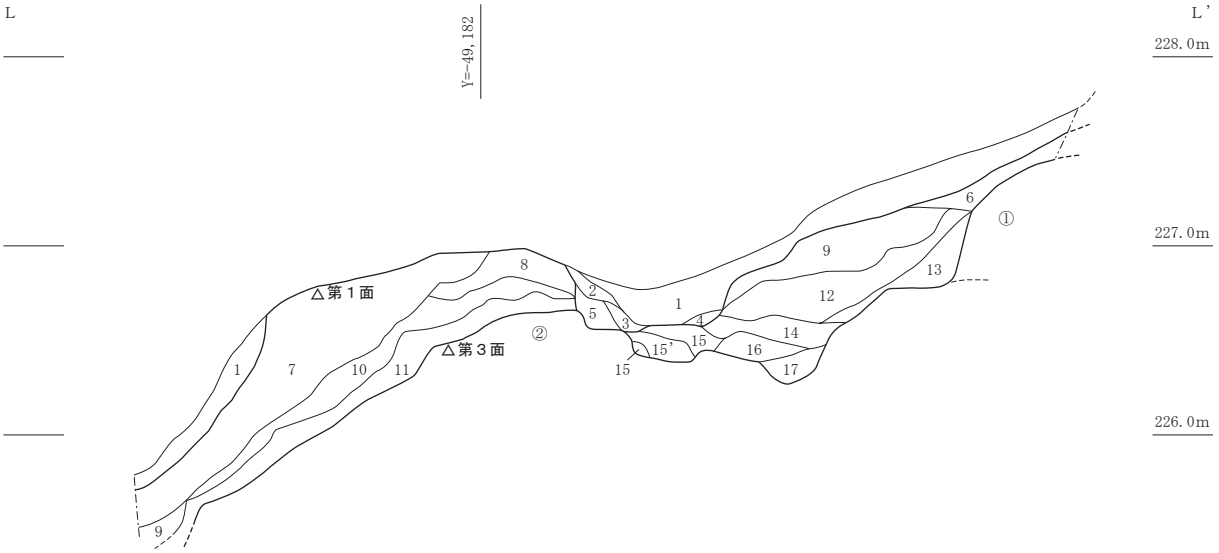
ほぼ現況と同じ地形で、頂部の幅は北部で1.5 ～２ｍ、南部で約５ｍである。北部で標高226ｍ、南部で標高227ｍである。頂上部南西裾部から平坦面が続く。尾根頂部の幅が狭い北部では、西縁部を畦状に盛り上げているほかは、ほぼ全幅を平坦としている。南部では西半を平坦とし、西縁部と東半部分を盛り上げている。平坦面は、調査地外の奥山川の谷筋に面する斜面を南東方向へ少しずつ標高を上げながら続いており、ここも同時に造成されたと考えられる（Ｎライン断面　図５　図版25）。平坦面の標高は、北端で225.8ｍ、南端で226.8ｍである。

平坦面において、１溝を検出した。また、第１層上層盛土層中で検出した31土坑についてもここで報告しておく。なお、第１層上層盛土層から遺物は出土していない。

１溝（図33 ～ 37　図版19・20）

棚田部、頂上部の項で記した通り、山頂を南東‐北西方向に縦断している、棚田へ導水する水路である。ここでは遠構え部に属する部分について報告する。

上述の平坦面部において検出した。幅1.0 ～ 1.3ｍ、深さ0.2 ～ 0.8ｍである。溝底面の標高は北端で224.9ｍ、南端で226.6ｍであり、北へ導水することが可能である。

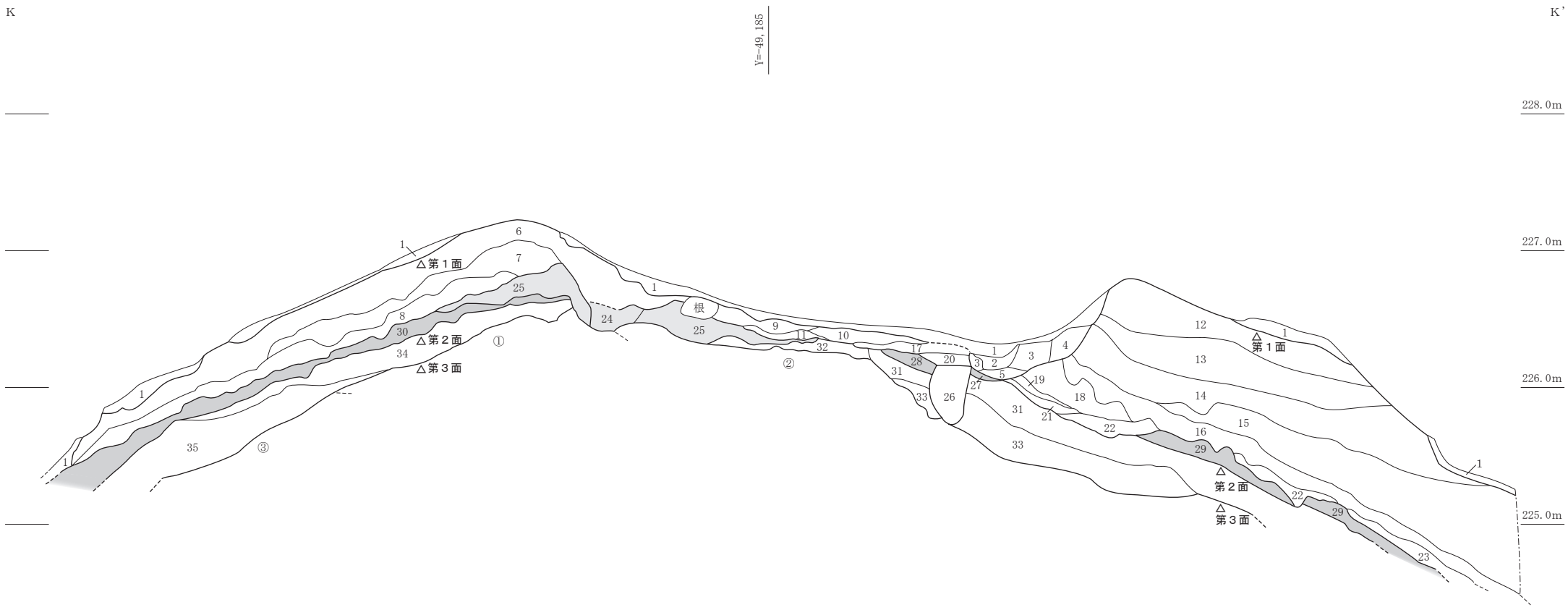


１．10YR3/1黒褐 小礫～３㎝大の礫を含むシルト～細砂〔表土層〕
２．2.5Y6/3にぶい黄 小礫を多く含むシルト～細砂〔第１面１溝〕
３．5Y6/1灰 小礫を多く含むシルト～極細砂〔第１面１溝〕
４．5Y6/1灰 シルト～極細砂〔第１面１溝〕
５．３と基盤層がブロック状に混じる〔第１面１溝〕
６．2.5Y6/2灰黄 小礫を多く含むシルト～細砂〔第１層　上層盛土〕
７．2.5Y6/6明黄褐 小礫を多く含むシルト～細砂〔第１層　上層盛土〕
８．2.5Y6/6明黄褐 小礫を非常に多く含むシルト～細砂〔第１層　上層盛土〕
９．2.5Y6/4にぶい黄 小礫を多く含むシルト～細砂
（拳大までの礫を含む）〔第１層　上層盛土〕
10．2.5Y6/4にぶい黄 小礫を多く含むシルト～細砂
（基盤層のブロックを含む）〔第１層　上層盛土〕
11．2.5Y7/4浅黄 小礫を非常に多く含むシルト～極細砂
（基盤層のブロックを多く含む）〔第１層　上層盛土〕
12．2.5Y7/4浅黄 小礫混シルト～極細砂
（基盤層のブロックを含む）〔第１層　上層盛土〕
13．2.5Y6/3にぶい黄 小礫を多く含む極細砂～細砂〔第１層　上層盛土〕
14．2.5Y7/3浅黄 小礫を多く含むシルト～極細砂
（5Y6/1灰 シルト～細砂のブロックを多く含む）〔第１層　上層盛土〕
15．2.5Y6/1黄灰 細砂～中砂（粗砂～小礫を含む）〔第１層　上層盛土か〕
15’．15より６㎝大までの礫を多く含む〔第１層　上層盛土か〕
16．2.5Y6/2灰黄 粗砂～小礫〔第１層　上層盛土か〕
17．2.5Y6/1黄灰 ３㎝大までの礫を非常に多く含むシルト～中砂
（拳大までの礫を少し含む）〔第１層　上層盛土か〕
基盤層①．2.5Y6/6明黄褐 粗砂～小礫を多く含むシルト～中砂
（人頭大までの礫を含む）
基盤層②．2.5Y8/1灰白 小礫を多く含むシルト～極細砂

※ 断面位置は図５・39・40

0　(1:40)　2m

図36　Ｌライン　断面図



１．10YR3/1黒褐 小礫～３㎝大の礫を含むシルト～細砂〔表土層〕
２．10YR5/4にぶい黄褐 粗砂～小礫を多く含む細砂～中砂〔第１面１溝〕
３．10YR6/3にぶい黄橙 粗砂～小礫混シルト～極細砂〔第１面１溝〕
４．2.5Y6/3にぶい黄 粗砂～小礫を多く含む細砂〔第１面１溝〕
５．2.5Y6/3にぶい黄 粗砂～小礫混細砂～中砂（流水堆積か）〔第１面１溝〕
６．2.5Y6/6明黄褐 小礫混極細砂～細砂〔第１層　上層盛土〕
７．2.5Y6/4にぶい黄 粗砂～小礫を多く含む極細砂～細砂〔第１層　上層盛土〕
８．2.5Y6/3にぶい黄 粗砂～小礫を多く含むシルト～細砂〔第１層　上層盛土〕
９．2.5Y7/6明黄褐 粗砂混細砂〔第１層　上層盛土〕
10．2.5Y6/4にぶい黄 粗砂～小礫を多く含む極細砂～細砂〔第１層　上層盛土〕
11．2.5Y6/3にぶい黄 粗砂～小礫を多く含むシルト～細砂〔第１層　上層盛土〕
12．2.5Y6/6明黄褐 粗砂～小礫を多く含む極細砂～細砂〔第１層　上層盛土〕
13．2.5Y6/4にぶい黄 粗砂～小礫を多く含むシルト～細砂〔第１層　上層盛土〕
14．2.5Y6/2灰黄 粗砂～小礫を多く含むシルト～極細砂〔第１層　上層盛土〕
15．2.5Y5/3黄褐 粗砂～小礫を多く含む極細砂～中砂〔第１層　上層盛土〕
16．2.5Y6/3にぶい黄 粗砂～小礫混シルト～極細砂〔第１層　上層盛土〕
17．2.5Y6/2灰黄 粗砂～小礫を非常に多く含むシルト～細砂〔第１層　上層盛土〕
18．2.5Y6/2灰黄 粗砂～小礫を非常に多く含む細砂～中砂〔第１層　上層盛土〕
19．2.5Y6/1黄灰 粗砂～小礫を非常に多く含む細砂～中砂〔第１層　上層盛土〕
20．2.5Y7/3浅黄 小礫混シルト～極細砂〔第１層　上層盛土か〕
21．10YR2/1黒 粗砂～小礫混シルト～極細砂〔第３層等の２次堆積か〕
22．2.5Y5/3黄褐 粗砂～小礫を非常に多く含む細砂～中砂
23．2.5Y4/1黄灰 粗砂～小礫を多く含むシルト～細砂〔第３層等の２次堆積か〕
24．2.5Y6/4にぶい黄 粗砂～小礫を多く含むシルト～細砂〔第２層上面溝〕
25．2.5Y5/2暗灰黄 シルト～極細砂（小礫を少し含む）〔第２層　作土層か〕
26．2.5Y5/1黄灰 粗砂～小礫を非常に多く含む細砂～中砂（流水堆積か）〔第２面34溝〕
27．2.5Y5/1黄灰 粗砂～小礫混シルト～極細砂〔第３層　土壌層〕
28．2.5Y6/2灰黄 小礫混シルト～極細砂〔第３層　土壌層〕
29．2.5Y5/2暗灰黄 小礫混シルト～極細砂〔第３層　土壌層〕
30．2.5Y4/2暗灰黄 粗砂～小礫混シルト～細砂〔第３層　土壌層〕
31．2.5Y7/4浅黄 小礫を多く含むシルト～極細砂（2.5Y6/3にぶい黄 シルト～極細砂等の小ブロックを含む）〔第４層　下層盛土〕
32．2.5Y7/6明黄褐 小礫を多く含むシルト～極細砂〔第４層　下層盛土か〕
33．2.5Y7/8黄 粗砂～小礫を非常に多く含む細砂～中砂（2.5Y6/4にぶい黄の同質ブロックを含む）〔第４層　下層盛土〕
34．2.5Y7/4浅黄 粗砂～小礫混シルト～細砂〔第４層　下層盛土〕
35．2.5Y6/6明黄褐 粗砂～小礫を多く含むシルト～細砂〔第４層　下層盛土〕
基盤層①．5Y8/4淡黄 粗砂～小礫を多く含む極細砂～細砂
基盤層②．2.5Y7/8黄 粗砂～小礫を非常に多く含むシルト～中砂
基盤層③．2.5Y6/8明黄褐 小礫～５㎝大の礫（隙間をシルト～粗砂が充填）

0　(1:40)　2m

※ 断面位置は図５・33・39・40

図 37　Kライン　断面図

北部では埋土にブロック土がみられ、埋め戻された可能性がある。北部の埋土上層及び南部の埋土には、部分的にではあるがラミナが認められ、流水時の堆積である可能性を指摘できる。

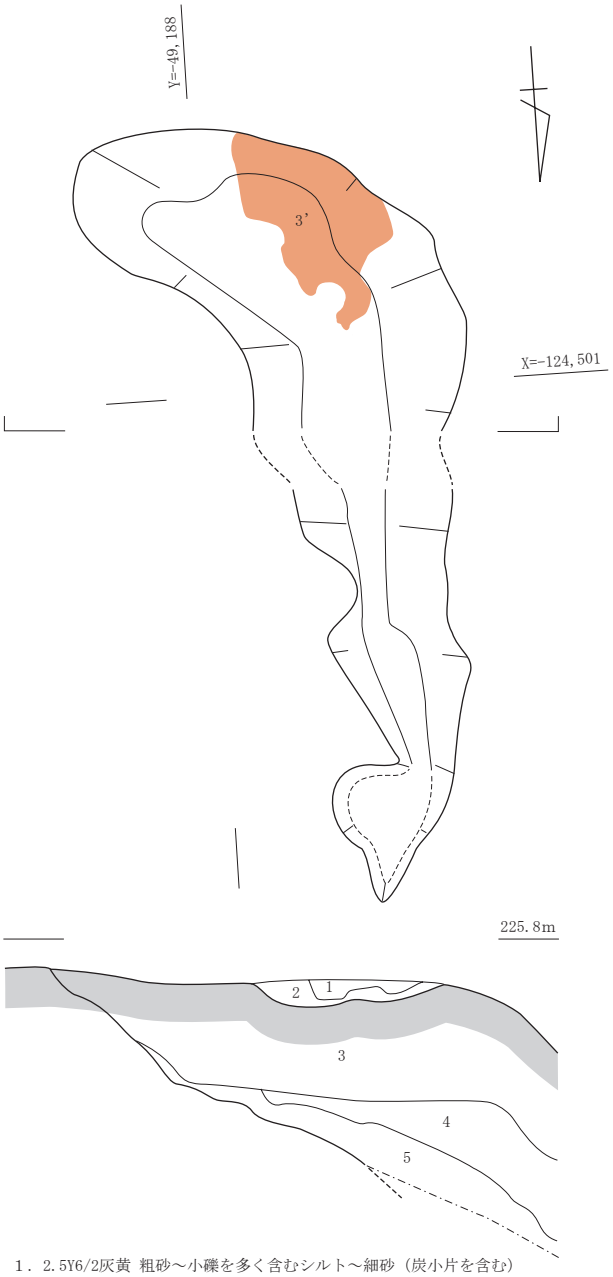
埋土から遺物は出土していない。

31土坑（図33・38）

南部の西縁部において、第１層上層盛土層掘削中に検出した。輪郭は不明瞭で、三日月形を呈し、深さは約0.1ｍである。埋土下層は炭片を主とする層である。南部の壁面から底面にかけての基盤層（第１層）が褐色化しており、被熱したと思われる。埋土を洗浄したが、遺物は含まれていなかった。

第１層内で検出した遺構はこれのみである。第１層は複数の層からなるが、層内に遺構面として把握できる層理面は認められない。盛土作業中の営為によるものと想定できる。

被熱痕跡上の埋土内で検出した炭片について放射性炭素年代測定を実施した結果、13世紀末～14世紀末の年代が示されている。ただし、試料が樹皮であったため、伐採年代より多少古い年代であるという（第４章第２節）。



１．2.5Y6/2灰黄 粗砂～小礫を多く含むシルト～細砂（炭小片を含む）
２．N1.5/0黒 炭
３．2.5Y6/4にぶい黄 小礫混シルト～極細砂と
　2.5Y6/3にぶい黄 中砂～小礫が互層になっている〔盛土層〕
３’．7.5YR5/4にぶい褐 粗砂・小礫混シルト～細砂〔盛土層　被熱痕跡〕
４．2.5Y5/3黄褐 小礫混シルト～細砂（５層をブロック状に含む）〔盛土層〕
５．2.5Y4/1黄灰 小礫混シルト（炭小片を含む）〔盛土層〕

0　(1:20)　1 m

図 38　31 土坑　平面・断面図

２．第２面（図34～37・39・41～45
カラー図版６・７　図版18・21～35）

第３層土壌層を除去した、第４層下層盛土層上面である。第３層の検出範囲は、図40に示した第４層の検出範囲とおおまかには同じである。なお、この面の表土層にあたる第３層土壌層上面でも精査を行なった。西縁斜面において、帯状に炭片を多く含む範囲が認められた（図37‐21層等）が、明確な輪郭としては捉えられず、遺構ではないと判断した。

第４層下層盛土層の検出範囲は、図40の通りである。厚い箇所（Ｊライン周辺）では１ｍ近くあり、第２面はこの盛土層により造成されている。中央部の東縁斜面では盛土層を検出していない。Ｊライン断面（図35）からも窺えるが、斜面の傾斜が西縁部より急であることから、崩落、流出したと考えられる。

幅広になる南部の頂部においても第４層を検出していない。同範囲では基盤層上面が露出し、尾根筋の方向に並行する溝群を検出した（図

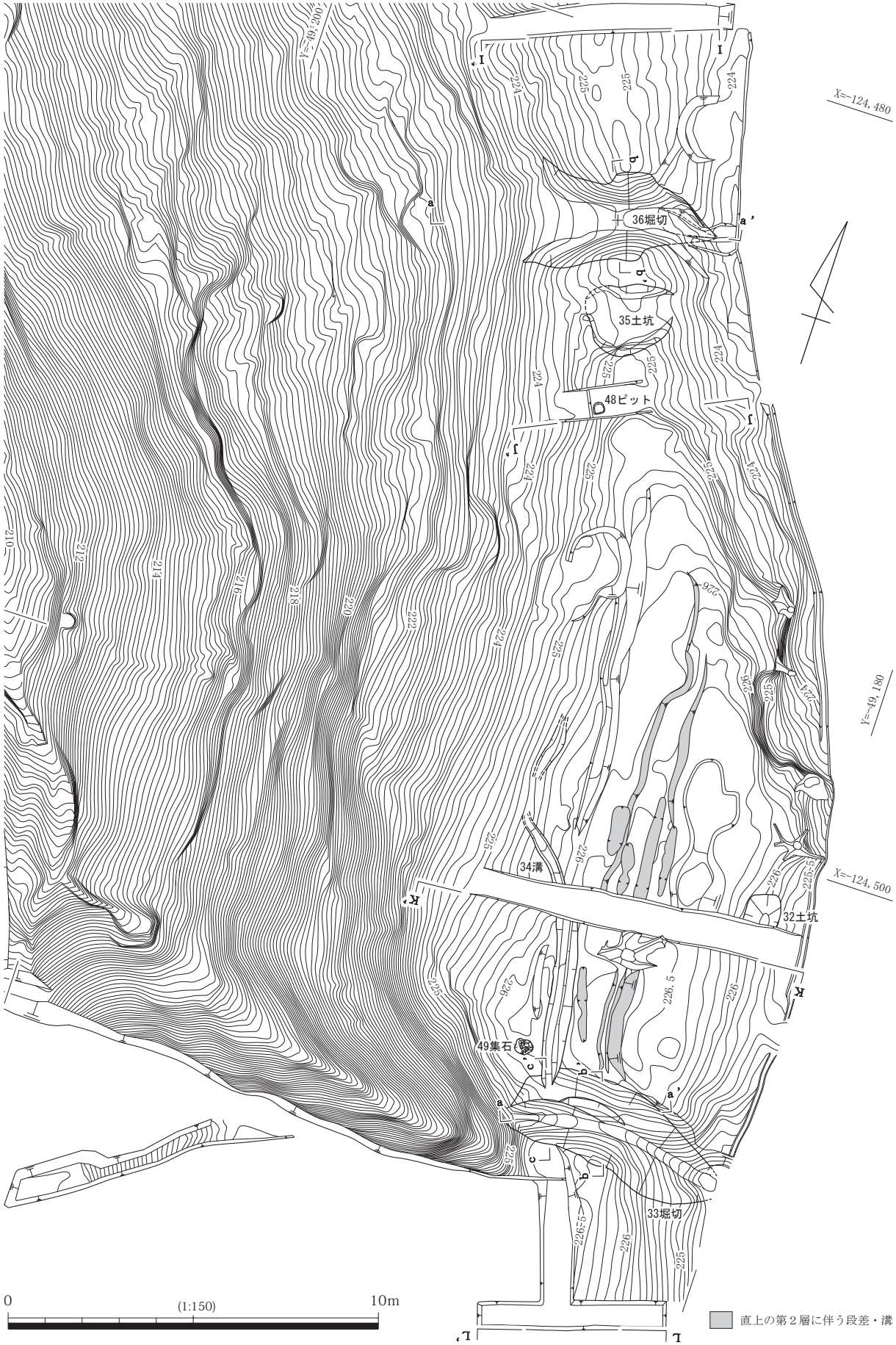


図 39　遠構え部　第２面　平面図

図 40　遠構え部　第３面　平面図

39)。溝の幅は0.2 ～ 0.4ｍ、深さは数㎝以下である。Ｋライン断面（図37）等の検討から、溝群の埋土は、第２層が落ち込んだものであることが確認できた。第２層は、第３層土壌層直上の層であるが、第３層及び第４層下層盛土層、基盤層を削平している。

当初、この第２層を第１層上層盛土層のうちに含めて調査を進めていたため、第２層上面を検出しておらず、平面分布範囲も確認できていないが、溝群を検出した範囲で露出している基盤層上面は、おおよそ平坦である。Ｋライン断面でも確認できるように、溝群東端には段差があり、段下にあたる西側には第２層上面から掘削された溝が確認できる。これらのことから、第２層上面は、第２面より後、上層盛土が施される前に形成された地表面であると考えられる。第２層はほかの断面では認められないことから、Ｋライン周辺にのみ存在したと思われる。第２層によりある程度の平坦化を指向した造成が行なわれたことが想定できる。上面の段差及びその段下の溝、下面の溝群から、尾根の幅広部に小規模な畠が存在した可能性を指摘しておく。極めて部分的な面であるため、遺構面名は付さず、ここに報告するにとどめる。なお、第２層から遺物は出土していない。

改めて第２面は、第４層下層盛土層を基盤層上に盛ることにより、造成された面である。前述の通り、南部の頂部は基盤層にまで及ぶ削平を受けている。頂部の幅は、北部では２ｍ弱（Ｊライン断面　図35）である。南部でも、Ｋライン断面（図37）から、同程度に復元することができる。頂部の標高は、北部で225.1ｍ、南部で226.5ｍである。なお、西側斜面については、あまりに急傾斜で危険を伴うため、基盤層上面を検出することを最優先として作業を行なった。ゆえに急傾斜部においては、第３層土壌層及び第４層下層盛土層ともに、厳密に層理面を検出し得ていない。

尾根筋に直交する溝状の遺構を２本検出した。現場を実見された村田修三氏によれば、これらは２本ともに「堀切」であり、この場所を止々呂美城の「遠構え」として位置付づけることができる、とのことである。第３層土壌層、第４層下層盛土層及び検出した遺構からも、全く遺物が出土しておらず、考古学的手法で時期を知ることはできないが、これらの遺構が「堀切」であるならば、この第２面が止々呂美城機能時の遺構面であると考えられる。

堀切以外に、土坑２基、溝１条、ピット１基、集石遺構１基を検出した。

32土坑（図39・41　図版27）

南部の東縁斜面部に位置する。第３層土壌層を除去し、第４層下層盛土層上面で検出した。南部分が土層確認用トレンチと重複してしまい、北部のみを確認した。平面形は隅丸の方形または長方形で、東西約0.9ｍ、南北0.7ｍ以上、深さ約0.1ｍである。埋土はシルト～細砂で、炭片を少量含む。明瞭な被熱痕跡は認められなかったが、壁面から底面にかけて淡い褐色を呈していたことから、被熱した可能性がある。埋土をすべて洗浄したが、遺物は含まれていなかった。

２層内の炭片について放射性炭素年代測定を実施した結果、９世紀前葉～ 10世紀後葉の年代が示されている（第４章第２節）。

33堀切（図39・42　図版28 ～ 30･34）

調査地の南東端、尾根が山稜に取り付く手前で、その幅をやや狭めている箇所に、尾根に直交して掘削されている。尾根の両サイド、特に西側斜面は、今回の調査地内において最も急峻な箇所である。

第１層上層盛土層を除去し、基盤層上面で検出した。断面形はＶ字状を呈し、長さ約6.0ｍ、幅約2.3ｍ、深さ約0.8ｍである。ただし、第３層土壌層が遺存していなかった箇所にあたることから、上部が削平されている可能性がある。底面のレベルは、尾根頂部にあたる中央部が最も高く標高225.6ｍ、東

端で224.5ｍ、西端で225.1ｍである。

埋土は、比較的細かく分層できる。上層部を中心に小礫を多く含んでおり、埋め戻されたと考えられる。最下層部にはシルト層が認められるが、基盤層がシルト層であり、雨の際に標高の高い南側から水が流れ込んでくる状況もみられたことから、堀切機能時に底面に自然堆積したものとも考えられる。

遺物は出土していない。

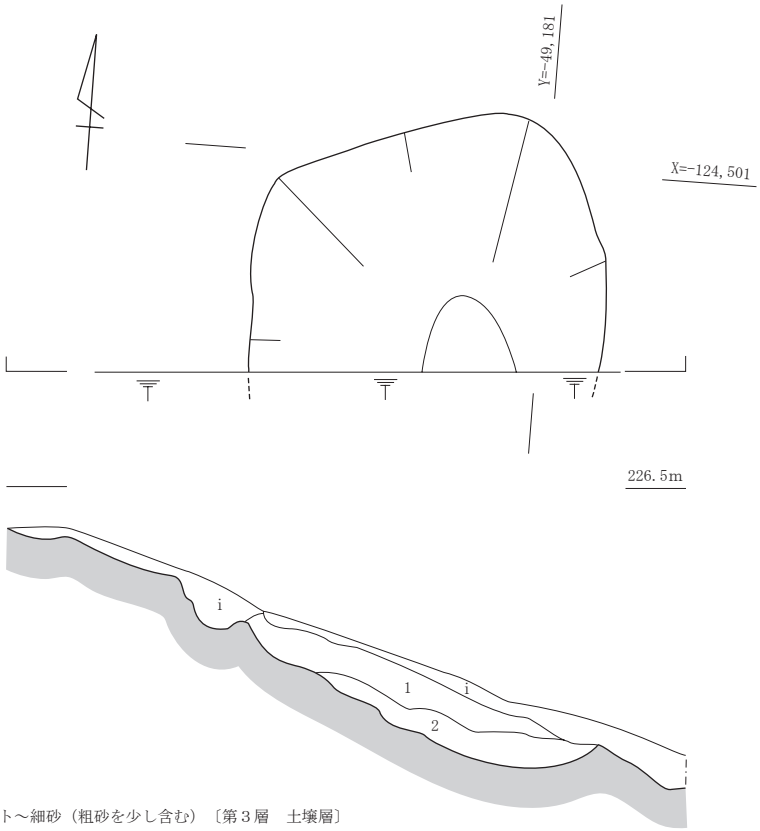
34溝（図37・39・42　図版30）

南部の西縁斜面部を尾根に沿って南北方向にのびる溝である。第３層土壌層上面から掘られていることをＫライン断面（図37）で確認できる。土壌層遺存範囲では、その上面で平面形を検出した。検出長約10.0ｍ、幅0.3 ～ 0.7ｍ、深さ0.1 ～ 0.4ｍで、北側にさらに続いていたと思われる。埋土は砂質で、流水堆積の可能性がある。

南端の位置が33堀切の北肩部にあたる。図42のｃ－ｃ´は、34溝と33堀切の断面である。溝の埋土は流水堆積を示す１～３層のみとしたが、断面形から、以南の16･28層が堆積している箇所も溝の延長部分として捉えられる。溝と堀切は、一連のものとして接続していたと考えられる。堀切が埋め戻された後、溝が埋没したと思われる。

溝底面のレベルは、北端で標高225.3ｍ、堀切と接続する南端で標高225.9ｍであり、堀切側の南が高い。埋土は流水堆積の可能性があるが、雨水等により埋没したとも考えられる。調査中、降雨の際には雨水がより標高の高い箇所の表層を集めて溝を埋没させる状況がみられた。

遺物は出土していない。



i．2.5Y5/2暗灰黄 シルト～細砂（粗砂を少し含む）〔第３層　土壌層〕
1．7.5Y4/3暗オリーブ シルト～細砂（粗砂を少し含む）
2．7.5Y4/1灰 シルト～細砂（粗砂を少し含む　炭小片を少し含む　１層よりシルト質強い）

0　(1:20)　1 m

図 41　32 土坑　平面・断面図

35土坑（図39・44　図版31）

北部に位置する。後述する36堀切の南東側に隣接する土坑である。第３層土壌層を除去し、第４層下層盛土層上面で検出した。不整な方形を呈し、東西約2.3ｍ、南北約1.9ｍ、深さ約0.4ｍである。

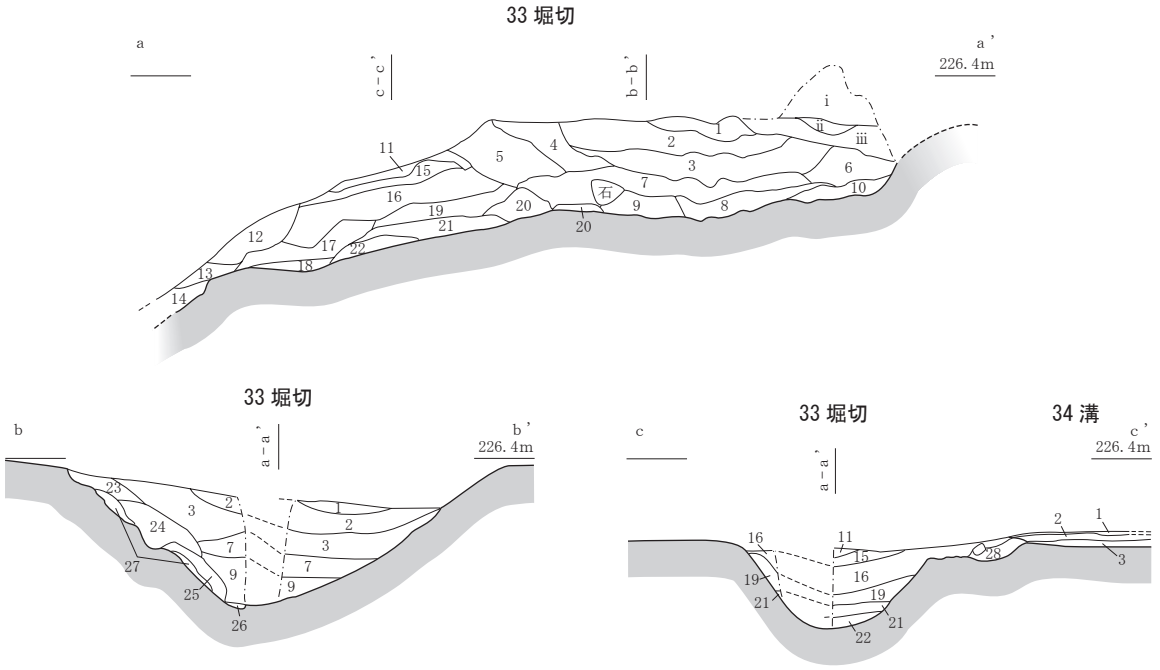
埋土は、粗砂～小礫混じりシルト～極細砂である。肩部は第４層下層盛土層であるが、底面は基盤層に及んでいる。

遺物は出土していない。

36堀切（図39・43　カラー図版７　図版32～34）

北部の頂上部との境界部分に位置する。尾根筋において頂部の幅が最も狭く、かつ標高が最も低くなる地点に、尾根に直交して掘削されている。尾根の両サイドは急峻な斜面である。

第３層土壌層を除去し、第４層下層盛土層上面で検出した。断面形はＶ字状を呈し、長さ約5.0ｍ、



ⅰ．2.5Y7/4浅黄 粗砂～小礫を多く含むシルト～極細砂〔第１層　上層盛土〕
ⅱ．2.5Y6/4にぶい黄 粗砂～小礫を非常に多く含む極細砂～細砂〔第１層　上層盛土か〕
ⅲ．2.5Y7/4浅黄 粗砂～小礫を多く含む極細砂～細砂〔第１層　上層盛土か〕

33堀切

１．2.5Y6/3にぶい黄 小礫混シルト～極細砂
２．2.5Y6/2灰黄 小礫を多く含むシルト～極細砂
３．2.5Y6/4にぶい黄 粗砂混シルト～極細砂（小礫を含む）
４．2.5Y6/2灰黄 小礫を非常に多く含むシルト～極細砂
５．2.5Y6/3にぶい黄 小礫混シルト～極細砂
６．2.5Y6/3にぶい黄 小礫を多く含むシルト～極細砂
７．2.5Y6/1黄灰 小礫を非常に多く含むシルト～極細砂
８．2.5Y7/2灰黄 粗砂～小礫混シルト
９．2.5Y6/2灰黄 粗砂混シルト（小礫を少し含む）
10．2.5Y7/3浅黄 粗砂～小礫混シルト（基盤層に似る）
11．2.5Y7/4浅黄 粗砂～小礫を多く含む細砂
12．2.5Y6/3にぶい黄 粗砂～小礫を多く含むシルト～極細砂
13．2.5Y6/3にぶい黄 粗砂～小礫混シルト～極細砂
14．2.5Y6/4にぶい黄 粗砂～小礫を多く含むシルト～細砂
15．2.5Y5/2暗灰黄 粗砂～小礫を非常に多く含むシルト～極細砂
16．2.5Y5/2暗灰黄 粗砂～小礫を多く含むシルト～細砂
17．2.5Y6/2灰黄 粗砂～小礫を非常に多く含むシルト～細砂
18．5Y6/1灰 粗砂～小礫を多く含むシルト
19．2.5Y5/1黄灰 粗砂～小礫を多く含むシルト
20．2.5Y6/2灰黄 粗砂～小礫を非常に多く含むシルト～細砂
21．2.5Y6/2灰黄 粗砂～小礫混シルト
22．5Y6/2灰オリーブ 粗砂～小礫を多く含むシルト～細砂
23．2.5Y6/3にぶい黄 小礫を多く含むシルト～細砂
24．2.5Y6/3にぶい黄 小礫混シルト～極細砂
25．2.5Y6/1黄灰 小礫を多く含むシルト
26．2.5Y7/2灰黄 粗砂混シルト
27．2.5Y7/3浅黄 シルト～極細砂（小礫を少し含む）
28．2.5Y6/3にぶい黄 小礫を多く含むシルト～細砂

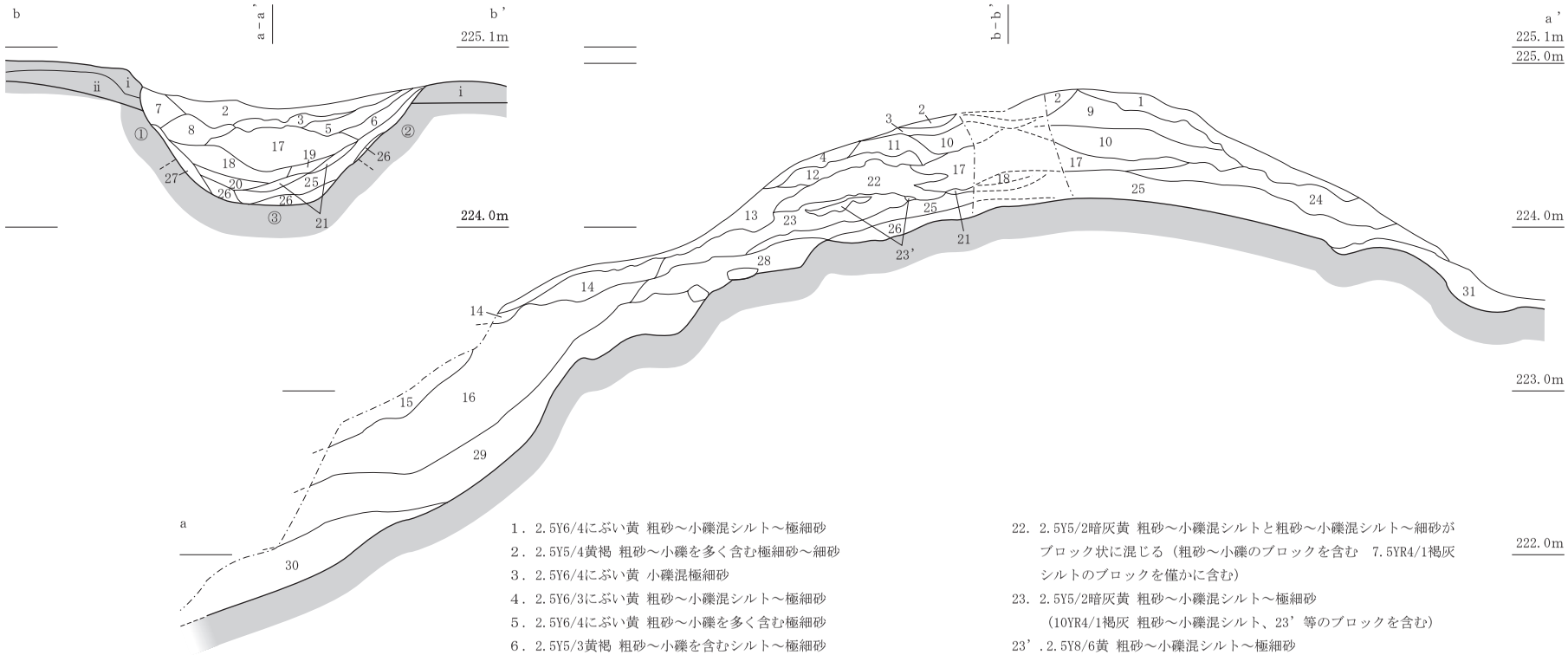
34溝

１．10YR5/2灰黄褐 細砂～小礫（ラミナありか）
２．2.5Y6/4にぶい黄 粗砂～小礫混細砂～中砂（ラミナありか）
３．2.5Y5/2暗灰黄 粗砂～小礫混細砂（ラミナありか）

※ 断面位置は図39

0　(1:40)　2m

図42　33堀切、34溝　断面図



※ 断面位置は図39

1．2.5Y6/4にぶい黄 粗砂～小礫混シルト～極細砂
2．2.5Y5/4黄褐 粗砂～小礫を多く含む極細砂～細砂
3．2.5Y6/4にぶい黄 小礫混極細砂
4．2.5Y6/3にぶい黄 粗砂～小礫混シルト～極細砂
5．2.5Y6/4にぶい黄 粗砂～小礫を多く含む極細砂
6．2.5Y5/3黄褐 粗砂～小礫を含むシルト～極細砂
7．2.5Y6/4にぶい黄 粗砂～小礫を多く含むシルト～極細砂
8．2.5Y6/3にぶい黄 粗砂～小礫を多く含む極細砂
9．2.5Y6/3にぶい黄 粗砂～小礫を多く含むシルト～極細砂
10．2.5Y5/3黄褐 粗砂～小礫を非常に多く含むシルト～細砂
11．2.5Y6/2灰黄 小礫混シルトと小礫混シルト～細砂がブロック状に混じる
12．2.5Y5/2暗灰黄 粗砂～小礫を多く含むシルト～極細砂
13．2.5Y6/4にぶい黄 粗砂～小礫を非常に多く含むシルト～細砂
14．2.5Y6/3にぶい黄 粗砂～小礫混シルト～極細砂
15．2.5Y5/2暗灰黄 粗砂～小礫混シルト～極細砂
16．2.5Y5/3黄褐 粗砂～小礫を多く含むシルト～細砂
（拳大までの礫を含む）
17．2.5Y5/4黄褐 粗砂～小礫を非常に多く含むシルト～細砂
18．2.5Y5/3黄褐 中砂～粗砂・小礫
19．2.5Y6/4にぶい黄 粗砂～小礫を多く含む極細砂
20．2.5Y6/2灰黄 粗砂～小礫混シルト～極細砂
21．2.5Y6/3にぶい黄 粗砂～小礫混シルト～極細砂
22．2.5Y5/2暗灰黄 粗砂～小礫混シルトと粗砂～小礫混シルト～細砂がブロック状に混じる（粗砂～小礫のブロックを含む　7.5YR4/1褐灰シルトのブロックを僅かに含む）
23．2.5Y5/2暗灰黄 粗砂～小礫混シルト～極細砂
（10YR4/1褐灰 粗砂～小礫混シルト、23’等のブロックを含む）
23’．2.5Y8/6黄 粗砂～小礫混シルト～極細砂
24．2.5Y6/3にぶい黄 粗砂～小礫混シルト～極細砂
25．2.5Y5/1黄灰 粗砂～小礫混シルト～極細砂
26．2.5Y5/3黄褐 粗砂～小礫を非常に多く含むシルト～細砂
27．2.5Y6/2灰黄 粗砂～小礫を多く含むシルト～極細砂
28．2.5Y6/2灰黄 粗砂～小礫を多く含むシルト～中砂
29．2.5Y5/2暗灰黄 粗砂～小礫を多く含むシルト～細砂
30．2.5Y5/2暗灰黄 粗砂～小礫を非常に多く含むシルト～細砂
31．2.5Y6/4にぶい黄 粗砂～小礫を多く含むシルト～細砂
（拳大までの礫を含む）
ⅰ．2.5Y5/2 暗灰黄 粗砂～小礫混シルト～極細砂〔第４層　下層盛土〕
ⅱ．2.5Y6/4 にぶい黄 小礫を非常に多く含むシルト～細砂〔第４層　下層盛土〕
基盤層①．2.5Y6/6 明黄褐 小礫を非常に多く含むシルト～極細砂
基盤層②．2.5Y7/3 浅黄 粗砂～小礫混シルト～極細砂
基盤層③．2.5Y6/6 明黄褐 粗砂～小礫を多く含むシルト～極細砂
（拳大までの礫を含む）

図43　36堀切　断面図

幅約2.4ｍ、深さ約0.8ｍである。底面のレベルは、尾根頂部にあたる中央部が最も高く標高224.1ｍ、東端で標高223.5ｍ、西端で標高223.3ｍである。

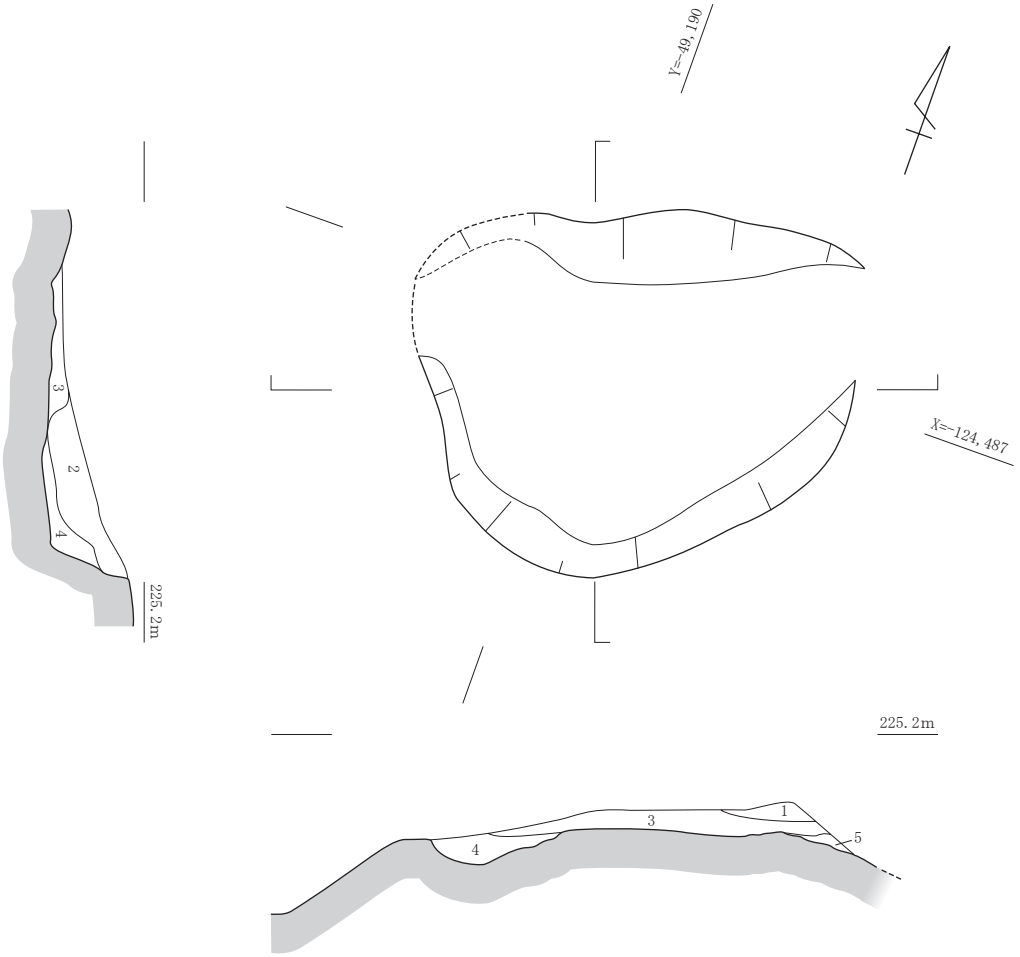
埋土は細かく分層できるが、おおむね粗砂～小礫を多く含むシルト～細砂である。ブロック土が認められ、埋め戻されたと考えられる。尾根頂部における埋土と、斜面部における埋土（断面14 ～ 16・28 ～ 31層）は、土質や層厚が対照的である。尾根頂部は締まりのある薄層群により、入念に埋め戻されたと思われる。堀切埋土上は、若干の窪みとはなっていたものの、第３層土壌層に覆われていたため、第２面の間に埋め戻されたことがわかる。

第４層下層盛土層は、ｂ‐ｂ´断面で確認できる通り肩部にのみ認められ、これより下の壁面及び底面は基盤層である。

遺物は出土していない。

48ピット（図39・45　図版31）

35土坑の南に位置する。土層確認用トレンチと重複してしまい、下部のみ検出した。１辺約0.3ｍの隅丸方形である。隣接するＪライン断面から本来の検出面の高さは東で標高225.0ｍ、西で標高224.9ｍ、



１．2.5Y6/4にぶい黄 粗砂～小礫を非常に多く含むシルト～中砂
２．2.5Y5/4黄褐 粗砂～小礫を多く含むシルト～細砂
３．2.5Y5/2暗灰黄 粗砂～小礫混シルト～極細砂
４．2.5Y5/6黄褐 粗砂～小礫を非常に多く含むシルト～中砂
５．2.5Y5/4黄褐 粗砂～小礫を多く含むシルト～細砂

0　(1:40)　2m

図44　35土坑　平面・断面図

深さは約0.2ｍと復元できる。

埋土は小礫混じりシルトである。遺物は出土していない。

49集石（図39・45　図版35）

南部の西縁部に位置する。33堀切と34溝の接続地点の北西側である。直上に第３層土壌層が遺存しておらず、削平を受けている可能性がある。基盤層上面で検出した。十数㎝から２～３㎝までの角礫が集積している。ほとんど深さを残していないが、径0.4 ～ 0.5ｍの土坑底部にあったと思われる。遺物は出土していない。

３．第３面（図34 ～ 37・40　図版24・26・36・37）

第４層下層盛土層を除去した、基盤層上面である。尾根頂部の断面形（図34 ～ 37）は、ピーク地点より西側に若干の緩斜面を有するものの、平坦面は認められない。標高は、南端部が226.6ｍで最も高い。北端は標高225.1ｍであるが、最低地点は第２面の36堀切の辺りで、標高224.7ｍである。

平面図（図40）で、Ｊライン断面の南側に斜面部とほぼ同じ間隔の等高線が確認できるが、Ｊライン南側から北側の最低地点へと、急傾斜で地形が落ち込んでいた。第４層下層盛土層はこの地点で最も厚く、第２面ではこの急傾斜は存在しない。等高線の表記間隔が異なるので見づらいが、第２面（図39）と比較すれば、この尾根の最低地点を平坦化するために、第４層下層盛土層が盛られたことが理解できる。

なお、基盤層上に土壌層は認められなかった。この面で遺構は検出していない。

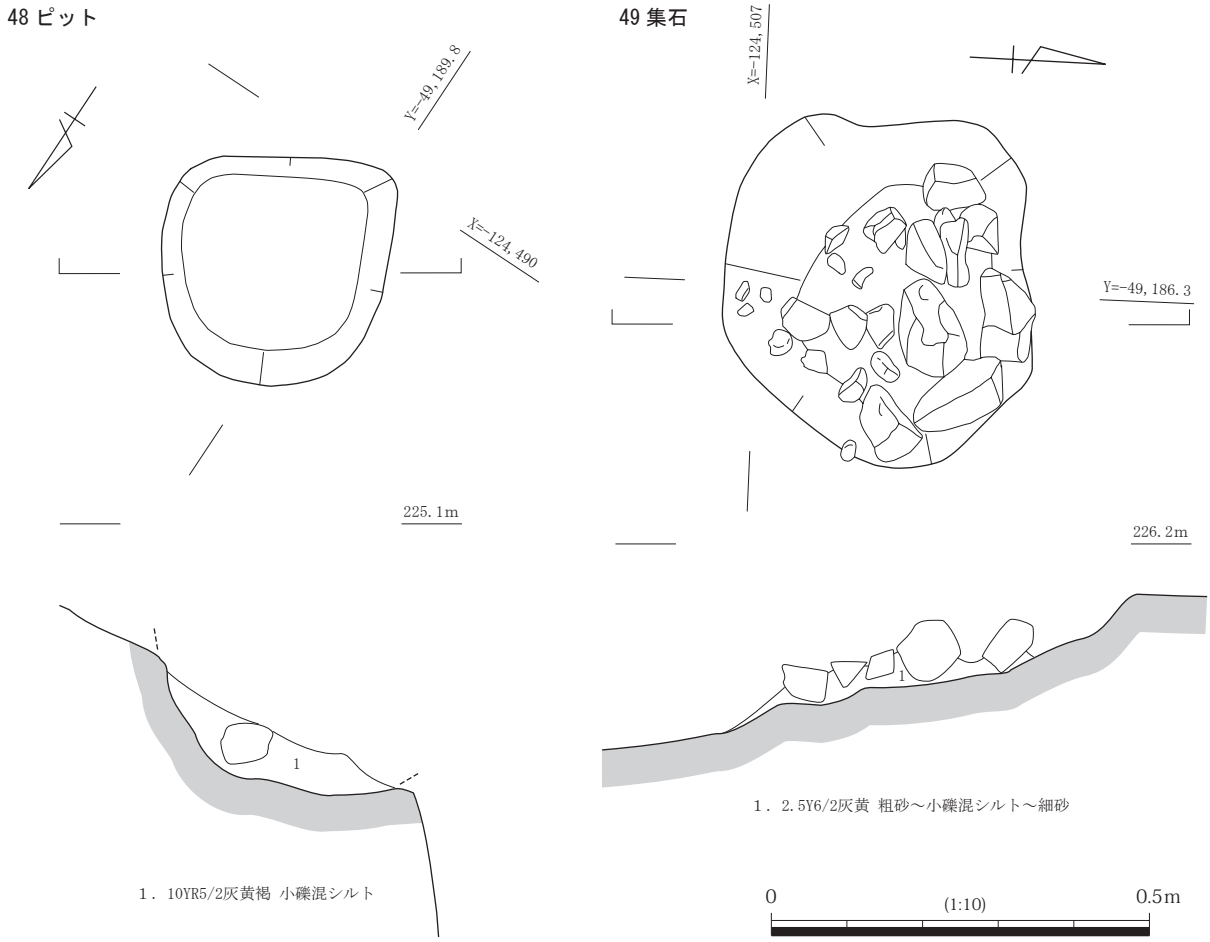


図45　48ピット、49集石　平面・断面図

第２節　南面斜面から谷

調査地である北西-南東方向の尾根の南側は、現在箕面有料道路になっている谷筋である。谷西部は、字「今宮」で、その東奥に続く谷筋及びそれに面する斜面について報告する。斜面を斜面部（３～５区）、谷筋を谷部（３区）とする（図５・47～54）。

第１項　斜面部（図46～62・91　図版38～42・51～53）

南面斜面は、調査地内で最も急峻である。現況では樹木が生えていた。

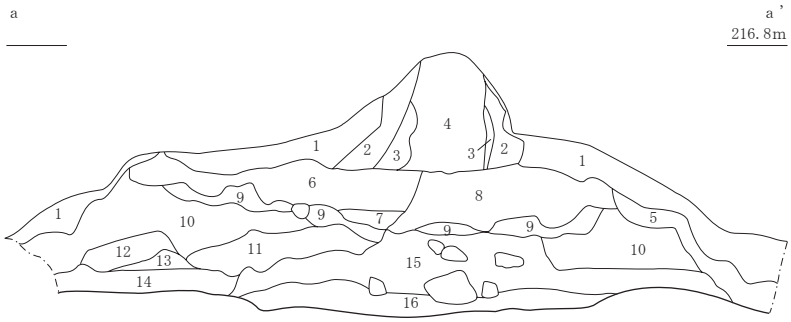
山頂棚田部中央付近から南西方向にのびる、尾根状を呈する斜面部（４区と５区の境）には堆積層はなく、表土層直下に非常に弱くではあるが土壌化している層が認められたのみである。それを第１層として除去した、基盤層上面を遺構面とした。それ以外の箇所では、山頂の棚田造成時の盛土等が流出したと思われる堆積層が比較的厚く認められた。特に、前述の尾根状を呈する斜面部の両サイドにあたる、谷筋状を呈する箇所では非常に厚く堆積しており、３m近い層厚を有する箇所もあった。礫を多く含むシルトを主体とし、砂礫層もみられる。

なお、調査地西端部の斜面下部に、現況で２段の平坦地が認められた。Ａライン断面（図47）の南西部（下部）にあたり、西側の調査地外に続いている。Ａライン断面で、切土、盛土により造成されていることがわかる。表土層を除去した盛土層上面及び盛土層を除去した基盤層上面において精査を行なったが、遺構は検出しなかった。盛土層内に遺物が含まれておらず、造成時期は不明である。調査地外の斜面下部に同様な平坦地が複数みられ、栗等の果樹が植えられていることから、果樹栽培のために造成された平坦地である可能性が高い。

尾根筋で土坑を２基検出したほか、石塔類をはじめとする遺物が出土している。

畦状盛土（図46・91）

現況で調査地中央部の斜面に認められた、畦状の高まりである。山頂棚田部より下方へ、等高線に直

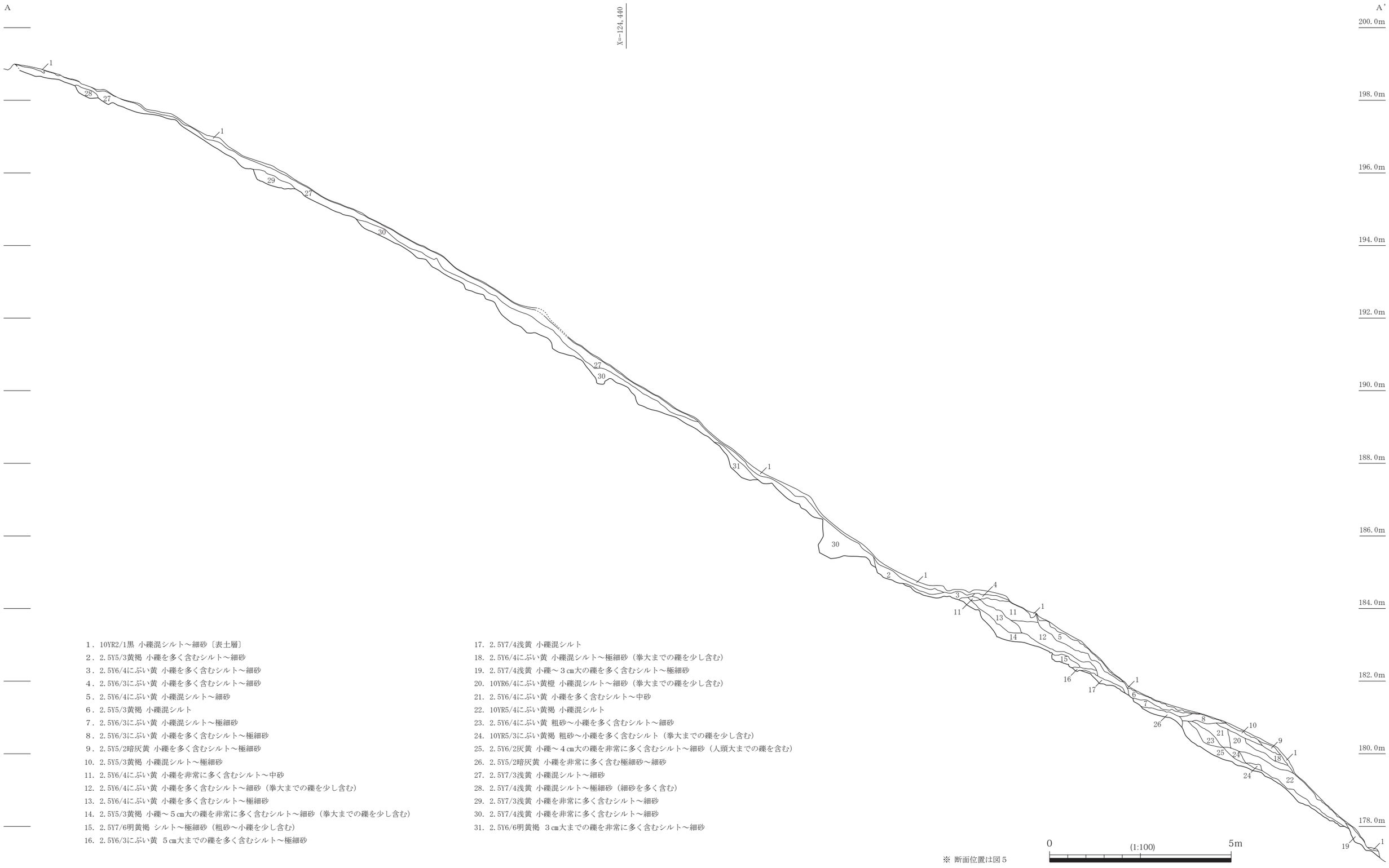


1．10YR4/2灰黄褐 小礫混シルト～中砂〔表土層〕
2．2.5Y6/3にぶい黄 小礫混シルト～中砂
3．2.5Y6/4にぶい黄 小礫混シルト～細砂
4．2.5Y6/4にぶい黄 小礫を多く含むシルト～細砂（５㎝大までの礫を含む）
5．2.5Y5/2暗灰黄 小礫を多く含むシルト～細砂
6．2.5Y5/3黄褐 小礫を多く含むシルト～中砂（４㎝大までの礫を含む）
7．2.5Y5/4黄褐 小礫を多く含むシルト～中砂
8．2.5Y6/6明黄褐 ３㎝大までの礫を非常に多く含むシルト～中砂
9．2.5Y7/4浅黄 細砂混シルト（５㎝大までの礫を少し含む）
10．2.5Y6/3にぶい黄 小礫混シルト～細砂（拳大までの礫を含む）
11．2.5Y6/3にぶい黄 小礫混シルト
12．2.5Y6/2灰黄 小礫混シルト～細砂（３㎝大までの礫を含む）
13．2.5Y6/2灰黄 小礫を多く含むシルト～中砂（３㎝大までの礫を含む）
14．2.5Y6/2灰黄 粗砂・小礫混シルト～中砂（３㎝大までの礫を含む）
15．2.5Y5/2暗灰黄 小礫を非常に多く含むシルト～細砂（５㎝大までの礫を含む 15㎝大までの礫を少し含む）
16．2.5Y7/2灰黄 ３㎝大までの礫を非常に多く含むシルト～中砂
基盤層．2.5Y8/1灰白 シルト（粗砂を少し含む）

※ 断面位置は図91

0　(1:40)　2m

図46　畦状盛土　断面図



※ 断面位置は図５

1．10YR2/1黒 小礫混シルト～細砂〔表土層〕
2．2.5Y5/3黄褐 小礫を多く含むシルト～細砂
3．2.5Y6/4にぶい黄 小礫を多く含むシルト～細砂
4．2.5Y6/3にぶい黄 小礫を多く含むシルト～細砂
5．2.5Y6/4にぶい黄 小礫混シルト～細砂
6．2.5Y5/3黄褐 小礫混シルト
7．2.5Y6/3にぶい黄 小礫混シルト～極細砂
8．2.5Y6/3にぶい黄 小礫を多く含むシルト～極細砂
9．2.5Y5/2暗灰黄 小礫を多く含むシルト～極細砂
10．2.5Y5/3黄褐 小礫混シルト～極細砂
11．2.5Y6/4にぶい黄 小礫を非常に多く含むシルト～中砂
12．2.5Y6/4にぶい黄 小礫を多く含むシルト～細砂（拳大までの礫を少し含む）
13．2.5Y6/4にぶい黄 小礫を多く含むシルト～極細砂
14．2.5Y5/3黄褐 小礫～５cm大の礫を非常に多く含むシルト～細砂（拳大までの礫を少し含む）
15．2.5Y7/6明黄褐 シルト～極細砂（粗砂～小礫を少し含む）
16．2.5Y6/3にぶい黄 ５cm大までの礫を多く含むシルト～極細砂
17．2.5Y7/4浅黄 小礫混シルト
18．2.5Y6/4にぶい黄 小礫混シルト～極細砂（拳大までの礫を少し含む）
19．2.5Y7/4浅黄 小礫～３cm大の礫を多く含むシルト～極細砂
20．10YR6/4にぶい黄橙 小礫混シルト～細砂（拳大までの礫を少し含む）
21．2.5Y6/4にぶい黄 小礫を多く含むシルト～中砂
22．10YR5/4にぶい黄褐 小礫混シルト
23．2.5Y6/4にぶい黄 粗砂～小礫を多く含むシルト～細砂
24．10YR5/3にぶい黄褐 粗砂～小礫を多く含むシルト（拳大までの礫を少し含む）
25．2.5Y6/2灰黄 小礫～４cm大の礫を非常に多く含むシルト～細砂（人頭大までの礫を含む）
26．2.5Y5/2暗灰黄 小礫を非常に多く含む極細砂～細砂
27．2.5Y7/3浅黄 小礫混シルト～細砂
28．2.5Y7/4浅黄 小礫混シルト～極細砂（細砂を多く含む）
29．2.5Y7/3浅黄 小礫を非常に多く含むシルト～細砂
30．2.5Y7/4浅黄 小礫を非常に多く含むシルト～細砂
31．2.5Y6/6明黄褐 ３cm大までの礫を非常に多く含むシルト～細砂

図47　Aライン　断面図

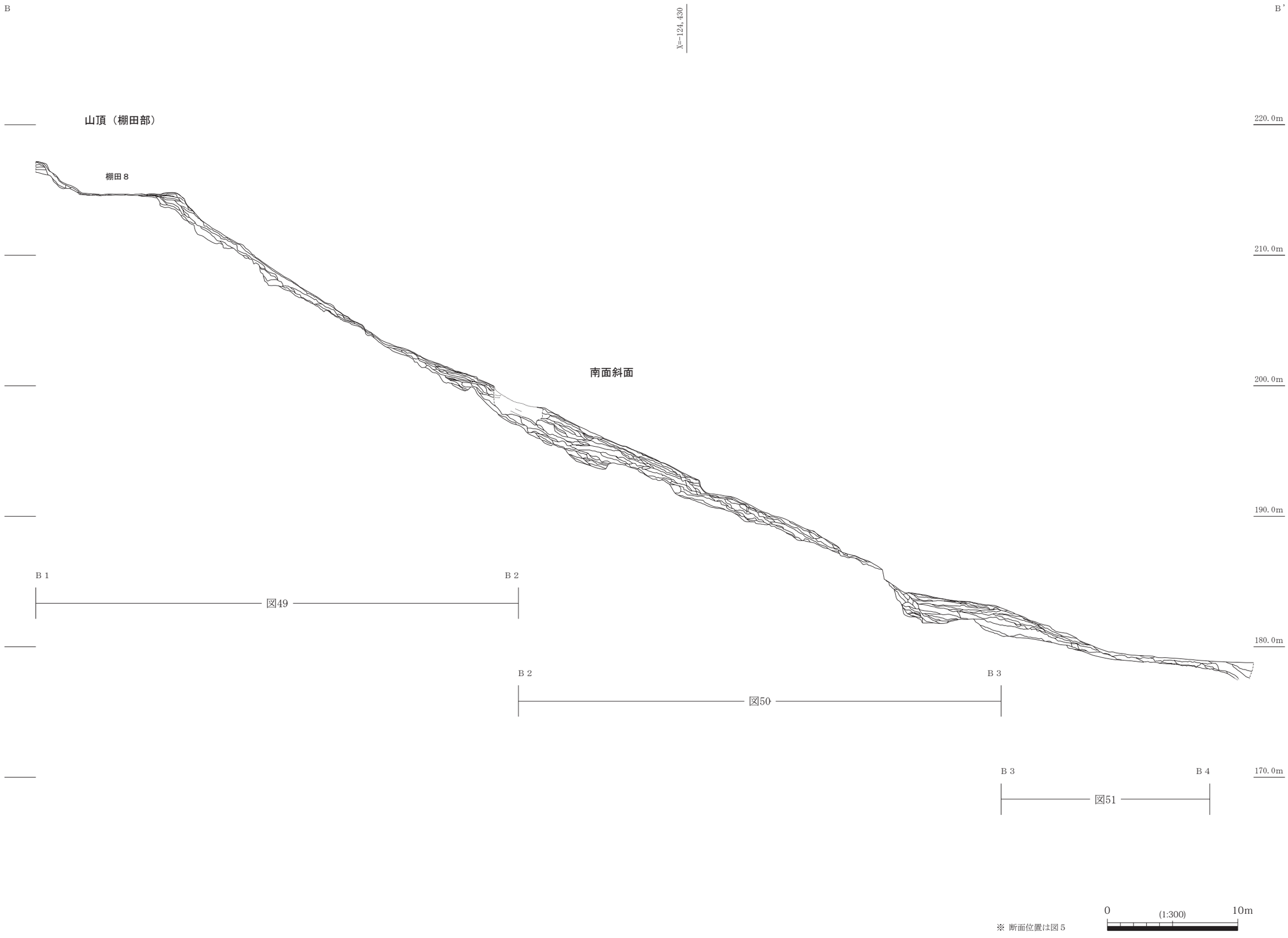
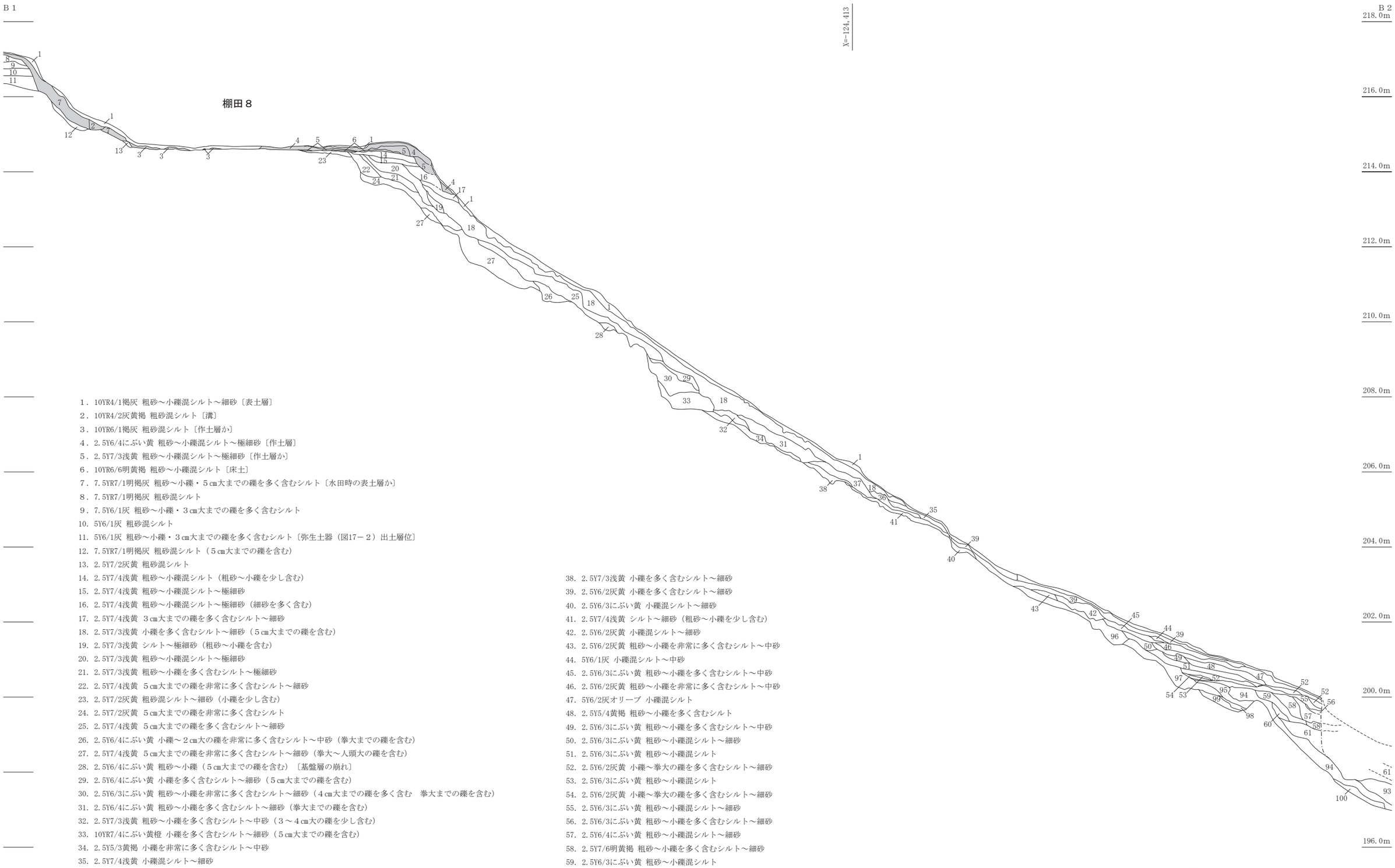

B
X=-124,430
B'
山頂（棚田部）
220.0m
棚田８
210.0m
南面斜面
200.0m
190.0m
B 1
B 2
図49
180.0m
B 2
B 3
図50
B 3
B 4
170.0m
図51
0
(1:300)
10m
※ 断面位置は図５

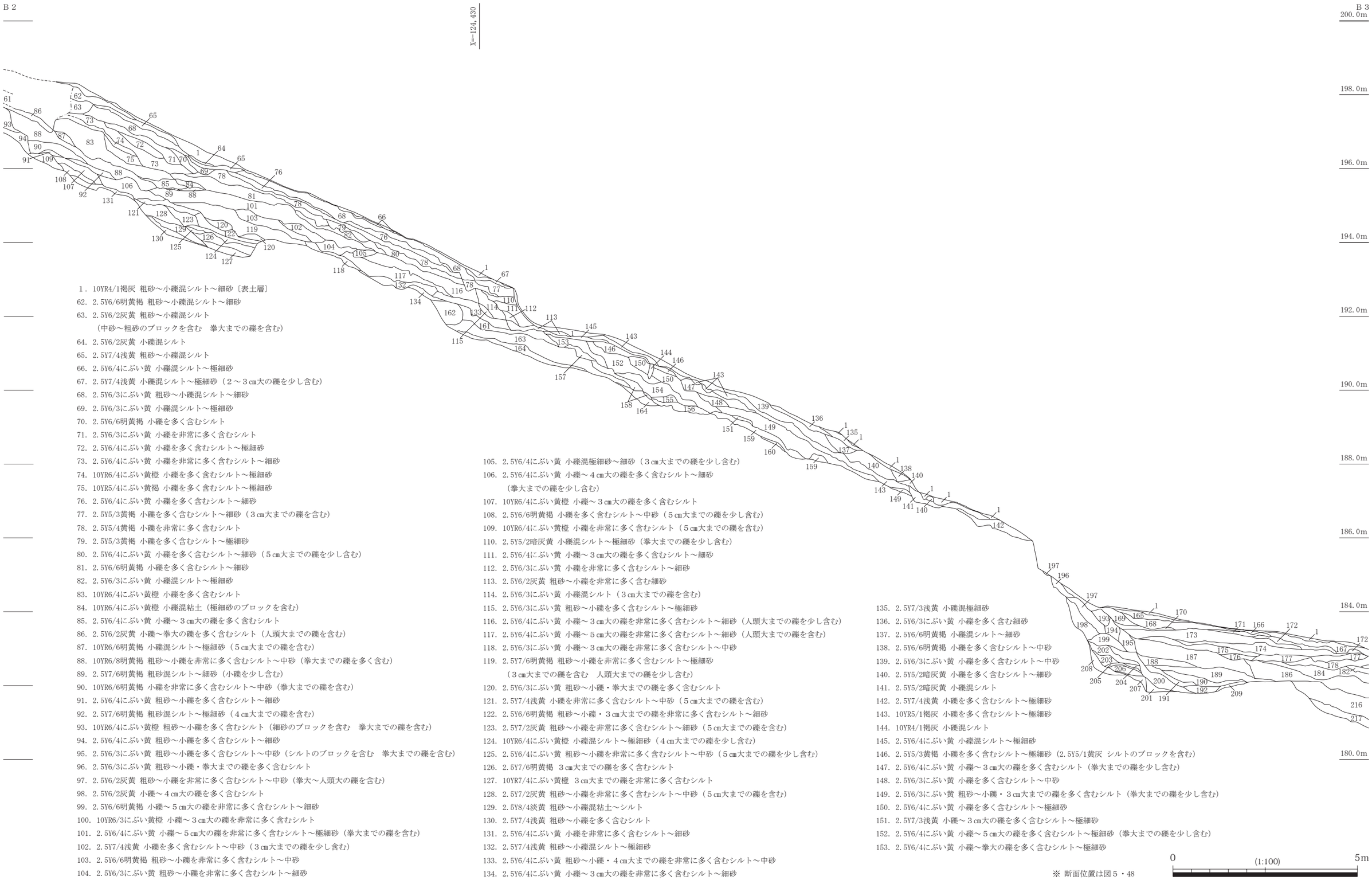
図 48　Ｂライン　断面図



※ 断面位置は図５・10・48

1．10YR4/1褐灰 粗砂～小礫混シルト～細砂〔表土層〕
2．10YR4/2灰黄褐 粗砂混シルト〔溝〕
3．10YR6/1褐灰 粗砂混シルト〔作土層か〕
4．2.5Y6/4にぶい黄 粗砂～小礫混シルト～極細砂〔作土層〕
5．2.5Y7/3浅黄 粗砂～小礫混シルト～極細砂〔作土層か〕
6．10YR6/6明黄褐 粗砂～小礫混シルト〔床土〕
7．7.5YR7/1明褐灰 粗砂～小礫・５㎝大までの礫を多く含むシルト〔水田時の表土層か〕
8．7.5YR7/1明褐灰 粗砂混シルト
9．7.5Y6/1灰 粗砂～小礫・３㎝大までの礫を多く含むシルト
10. 5Y6/1灰 粗砂混シルト
11. 5Y6/1灰 粗砂～小礫・３㎝大までの礫を多く含むシルト〔弥生土器（図17－２）出土層位〕
12. 7.5YR7/1明褐灰 粗砂混シルト（５㎝大までの礫を含む）
13. 2.5Y7/2灰黄 粗砂混シルト
14. 2.5Y7/4浅黄 粗砂～小礫混シルト（粗砂～小礫を少し含む）
15. 2.5Y7/4浅黄 粗砂～小礫混シルト～極細砂
16. 2.5Y7/4浅黄 粗砂～小礫混シルト～極細砂（細砂を多く含む）
17. 2.5Y7/4浅黄 ３㎝大までの礫を多く含むシルト～細砂
18. 2.5Y7/3浅黄 小礫を多く含むシルト～細砂（５㎝大までの礫を含む）
19. 2.5Y7/3浅黄 シルト～極細砂（粗砂～小礫を含む）
20. 2.5Y7/3浅黄 粗砂～小礫混シルト～極細砂
21. 2.5Y7/3浅黄 粗砂～小礫を多く含むシルト～極細砂
22. 2.5Y7/4浅黄 ５㎝大までの礫を非常に多く含むシルト～細砂
23. 2.5Y7/2灰黄 粗砂混シルト～細砂（小礫を少し含む）
24. 2.5Y7/2灰黄 ５㎝大までの礫を非常に多く含むシルト
25. 2.5Y7/4浅黄 ５㎝大までの礫を多く含むシルト～細砂
26. 2.5Y6/4にぶい黄 小礫～２㎝大の礫を非常に多く含むシルト～中砂（拳大までの礫を含む）
27. 2.5Y7/4浅黄 ５㎝大までの礫を非常に多く含むシルト～細砂（拳大～人頭大の礫を含む）
28. 2.5Y6/4にぶい黄 粗砂～小礫（５㎝大までの礫を含む）〔基盤層の崩れ〕
29. 2.5Y6/4にぶい黄 小礫を多く含むシルト～細砂（５㎝大までの礫を含む）
30. 2.5Y6/3にぶい黄 粗砂～小礫を非常に多く含むシルト～細砂（４㎝大までの礫を多く含む　拳大までの礫を含む）
31. 2.5Y6/4にぶい黄 粗砂～小礫を多く含むシルト～細砂（拳大までの礫を含む）
32. 2.5Y7/3浅黄 粗砂～小礫を多く含むシルト～中砂（３～４㎝大の礫を少し含む）
33. 10YR7/4にぶい黄橙 小礫を多く含むシルト～細砂（５㎝大までの礫を含む）
34. 2.5Y5/3黄褐 小礫を非常に多く含むシルト～中砂
35. 2.5Y7/4浅黄 小礫混シルト～細砂
36. 2.5Y7/3浅黄 小礫を多く含むシルト～細砂
37. 2.5Y6/4にぶい黄 粗砂～小礫混シルト～中砂（５㎝大までの礫を含む）
38. 2.5Y7/3浅黄 小礫を多く含むシルト～細砂
39. 2.5Y6/2灰黄 小礫を多く含むシルト～細砂
40. 2.5Y6/3にぶい黄 小礫混シルト～細砂
41. 2.5Y7/4浅黄 シルト～細砂（粗砂～小礫を少し含む）
42. 2.5Y6/2灰黄 小礫混シルト～細砂
43. 2.5Y6/2灰黄 粗砂～小礫を非常に多く含むシルト～中砂
44. 5Y6/1灰 小礫混シルト～中砂
45. 2.5Y6/3にぶい黄 粗砂～小礫を多く含むシルト～中砂
46. 2.5Y6/2灰黄 粗砂～小礫を非常に多く含むシルト～中砂
47. 5Y6/2灰オリーブ 小礫混シルト
48. 2.5Y5/4黄褐 粗砂～小礫を多く含むシルト
49. 2.5Y6/3にぶい黄 粗砂～小礫を多く含むシルト～中砂
50. 2.5Y6/3にぶい黄 粗砂～小礫混シルト～細砂
51. 2.5Y6/3にぶい黄 粗砂～小礫混シルト
52. 2.5Y6/2灰黄 小礫～拳大の礫を多く含むシルト～細砂
53. 2.5Y6/3にぶい黄 粗砂～小礫混シルト
54. 2.5Y6/2灰黄 小礫～拳大の礫を多く含むシルト～細砂
55. 2.5Y6/3にぶい黄 粗砂～小礫混シルト～細砂
56. 2.5Y6/3にぶい黄 粗砂～小礫を多く含むシルト～細砂
57. 2.5Y6/4にぶい黄 粗砂～小礫混シルト～細砂
58. 2.5Y7/6明黄褐 粗砂～小礫を多く含むシルト～細砂
59. 2.5Y6/3にぶい黄 粗砂～小礫混シルト
60. 2.5Y6/2灰黄 粗砂～小礫を多く含むシルト～細砂
61. 2.5Y6/1黄灰 粗砂～小礫を非常に多く含むシルト～細砂

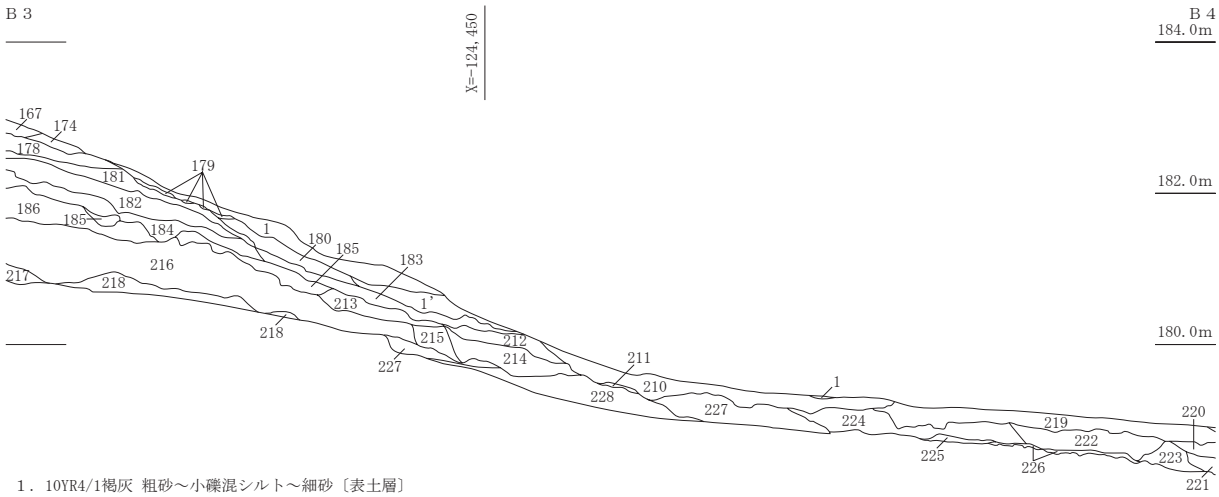
図49　Ｂライン　断面図（1/３）



1．10YR4/1褐灰 粗砂～小礫混シルト～細砂〔表土層〕
62．2.5Y6/6明黄褐 粗砂～小礫混シルト～細砂
63．2.5Y6/2灰黄 粗砂～小礫混シルト
（中砂～粗砂のブロックを含む　拳大までの礫を含む）
64．2.5Y6/2灰黄 小礫混シルト
65．2.5Y7/4浅黄 粗砂～小礫混シルト
66．2.5Y6/4にぶい黄 小礫混シルト～極細砂
67．2.5Y7/4浅黄 小礫混シルト～極細砂（２～３㎝大の礫を少し含む）
68．2.5Y6/3にぶい黄 粗砂～小礫混シルト～細砂
69．2.5Y6/3にぶい黄 小礫混シルト～極細砂
70．2.5Y6/6明黄褐 小礫を多く含むシルト
71．2.5Y6/3にぶい黄 小礫を非常に多く含むシルト
72．2.5Y6/4にぶい黄 小礫を多く含むシルト～極細砂
73．2.5Y6/4にぶい黄 小礫を非常に多く含むシルト～細砂
74．10YR6/4にぶい黄橙 小礫を多く含むシルト～極細砂
75．10YR5/4にぶい黄褐 小礫を多く含むシルト～極細砂
76．2.5Y6/4にぶい黄 小礫を多く含むシルト～細砂
77．2.5Y5/3黄褐 小礫を多く含むシルト～細砂（３㎝大までの礫を含む）
78．2.5Y5/4黄褐 小礫を非常に多く含むシルト
79．2.5Y5/3黄褐 小礫を多く含むシルト～極細砂
80．2.5Y6/4にぶい黄 小礫を多く含むシルト～細砂（５㎝大までの礫を少し含む）
81．2.5Y6/6明黄褐 小礫を多く含むシルト～細砂
82．2.5Y6/3にぶい黄 小礫混シルト～極細砂
83．10YR6/4にぶい黄橙 小礫を多く含むシルト
84．10YR6/4にぶい黄橙 小礫混粘土（極細砂のブロックを含む）
85．2.5Y6/4にぶい黄 小礫～３㎝大の礫を多く含むシルト
86．2.5Y6/2灰黄 小礫～拳大の礫を多く含むシルト（人頭大までの礫を含む）
87．10YR6/6明黄褐 小礫混シルト～極細砂（５㎝大までの礫を含む）
88．10YR6/8明黄褐 粗砂～小礫を非常に多く含むシルト～中砂（拳大までの礫を多く含む）
89．2.5Y7/6明黄褐 粗砂混シルト～細砂（小礫を少し含む）
90．10YR6/6明黄褐 小礫を非常に多く含むシルト～中砂（拳大までの礫を含む）
91．2.5Y6/4にぶい黄 粗砂～小礫を多く含むシルト～細砂
92．2.5Y7/6明黄褐 粗砂混シルト～極細砂（４㎝大までの礫を含む）
93．10YR6/4にぶい黄橙 粗砂～小礫を多く含むシルト（細砂のブロックを含む　拳大までの礫を含む）
94．2.5Y6/4にぶい黄 粗砂～小礫を多く含むシルト～細砂
95．2.5Y6/3にぶい黄 粗砂～小礫を多く含むシルト～中砂（シルトのブロックを含む　拳大までの礫を含む）
96．2.5Y6/3にぶい黄 粗砂～小礫・拳大までの礫を多く含むシルト
97．2.5Y6/2灰黄 粗砂～小礫を非常に多く含むシルト～中砂（拳大～人頭大の礫を含む）
98．2.5Y6/2灰黄 小礫～４㎝大の礫を多く含むシルト
99．2.5Y6/6明黄褐 小礫～５㎝大の礫を非常に多く含むシルト～細砂
100．10YR6/3にぶい黄橙 小礫～３㎝大の礫を非常に多く含むシルト
101．2.5Y6/4にぶい黄 小礫～５㎝大の礫を非常に多く含むシルト～極細砂（拳大までの礫を含む）
102．2.5Y7/4浅黄 小礫を多く含むシルト～中砂（３㎝大までの礫を少し含む）
103．2.5Y6/6明黄褐 粗砂～小礫を非常に多く含むシルト～中砂
104．2.5Y6/3にぶい黄 粗砂～小礫を非常に多く含むシルト～細砂
105．2.5Y6/4にぶい黄 小礫混極細砂～細砂（３㎝大までの礫を少し含む）
106．2.5Y6/4にぶい黄 小礫～４㎝大の礫を多く含むシルト～細砂
（拳大までの礫を少し含む）
107．10YR6/4にぶい黄橙 小礫～３㎝大の礫を多く含むシルト
108．2.5Y6/6明黄褐 小礫を多く含むシルト～中砂（５㎝大までの礫を少し含む）
109．10YR6/4にぶい黄橙 小礫を非常に多く含むシルト（５㎝大までの礫を含む）
110．2.5Y5/2暗灰黄 小礫混シルト～極細砂（拳大までの礫を少し含む）
111．2.5Y6/4にぶい黄 小礫～３㎝大の礫を多く含むシルト～細砂
112．2.5Y6/3にぶい黄 小礫を非常に多く含むシルト～細砂
113．2.5Y6/2灰黄 粗砂～小礫を非常に多く含む細砂
114．2.5Y6/3にぶい黄 小礫混シルト（３㎝大までの礫を含む）
115．2.5Y6/3にぶい黄 粗砂～小礫を多く含むシルト～極細砂
116．2.5Y6/4にぶい黄 小礫～３㎝大の礫を非常に多く含むシルト～細砂（人頭大までの礫を少し含む）
117．2.5Y6/4にぶい黄 小礫～５㎝大の礫を非常に多く含むシルト～細砂（人頭大までの礫を含む）
118．2.5Y6/3にぶい黄 小礫～３㎝大の礫を非常に多く含むシルト～中砂
119．2.5Y7/6明黄褐 粗砂～小礫を非常に多く含むシルト～極細砂
（３㎝大までの礫を含む　人頭大までの礫を少し含む）
120．2.5Y6/3にぶい黄 粗砂～小礫・拳大までの礫を多く含むシルト
121．2.5Y7/4浅黄 小礫を非常に多く含むシルト～中砂（５㎝大までの礫を含む）
122．2.5Y6/6明黄褐 粗砂～小礫・３㎝大までの礫を非常に多く含むシルト～細砂
123．2.5Y7/2灰黄 粗砂～小礫を非常に多く含むシルト～細砂（５㎝大までの礫を含む）
124．10YR6/4にぶい黄橙 小礫混シルト～極細砂（４㎝大までの礫を少し含む）
125．2.5Y6/4にぶい黄 粗砂～小礫を非常に多く含むシルト～中砂（５㎝大までの礫を少し含む）
126．2.5Y7/6明黄褐 ３㎝大までの礫を多く含むシルト
127．10YR7/4にぶい黄橙 ３㎝大までの礫を非常に多く含むシルト
128．2.5Y7/2灰黄 粗砂～小礫を非常に多く含むシルト～中砂（５㎝大までの礫を含む）
129．2.5Y8/4淡黄 粗砂～小礫混粘土～シルト
130．2.5Y7/4浅黄 粗砂～小礫を多く含むシルト
131．2.5Y6/4にぶい黄 小礫を非常に多く含むシルト～細砂
132．2.5Y7/4浅黄 粗砂～小礫混シルト～極細砂
133．2.5Y6/4にぶい黄 粗砂～小礫・４㎝大までの礫を非常に多く含むシルト～中砂
134．2.5Y6/4にぶい黄 小礫～３㎝大の礫を非常に多く含むシルト～細砂
135．2.5Y7/3浅黄 小礫混極細砂
136．2.5Y6/3にぶい黄 小礫を多く含む細砂
137．2.5Y6/6明黄褐 小礫混シルト～細砂
138．2.5Y6/6明黄褐 小礫を多く含むシルト～中砂
139．2.5Y6/3にぶい黄 小礫を多く含むシルト～中砂
140．2.5Y5/2暗灰黄 小礫を多く含むシルト～細砂
141．2.5Y5/2暗灰黄 小礫混シルト
142．2.5Y7/4浅黄 小礫を多く含むシルト～極細砂
143．10YR5/1褐灰 小礫を多く含むシルト～極細砂
144．10YR4/1褐灰 小礫混シルト
145．2.5Y6/4にぶい黄 小礫混シルト～極細砂
146．2.5Y5/3黄褐 小礫を多く含むシルト～極細砂（2.5Y5/1黄灰 シルトのブロックを含む）
147．2.5Y6/4にぶい黄 小礫～３㎝大の礫を多く含むシルト（拳大までの礫を少し含む）
148．2.5Y6/3にぶい黄 小礫を多く含むシルト～中砂
149．2.5Y6/3にぶい黄 粗砂～小礫・３㎝大までの礫を多く含むシルト（拳大までの礫を少し含む）
150．2.5Y6/4にぶい黄 小礫を多く含むシルト～極細砂
151．2.5Y7/3浅黄 小礫～３㎝大の礫を多く含むシルト～極細砂
152．2.5Y6/4にぶい黄 小礫～５㎝大の礫を多く含むシルト～極細砂（拳大までの礫を少し含む）
153．2.5Y6/4にぶい黄 小礫～拳大の礫を多く含むシルト～極細砂

※ 断面位置は図５・48

図50　Bライン　断面図（2/３）

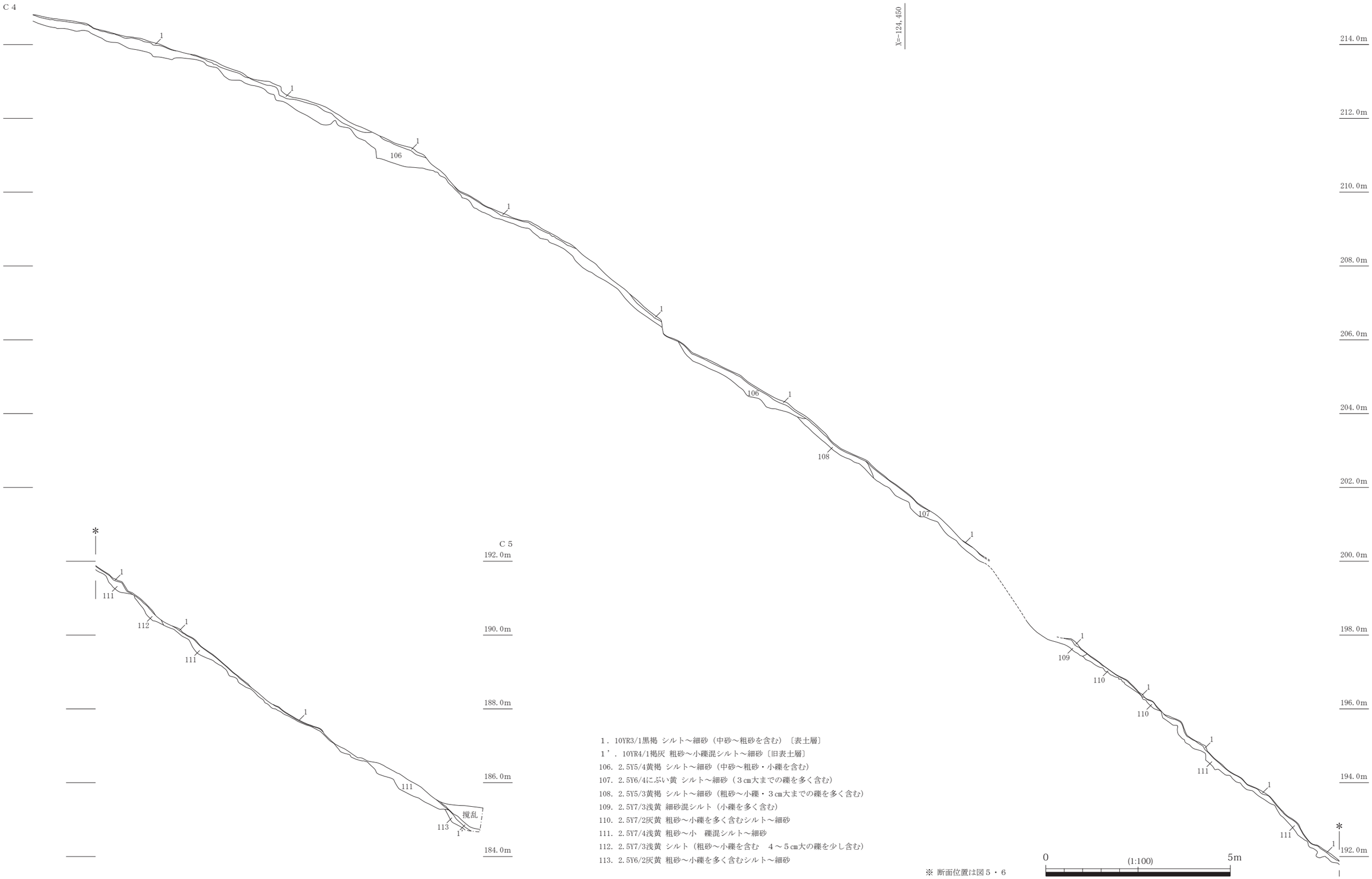


１．10YR4/1褐灰 粗砂～小礫混シルト～細砂〔表土層〕
154．2.5Y6/2灰黄 小礫～３㎝大の礫を非常に多く含むシルト～中砂
155．2.5Y6/3にぶい黄 小礫を多く含むシルト～中砂
156．2.5Y7/4浅黄 小礫～３㎝大の礫とシルト～細砂が混じる
157．2.5Y6/4にぶい黄 小礫～５㎝大の礫を多く含むシルト～中砂
158．2.5Y5/3黄褐 小礫を非常に多く含むシルト～細砂
159．2.5Y6/4にぶい黄 小礫～３㎝大の礫を非常に多く含むシルト～中砂
160．2.5Y7/4浅黄 小礫～３㎝大の礫とシルト～細砂が混じる
161．10YR6/4にぶい黄橙 小礫～５㎝大の礫を非常に多く含むシルト
（拳大までの礫を含む）
162．10YR7/4にぶい黄橙 小礫～３㎝大の礫とシルト～細砂が混じる
163．2.5Y5/3黄褐 小礫～５㎝大の礫を非常に多く含むシルト～細砂
（拳大までの礫を含む）
164．2.5Y7/4浅黄 小礫～５㎝大の礫とシルト～極細砂が混じる
165．2.5Y5/2暗灰黄 小礫～３㎝大の礫を多く含むシルト～細砂
166．2.5Y6/3にぶい黄 租砂～小礫を多く含む細砂
167．2.5Y5/3黄褐 粗砂～小礫を多く含むシルト～中砂
168．2.5Y5/4黄褐 粗砂～小礫・３㎝大までの礫を多く含む極細砂～細砂
（拳大の礫を少し含む）
169．2.5Y5/1黄灰 粗砂～小礫・３㎝大までの礫を多く含むシルト～細砂
170．2.5Y6/1黄灰 粗砂～小礫・３㎝大までの礫を多く含むシルト～細砂
171．2.5Y6/2灰黄 粗砂～小礫を非常に多く含む細砂（５㎝大までの礫を含む）
172．2.5Y6/2灰黄 粗砂～小礫混細砂
173．2.5Y5/3黄褐 粗砂～小礫・３㎝大までの礫を多く含むシルト～中砂
174．2.5Y6/2灰黄 粗砂～小礫と2.5Y6/4にぶい黄 細砂がラミナ状に互層になっている
175．2.5Y6/3にぶい黄 粗砂～小礫・３㎝大までの礫を非常に多く含むシルト～細砂
176．2.5Y6/2灰黄 粗砂～小礫を非常に多く含む細砂～中砂
177．2.5Y6/1黄灰 小礫を多く含むシルト～極細砂
178．2.5Y6/2灰黄 小礫混シルト～細砂（拳大までの礫を少し含む）
179．2.5Y4/1黄灰 小礫混シルト～極細砂
180．2.5Y4/3オリーブ褐 小礫混シルト～細砂
181．2.5Y6/3にぶい黄 粗砂～小礫混シルト～極細砂
182．2.5Y5/3黄褐 小礫混シルト～細砂（拳大までの礫を少し含む）
183．2.5Y5/3黄褐 小礫～拳大の礫を多く含むシルト～細砂
184．2.5Y5/2暗灰黄 粗砂～小礫・人頭大までの礫を多く含むシルト～中砂
185．5Y4/1灰 小礫を非常に多く含むシルト
186．2.5Y7/2灰黄 小礫～人頭大の礫を多く含むシルト～極細砂
187．2.5Y5/2暗灰黄 粗砂～小礫・３㎝大までの礫を非常に多く含む細砂～中砂
188．10YR5/3にぶい黄褐 粗砂～小礫・５㎝大までの礫を非常に多く含むシルト～中砂
（拳大までの礫を含む）
189．10YR5/2灰黄褐 粗砂～小礫・５㎝大までの礫を非常に多く含む細砂～中砂
190．2.5Y6/1黄灰 粗砂～小礫・拳大までの礫を非常に多く含むシルト～細砂
（人頭大までの礫を含む）
191．5Y6/1灰 粗砂～小礫を多く含むシルト
192．10YR6/3にぶい黄橙 シルト混粗砂～小礫
193．2.5Y6/2灰黄 粗砂～小礫・３㎝大までの礫を多く含むシルト～中砂
194．2.5Y5/2暗灰黄 粗砂～小礫・３㎝大までの礫を多く含むシルト～細砂
195．2.5Y5/1黄灰 粗砂～小礫・３㎝大までの礫を
非常に多く含むシルト～細砂
196．2.5Y7/4浅黄 小礫～３㎝大の礫を多く含むシルト～極細砂
197．2.5Y7/4浅黄 粗砂～小礫を多く含むシルト～細砂
（拳大までの礫を含む）
198．2.5Y6/6明黄褐 小礫～５㎝大の礫を多く含むシルト～極細砂
（人頭大までの礫を含む）
199．2.5Y6/3にぶい黄 粗砂～小礫を非常に多く含むシルト～中砂
200．2.5Y6/1黄灰 シルト混粗砂～小礫（拳大までの礫を少し含む）
201．5Y5/1灰 シルト混粗砂～小礫
202．5Y6/1灰 粗砂～小礫混シルト～極細砂
203．10YR6/6明黄褐 粗砂～小礫を多く含むシルト～中砂
（５㎝大までの礫を含む）
204．5Y6/3オリーブ黄 粗砂～小礫を多く含むシルト～細砂
205．5Y5/1灰 粗砂～小礫を多く含むシルト
206．2.5Y6/4にぶい黄 小礫を多く含むシルト～中砂
（５㎝大までの礫を含む）
207．2.5Y6/2灰黄 小礫～拳大の礫を非常に多く含むシルト～細砂
208．5Y6/1灰 粗砂～小礫を多く含むシルト
209．5Y6/2灰オリーブ 粗砂～小礫混極細砂～細砂
210．2.5Y6/2灰黄 拳大までの礫を非常に多く含むシルト～細砂
211．7.5Y7/1灰白 ３㎝大までの礫を多く含むシルト
212．10YR5/6黄褐 小礫～拳大の礫を多く含む細砂
213．5Y6/2灰オリーブ 小礫～拳大の礫とシルト～極細砂が混じる
214．7.5Y6/1灰 粗砂～小礫を非常に多く含む細砂
（人頭大までの礫を少し含む）
215．5Y6/2灰オリーブ 小礫～３㎝大の礫を多く含むシルト～極細砂
（拳大までの礫を少し含む）
216．2.5Y6/4にぶい黄 小礫～拳大の礫を非常に多く含むシルト～中砂
217．5Y7/2灰白 粗砂～小礫・拳大までの礫とシルト～極細砂が混じる
218．5Y6/2灰オリーブ 粗砂～小礫とシルト～極細砂が混じる
219．2.5Y6/2灰黄 小礫混粘土～シルト（拳大までの礫を少し含む）
220．2.5Y6/2灰黄 小礫を非常に多く含むシルト～極細砂
221．5Y5/1灰 小礫～５㎝大の礫を非常に多く含むシルト
222．5Y5/2灰オリーブ 小礫を非常に多く含むシルト
（５㎝大までの礫を少し含む）
223．2.5Y6/1黄灰 小礫を多く含むシルト～極細砂
224．5Y6/3オリーブ黄 人頭大までの礫を多く含むシルト～中砂
225．5Y6/2灰オリーブ 粗砂～小礫とシルトが混じる
226．5Y6/1灰 小礫混シルト
227．2.5Y7/3浅黄 粗砂～小礫を非常に多く含むシルト
228．5Y6/2灰オリーブ 粗砂～小礫を非常に多く含むシルト～中砂

※ 断面位置は図５・48

0　(1:100)　5m

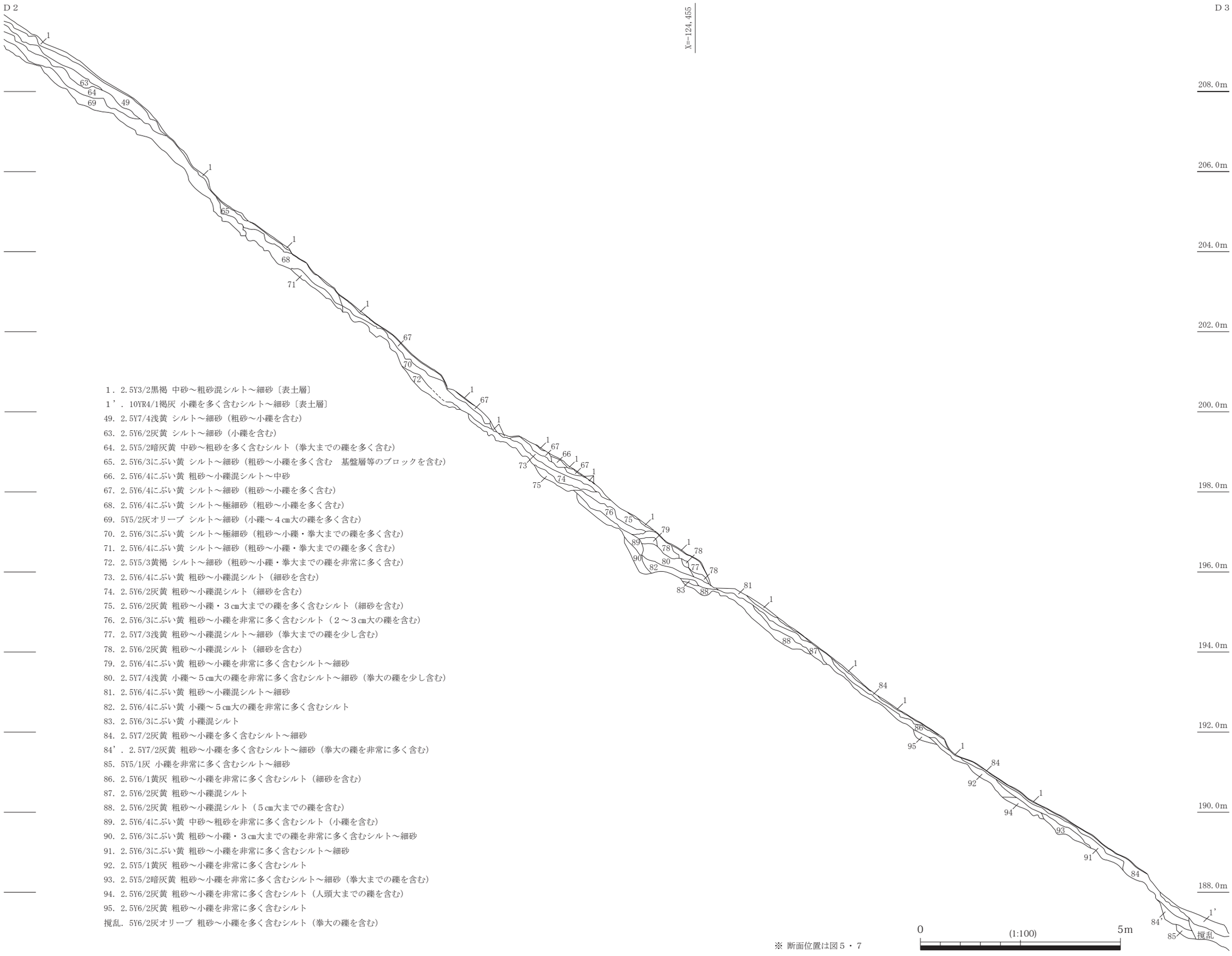
図51　Ｂライン　断面図（3/ 3）



1．10YR3/1黒褐 シルト～細砂（中砂～粗砂を含む）〔表土層〕
1’．10YR4/1褐灰 粗砂～小礫混シルト～細砂〔旧表土層〕
106．2.5Y5/4黄褐 シルト～細砂（中砂～粗砂・小礫を含む）
107．2.5Y6/4にぶい黄 シルト～細砂（３㎝大までの礫を多く含む）
108．2.5Y5/3黄褐 シルト～細砂（粗砂～小礫・３㎝大までの礫を多く含む）
109．2.5Y7/3浅黄 細砂混シルト（小礫を多く含む）
110．2.5Y7/2灰黄 粗砂～小礫を多く含むシルト～細砂
111．2.5Y7/4浅黄 粗砂～小　礫混シルト～細砂
112．2.5Y7/3浅黄 シルト（粗砂～小礫を含む　４～５㎝大の礫を少し含む）
113．2.5Y6/2灰黄 粗砂～小礫を多く含むシルト～細砂

※ 断面位置は図５・６

図 52　Ｃライン　断面図

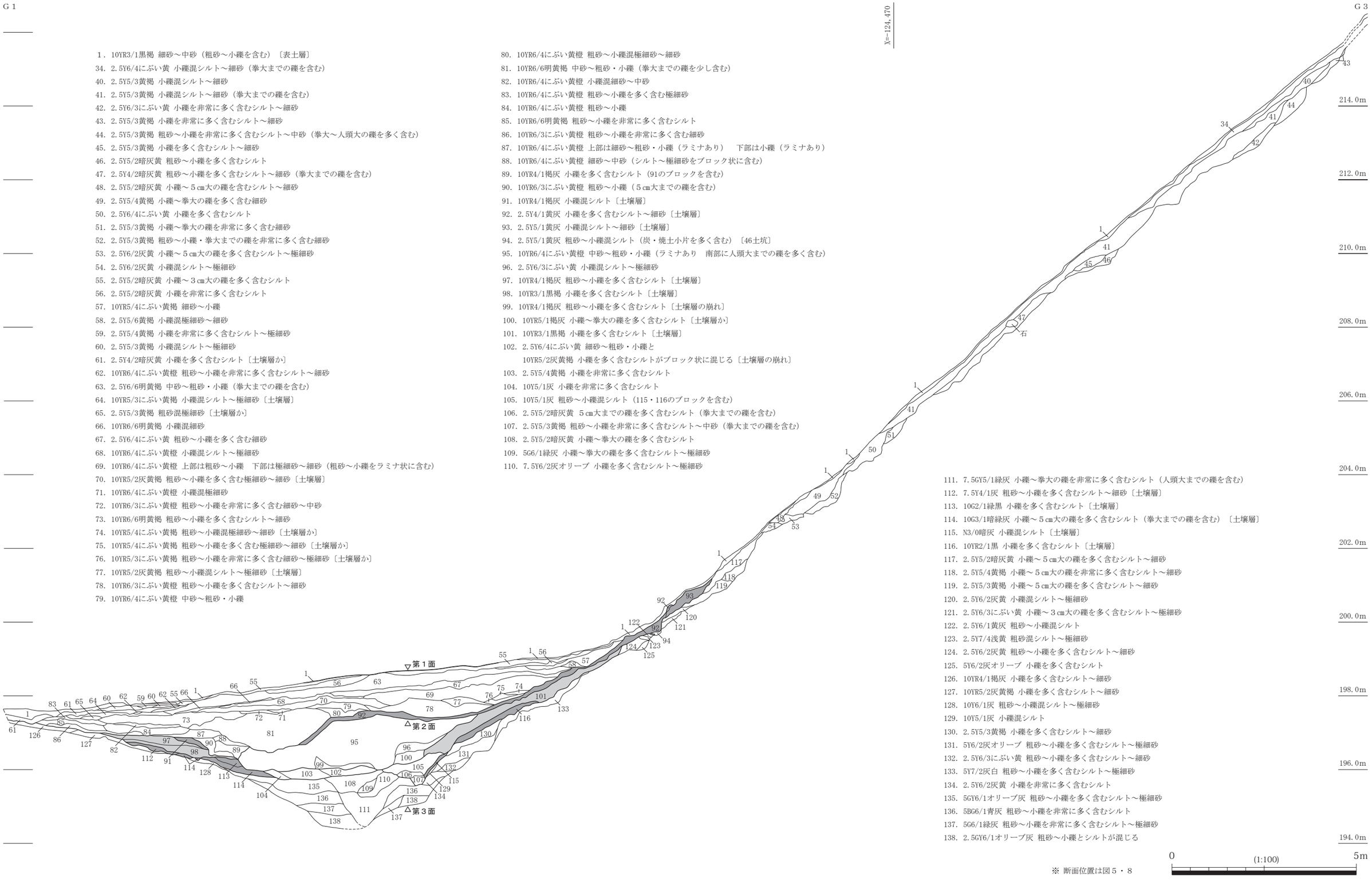


１．2.5Y3/2黒褐 中砂～粗砂混シルト～細砂〔表土層〕
１’．10YR4/1褐灰 小礫を多く含むシルト～細砂〔表土層〕
49．2.5Y7/4浅黄 シルト～細砂（粗砂～小礫を含む）
63．2.5Y6/2灰黄 シルト～細砂（小礫を含む）
64．2.5Y5/2暗灰黄 中砂～粗砂を多く含むシルト（拳大までの礫を多く含む）
65．2.5Y6/3にぶい黄 シルト～細砂（粗砂～小礫を多く含む　基盤層等のブロックを含む）
66．2.5Y6/4にぶい黄 粗砂～小礫混シルト～中砂
67．2.5Y6/4にぶい黄 シルト～細砂（粗砂～小礫を多く含む）
68．2.5Y6/4にぶい黄 シルト～極細砂（粗砂～小礫を多く含む）
69．5Y5/2灰オリーブ シルト～細砂（小礫～４㎝大の礫を多く含む）
70．2.5Y6/3にぶい黄 シルト～極細砂（粗砂～小礫・拳大までの礫を多く含む）
71．2.5Y6/4にぶい黄 シルト～細砂（粗砂～小礫・拳大までの礫を多く含む）
72．2.5Y5/3黄褐 シルト～細砂（粗砂～小礫・拳大までの礫を非常に多く含む）
73．2.5Y6/4にぶい黄 粗砂～小礫混シルト（細砂を含む）
74．2.5Y6/2灰黄 粗砂～小礫混シルト（細砂を含む）
75．2.5Y6/2灰黄 粗砂～小礫・３㎝大までの礫を多く含むシルト（細砂を含む）
76．2.5Y6/3にぶい黄 粗砂～小礫を非常に多く含むシルト（２～３㎝大の礫を含む）
77．2.5Y7/3浅黄 粗砂～小礫混シルト～細砂（拳大までの礫を少し含む）
78．2.5Y6/2灰黄 粗砂～小礫混シルト（細砂を含む）
79．2.5Y6/4にぶい黄 粗砂～小礫を非常に多く含むシルト～細砂
80．2.5Y7/4浅黄 小礫～５㎝大の礫を非常に多く含むシルト～細砂（拳大の礫を少し含む）
81．2.5Y6/4にぶい黄 粗砂～小礫混シルト～細砂
82．2.5Y6/4にぶい黄 小礫～５㎝大の礫を非常に多く含むシルト
83．2.5Y6/3にぶい黄 小礫混シルト
84．2.5Y7/2灰黄 粗砂～小礫を多く含むシルト～細砂
84’．2.5Y7/2灰黄 粗砂～小礫を多く含むシルト～細砂（拳大の礫を非常に多く含む）
85．5Y5/1灰 小礫を非常に多く含むシルト～細砂
86．2.5Y6/1黄灰 粗砂～小礫を非常に多く含むシルト（細砂を含む）
87．2.5Y6/2灰黄 粗砂～小礫混シルト
88．2.5Y6/2灰黄 粗砂～小礫混シルト（５㎝大までの礫を含む）
89．2.5Y6/4にぶい黄 中砂～粗砂を非常に多く含むシルト（小礫を含む）
90．2.5Y6/3にぶい黄 粗砂～小礫・３㎝大までの礫を非常に多く含むシルト～細砂
91．2.5Y6/3にぶい黄 粗砂～小礫を非常に多く含むシルト～細砂
92．2.5Y5/1黄灰 粗砂～小礫を非常に多く含むシルト
93．2.5Y5/2暗灰黄 粗砂～小礫を非常に多く含むシルト～細砂（拳大までの礫を含む）
94．2.5Y6/2灰黄 粗砂～小礫を非常に多く含むシルト（人頭大までの礫を含む）
95．2.5Y6/2灰黄 粗砂～小礫を非常に多く含むシルト
撹乱．5Y6/2灰オリーブ 粗砂～小礫を多く含むシルト（拳大の礫を含む）

図 53　Dライン　断面図

G 1

1．10YR3/1黒褐 細砂～中砂（粗砂～小礫を含む）〔表土層〕
34．2.5Y6/4にぶい黄 小礫混シルト～細砂（拳大までの礫を含む）
40．2.5Y5/3黄褐 小礫混シルト～細砂
41．2.5Y5/3黄褐 小礫混シルト～細砂（拳大までの礫を含む）
42．2.5Y6/3にぶい黄 小礫を非常に多く含むシルト～細砂
43．2.5Y5/3黄褐 小礫を非常に多く含むシルト～細砂
44．2.5Y5/3黄褐 粗砂～小礫を非常に多く含むシルト～中砂（拳大～人頭大の礫を多く含む）
45．2.5Y5/3黄褐 小礫を多く含むシルト～細砂
46．2.5Y5/2暗灰黄 粗砂～小礫を多く含むシルト
47．2.5Y4/2暗灰黄 粗砂～小礫を多く含むシルト～細砂（拳大までの礫を含む）
48．2.5Y5/2暗灰黄 小礫～５㎝大の礫を含むシルト～細砂
49．2.5Y5/4黄褐 小礫～拳大の礫を多く含む細砂
50．2.5Y6/4にぶい黄 小礫を多く含むシルト
51．2.5Y5/3黄褐 小礫～拳大の礫を非常に多く含む細砂
52．2.5Y5/3黄褐 粗砂～小礫・拳大までの礫を非常に多く含む細砂
53．2.5Y6/2灰黄 小礫～５㎝大の礫を多く含むシルト～極細砂
54．2.5Y6/2灰黄 小礫混シルト～極細砂
55．2.5Y5/2暗灰黄 小礫～３㎝大の礫を多く含むシルト
56．2.5Y5/2暗灰黄 小礫を非常に多く含むシルト
57．10YR5/4にぶい黄褐 細砂～小礫
58．2.5Y5/6黄褐 小礫混極細砂～細砂
59．2.5Y5/4黄褐 小礫を非常に多く含むシルト～極細砂
60．2.5Y5/3黄褐 小礫混シルト～極細砂
61．2.5Y4/2暗灰黄 小礫を多く含むシルト〔土壌層か〕
62．10YR6/4にぶい黄橙 粗砂～小礫を非常に多く含むシルト～細砂
63．2.5Y6/6明黄褐 中砂～粗砂・小礫（拳大までの礫を含む）
64．10YR5/3にぶい黄褐 小礫混シルト～極細砂〔土壌層〕
65．2.5Y5/3黄褐 粗砂混極細砂〔土壌層か〕
66．10YR6/6明黄褐 小礫混細砂
67．2.5Y6/4にぶい黄 粗砂～小礫を多く含む細砂
68．10YR6/4にぶい黄橙 小礫混シルト～極細砂
69．10YR6/4にぶい黄橙 上部は粗砂～小礫　下部は極細砂～細砂（粗砂～小礫をラミナ状に含む）
70．10YR5/2灰黄褐 粗砂～小礫を多く含む極細砂～細砂〔土壌層〕
71．10YR6/4にぶい黄橙 小礫混極細砂
72．10YR6/3にぶい黄橙 粗砂～小礫を非常に多く含む細砂～中砂
73．10YR6/6明黄褐 粗砂～小礫を多く含むシルト～細砂
74．10YR5/4にぶい黄褐 粗砂～小礫混極細砂～細砂〔土壌層か〕
75．10YR5/4にぶい黄褐 粗砂～小礫を多く含む極細砂～細砂〔土壌層か〕
76．10YR5/3にぶい黄褐 粗砂～小礫を非常に多く含む細砂～極細砂〔土壌層か〕
77．10YR5/2灰黄褐 粗砂～小礫混シルト～極細砂〔土壌層〕
78．10YR6/3にぶい黄橙 粗砂～小礫を多く含むシルト～細砂
79．10YR6/4にぶい黄橙 中砂～粗砂・小礫
80．10YR6/4にぶい黄橙 粗砂～小礫混極細砂～細砂
81．10YR6/6明黄褐 中砂～粗砂・小礫（拳大までの礫を少し含む）
82．10YR6/4にぶい黄橙 小礫混細砂～中砂
83．10YR6/4にぶい黄橙 粗砂～小礫を多く含む極細砂
84．10YR6/4にぶい黄橙 粗砂～小礫
85．10YR6/6明黄褐 粗砂～小礫を非常に多く含むシルト
86．10YR6/3にぶい黄橙 粗砂～小礫を非常に多く含む細砂
87．10YR6/4にぶい黄橙 上部は細砂～粗砂・小礫（ラミナあり）　下部は小礫（ラミナあり）
88．10YR6/4にぶい黄橙 細砂～中砂（シルト～極細砂をブロック状に含む）
89．10YR4/1褐灰 小礫を多く含むシルト（91のブロックを含む）
90．10YR6/3にぶい黄橙 粗砂～小礫（５㎝大までの礫を含む）
91．10YR4/1褐灰 小礫混シルト〔土壌層〕
92．2.5Y4/1黄灰 小礫を多く含むシルト～細砂〔土壌層〕
93．2.5Y5/1黄灰 小礫混シルト～細砂〔土壌層〕
94．2.5Y5/1黄灰 粗砂～小礫混シルト（炭・焼土小片を多く含む）〔46土坑〕
95．10YR6/4にぶい黄橙 中砂～粗砂・小礫（ラミナあり　南部に人頭大までの礫を多く含む）
96．2.5Y6/3にぶい黄 小礫混シルト～極細砂
97．10YR4/1褐灰 粗砂～小礫を多く含むシルト〔土壌層〕
98．10YR3/1黒褐 小礫を多く含むシルト〔土壌層〕
99．10YR4/1褐灰 粗砂～小礫を多く含むシルト〔土壌層の崩れ〕
100．10YR5/1褐灰 小礫～拳大の礫を多く含むシルト〔土壌層か〕
101．10YR3/1黒褐 小礫を多く含むシルト〔土壌層〕
102．2.5Y6/4にぶい黄 細砂～粗砂・小礫と
　　10YR5/2灰黄褐 小礫を多く含むシルトがブロック状に混じる〔土壌層の崩れ〕
103．2.5Y5/4黄褐 小礫を非常に多く含むシルト
104．10Y5/1灰 小礫を非常に多く含むシルト
105．10Y5/1灰 粗砂～小礫混シルト（115・116のブロックを含む）
106．2.5Y5/2暗灰黄 ５㎝大までの礫を多く含むシルト（拳大までの礫を含む）
107．2.5Y5/3黄褐 粗砂～小礫を非常に多く含むシルト～中砂（拳大までの礫を含む）
108．2.5Y5/2暗灰黄 小礫～拳大の礫を多く含むシルト
109．5G6/1緑灰 小礫～拳大の礫を多く含むシルト～極細砂
110．7.5Y6/2灰オリーブ 小礫を多く含むシルト～極細砂
111．7.5GY5/1緑灰 小礫～拳大の礫を非常に多く含むシルト（人頭大までの礫を含む）
112．7.5Y4/1灰 粗砂～小礫を多く含むシルト～細砂〔土壌層〕
113．10G2/1緑黒 小礫を多く含むシルト〔土壌層〕
114．10G3/1暗緑灰 小礫～５㎝大の礫を多く含むシルト（拳大までの礫を含む）〔土壌層〕
115．N3/0暗灰 小礫混シルト〔土壌層〕
116．10YR2/1黒 小礫を多く含むシルト〔土壌層〕
117．2.5Y5/2暗灰黄 小礫～５㎝大の礫を多く含むシルト～細砂
118．2.5Y5/4黄褐 小礫～５㎝大の礫を非常に多く含むシルト～細砂
119．2.5Y5/3黄褐 小礫～５㎝大の礫を多く含むシルト～細砂
120．2.5Y6/2灰黄 小礫混シルト～極細砂
121．2.5Y6/3にぶい黄 小礫～３㎝大の礫を多く含むシルト～極細砂
122．2.5Y6/1黄灰 粗砂～小礫混シルト
123．2.5Y7/4浅黄 粗砂混シルト～極細砂
124．2.5Y6/2灰黄 粗砂～小礫を多く含むシルト～細砂
125．5Y6/2灰オリーブ 小礫を多く含むシルト
126．10YR4/1褐灰 小礫を多く含むシルト～細砂
127．10YR5/2灰黄褐 小礫を多く含むシルト～細砂
128．10Y6/1灰 粗砂～小礫混シルト～極細砂
129．10Y5/1灰 小礫混シルト
130．2.5Y5/3黄褐 小礫を多く含むシルト～細砂
131．5Y6/2灰オリーブ 粗砂～小礫を多く含むシルト～極細砂
132．2.5Y6/3にぶい黄 粗砂～小礫を多く含むシルト～細砂
133．5Y7/2灰白 粗砂～小礫を多く含むシルト～極細砂
134．2.5Y6/2灰黄 小礫を非常に多く含むシルト
135．5GY6/1オリーブ灰 粗砂～小礫を多く含むシルト～極細砂
136．5BG6/1青灰 粗砂～小礫を非常に多く含むシルト
137．5G6/1緑灰 粗砂～小礫を非常に多く含むシルト～極細砂
138．2.5GY6/1オリーブ灰 粗砂～小礫とシルトが混じる



※ 断面位置は図５・８

図 54　Gライン　断面図

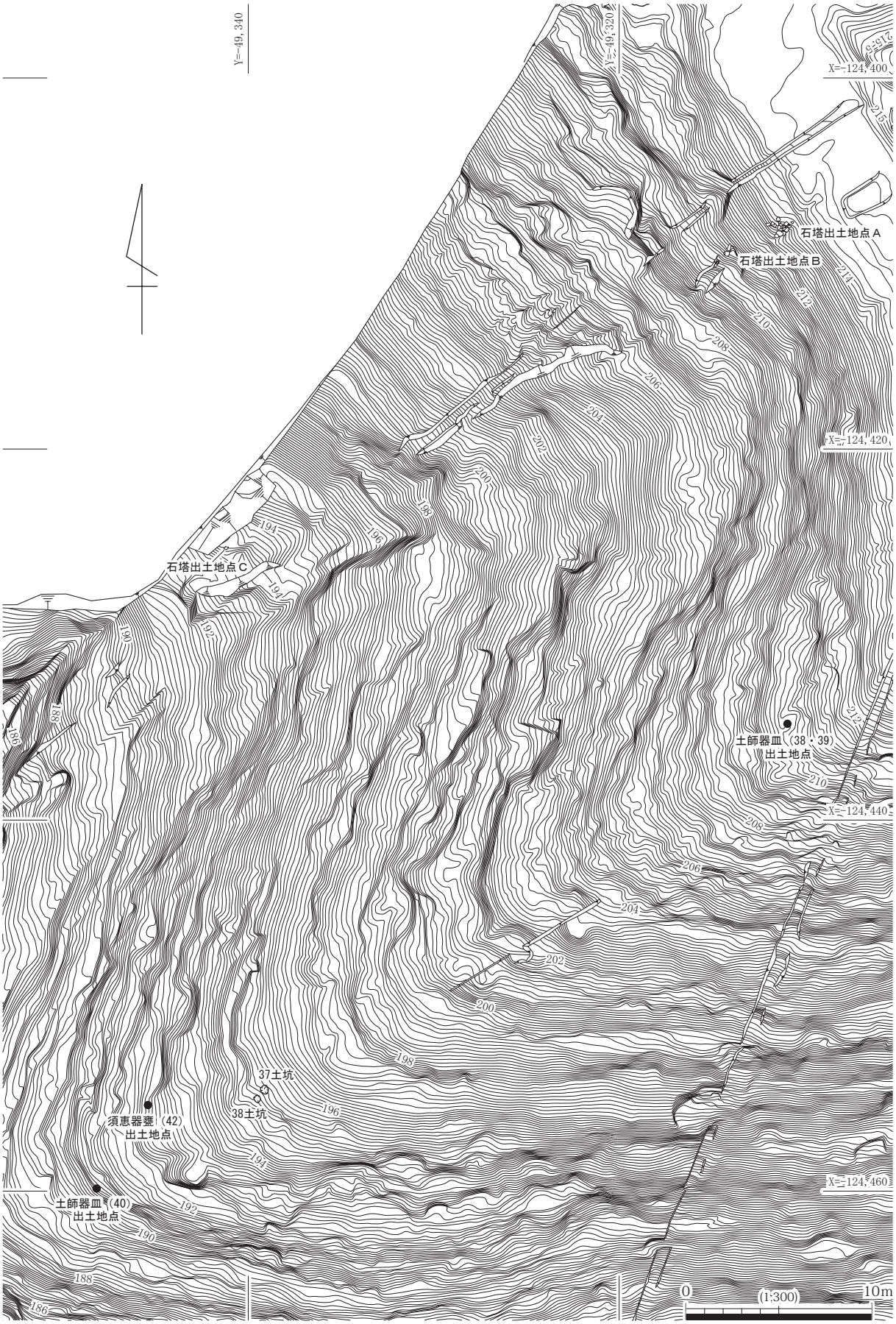


図 55　南面斜面部（西部）　平面図

交して直線状にのびる。検出長約28.0ｍ、基部の幅は約１ .0ｍ、高さは約0.5ｍである。

山頂棚田部において、第１面棚田１の南縁畦畔と接続していることから、第１面棚田造成以降のものと考えられる。断面からは、斜面流出土と思われる層群の上に盛土を施して築かれていることがわかる。

盛土層から遺物は出土していない。

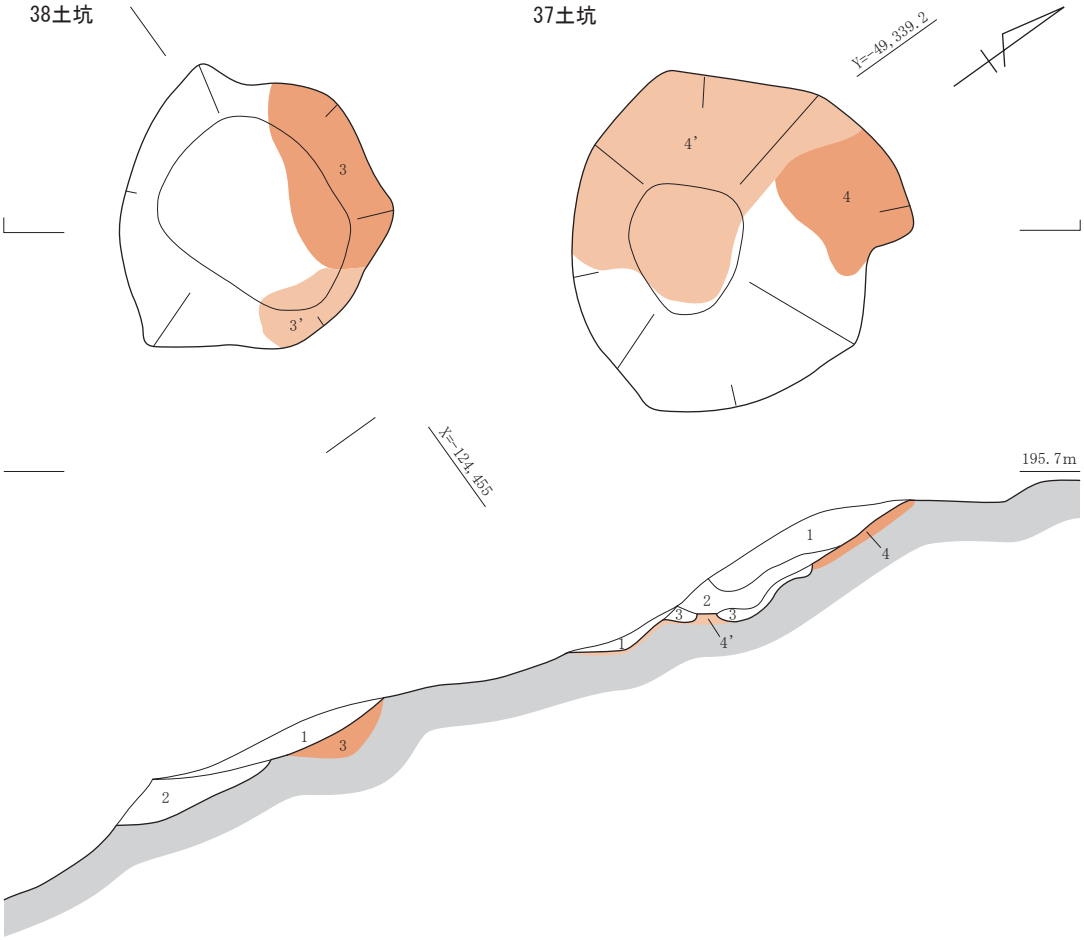
37土坑（図55・56　図版42）

山頂棚田部中央付近から南西方向にのびる、尾根状を呈する斜面部の下位に位置する。不整な円形で、径約0.5ｍ、深さ約0.1ｍである。北西部の基盤層が褐色化しているのが認められ、被熱していると思われる。埋土に炭小片を含む。埋土をすべて洗浄したが、遺物は含まれていなかった。

南西側に38土坑が隣接している。

38土坑（図55・56　図版42）

山頂棚田部中央付近から南西方向にのびる、尾根状を呈する斜面部の下位に位置する。不整な円形で、



38土坑

１．10YR6/4にぶい黄橙 小礫混シルト～極細砂
２．2.5Y2/1黒 小礫混シルト～極細砂（炭小片を多く含む）
３．7.5YR6/3にぶい褐 小礫混シルト～極細砂〔基盤層　やや強い被熱痕跡〕
３’．7.5YR6/4にぶい橙 小礫混シルト～極細砂〔基盤層　ごく弱い被熱痕跡〕
基盤層．2.5Y7/4浅黄 小礫混シルト～極細砂（拳大までの礫を含む）

37土坑

１．10YR5/4にぶい黄褐 小礫混シルト～極細砂
（２～３㎝大の礫を少し含む　炭小片を少し含む）
２．10YR4/2灰黄褐 小礫混シルト～極細砂（炭小片を含む）
３．2.5Y4/1黄灰 シルト～極細砂と
2.5Y7/4浅黄 シルト～極細砂が混じる（小礫を含む　炭小片を含む）
４．7.5YR5/3にぶい褐 小礫混シルト～極細砂〔基盤層　やや強い被熱痕跡〕
４’．7.5YR6/2灰褐 小礫混シルト～極細砂〔基盤層　弱い被熱痕跡〕
基盤層．2.5Y7/4浅黄 小礫混シルト～極細砂（拳大までの礫を含む）

0　(1:10)　0.5m

図 56　37・38 土坑　平面・断面図

径約0.4ｍ、深さ0.1ｍ未満である。北東部の基盤層が褐色化しているのが認められ、被熱していると思われる。埋土に炭小片を多く含む。樹種はクリである。埋土をすべて洗浄したが、遺物は含まれていなかった。北東側に37土坑が隣接している。２層検出の炭片について、放射性炭素年代測定を実施した結果、15世紀中葉～17世紀前葉の年代が示されている（第４章第２節）。

石塔出土地点Ａ～Ｃ（図55・57～60　図版40・41・53）

山頂棚田部北西部の第１面棚田８直下の斜面において、石塔類が出土した。Ａ地点では、組合式五輪塔の空風輪（31）、火輪（33・34）、水輪（32）が、40㎝大までの角礫とともにまとまって出土した。そのやや下位にあたるＢ地点で出土したのは、一石五輪塔（36）、石仏（37）である。Ｃ地点は20ｍ程下がった斜面中位で、五輪塔部材の火輪（35）が出土している。

図版41－１でも確認できる通り、Ａ地点は盛土によって造成された棚田８の斜面部にあたっており、石塔類は棚田造成時の盛土内に含まれていたとも考えられる。しかし、Ａ～Ｃの各地点とも、棚田８からの排水路と重複している。石塔出土地点の上方は、棚田から斜面への、溝の開口箇所にあたっている。斜面における排水路は、現況で腐植土が落ち込む窪みとなっていたが、範囲を限定せずに盛土及び盛土流出土の上を落水していたとみられ、明確な輪郭、幅等は把握できなかった。図55の平面図に、基盤層上面まで下刻が及んでいた箇所のみ、その肩を攪乱表記で示している。Ｂ地点下部の短い溝状を呈する箇所や、標高206ｍ地点から200ｍ地点までの落ち肩（西肩は断面観察用トレンチと重複している）がそれで、以下はより幅が広がるようである。

上記のような状況であったことから、盛土及び盛土流出土と溝埋土の区別はできておらず、石塔類出土層の性格について明言することはできない。ただ、Ａ～Ｃの３地点ともに排水路と重複しているのは偶然とも考え難く、棚田造成後に排水路の窪みへ礫とともに石塔類が廃棄された可能性もある。

石仏（37）は、阿弥陀如来座像で、袈裟が垂れ下がった状態を表現している。定印を結ぶ。側面、特に背面の加工は非常に粗雑である。頂部、背面及び下端部の一部は加工せず、円礫面を残す。下部１／３は上部に比べて風化が進んでおらず、一定期間土中に埋まっていたと思われる。

尾根状斜面部出土遺物（図61・62　図版52）

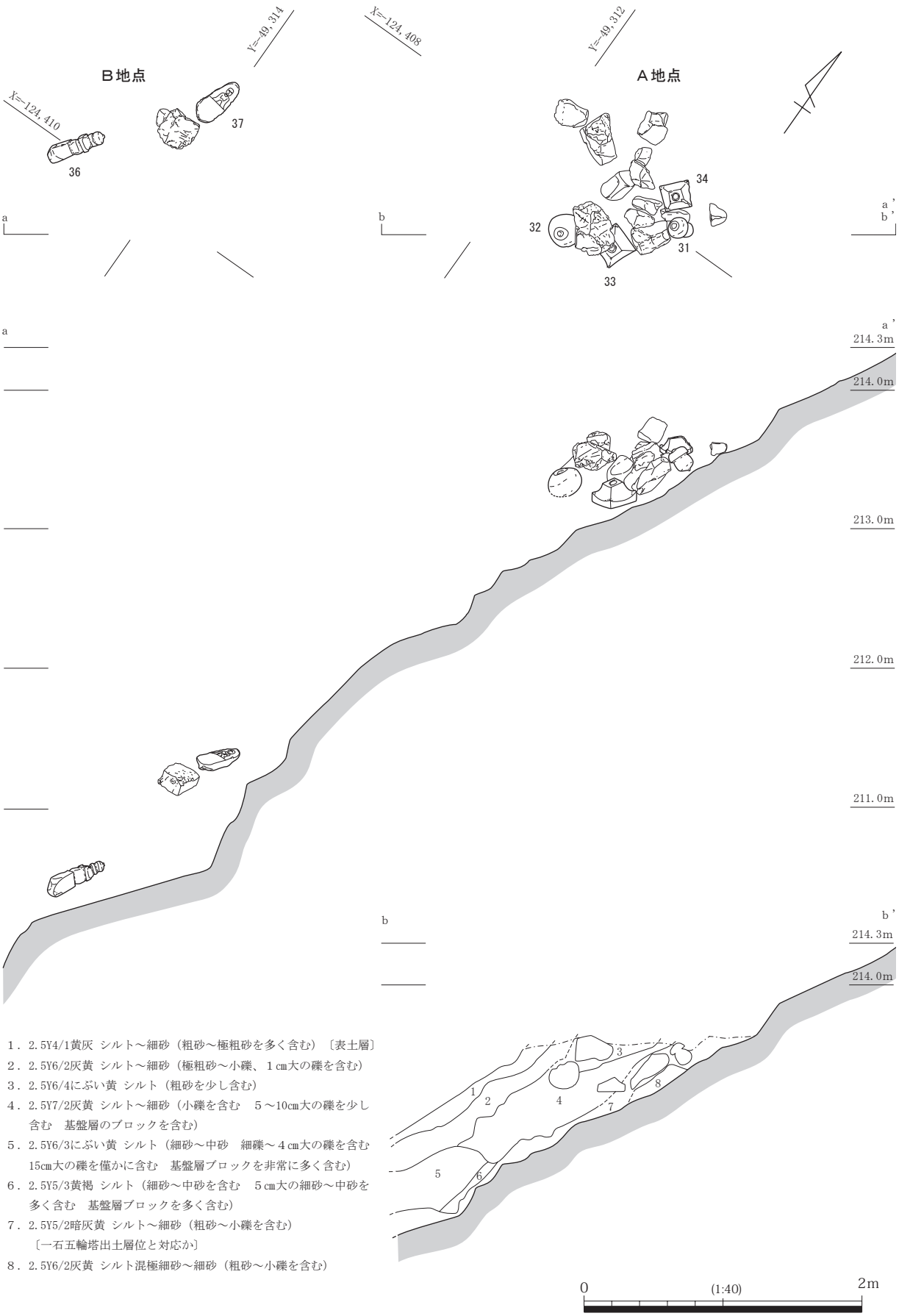
基盤層直上の第１層及び表土層から遺物が出土している。上位では、ほぼ完形の土師器皿２点（38・39）がともに出土した。14世紀後葉～15世紀前葉のものである。中位では、土師器皿片（40）、瓦器椀片（41）、須恵器甕片（42）が出土している。40は13世紀中葉～後葉、41も13世紀のものかと思われる。僅かな小片であるが、この箇所以外で遺物が出土しているのは下記２地点のみである。相対的に傾斜の緩やかなこの尾根筋が、活動地点として選ばれていたことを示している。

斜面中央部出土遺物（図62　図版51）

斜面中位のおおよそ東西15ｍ、南北10ｍの範囲内（L4-8-13O-8･9f）で、表土層から北宋銭３枚、明銭１枚が出土した。至道元寳（49）、祥符元寳（50）、皇宋通寳（51）、永楽通寳（52）である。急傾斜地点であり、山頂から転落したものと思われる。

斜面東部出土遺物（図62　図版52）

斜面上位（L4-8-13O-2g）で、表土層及び斜面堆積層から土器片が出土した。いずれも小片で、図化し得たもの以外に同様な破片が少量ある。47・48は斜面下位出土であるが、位置的にみて上位から転落したとみられる。瓦器椀（43）は12世紀、瓦質土器（44～48）は、鉢・羽釜等で、13世紀以降のものと思われる。器種としてはほかに、土師器皿、回転台土師器皿がある。



１．2.5Y4/1黄灰 シルト～細砂（粗砂～極粗砂を多く含む）〔表土層〕
２．2.5Y6/2灰黄 シルト～細砂（極粗砂～小礫、１㎝大の礫を含む）
３．2.5Y6/4にぶい黄 シルト（粗砂を少し含む）
４．2.5Y7/2灰黄 シルト～細砂（小礫を含む　５～10㎝大の礫を少し含む　基盤層のブロックを含む）
５．2.5Y6/3にぶい黄 シルト（細砂～中砂　細礫～４㎝大の礫を含む　15㎝大の礫を僅かに含む　基盤層ブロックを非常に多く含む）
６．2.5Y5/3黄褐 シルト（細砂～中砂を含む　５㎝大の細砂～中砂を多く含む　基盤層ブロックを多く含む）
７．2.5Y5/2暗灰黄 シルト～細砂（粗砂～小礫を含む）〔一石五輪塔出土層位と対応か〕
８．2.5Y6/2灰黄 シルト混極細砂～細砂（粗砂～小礫を含む）

図 57　石塔出土地点Ａ・Ｂ　平面・立面・断面図

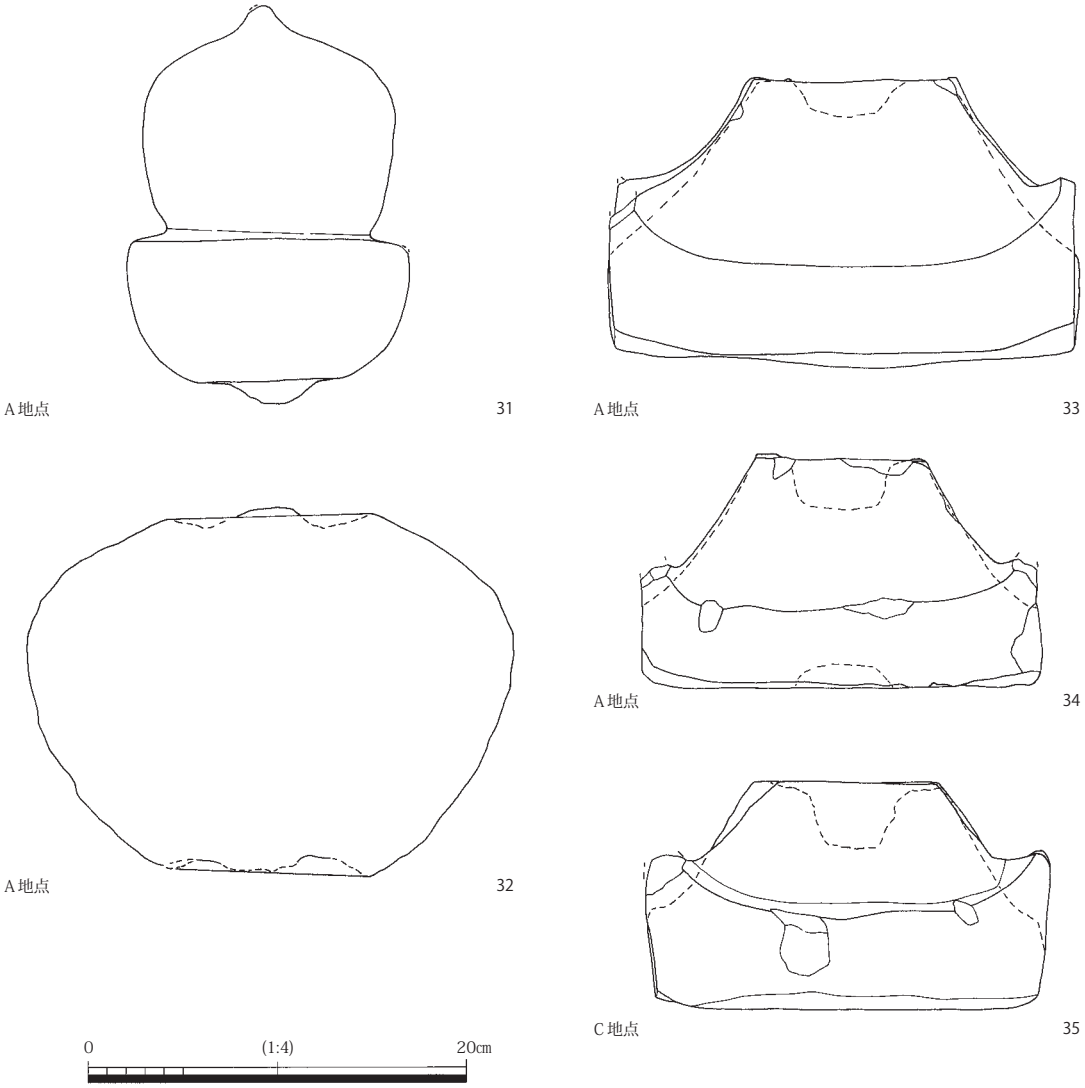


図 58　石塔出土地点Ａ・Ｃ　出土遺物

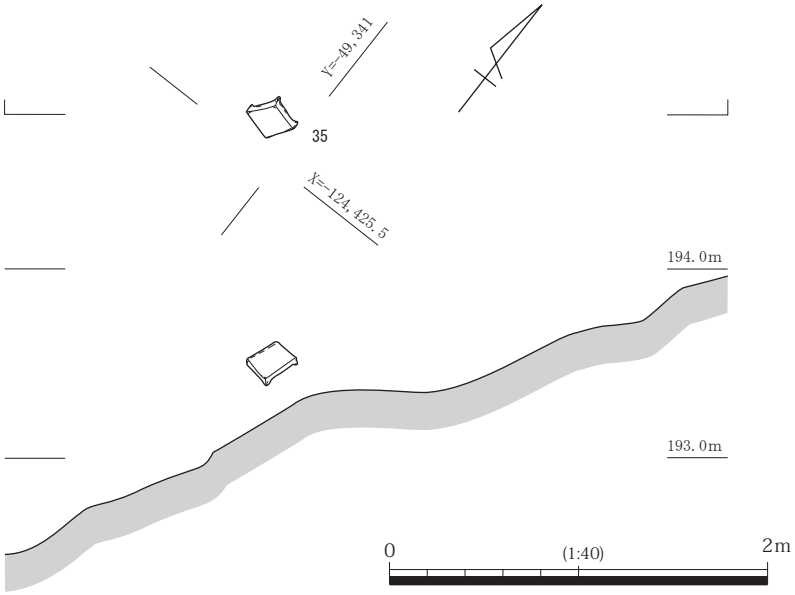


図 59　石塔出土地点Ｃ　平面・立面図

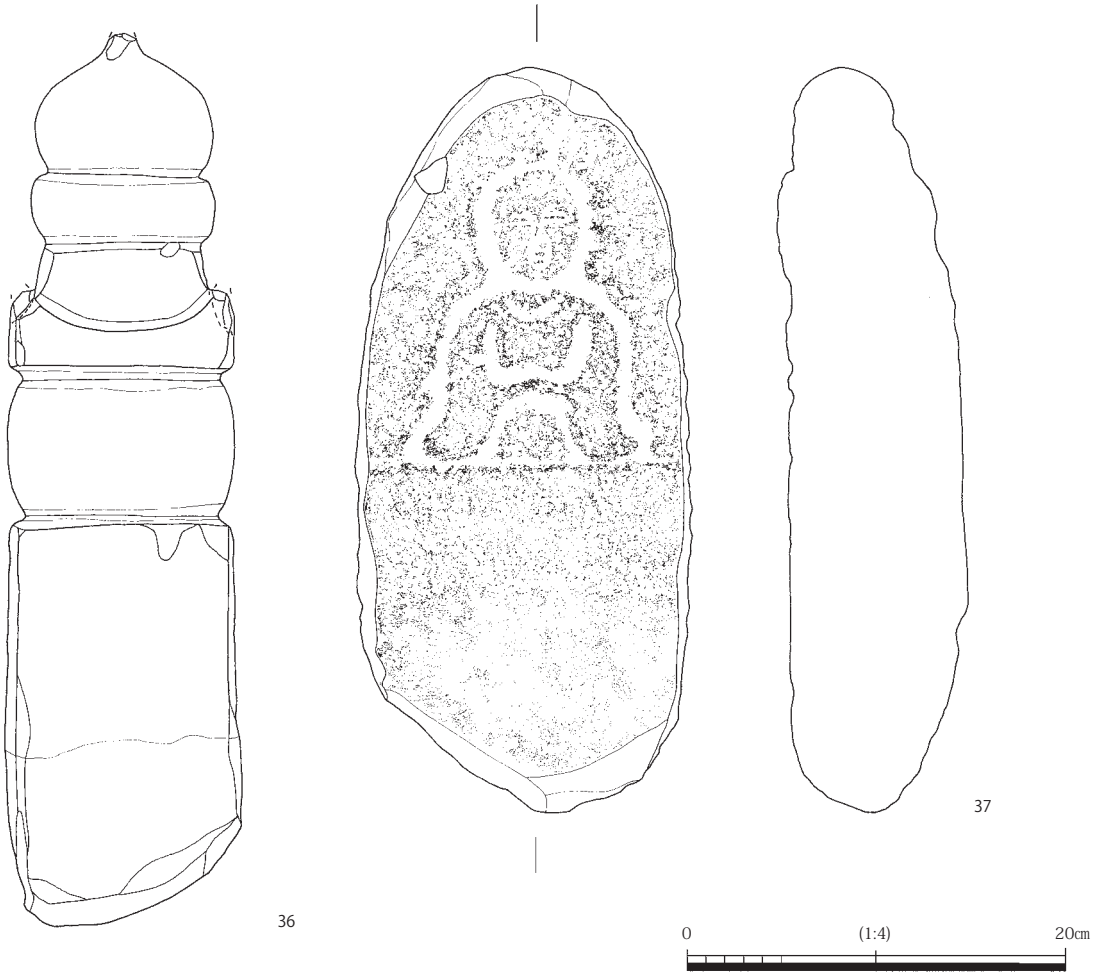
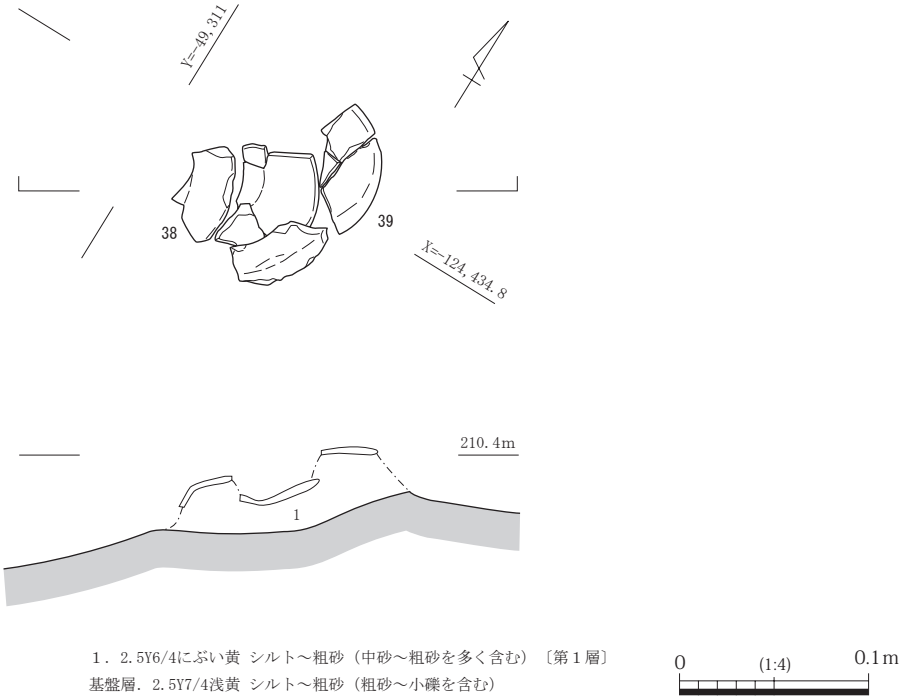


図 60　石塔出土地点Ｂ　出土遺物



１．2.5Y6/4にぶい黄 シルト～粗砂（中砂～粗砂を多く含む）〔第１層〕
基盤層．2.5Y7/4浅黄 シルト～粗砂（粗砂～小礫を含む）

図 61　土師器皿 38・39　出土状況　平面図

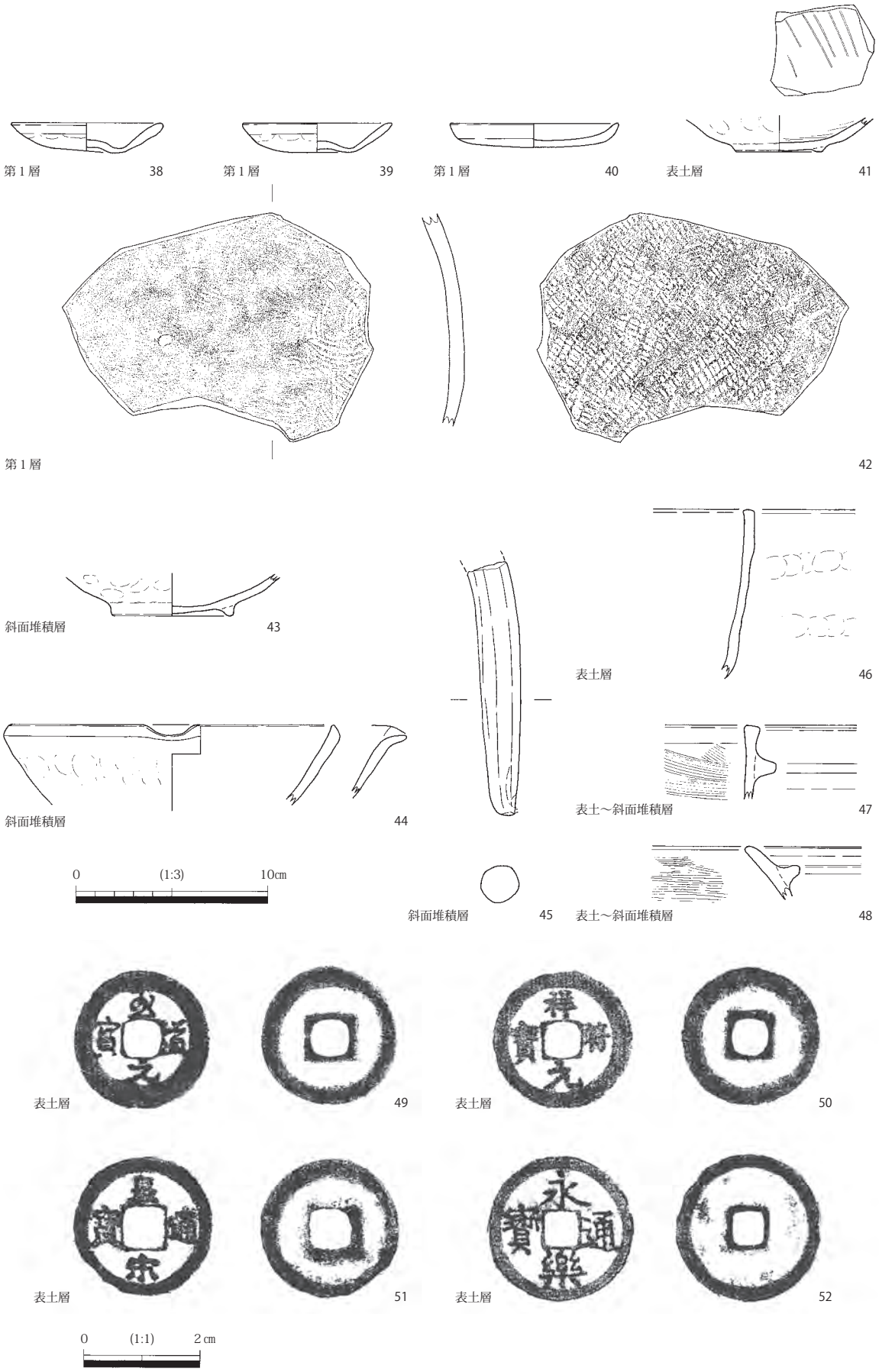


図 62　南面斜面部　出土遺物

第２項　谷部

谷筋は、調査地南東端の尾根が山稜へ取り付く箇所から北西方向及び西方向へ急勾配で下っている。

Ｇライン断面（図54）でみられる通り、谷部には４ｍ余の堆積がある。ラミナが認められる自然堆積であるが、礫を多く含み、土石流状に堆積した層も多いと思われる。谷筋奥の斜面及び両サイドの斜面からの流出土である。複数の土壌層が認められ、堆積と地表面化を繰り返し、谷が埋積していったことがわかる。なお、土壌層が認められたのは、谷の西半部のみである。

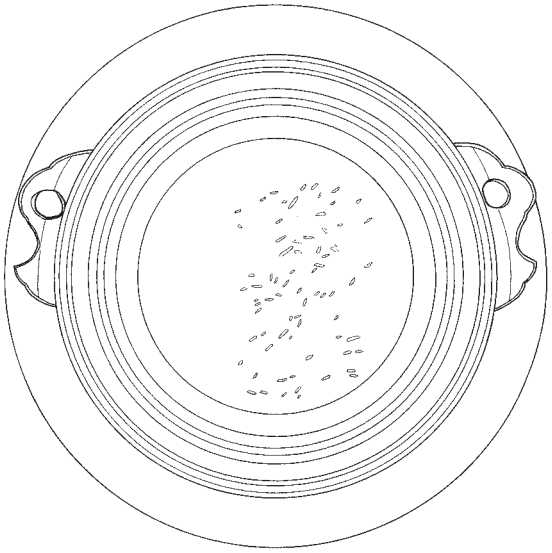
遺構面として捉えられる土壌層は、表土層のほかに３層ある（図54に網かけで表示）。表土層を除去した、堆積層上面を第１面、91 ～ 93層の土壌層を除去した、堆積層上面を第２面とした。より下層の土壌層については、これに伴う遺構を検出しなかったため、遺構面とはせず、基盤層上面を第３面とした。

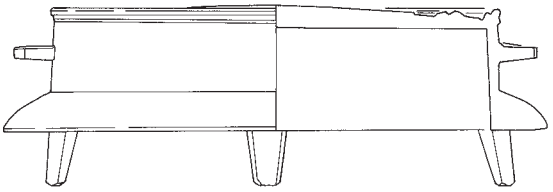
１．第１面（図54・63・64　図版56）

表土層を除去し、堆積層上面を検出した。谷西部の底面北寄りで、土坑２基を検出した。

表土層から、伏鉦（53）、寛永通寶（54・55）が出土している。

伏鉦（ふせがね）は、撞木で叩き鳴らす仏具である。釣鉦鼓が変形したもので、釣り下げるための耳はその名残とされる。浄土宗で念仏を唱える際に使用するといわれる。鼓面は円形で、断面半円形の頂部に沈線を入れた二重線界線を一重に巡らし、中央に鐘座区を設ける。鐘座区は僅かに膨らみを持つ。肥厚した縁部には、上面と側面に沈線が巡る。側面２箇

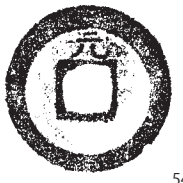




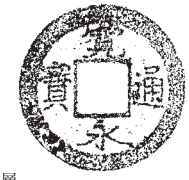
表土層　53

0　(2:3)　5㎝

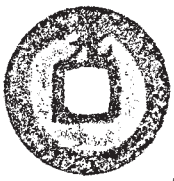
表土層



54



表土層



55

0　(1:1)　2㎝

図 63　南面谷部　出土遺物

所に円径孔を穿った耳が、凹面縁部に三脚が付く。三脚間に「摂州豊嶋郡下止呂美村」「寛政四子年観音講中」「京六条出羽宗味作」の陰刻がある。寛政４年は1792年である。作者は、寛文９（1669）年以降百十年間ほど世襲された、京都の鋳物師「出羽大掾宗味」かと思われる。上止々呂美の養谷寺にも延宝８（1680）年の「天下一出羽大掾宗味作」の銘を持つ半鐘が現存している。

43土坑（図64・65）

谷西部の底面北寄りに位置する。不整な楕円形で、長径約0.5ｍ、短径約0.4ｍ、深さ約0.1ｍである。埋土に炭小片、焼土小片を含む。顕著な被熱痕跡は認められなかったが、隣接する44土坑同様に被熱している可能性がある。埋土を洗浄したが、遺物は含まれていなかった。

44土坑が南に隣接している。

44土坑（図64・65）

谷西部の底面北寄りに位置する。不整な楕円形で、長径約0.7ｍ、短径約0.6ｍ、深さ約0.1ｍである。埋土に炭小片、焼土小片を含む。東半部壁面の基盤層が褐色化しており、被熱していると思われる。埋土を洗浄したが、遺物は含まれていなかった。

43土坑が北に隣接している。

３～５層内の炭片について放射性炭素年代測定を実施した結果、15世紀末～17世紀中葉の年代が示されている（第４章第２節）。

２．第２面（図54・64・66・67）

土壌層（91～93層）を除去し、堆積層上面を検出した。谷西部の底面北寄りで、土坑を４基検出している。土壌層から遺物は出土していない。

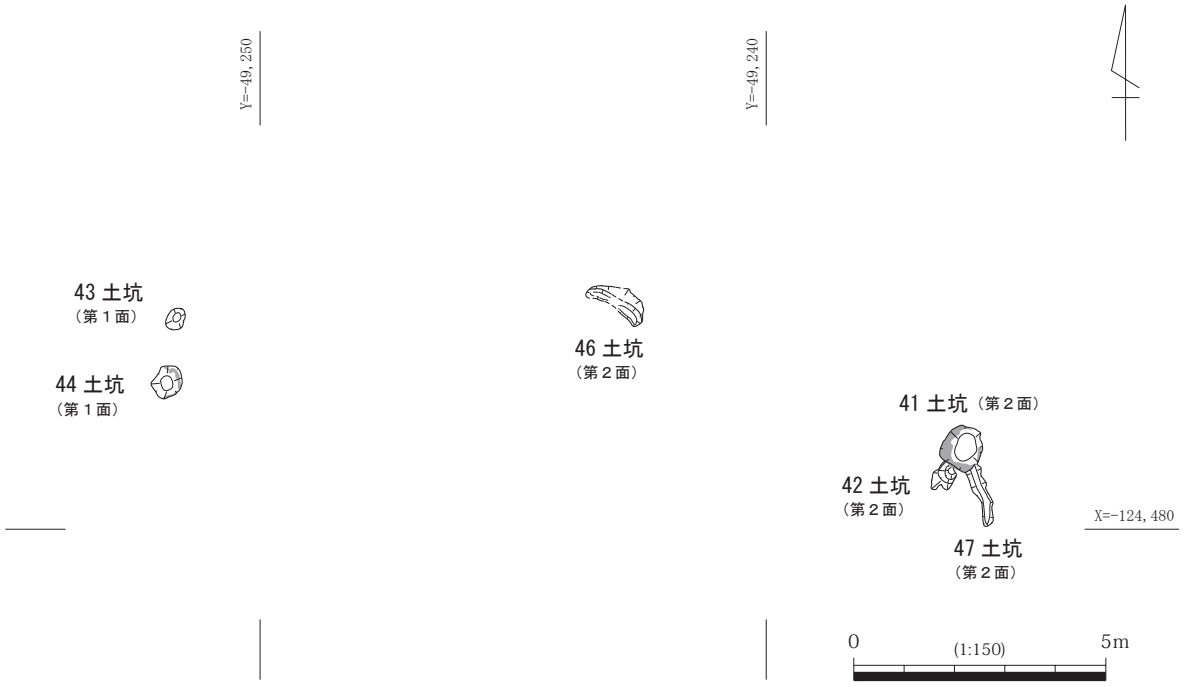
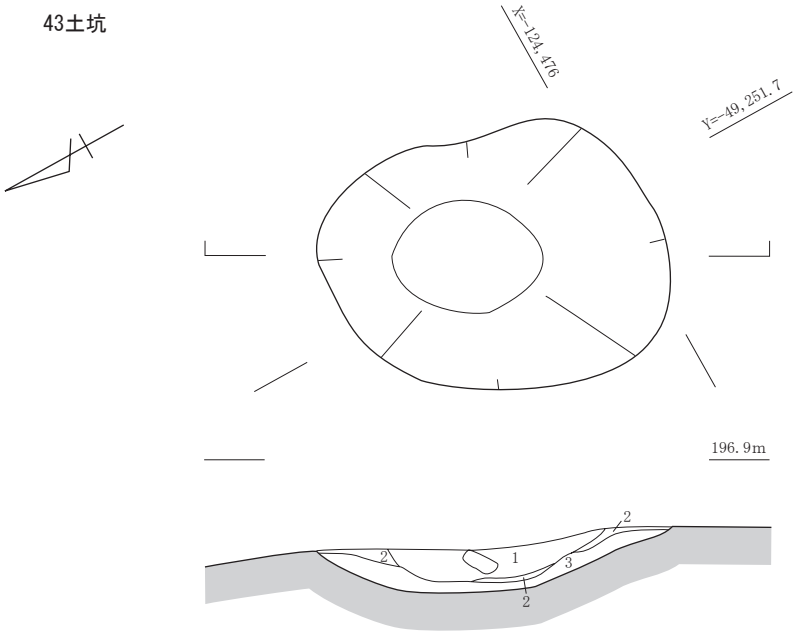
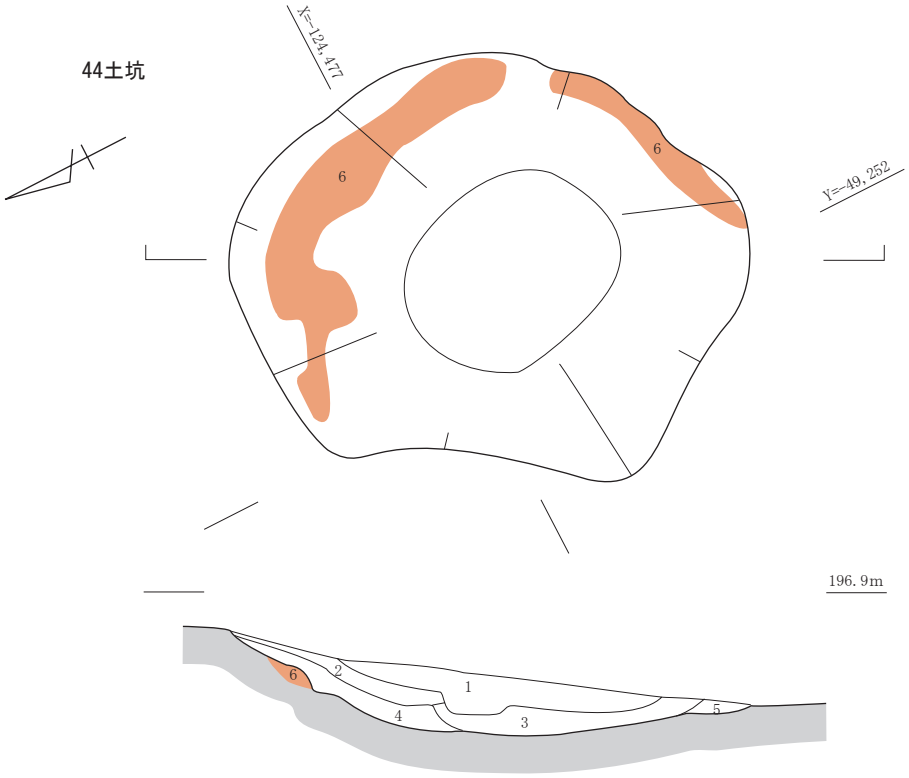


図 64　南面谷部　第１面、第２面　遺構平面図



１．2.5Y4/1黄灰 小礫を多く含むシルト～細砂
２．N1.5/0黒 炭小片を非常に多く含むシルト（焼土小片を少し含む）
３．2.5Y5/2暗灰黄 小礫混シルト
基盤層．2.5Y5/2暗灰黄 小礫を多く含むシルト～細砂（拳大までの礫を含む）



１．10YR4//2灰黄褐 粗砂～小礫を多く含むシルト～細砂
２．5YR4/3にぶい赤褐 粗砂～小礫混シルト～細砂（炭小片を少し含む　焼土片を含む）
３．10YR1.7/1黒 小礫混シルト～細砂（炭小片を含む）
４．7.5YR3/1黒褐 炭小片を多く含むシルト～極細砂（焼土片を少し含む）
５．7.5YR4/2灰褐 小礫混シルト～細砂（炭小片・焼土片を少し含む）
６．7.5YR4/2灰褐 小礫を多く含むシルト～細砂（拳大までの礫を含む）
〔基盤層　被熱痕跡〕

0　(1:10)　0.5m

図 65　43・44 土坑　平面・断面図

41土坑（図64・66）

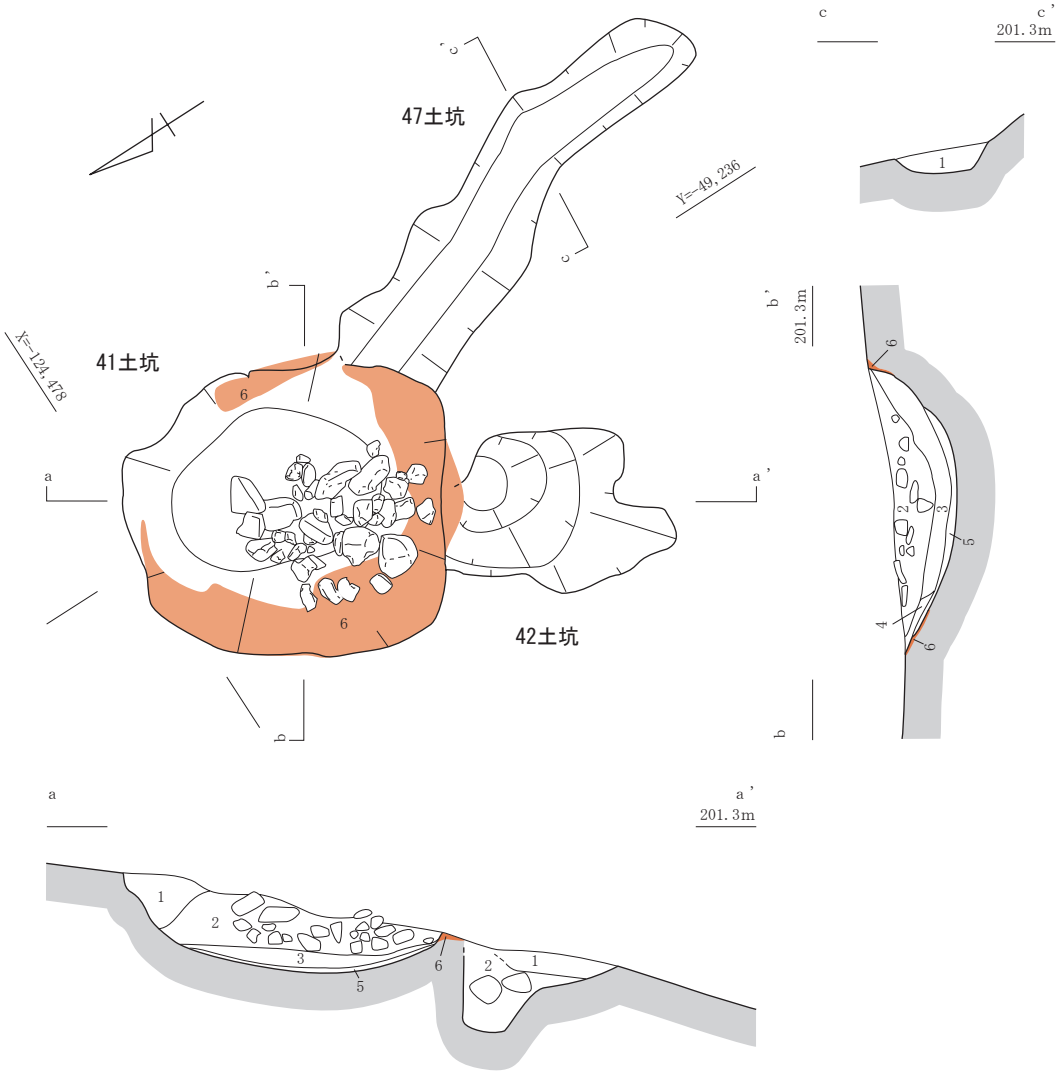
谷西部の底面北側斜面に位置する。不整な円形で、径約0.8ｍ、深さ約0.2ｍである。埋土は、上層に拳大までの礫を含み、下層に炭小片を非常に多く含む。樹種はクリである。壁面の基盤層が赤褐色化しており、被熱していると思われる。埋土を洗浄したが、遺物は含まれていなかった。

南西部が42土坑と接しているが、新旧関係は確認できなかった。南側の47土坑を切っている。

５層内の炭片について放射性炭素年代測定を実施した結果、15世紀中葉～17世紀前葉の年代が示されている（第４章第２節）。

42土坑（図64・66）

谷西部の底面北側斜面に位置する。不定形で、長さ約0.6ｍ、幅約0.4ｍ、深さ約0.2ｍである。埋土



41土坑
1．10Y5/1灰 粗砂～小礫混シルト（炭小片を少し含む）
2．2.5Y5/2暗灰黄 粗砂～小礫を多く含むシルト～細砂（拳大までの礫を含む）
3．2.5YR5/1黄灰 ２cm大までの礫を含むシルト（炭小片・焼土小片を少し含む）
4．7.5YR4/2灰褐 粗砂～小礫を多く含むシルト～細砂（炭小片を少し含む）
5．N1.5/0黒 炭小片を非常に多く含むシルト（粗砂～小礫を少し含む）
6．5YR4/4にぶい赤褐 粗砂～小礫混シルト～細砂〔基盤層　被熱痕跡〕

42土坑
1．10YR4//1褐灰 粗砂～小礫を多く含むシルト～細砂
（５cm大までの礫を含む　炭小片・焼土小片を含む）
2．10YR5/1褐灰 小礫を多く含むシルト（拳大までの礫を少し含む）

47土坑
1．2.5Y5/2暗灰黄 粗砂～小礫を非常に多く含むシルト～細砂

0　(1:20)　1 m

図 66　41・42・47 土坑　平面・断面図

は、小礫を多く含むシルトである。埋土を洗浄したが、遺物は含まれていなかった。

北東部が41土坑と接しているが、新旧関係は確認できなかった。

46土坑（図64・67）

谷西部の底面北側斜面に位置する。三日月形を呈し、長さ約1.3ｍ、幅約0.5ｍである。Ｇライン断面のトレンチと重複してしまい、中央部分を検出し得ていない。埋土に炭小片、焼土小片を多く含む。炭の樹種はクリである。土坑南辺に沿って石列を検出した。地形の高い北側の基盤層が褐色化しており、被熱していると思われる。被熱痕跡上には炭の薄層が認められた。石と基盤層の間に、厚さ２～３㎝の層（2.5Y5/2暗灰黄　粗砂混シルト）が存在したが、炭片は認められなかった。壁面が被熱し、炭層が堆積したのは、石を据えた後と考えられる。埋土を洗浄したが、遺物は含まれていなかった。

炭層内の炭片について放射性炭素年代測定を実施した結果、15世紀後葉～17世紀前葉の年代が示されている（第４章第２節）。

47土坑（図64・66）

谷西部の底面北側の斜面に位置する。溝状を呈し、検出長約1.3ｍ、幅約0.3ｍ、深さ約0.1ｍである。埋土に小礫を非常に多く含む。埋土を洗浄したが、遺物は含まれていなかった。

北側の41土坑に切られている。

３．第３面（図54　図版43・44）

堆積層をすべて除去した基盤層上面である。底面の幅は極めて狭く、両側斜面の勾配も急である。遺構は検出していない。

西端部の堆積層下部で土師器小片が１点出土しているが、時期等は不明である。

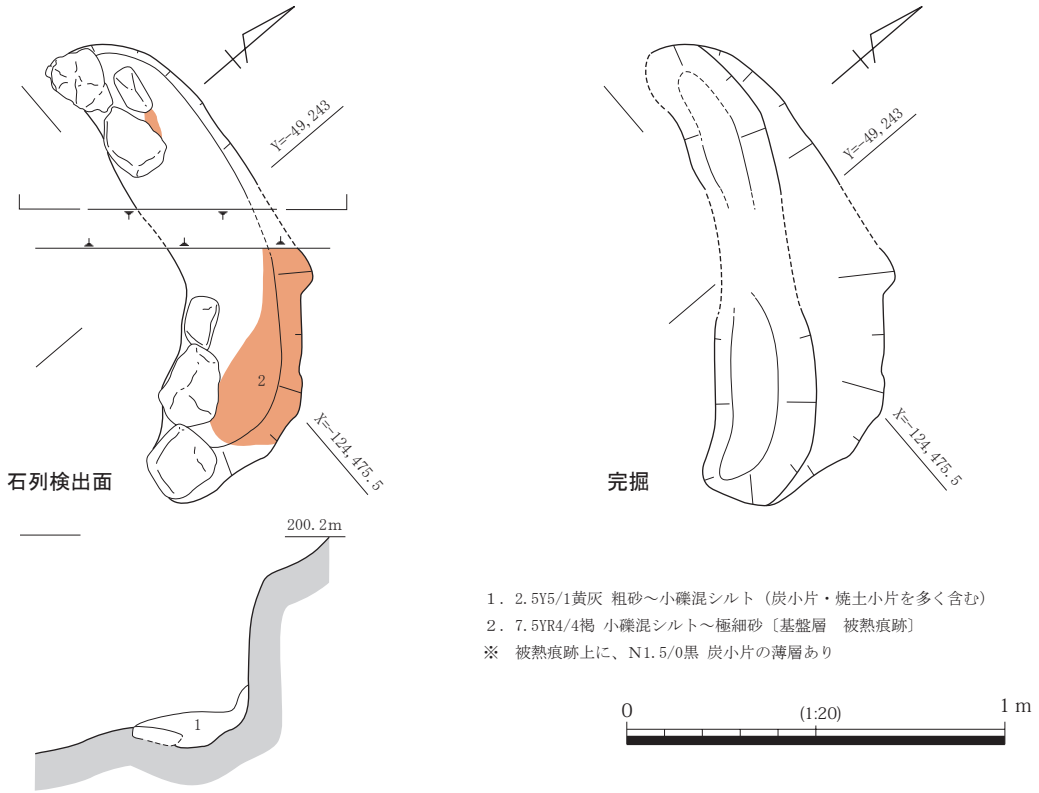


図67　46土坑　平面・断面図

第３節　北面斜面

調査地である北西‐南東方向の尾根の北東側は、余野川支流の奥山川沿いの狭い谷筋である。下止々呂美「奥ノ所」集落の住宅が奥山川と尾根斜面の間に並んでいる。この谷筋に面する斜面について報告する。

一部がⅠ期地区の１区の範囲にあたる以外は、Ⅱ期地区である。Ⅰ期地区の調査成果を踏まえ、大阪府教育委員会の判断により、上位～中位部については北西部（６～９区）のみ、下位部については北西部の一部分（10区）のみ調査を行なった（図５）。

第１項　上位から中位部（図68～78　カラー図版８　図版45～48・54・55）

北面斜面の上位から中位部である。山頂棚田部に接する範囲では、棚田造成に伴う盛土層及びその流出土が比較的厚く認められた。頂上部と接する箇所では、表土層直下に非常に弱くではあるが土壌化している層が認められ、それを第１層として除去し、基盤層上面を検出した。斜面は急傾斜を呈するが、南面斜面と比べれば緩やかであり、第１層は広範囲で認められた。第１層からは遺物は出土していない。表土層から、15世紀代の土師器皿片（56）等が出土している。

なお、中央部の谷筋状を呈する斜面の中位（８区中央北端部）では、表土層直下に炭片を多く含むシルト層を認め、それを除去した棚田に伴う盛土層上面で、56土坑を検出している。また、中央部の斜面上位では、盛土層掘削中に、土坑状の落ち込みを検出している。盛土施工中の営為によるものと思われる。遺物は出土していな

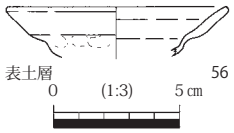
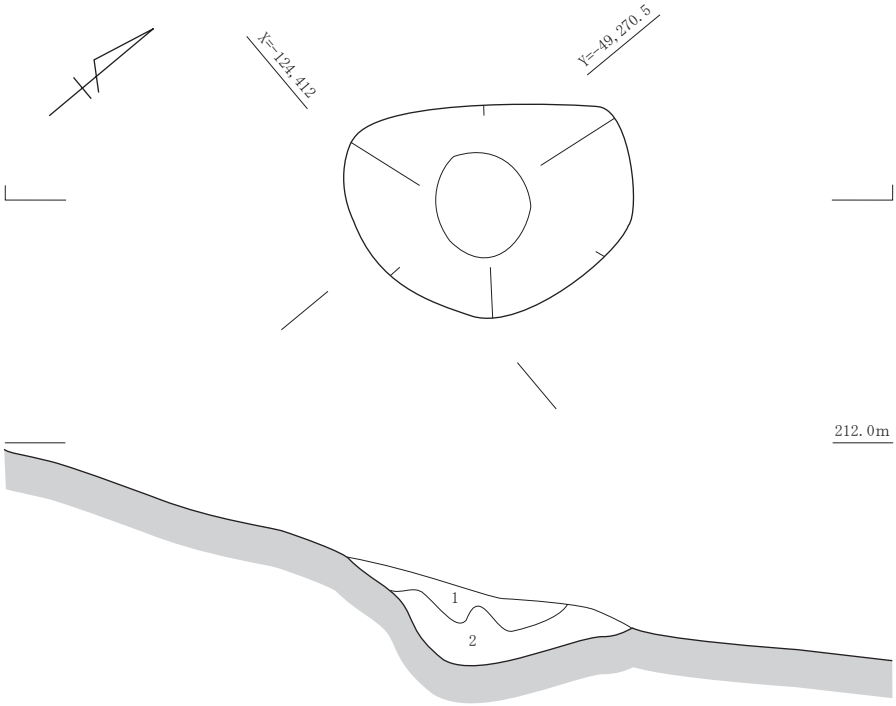


図 68　北面斜面　出土遺物



１．2.5Y4/1黄灰 小礫を多く含むシルト～細砂（炭小片を含む）
２．N2/0黒 小礫混シルト（炭小片を多く含む）
基盤層．2.5Y6/4にぶい黄 小礫混シルト〔盛土層〕

0　(1:20)　1 m

図 69　56 土坑　平面・断面図

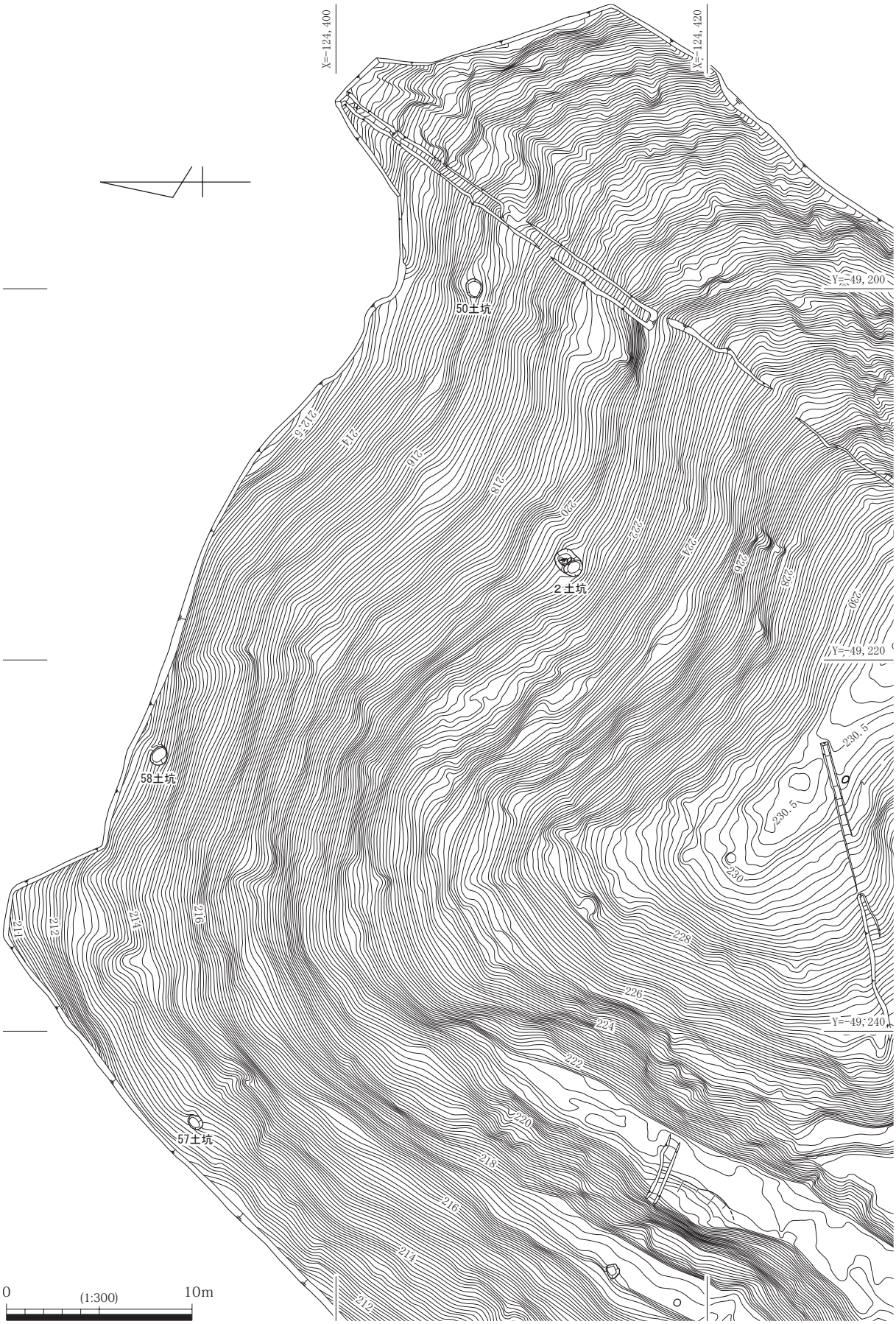
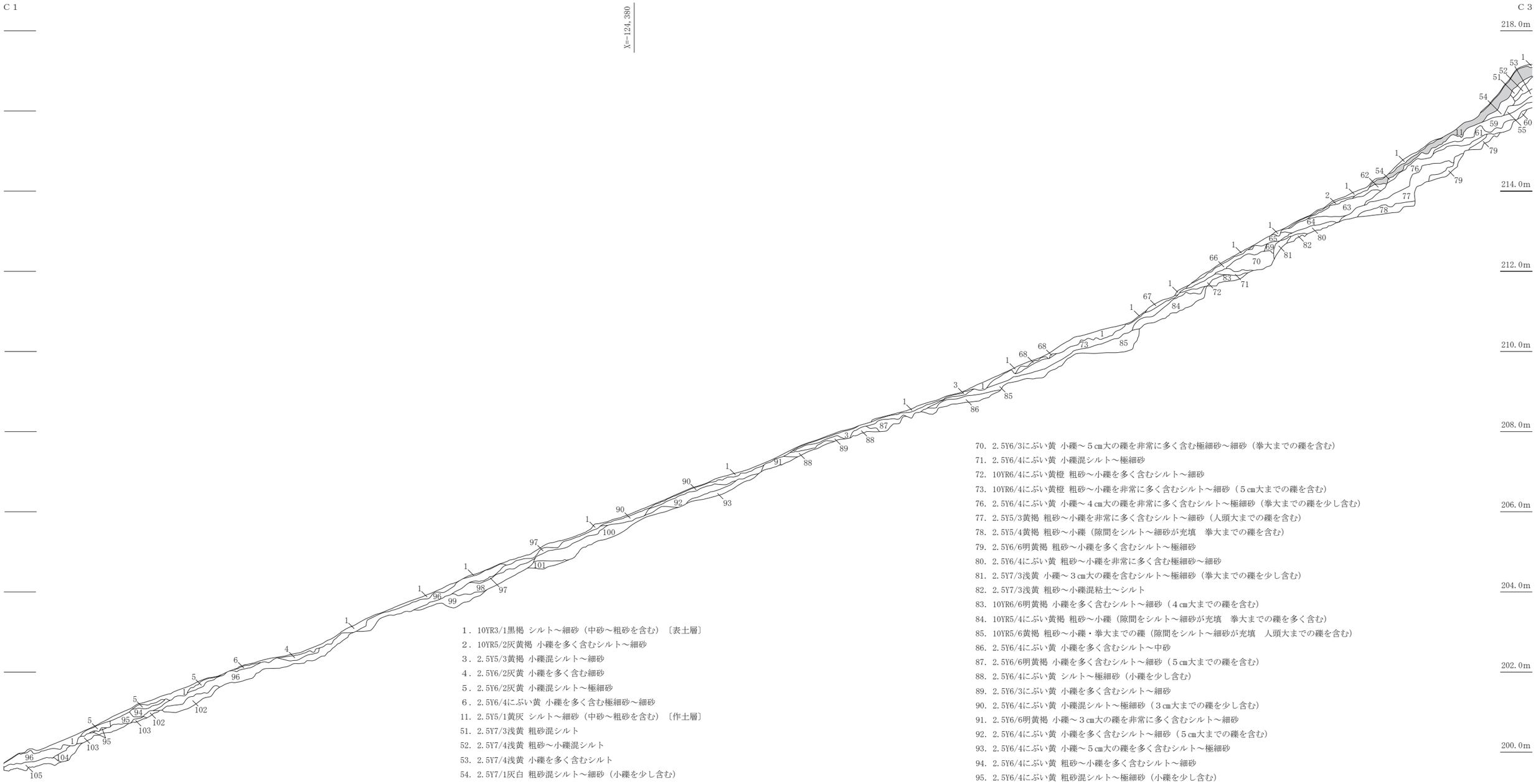


図 70　北面斜面上位から中位部（東部）　平面図

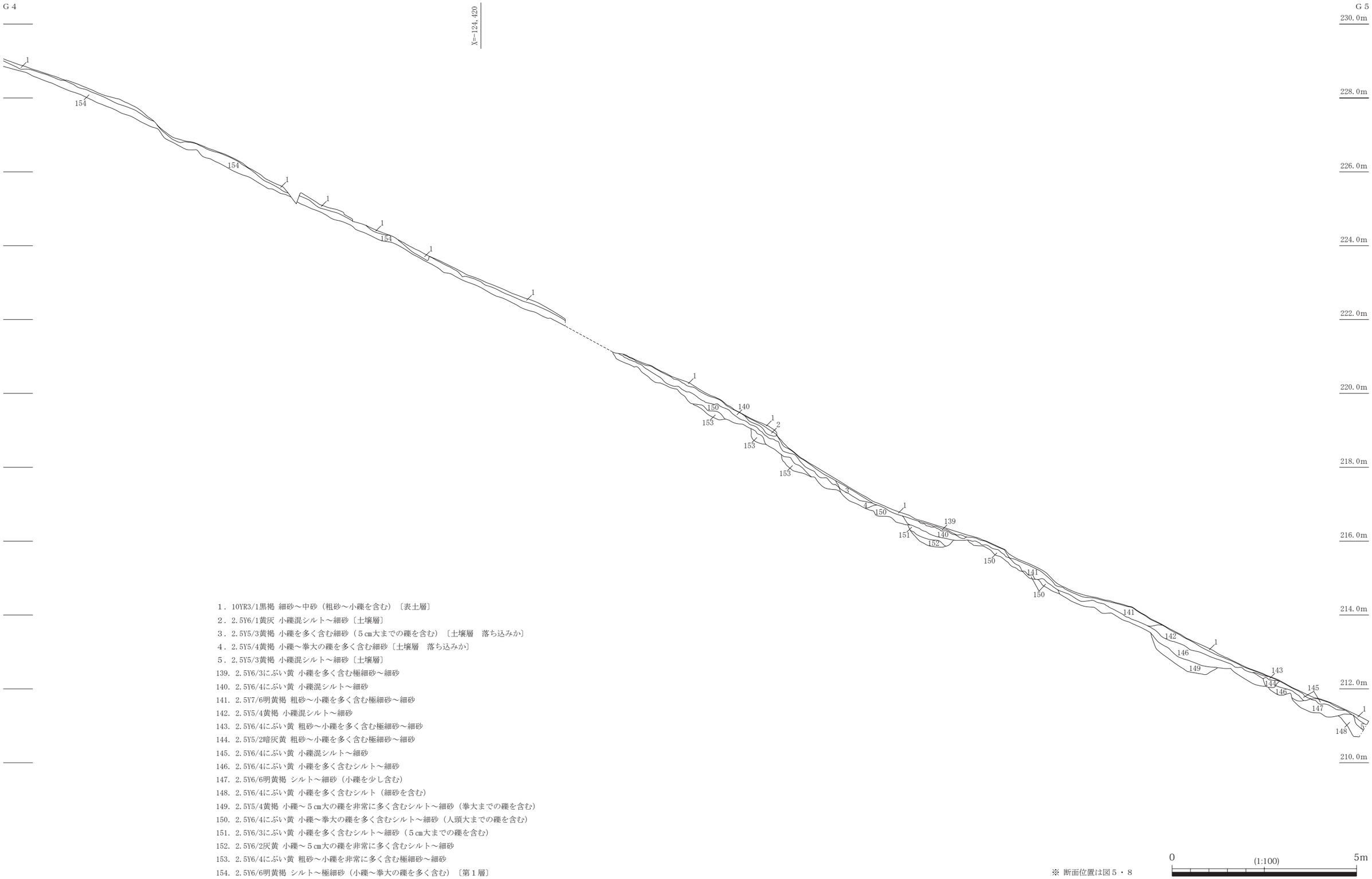


1．10YR3/1黒褐 シルト～細砂（中砂～粗砂を含む）〔表土層〕
2．10YR5/2灰黄褐 小礫を多く含むシルト～細砂
3．2.5Y5/3黄褐 小礫混シルト～細砂
4．2.5Y6/2灰黄 小礫を多く含む細砂
5．2.5Y6/2灰黄 小礫混シルト～極細砂
6．2.5Y6/4にぶい黄 小礫を多く含む極細砂～細砂
11．2.5Y5/1黄灰 シルト～細砂（中砂～粗砂を含む）〔作土層〕
51．2.5Y7/3浅黄 粗砂混シルト
52．2.5Y7/4浅黄 粗砂～小礫混シルト
53．2.5Y7/4浅黄 小礫を多く含むシルト
54．2.5Y7/1灰白 粗砂混シルト～細砂（小礫を少し含む）
55．2.5Y7/4浅黄 小礫混シルト
59．10YR6/2灰黄褐 粗砂～小礫混シルト
60．2.5Y6/3にぶい黄 小礫を多く含むシルト～細砂
61．2.5Y6/2灰黄 小礫～５㎝大の礫を多く含むシルト～極細砂
62．2.5Y6/4にぶい黄 小礫混シルト～極細砂
63．2.5Y6/4にぶい黄 小礫を多く含むシルト～極細砂（５㎝大までの礫を含む）
64．2.5Y6/3にぶい黄 小礫を多く含むシルト～細砂（５㎝大までの礫を多く含む）
65．2.5Y6/4にぶい黄 小礫を多く含むシルト（５㎝大までの礫を少し含む）
66．2.5Y6/3にぶい黄 小礫を非常に多く含むシルト～細砂（５㎝大までの礫を含む）
67．2.5Y6/6明黄褐 小礫混極細砂～細砂
68．10YR6/4にぶい黄橙 小礫混シルト
69．2.5Y7/6明黄褐 小礫混シルト～極細砂
70．2.5Y6/3にぶい黄 小礫～５㎝大の礫を非常に多く含む極細砂～細砂（拳大までの礫を含む）
71．2.5Y6/4にぶい黄 小礫混シルト～極細砂
72．10YR6/4にぶい黄橙 粗砂～小礫を多く含むシルト～細砂
73．10YR6/4にぶい黄橙 粗砂～小礫を非常に多く含むシルト～細砂（５㎝大までの礫を含む）
76．2.5Y6/4にぶい黄 小礫～４㎝大の礫を非常に多く含むシルト～極細砂（拳大までの礫を少し含む）
77．2.5Y5/3黄褐 粗砂～小礫を非常に多く含むシルト～細砂（人頭大までの礫を含む）
78．2.5Y5/4黄褐 粗砂～小礫（隙間をシルト～細砂が充填　拳大までの礫を含む）
79．2.5Y6/6明黄褐 粗砂～小礫を多く含むシルト～極細砂
80．2.5Y6/4にぶい黄 粗砂～小礫を非常に多く含む極細砂～細砂
81．2.5Y7/3浅黄 小礫～３㎝大の礫を含むシルト～極細砂（拳大までの礫を少し含む）
82．2.5Y7/3浅黄 粗砂～小礫混粘土～シルト
83．10YR6/6明黄褐 小礫を多く含むシルト～細砂（４㎝大までの礫を含む）
84．10YR5/4にぶい黄褐 粗砂～小礫（隙間をシルト～細砂が充填　拳大までの礫を多く含む）
85．10YR5/6黄褐 粗砂～小礫・拳大までの礫（隙間をシルト～細砂が充填　人頭大までの礫を含む）
86．2.5Y6/4にぶい黄 小礫を多く含むシルト～中砂
87．2.5Y6/6明黄褐 小礫を多く含むシルト～細砂（５㎝大までの礫を含む）
88．2.5Y6/4にぶい黄 シルト～極細砂（小礫を少し含む）
89．2.5Y6/3にぶい黄 小礫を多く含むシルト～細砂
90．2.5Y6/4にぶい黄 小礫混シルト～極細砂（３㎝大までの礫を少し含む）
91．2.5Y6/6明黄褐 小礫～３㎝大の礫を非常に多く含むシルト～細砂
92．2.5Y6/4にぶい黄 小礫を多く含むシルト～細砂（５㎝大までの礫を含む）
93．2.5Y6/4にぶい黄 小礫～５㎝大の礫を多く含むシルト～極細砂
94．2.5Y6/4にぶい黄 粗砂～小礫を多く含むシルト～細砂
95．2.5Y6/4にぶい黄 粗砂混シルト～極細砂（小礫を少し含む）
96．2.5Y6/4にぶい黄 小礫を多く含むシルト～細砂（拳大までの礫を少し含む）
97．2.5Y6/3にぶい黄 小礫～５㎝大の礫を多く含むシルト～細砂
98．2.5Y6/4にぶい黄 小礫を多く含むシルト～中砂（拳大までの礫を少し含む）
99．2.5Y6/4にぶい黄 小礫～５㎝大の礫を含む極細砂～中砂（拳大までの礫を少し含む）
100．2.5Y5/4黄褐 小礫～５㎝大の礫を非常に多く含むシルト～細砂
101．2.5Y5/4黄褐 小礫～拳大の礫を非常に多く含むシルト～細砂
102．10YR6/4にぶい黄橙 粗砂～小礫を多く含む極細砂～細砂
103．10YR6/4にぶい黄橙 粗砂混シルト～極細砂
104．2.5Y6/4にぶい黄 小礫～拳大の礫を非常に多く含むシルト～細砂
105．2.5Y7/3浅黄 粗砂～小礫・５㎝大までの礫を多く含むシルト～細砂

※ 断面位置は図５・６

0　(1:100)　5m

図71　Cライン　断面図



※ 断面位置は図５・８

１．10YR3/1黒褐 細砂～中砂（粗砂～小礫を含む）〔表土層〕
２．2.5Y6/1黄灰 小礫混シルト～細砂〔土壌層〕
３．2.5Y5/3黄褐 小礫を多く含む細砂（５㎝大までの礫を含む）〔土壌層　落ち込みか〕
４．2.5Y5/4黄褐 小礫～拳大の礫を多く含む細砂〔土壌層　落ち込みか〕
５．2.5Y5/3黄褐 小礫混シルト～細砂〔土壌層〕
139．2.5Y6/3にぶい黄 小礫を多く含む極細砂～細砂
140．2.5Y6/4にぶい黄 小礫混シルト～細砂
141．2.5Y7/6明黄褐 粗砂～小礫を多く含む極細砂～細砂
142．2.5Y5/4黄褐 小礫混シルト～細砂
143．2.5Y6/4にぶい黄 粗砂～小礫を多く含む極細砂～細砂
144．2.5Y5/2暗灰黄 粗砂～小礫を多く含む極細砂～細砂
145．2.5Y6/4にぶい黄 小礫混シルト～細砂
146．2.5Y6/4にぶい黄 小礫を多く含むシルト～細砂
147．2.5Y6/6明黄褐 シルト～細砂（小礫を少し含む）
148．2.5Y6/4にぶい黄 小礫を多く含むシルト（細砂を含む）
149．2.5Y5/4黄褐 小礫～５㎝大の礫を非常に多く含むシルト～細砂（拳大までの礫を含む）
150．2.5Y6/4にぶい黄 小礫～拳大の礫を多く含むシルト～細砂（人頭大までの礫を含む）
151．2.5Y6/3にぶい黄 小礫を多く含むシルト～細砂（５㎝大までの礫を含む）
152．2.5Y6/2灰黄 小礫～５㎝大の礫を非常に多く含むシルト～細砂
153．2.5Y6/4にぶい黄 粗砂～小礫を非常に多く含む極細砂～細砂
154．2.5Y6/6明黄褐 シルト～極細砂（小礫～拳大の礫を多く含む）〔第１層〕

図 72　Gライン　断面図

い。盛土層上面及び盛土層中で検出した遺構はほかになく、別途遺構面名は付していない。

基盤層上面では、土坑を４基検出している。

56土坑（図69）

中央部の谷筋状を呈する斜面の中位（８区中央北端部）に位置する。表土層直下で、南北約４ｍ、東西約２ｍの範囲に炭片を多く含むシルト層を認め、それを除去した棚田に伴う盛土層上面で検出した。

楕円形で、長径約0.8ｍ、短径約0.6ｍ、深さ約0.2ｍである。埋土に炭小片を多く含む。

埋土を洗浄したが、遺物は含まれていなかった。

２土坑（図70・73～76　カラー図版８　図版46・47・54・55）

山頂頂上部の調査地最高所の北側斜面に位置する。斜面は急傾斜であるが、幅の広い谷状を呈しており、ところどころにやや緩やかになる地点が認められる。この土坑を検出したのもそのうちの一所である。北西方向に展望が開けており、下止々呂美集落を望む立地である。

表土層を除去した段階で土師器皿片が散見されたが、遺構の輪郭は認められず、土師器皿片等を含む層（２層）を除去し、検出した。この２層は、後述する石組みとの関係からも、遺構埋土ではなく旧表土層等である可能性が高いと思われる。

等高線に直交する方向に長軸を持つ楕円形で、長径約1.7ｍ、短径約1.1ｍである。

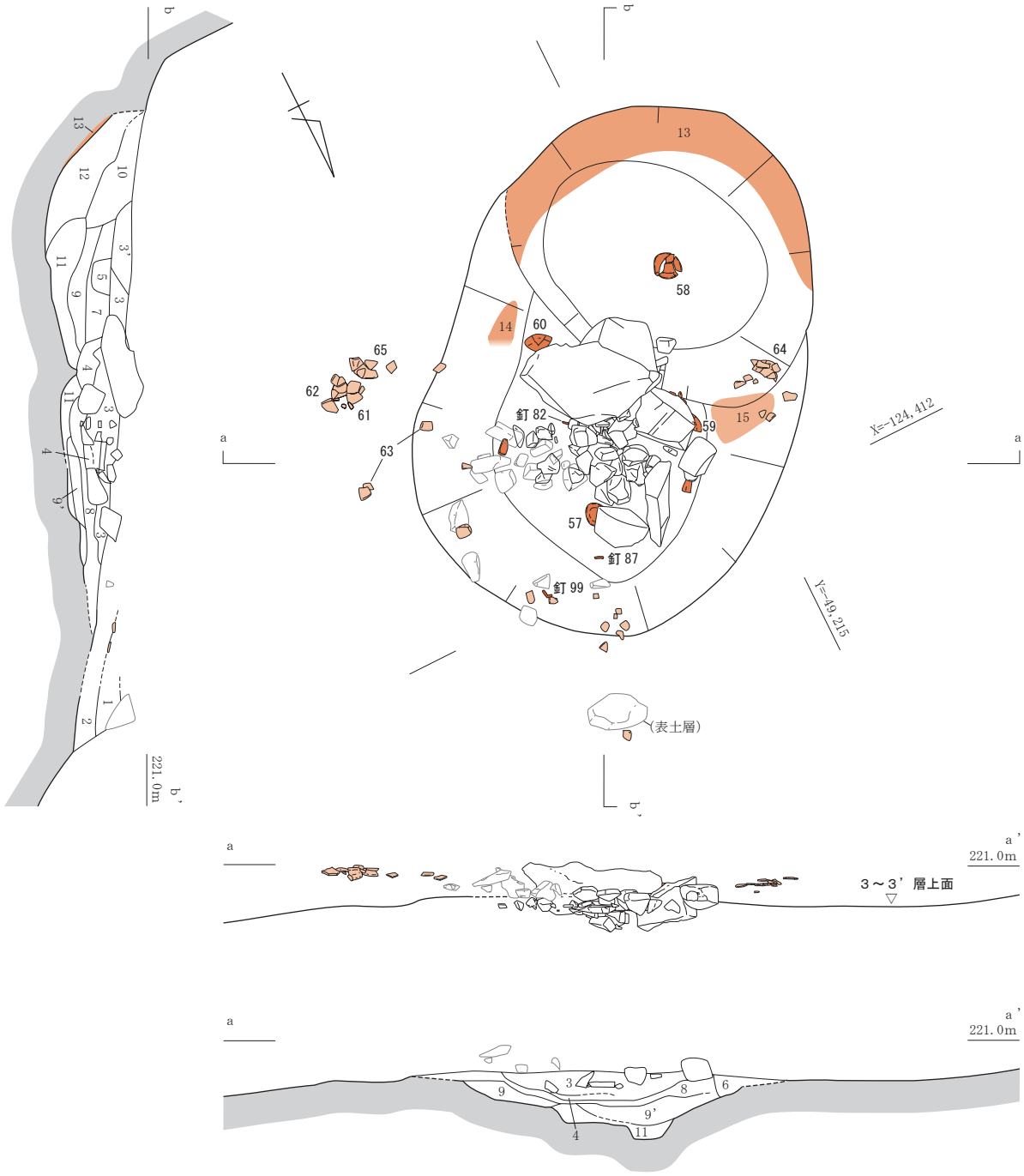
地形の低い側の北東半部で、外周約0.6ｍの石組みを検出した。縁部に20～40㎝大の石を配し、内側に10㎝大までの石を集積している。石の下部が埋土上層（３層）に埋もれており、石を据え置きながら埋め戻したことが窺われる。３層は灰黄褐色で黒味を帯びず、小礫を多く含んでおり、下層と層相を異にしている。北東縁部では大形の石を検出していないが、この辺りの２層には石組みと同様な石が含まれていた。石組みを検出したのは３層上面であり、石は３層により据え置かれている状態である。２層内の石はその検出面から浮いており、石組みから外れたものと考えられる。縁部の大形の石も、後に失われた可能性が高い。石組みとともに、土師器皿、釘が出土している。土師器皿は、完形に近いものもあり、石とともに置かれたものと思われる。

３層より下層は、炭小片を含んで黒褐色を呈し、よりシルト質が強い。地形の低い側の北東半部で、骨片とともに、釘、木製珠類が出土した。骨はすべて小片で、石組み内部の直下にあたる範囲に集中している。

地形の高い側の南西半部は、北東半部に比べてやや深くなっている。北東半部とは対照的に、その埋土に骨片、遺物をほとんど含まない。地形の高い側の壁面を中心に、基盤層が赤褐色化しているのが認められ、被熱していると思われる。

骨片の出土及び被熱痕跡から、火葬の遺構であると考えられる。骨片の分布状況から、火葬後に北東半部に骨が集められたことが想定できる。さらにその上に石組みが築かれていることから、骨の集積行為は納骨であり、石組みを墓標とする墓が設けられたと考えることができる。骨片等の分布状況に加え、地形がより高く、より深さを有する南西半部に被熱痕跡が認められ、北東半部に認められないことから、火葬が行なわれたのは南西半部であり、北東半部は火葬後に拡張された可能性もある。

２層から出土した土師器皿は、ほぼ完形に復元できるものもあり、その出土位置から、石組みの周囲に置かれたものと思われる。２層は石組み上部を被覆しており、石組みの構築から一定期間を経た後に、



1．10YR2/2黒褐 細砂～中砂（小礫を多く含む）〔表土層〕
2．10YR4/2灰黄褐 極細砂～細砂（小礫を多く含む）
3．10YR4/2灰黄褐 シルト～細砂（小礫を多く含む　５cm大までの礫を含む）
3'．10YR5/2灰黄褐 シルト～細砂
（小礫を多く含む　５cm大までの礫を含む）
4．2.5Y5/2暗灰黄 シルト～極細砂（細砂～中砂を含む　炭小片を含む
2.5Y5/1黄灰 シルト～極細砂のブロックを含む）
5．10YR4/1褐灰 シルト～極細砂（細砂～中砂を含む　炭小片を少し含む）
6．10YR3/1黒褐 細砂混シルト（中砂～粗砂・小礫を含む）
7．2.5Y4/1黄灰 極細砂混シルト（細砂～中砂を少し含む　炭小片を含む）
8．10YR3/1黒褐 細砂混シルト（中砂～粗砂・小礫、３cm大までの礫を含む）
9．2.5Y2/1黒 極細砂混シルト（細砂～中砂を少し含む　炭小片を多く含む）
9'．10YR1.7/1黒 極細砂混シルト（細砂～中砂を少し含む　炭小片を多く含む）
10．10YR3/2黒褐 極細砂～シルト（細砂～中砂を少し含む　炭小片を少し含む）
11．2.5Y3/1黒褐 細砂～中砂混シルト（炭小片を少し含む）
12．7.5YR4/2灰褐 極細砂～シルト（細砂～粗砂を少し含む）
13．5YR3/3暗赤褐 粗砂・小礫混シルト～細砂（拳大の礫を多く含む）
〔基盤層　被熱痕跡〕
14．5YR4/3にぶい赤褐 粗砂・小礫混シルト～細砂（拳大の礫を多く含む）
〔基盤層　被熱痕跡〕
15．7.5YR5/4にぶい褐 粗砂・小礫混シルト～細砂（拳大の礫を多く含む）
〔基盤層　弱い被熱痕跡〕
基盤層．2.5Y6/4にぶい黄 粗砂・小礫混シルト～細砂（拳大の礫を多く含む）

２層中の石　　２層に伴う土師器皿
３層上面の石組み　　石組みに伴う土師器皿

0　(1:20)　1 m

図 73　２土坑　平面・立面・断面図

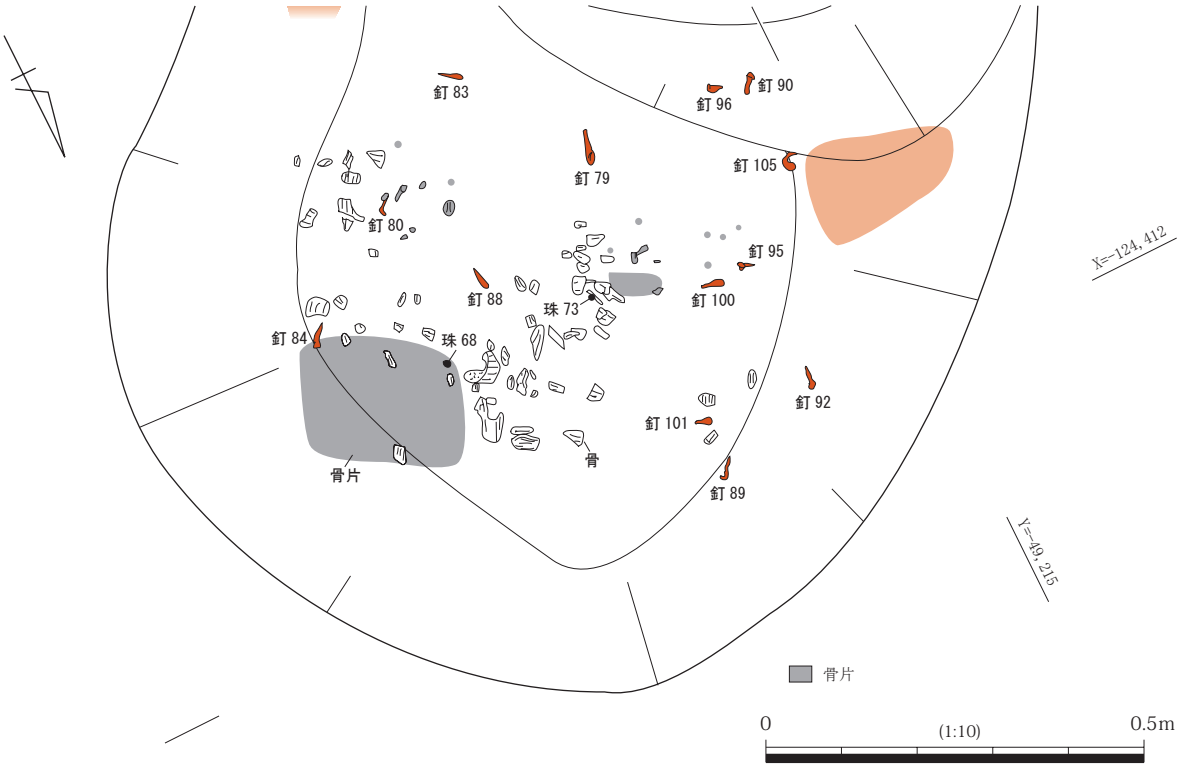


図 74　２土坑　北東半部骨片等出土状況　平面図

この土師器皿が置かれたと考えられる。

２層出土土師器皿は、61 ～ 65である。径９㎝以上の63 ～ 65は口縁部に横ナデを施すが、61・62は口縁部外面をナデ仕上げせず、内面に不定方向のナデを施す。16世紀のものである。石組みとともに出土した土師器皿は、57 ～ 60である。60は表面の遺存状態が悪く不明であるが、57 ～ 59は口縁部外面をナデ仕上げしていない。16世紀のものである。

釘は可能なものをすべて図化し、79 ～ 112の34本を掲載した。最も長い79は残存長4.3㎝であるが、これ以外の遺存状態良好なものから、約３㎝（１寸）のものが多くを占めていたと推測できる。種類を確認できるものは、すべて頭巻釘である。一端を鍛打によって扁平にし、折り返すことにより頭を成形している。木棺に使用されていたものと想定できる。

木製珠は66 ～ 78・115の14個で、球形のもの（66 ～ 73）と長球形のもの（74 ～ 78・115）の２種がある。球形のものは径0.6 ～ 0.7㎝のものが多く、平坦な小口を設けて径0.1㎝の孔を穿つ。長球形のものは長さ0.7 ～ 0.8㎝で、同様に平坦な小口を設けて径0.1㎝の孔を穿つ。両者とも側面に水平方向の加工痕が認められる。遺構の性格から、数珠であると思われる。黒色を呈しており、炭化している可能性があるが、火葬の際に被熱したかについては不明といわざるを得ない。

なお、釘、木製珠類、骨片検出のため、すべての埋土を洗浄した。

骨片について、安部みき子氏に鑑定を依頼した（第４章第１節）が、細片であったため、被葬者に関する情報は得られていない。

埋土に含まれていた炭小片について放射性炭素年代測定を実施した結果、16世紀前葉～ 17世紀中葉の年代が示されている（第４章第２節）。

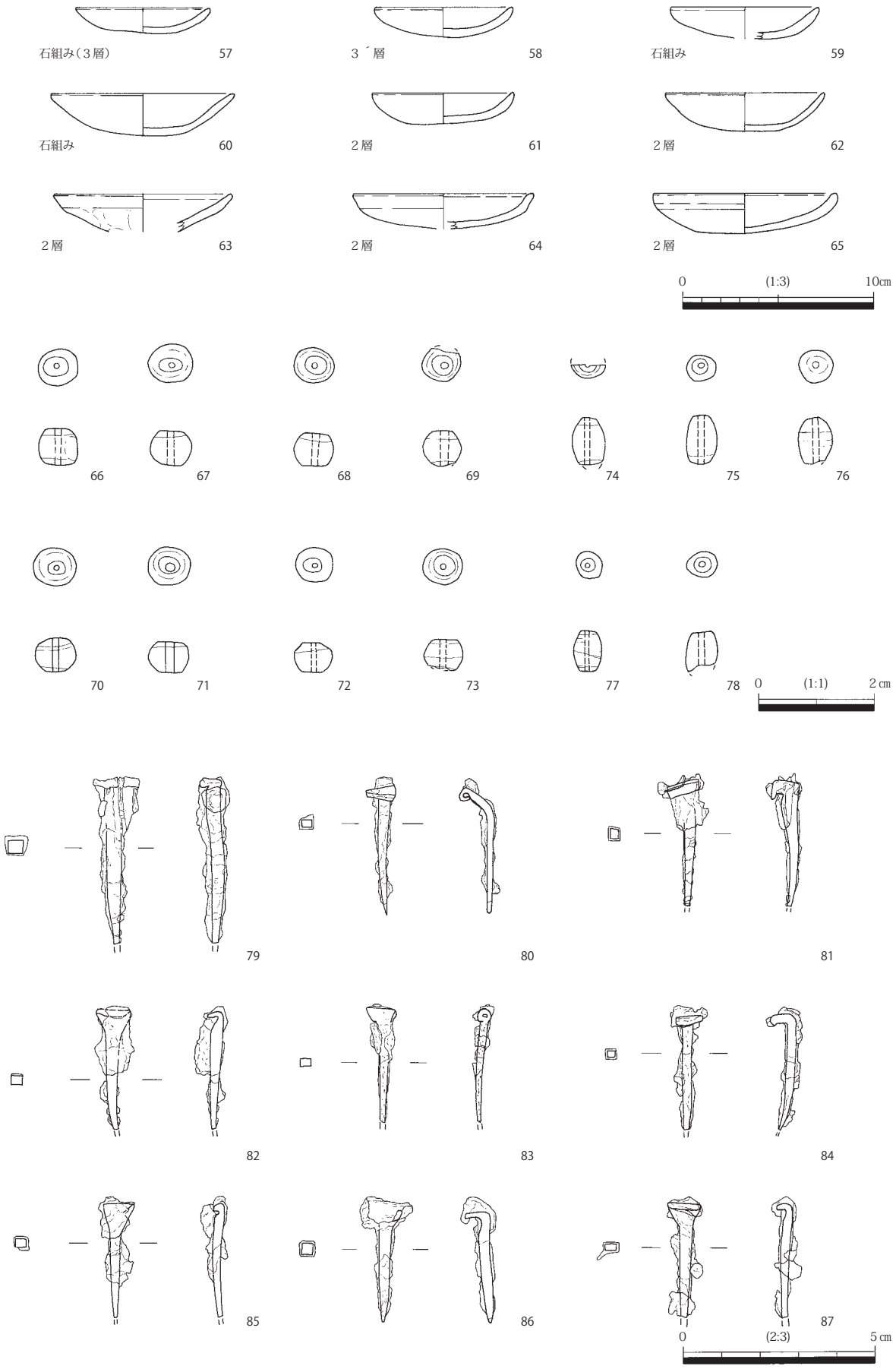


図 75　２土坑　出土遺物（１）

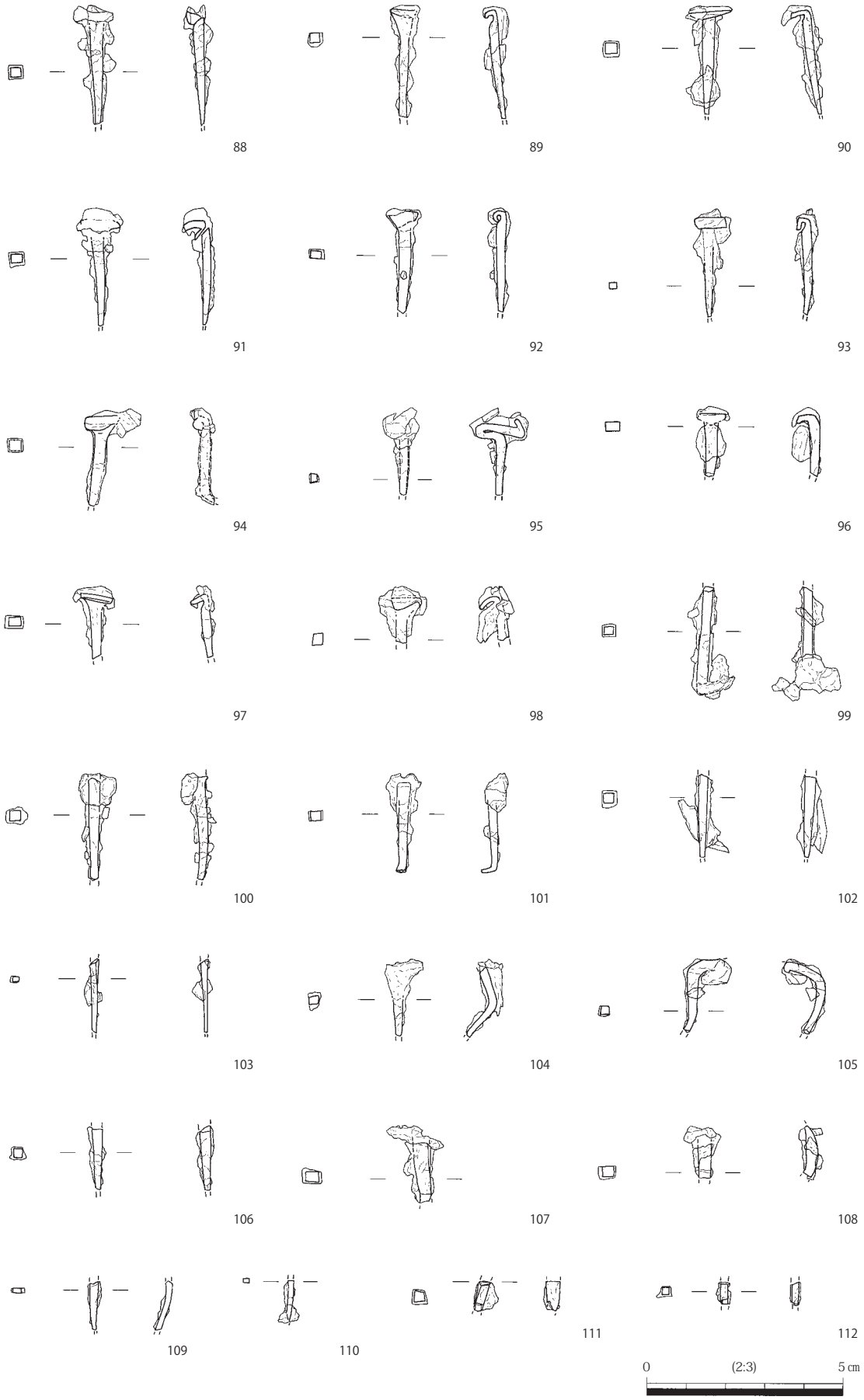


図 76　２土坑　出土遺物（２）

50土坑（図70・77　図版48）

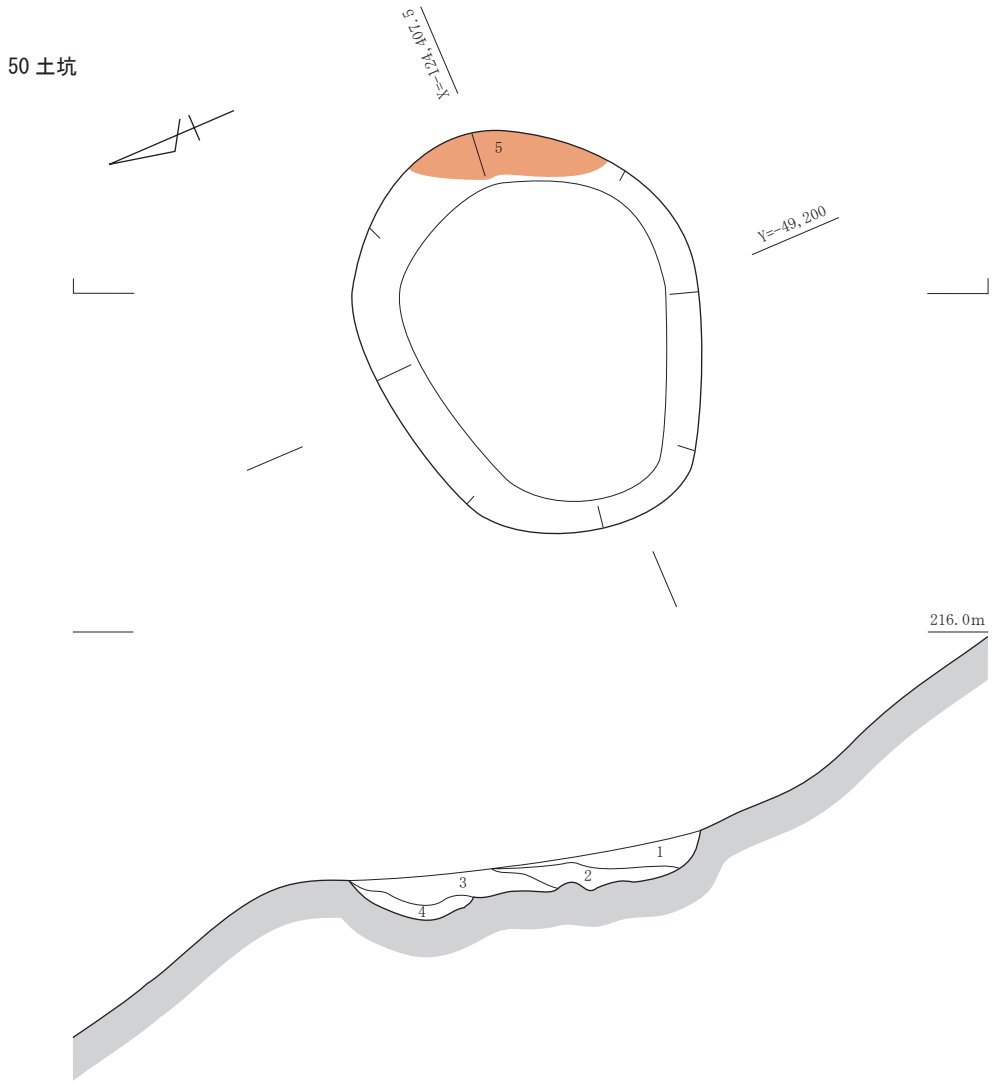
山頂頂上部の北側斜面にあたる、東端部の尾根状を呈する斜面中位に位置する。楕円形で、長径約1.1ｍ、短径約0.9ｍ、深さ約0.1ｍである。埋土に炭小片を多く含む。壁面の基盤層が橙色化しているのが認められ、被熱していると思われる。

埋土を洗浄したが、遺物は含まれていなかった。

57土坑（図70・78　図版48）

山頂頂上部の北側斜面にあたる、中央部の尾根状を呈する斜面中位に位置する。楕円形で、長径約0.9ｍ、短径約0.7ｍ、深さ約0.2ｍである。埋土に炭小片を含む。地形が高い側の壁面で基盤層が褐色化しているのが認められ、被熱していると思われる。

埋土を洗浄したが、遺物は含まれていなかった。



１．10YR5/4にぶい黄褐 小礫混シルト～細砂
２．2.5Y5/1黄灰 細砂混シルト（小礫を含む）
３．2.5Y2/1黒 細砂混シルト（小礫を少し含む　炭小片を多く含む）
４．2.5Y6/3にぶい黄 シルト～細砂（小礫を含む）
５．7.5YR6/6橙 小礫を非常に多く含むシルト～細砂〔基盤層　被熱痕跡〕
基盤層．2.5Y7/6明黄褐 小礫を非常に多く含むシルト～細砂（拳大～人頭大の礫を含む）

0　(1:20)　1 m

図 77　50 土坑　平面・断面図

58土坑（図70・78　図版48）

山頂頂上部の北側斜面にあたる、中央部の尾根状を呈する斜面中位に位置する。楕円形で、長径約1.1m、短径約0.9m、深さ約0.1mである。埋土に炭小片を多く含む。地形が高い側の壁面で基盤層が褐色化しているのが認められ、被熱していると思われる。

埋土を洗浄したが、遺物は含まれていなかった。

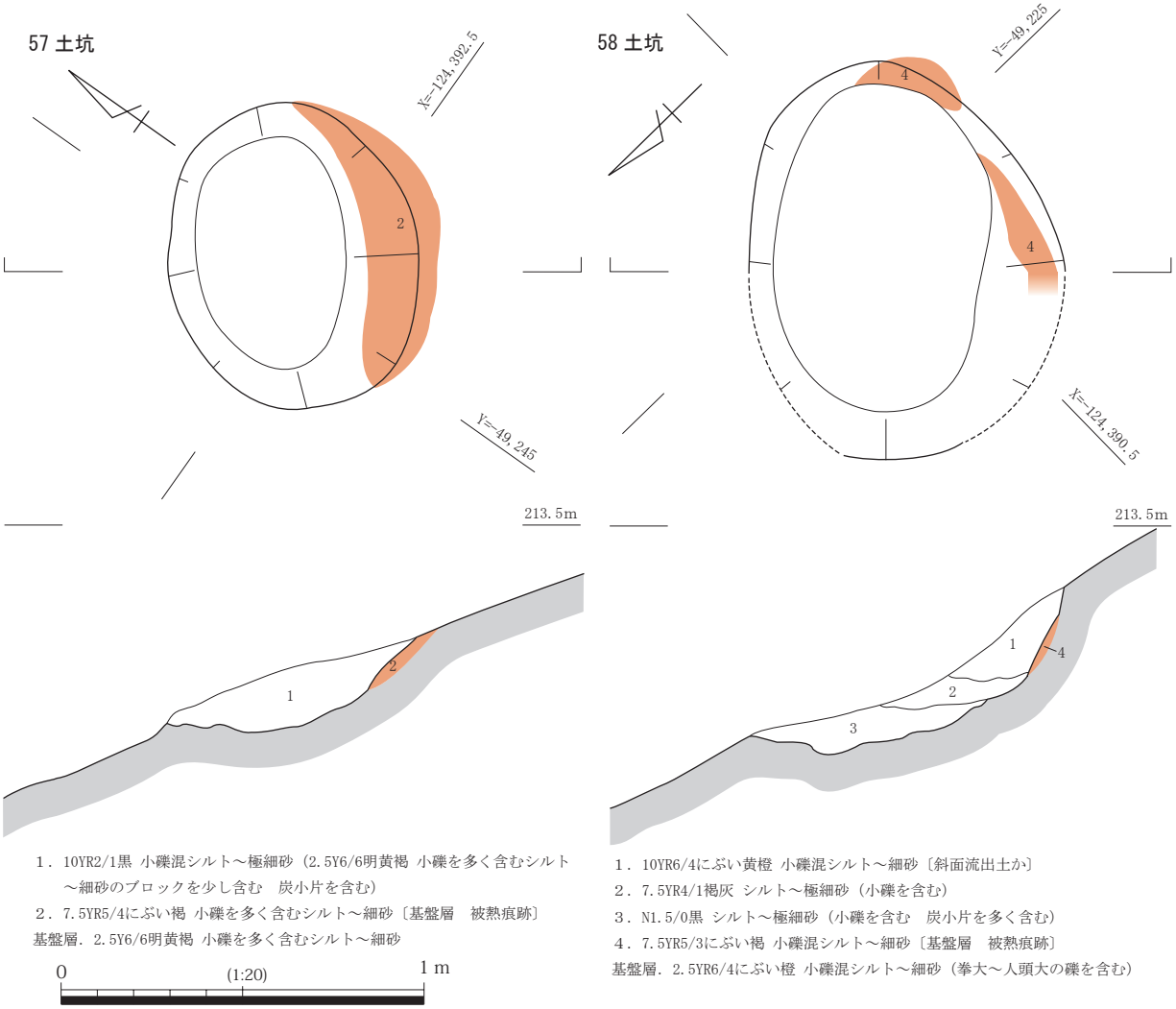


図 78　57・58 土坑　平面・断面図

第２項　下位部

北面斜面の下位である。西側が斜面上位からの谷筋芯部にあたっており、南東から北西に傾斜している。谷部には礫を多く含むシルト層等が厚く堆積していたが、土壌層が認められた。この土壌層までを第１層、土壌層以下を第２層とし、表土層を除去した第１層上面を第１面、土壌層を除去した第２層上面を第２面、第２層を除去した基盤層上面を第３面とした。

図 79　北面斜面下位部　第１面　平面図

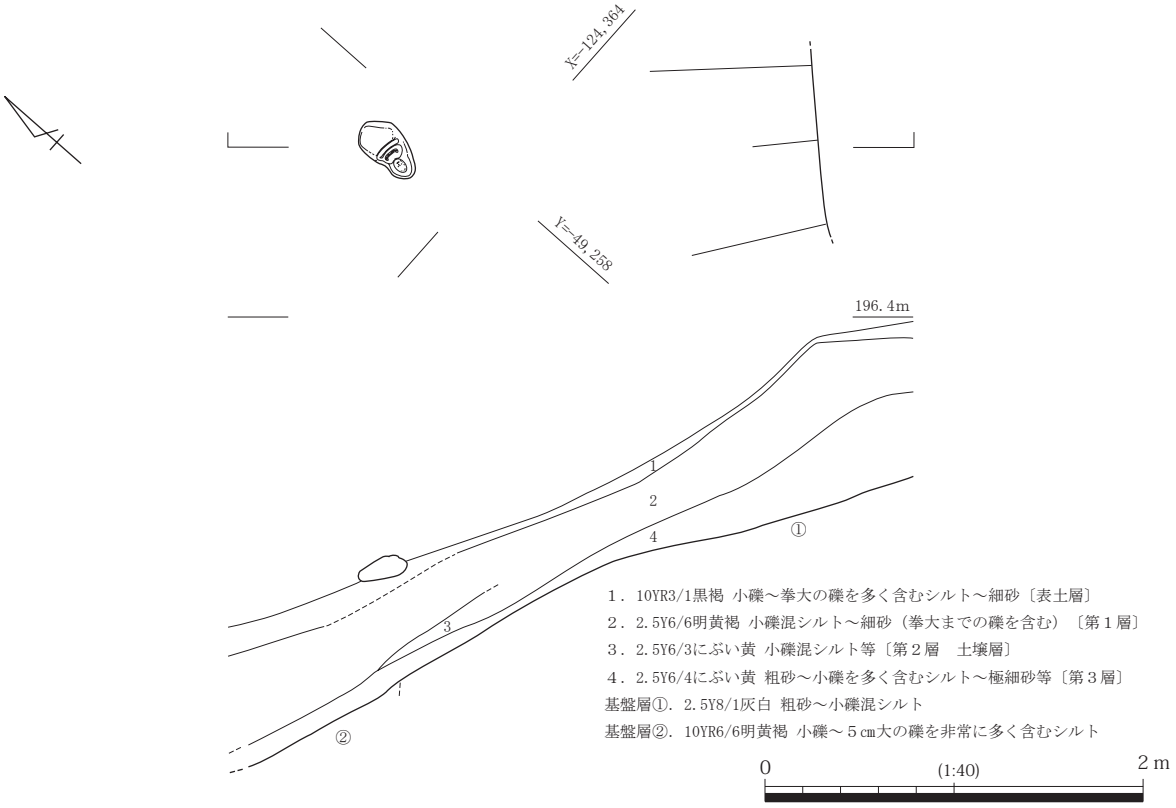


図 80　石塔出土地点Ｄ　平面・断面図

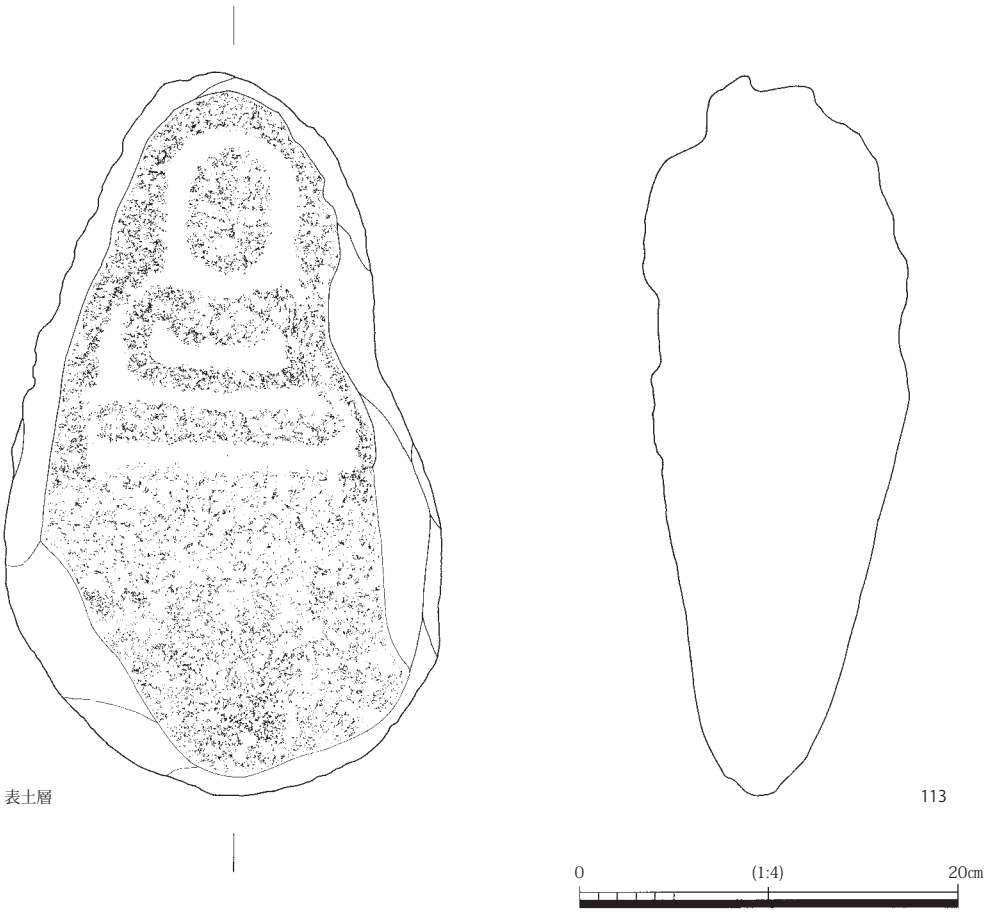


図 81　石塔出土地点Ｄ　出土遺物

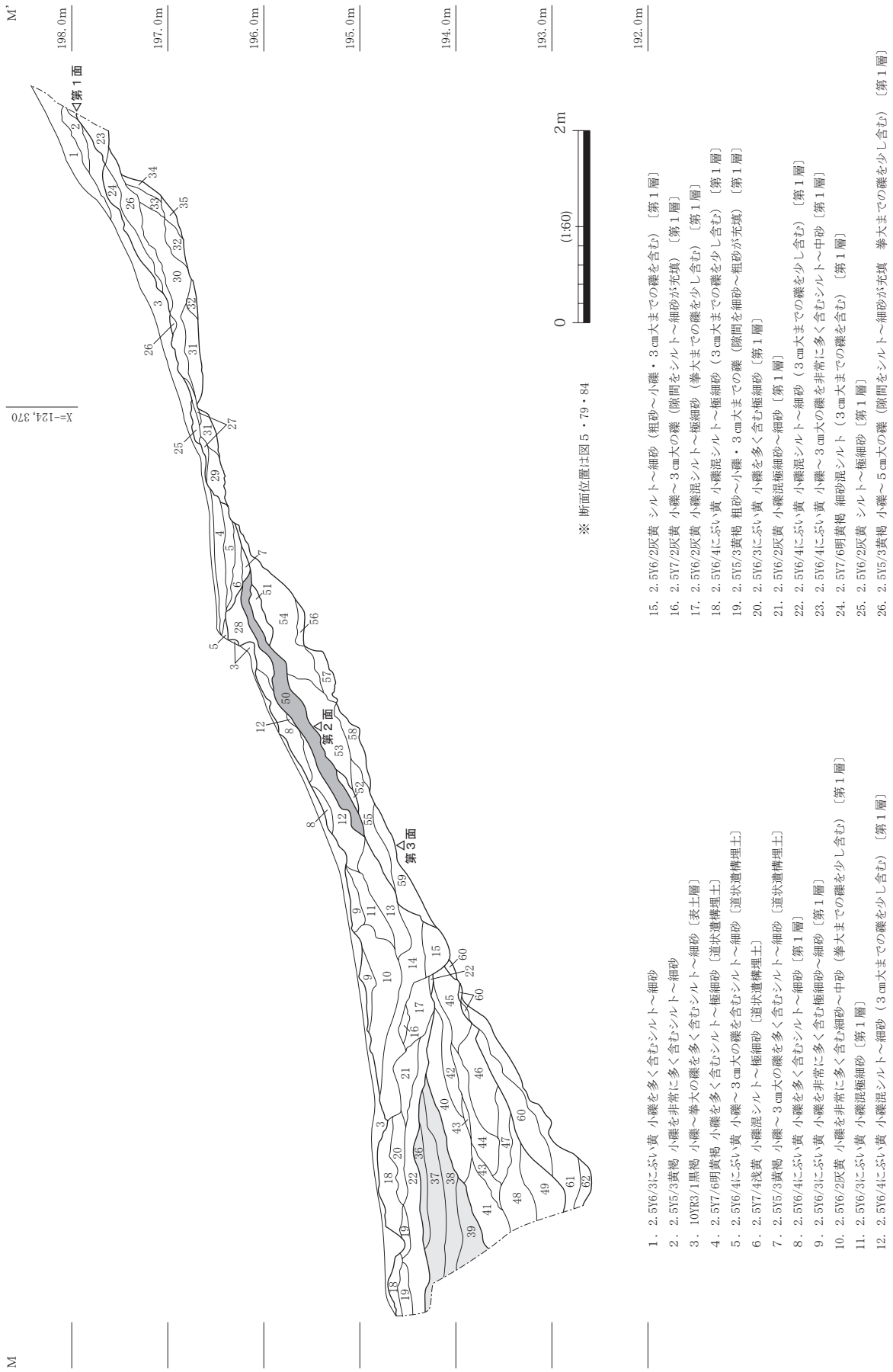

M'
M
198.0m
197.0m
196.0m
195.0m
194.0m
193.0m
192.0m
X=-124,370
第１面
第２面
第３面
0
(1:60)
2m
※ 断面位置は図５・79・84
1. 2.5Y6/3にぶい黄 小礫を多く含むシルト～細砂
2. 2.5Y5/3黄褐 小礫を非常に多く含むシルト～細砂
3. 10YR3/1黒褐 小礫～拳大の礫を多く含むシルト～細砂〔表土層〕
4. 2.5Y7/6明黄褐 小礫を多く含むシルト～極細砂〔道状遺構埋土〕
5. 2.5Y6/4にぶい黄 小礫～３cm大の礫を含むシルト～細砂〔道状遺構埋土〕
6. 2.5Y7/4浅黄 小礫混シルト～極細砂〔道状遺構埋土〕
7. 2.5Y5/3黄褐 小礫～３cm大の礫を多く含むシルト～細砂〔道状遺構埋土〕
8. 2.5Y6/4にぶい黄 小礫を多く含むシルト～細砂〔第１層〕
9. 2.5Y6/3にぶい黄 小礫を非常に多く含む極細砂～細砂〔第１層〕
10. 2.5Y6/2灰黄 小礫を非常に多く含む細砂～中砂（拳大までの礫を少し含む）〔第１層〕
11. 2.5Y6/3にぶい黄 小礫混極細砂〔第１層〕
12. 2.5Y6/4にぶい黄 小礫混シルト～細砂（３cm大までの礫を少し含む）〔第１層〕
13. 2.5Y6/3にぶい黄 小礫混シルト～極細砂（３cm大までの礫を少し含む）〔第１層〕
14. 2.5Y7/2灰黄 シルト～極細砂（５cm大までの礫を含む）〔第１層〕
15. 2.5Y6/2灰黄 シルト～細砂（粗砂～小礫・３cm大までの礫を含む）〔第１層〕
16. 2.5Y7/2灰黄 小礫～３cm大の礫（隙間をシルト～細砂が充填）〔第１層〕
17. 2.5Y6/2灰黄 小礫混シルト～極細砂（拳大までの礫を少し含む）〔第１層〕
18. 2.5Y6/4にぶい黄 小礫混シルト～極細砂（３cm大までの礫を少し含む）〔第１層〕
19. 2.5Y5/3黄褐 粗砂～小礫・３cm大までの礫（隙間を細砂～粗砂が充填）〔第１層〕
20. 2.5Y6/3にぶい黄 小礫を多く含む極細砂〔第１層〕
21. 2.5Y6/2灰黄 小礫混極細砂～細砂〔第１層〕
22. 2.5Y6/4にぶい黄 小礫混シルト～細砂（３cm大までの礫を少し含む）〔第１層〕
23. 2.5Y6/4にぶい黄 小礫～３cm大の礫を非常に多く含むシルト～中砂〔第１層〕
24. 2.5Y7/6明黄褐 細砂混シルト（３cm大までの礫を含む）〔第１層〕
25. 2.5Y6/2灰黄 シルト～極細砂〔第１層〕
26. 2.5Y5/3黄褐 小礫～５cm大の礫（隙間をシルト～細砂が充填　拳大までの礫を少し含む）〔第１層〕
27. 10YR6/6明黄褐 シルト（５cm大までの礫を少し含む　鉄分沈着）〔第１層〕
28. 2.5Y6/4にぶい黄 小礫混シルト～細砂〔第１層　盛土層〕

図 82　Mライン　断面図

１．第１面（図79 ～ 83　図版56）

表土層の下面である。中央部を南西から北東へとのびる幅１ｍの平坦面は、道と思われる。北側の集落へと続いている。地形の高い南東側を切土し、北西側に盛土して造成されている。そのさらに北西側は谷芯部にいたる斜面である。斜面で石仏を確認した。表土層から土師器鉢（114）等の小片が、第１層からは染付片とともに土師器皿、瓦器の磨耗した細片等が少量出土している。

なお、地形の高い南東部には、現況で崖状を呈する落ち込みがみられた。道に伴う盛土層を除去した基盤層上面で、基盤層を大きく削りこむ落ち込み群（図版49）として検出している。帰属面不明で、出土遺物もない。

石塔出土地点Ｄ（図79 ～ 81　図版56）

斜面部で、石仏が表土層に埋もれていた。表土層を除去して精査を行なったが、遺構は検出していない。斜面のより上部から転落したと思われる。石仏（113）は、阿弥陀如来座像で、円礫面を多く残し、背面上部の加工は非常に粗雑である。

２．第２面（図82・84 ～ 86　図版49）

土壌層を除去した、第２層上面である。地形の高い南東側は削平を受けており、土壌層は中央部から北西部のみに遺存している。第２層から土師器細片が出土している。

61 ～ 63溝（図82・84・85）

中央部の斜面で検出した、南西‐北東方向の溝群である。検出長は61溝で約10.8ｍ、深さはいずれも0.1ｍ以下である。63溝南西部、61溝北東部の埋土に角礫を多く含む。63、61、62の順で掘削されている。遺物は出土していない。

64・65ピット（図84・86）

61溝の南東肩部で検出した。径約0.3ｍ、深さ約0.1ｍである。遺物は出土していない。

３．第３面（図82・87）

基盤層上面で、谷地形を検出した。

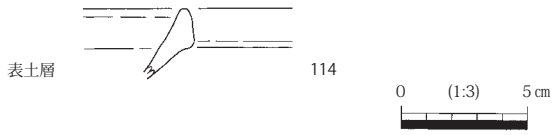


図 83　北面斜面　出土遺物

29. 2.5Y6/4にぶい黄 小礫を多く含むシルト～極細砂〔第１層　盛土層〕
30. 2.5Y7/6明黄褐 シルトと細砂～粗砂がブロック状に混じる（小礫～５㎝大の礫を含む）〔落ち込み〕
31. 2.5Y6/3にぶい黄 粗砂～小礫を非常に多く含むシルト～細砂（拳大までの礫を少し含む）〔落ち込み〕
32. 2.5Y6/2灰黄 粗砂～小礫（隙間をシルトと細砂が充填）〔落ち込み〕
33. 10YR6/6にぶい黄橙 粗砂～小礫を多く含むシルト～極細砂〔落ち込み〕
34. 10YR7/6明黄褐 粗砂～小礫混シルト〔落ち込み〕
35. 10YR7/6明黄褐 シルト（小礫を少し含む）〔落ち込み〕
36. 2.5Y5/3黄褐 小礫混極細砂～細砂（３㎝大までの礫を少し含む）〔第２層　土壌層〕
37. 2.5Y5/2暗灰黄 小礫を多く含むシルト～細砂（３㎝大までの礫を少し含む）〔第２層　土壌層〕
38. 2.5Y4/2暗灰黄 小礫～３㎝大の礫を多く含むシルト～極細砂〔第２層　土壌層〕
39. 2.5Y3/2黒褐 小礫～３㎝大の礫を多く含むシルト（細砂を少し含む）〔第２層　土壌層〕
40. 2.5Y6/3にぶい黄 粗砂～小礫・３㎝大までの礫を多く含むシルト～細砂〔第２層〕
41. 2.5Y5/3黄褐 粗砂～小礫・３㎝大までの礫を非常に多く含むシルト～細砂〔第２層〕
42. 2.5Y6/3にぶい黄 粗砂～小礫を非常に多く含む極細砂～細砂〔第２層〕
43. 2.5Y6/4にぶい黄 粗砂～小礫を多く含むシルト〔第２層〕
44. 2.5Y5/3黄褐 粗砂～小礫・３㎝大までの礫を非常に多く含むシルト〔第２層〕
45. 2.5Y6/4にぶい黄 シルトと粗砂～小礫がブロック状に混じる〔第２層〕
46. 2.5Y6/3にぶい黄 小礫～３㎝大の礫を非常に多く含むシルト〔第２層〕
47. 2.5Y6/2灰黄 粗砂～小礫（隙間をシルトが充填）〔第２層〕
48. 2.5Y6/2灰黄 小礫～５㎝大の礫（隙間をシルトが充填）〔第２層〕
49. 2.5Y6/3にぶい黄 粗砂～小礫・拳大までの礫を非常に多く含むシルト～細砂〔第２層〕
50. 2.5Y5/3黄褐 小礫混シルト～細砂〔第２層　土壌層〕
51. 2.5Y6/3黄褐 粗砂～小礫を多く含むシルト～細砂〔第２面61溝〕
52. 2.5Y6/3にぶい黄 粗砂～小礫を多く含むシルト～細砂〔第２面63溝〕
53. 2.5Y6/4にぶい黄 粗砂～小礫を多く含むシルト～極細砂（拳大までの礫を少し含む）〔第３層〕
54. 2.5Y6/4にぶい黄 小礫混シルト～極細砂（拳大までの礫を含む）〔第３層〕
55. 2.5Y6/4にぶい黄 小礫混シルト～細砂（拳大までの礫を含む）〔第３層〕
56. 2.5Y7/4浅黄 粗砂混シルト〔第３層〕
57. 2.5Y7/3浅黄 粗砂～小礫を多く含むシルト～細砂（拳大までの礫を含む）〔第３層〕
58. 2.5Y7/3浅黄 粗砂～小礫混シルト～極細砂〔第３層〕
59. 2.5Y7/3浅黄 粗砂～小礫を非常に多く含むシルト～細砂〔第３層〕
60. 2.5Y7/3浅黄 粗砂～小礫を非常に多く含むシルト〔第３層〕
61. 2.5Y7/4浅黄 粗砂～小礫混シルト〔第３層〕
62. 2.5Y8/2灰白 粗砂～小礫混粘土～シルト〔第３層〕

図 84　北面斜面下位部　第２面　平面図

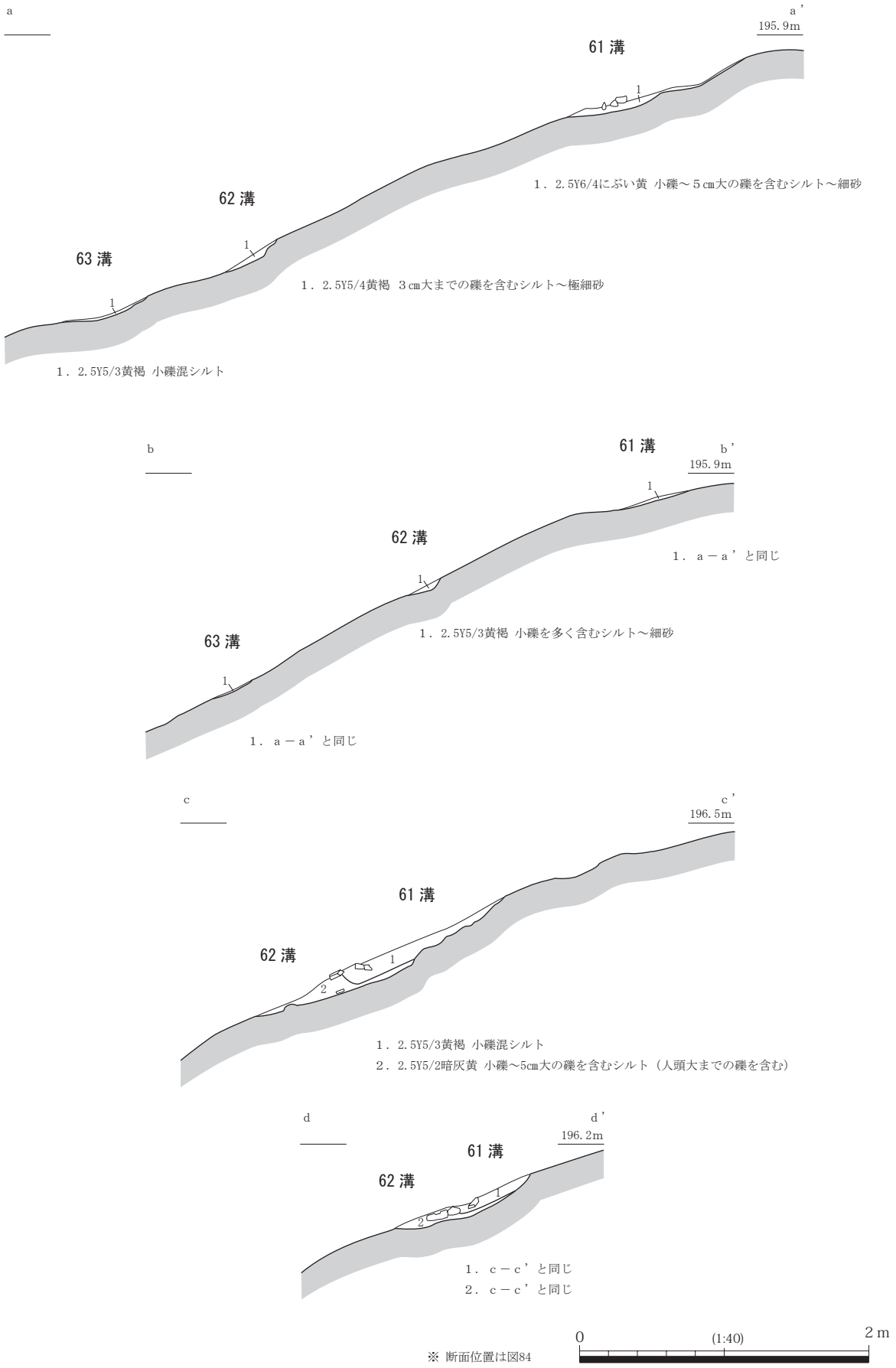


図 85　61 ～ 63 溝　断面図

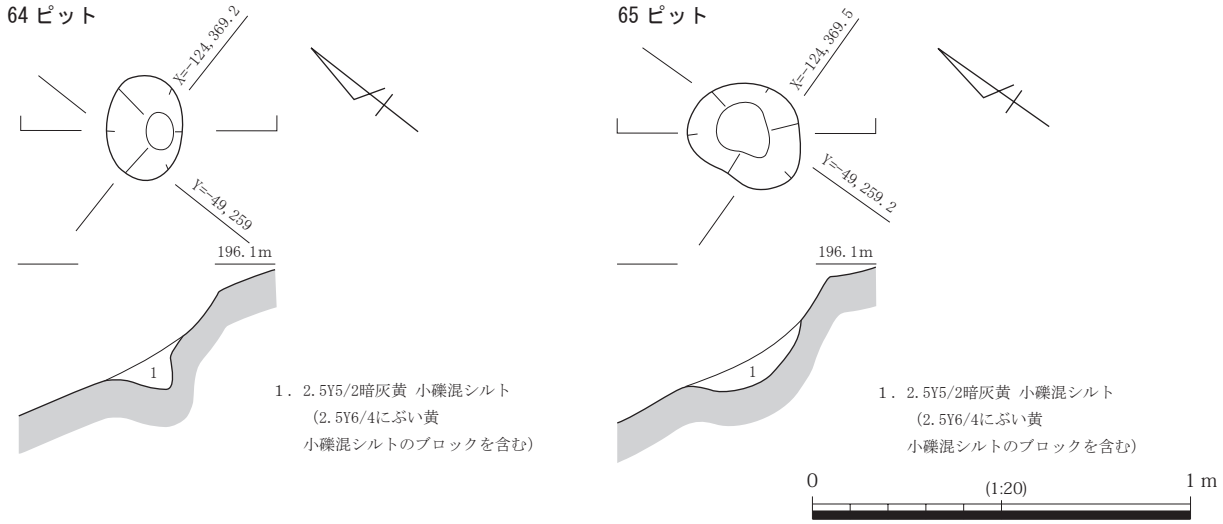


図 86　64・65 ピット　平面・断面図

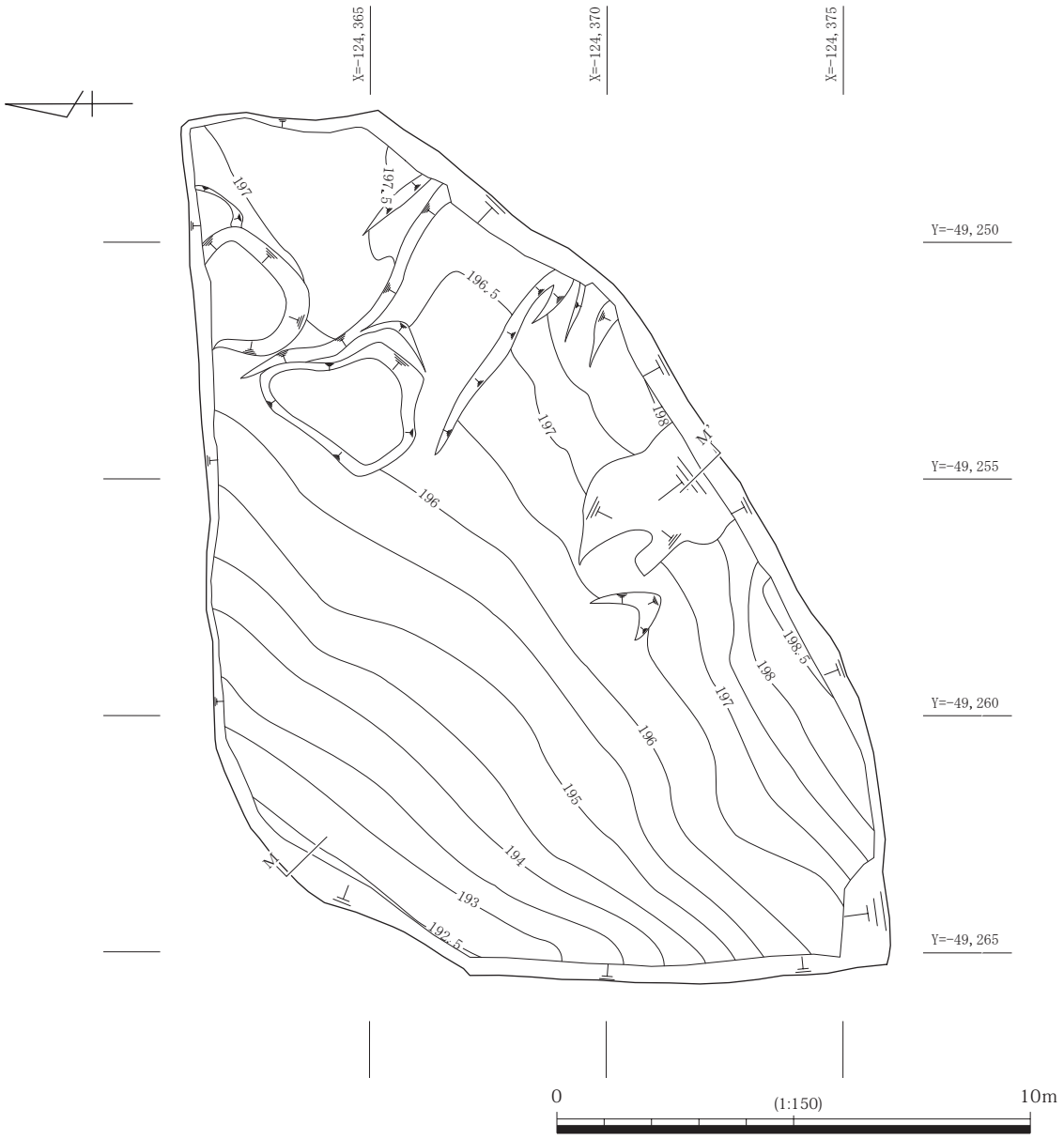


図 87　北面斜面下位部　第３面　平面図

第４章　自然科学による分析

第１節　止々呂美城跡火葬遺構出土人骨について

安　部　み　き　子

大阪府箕面市北西部端に位置する止々呂美城跡の、15世紀中葉から16・17世紀と想定される火葬遺構３基から火葬人骨が出土した。

火葬人骨は白色で小片に割れており、高温で被熱したと推測される歪みやクラックが見られた。したがって、骨の部位の同定や、年齢、性別の判定は困難であった。しかし、一部の出土骨は骨の形態をわずかにとどめていた。

16土坑　〔山頂棚田部〕

部位の同定ができたものは、左上顎の第２大臼歯と手または足の末節骨の２点であった。第２大臼歯は咬頭部エナメル質が一部破損しており、さらに被熱による収縮と歪みも大きかった。その他は、歯根の一部と長骨の破片が数点確認できた。

29土坑　〔山頂棚田部〕

部位の同定ができたものは、左側頭骨の錐体、後頭骨の内後頭隆起周辺、顎骨の歯槽の一部、頭蓋冠を構成する骨の一部、大臼歯や歯の破片や頚椎の椎体などである。その他、長骨の骨片が十数点確認された。

咬耗の無い下顎の第２大臼歯または第３大臼歯の歯冠が出土していることより、この土坑の被葬者は成年（15 ～ 20歳）と推測される。

２土坑　〔北面斜面上位部〕

この遺構の火葬人骨の保存状態は非常に悪く、最も良く遺存していた骨は長骨片で、約２㎝の骨片であった。

表１　止々呂美城跡から出土した主な火葬人骨

16 土坑

	出土層位	出土位置	出土部位	詳　　細	登録番号
1	３層	東部	左上顎第２大臼歯		752
2	３層	東部	歯	歯根の一部	759
3	３層	東部	手または足の末節骨		740
4	３層	西部	長骨片	歪みが大きい	347
5	３層	西部	長骨片	約６㎝遺存	667
6	３層	西部	長骨片	約 4.5 ㎝遺存	671
7	３層	中央部	長骨片	約 4.5 ㎝遺存	733

29 土坑

	出土層位	出土位置	出土部位	詳　　細	登録番号
8	３層上面	北東石と中央石の間	左側頭骨の錐体		913
9	３層上面	北東石と中央石の間	後頭骨	内後頭隆起周辺の横６㎝×縦３㎝遺存	917
10	３層上面	北東石と中央石の間	頭骨片	多数	913
11	３層上部	北東半部	頭骨片		1000
12	３層	―	上顎骨または下顎骨	歯槽部	1009
13	２層	北東半部中央	左右不明の下顎第２大臼歯？	歯冠のエナメル質のみ遺存、未咬耗の歯冠のみ	987
14	３層	北東石周辺	大臼歯片	エナメル質のみ遺存	1012
15	３層	―	歯	エナメル質のみ遺存	1009
16	１・２層	―	頚椎椎体の一部？		988
17	ii ´ 層	南西半部	長骨片	約１㎝遺存	506
18	３層	―	長骨片	約２㎝遺存	510
19	１・２層	南西半部	長骨片	約２㎝遺存	870
20	１・２層	南西半部	長骨片	約３㎝遺存	870
21	１層	中央部	長骨片	約４㎝遺存	871
22	１層	南西隅部	長骨片	約３㎝遺存	877
23	１層	南西半部	長骨片	約１㎝遺存	878
24	１層	南東辺中央部	長骨片	約２㎝遺存	880
25	２層	北東半部	長骨片	約３㎝遺存	883
26	２層	北東半部	長骨片	約 1.5 ㎝遺存	884
27	３層上面	中央石北西側	長骨片	約２㎝遺存	910
28	３層上面	南西隅部	長骨片	約２㎝遺存	921

２土坑

	出土層位	出土位置	出土部位	詳　　細	登録番号
29	―	北東半部	長骨片	約２㎝遺存	236

第２節　放射性炭素年代測定

１．試料と方法

遺構から検出された試料について、加速器質量分析法（ＡＭＳ法）による放射性炭素年代測定を行なった。測定試料の情報、調製データは表２のとおりである。

試料はいずれも炭化材で、分析に供された炭化材の中から、測定する上で良好な試料を抽出、採取し測定試料とした。

試料は調製後、加速器質量分析計（パレオ・ラボ、コンパクト AMS：NEC 製 1.5SDH）を用いて測定した。得られた ^{14}C 濃度について同位体分別効果の補正を行なった後、^{14}C 年代、暦年代を算出した。

２．結果

表３に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（$\delta^{13}C$）、同位体分別効果の補正を行なって暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した ^{14}C 年代を、図88・89に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下１桁を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行なうために記載した。

^{14}C 年代は AD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。^{14}C 年代（yrBP）の算出には、^{14}C の半減期として Libby の半減期5568年を使用した。また、付記した ^{14}C 年代誤差（± １ σ）は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の ^{14}C 年代がその ^{14}C 年代誤差内に入る確率が68.2％であることを示す。

なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。

暦年較正とは、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が5568年として算出された ^{14}C 年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動、及び半減期の違い（^{14}C の半減期5730±40年）を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

^{14}C 年代の暦年較正には OxCal4.1（較正曲線データ：IntCal09）を使用した。なお、１ σ 暦年代範囲は、OxCal の確率法を使用して算出された ^{14}C 年代誤差に相当する68.2％信頼限界の暦年代範囲であり、同様に２σ暦年代範囲は95.4％信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は ^{14}C 年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

３．まとめ

以下、２σ暦年代範囲（確率95.4％）を基に結果を整理する。

２土坑より出土した試料№１（PLD-20099）は、1515-1599 cal AD（71.3%）及び1617-1648 cal AD（24.1%）となり、16世紀前半～ 17世紀中頃の範囲を示した。

16土坑より出土した試料№２（PLD-20100）は、1514-1600 cal AD（72.1%）及び1616-1647 cal AD（23.3%）となり、16世紀前半～ 17世紀中頃の範囲を示した。

17土坑より出土した試料№３（PLD-20101）は、1672-1707 cal AD（15.6%）、1719-1779 cal AD（26.9%）、1797-1826 cal AD（11.9%）、1832-1885 cal AD（23.3%）及び1913-1943 cal AD（17.6%）となり、17世紀後半～ 20世紀中頃の範囲を示した。この時期は、較正曲線が平坦であり、暦年代が絞

表２　測定試料及び処理

測定番号	遺構データ	試料データ	前処理
PLD-20099	試料 No. 1 **北面斜面上位から中位部** 遺構：**２土坑**	試料の種類：炭化材 試料の性状：不明 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸 :1.2N, 水酸化ナトリウム :1N, 塩酸 :1.2N)
PLD-20100	試料 No. 2 **山頂棚田部 第２面** 遺構：**16 土坑** 層位：３層	試料の種類：炭化材 試料の性状：不明 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸 :1.2N, 水酸化ナトリウム :1N, 塩酸 :1.2N)
PLD-20101	試料 No. 3 **山頂棚田部 第２面** 遺構：**17 土坑**	試料の種類：炭化材 (枝材) 試料の性状：最終形成年輪 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸 :1.2N, 水酸化ナトリウム :1N, 塩酸 :1.2N)
PLD-20102	試料 No. 4 **山頂棚田部 第２面** 遺構：**12 土坑** 層位：３層	試料の種類：炭化材 試料の性状：不明 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸 :1.2N, 水酸化ナトリウム :1N, 塩酸 :1.2N)
PLD-20103	試料 No. 5 **山頂棚田部 第２面** 遺構：**13 土坑** 層位：３層	試料の種類：炭化材 試料の性状：最終形成年輪 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸 :1.2N, 水酸化ナトリウム :1N, 塩酸 :1.2N)
PLD-20104	試料 No. 6 **山頂棚田部 第２面** 遺構：**11 土坑** 層位：１層	試料の種類：炭化材 (枝材) 試料の性状：最終形成年輪 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸 :1.2N, 水酸化ナトリウム :1N, 塩酸 :1.2N)
PLD-22759	試料 No. 7 **山頂棚田部 第２面** 遺構：**29 土坑** 層位：３層上面検出材	種類 : 炭化材 (環孔材) 試料の性状 : 最終形成年輪 状態 :dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸 :1.2N, 水酸化ナトリウム :1.0N, 塩酸 :1.2N)
PLD-22760	試料 No. 8 **山頂遠構え部** **第１層（上層盛土）中** 遺構：**31 土坑**	種類 : 炭化材 試料の性状 : 樹皮 状態 :dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸 :1.2N, 水酸化ナトリウム :1.0N, 塩酸 :1.2N)
PLD-22761	試料 No. 9 **山頂遠構え部 第２面** 遺構：**32 土坑** 層位：２層	種類 : 炭化材 (散孔材) 試料の性状 : 最終形成年輪 状態 :dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸 :1.2N, 水酸化ナトリウム :1.0N, 塩酸 :1.2N)
PLD-22762	試料 No.10 **南面斜面部** 遺構：**38 土坑** 層位：２層	種類 : 炭化材 (クリ) 試料の性状 : 最終形成年輪 状態 :dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸 :1.2N, 水酸化ナトリウム :1.0N, 塩酸 :1.2N)
PLD-22763	試料 No.11 **南面谷部 第２面** 遺構：**41 土坑** 層位：５層	種類 : 炭化材 (クリ) 試料の性状 : 最終形成年輪 状態 :dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸 :1.2N, 水酸化ナトリウム :1.0N, 塩酸 :1.2N)
PLD-22764	試料 No.12 **南面谷部 第１面** 遺構：**44 土坑** 層位：３～５層	種類 : 炭化材 (散孔材) 試料の性状 : 不明 状態 :dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸 :1.2N, 水酸化ナトリウム :1.0N, 塩酸 :1.2N)
PLD-22765	試料 No.13 **南面谷部 第２面** 遺構：**46 土坑** 層位 : 炭層	種類 : 炭化材 (クリ) 試料の性状 : 最終形成年輪 状態 :dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸 :1.2N, 水酸化ナトリウム :1.0N, 塩酸 :1.2N)

表３　放射性炭素年代測定及び暦年較正の結果

測定番号	δ ^{13}C (‰)	暦年較正用年代 (yrBP ±１σ)	^{14}C 年代 (yrBP ±１σ)	^{14}C 年代を暦年代に較正した年代範囲	
				１σ暦年代範囲	２σ暦年代範囲
PLD-20099 試料 No. 1 **２土坑**	-25.67 ± 0.10	305 ± 18	305 ± 20	1523AD(53.3%)1572AD 1630AD(14.9%)1643AD	1515AD(71.3%)1599AD 1617AD(24.1%)1648AD
PLD-20100 試料 No. 2 **16 土坑**	-25.71 ± 0.11	307 ± 18	305 ± 20	1523AD(54.0%)1572AD 1630AD(14.2%)1643AD	1514AD(72.1%)1600AD 1616AD(23.3%)1647AD
PLD-20101 試料 No. 3 **17 土坑**	-25.95 ± 0.10	140 ± 18	140 ± 20	1681AD(10.7%)1696AD 1726AD(18.7%)1763AD 1801AD(8.2%)1814AD 1836AD(4.0%)1845AD 1851AD(12.1%)1877AD 1917AD(14.5%)1938AD	1672AD(15.6%)1707AD 1719AD(26.9%)1779AD 1797AD(11.9%)1826AD 1832AD(23.3%)1885AD 1913AD(17.6%)1943AD
PLD-20102 試料 No. 4 **12 土坑**	-26.56 ± 0.11	330 ± 18	330 ± 20	1512AD(12.1%)1529AD 1545AD(42.2%)1601AD 1617AD(13.9%)1634AD	1488AD(76.5%)1604AD 1610AD(18.9%)1639AD
PLD-20103 試料 No. 5 **13 土坑**	-25.83 ± 0.11	400 ± 19	400 ± 20	1447AD(68.2%)1480AD	1441AD(87.3%)1500AD 1508AD(0.6%)1511AD 1601AD(7.5%)1615AD
PLD-20104 試料 No. 6 **11 土坑**	-29.42 ± 0.10	318 ± 19	320 ± 20	1522AD(48.7%)1576AD 1582AD(6.8%)1591AD 1622AD(12.8%)1637AD	1493AD(75.5%)1603AD 1615AD(19.9%)1644AD
PLD-22759 試料 No. 7 **29 土坑**	-24.60 ± 0.18	526 ± 19	525 ± 20	1407AD(68.2%)1427AD	1330AD(2.9%)1339AD 1396AD(92.5%)1437AD
PLD-22760 試料 No. 8 **31 土坑**	-27.19 ± 0.23	615 ± 19	615 ± 20	1302AD(28.7%)1324AD 1346AD(27.5%)1367AD 1383AD(12.1%)1393AD	1296AD(95.4%)1399AD
PLD-22761 試料 No. 9 **32 土坑**	-28.87 ± 0.18	1135 ± 20	1135 ± 20	889AD(13.2%)900AD 918AD(55.0%)964AD	830AD(0.8%)837AD 868AD(94.6%)981AD
PLD-22762 試料 No.10 **38 土坑**	-27.85 ± 0.19	350 ± 19	350 ± 20	1485AD(30.7%)1522AD 1574AD(37.5%)1626AD	1463AD(42.9%)1529AD 1552AD(52.5%)1634AD
PLD-22763 試料 No.11 **41 土坑**	-25.55 ± 0.18	364 ± 20	365 ± 20	1468AD(45.9%)1517AD 1595AD(22.3%)1618AD	1453AD(56.4%)1524AD 1558AD(1.6%)1564AD 1570AD(37.4%)1631AD
PLD-22764 試料 No.12 **44 土坑**	-22.56 ± 0.24	328 ± 18	330 ± 20	1515AD(10.5%)1529AD 1544AD(44.5%)1600AD 1618AD(13.2%)1634AD	1490AD(76.5%)1603AD 1611AD(18.9%)1640AD
PLD-22765 試料 No.13 **46 土坑**	-24.61 ± 0.19	338 ± 19	340 ± 20	1495AD(21.2%)1524AD 1558AD(34.6%)1602AD 1616AD(12.4%)1631AD	1476AD(95.4%)1635AD

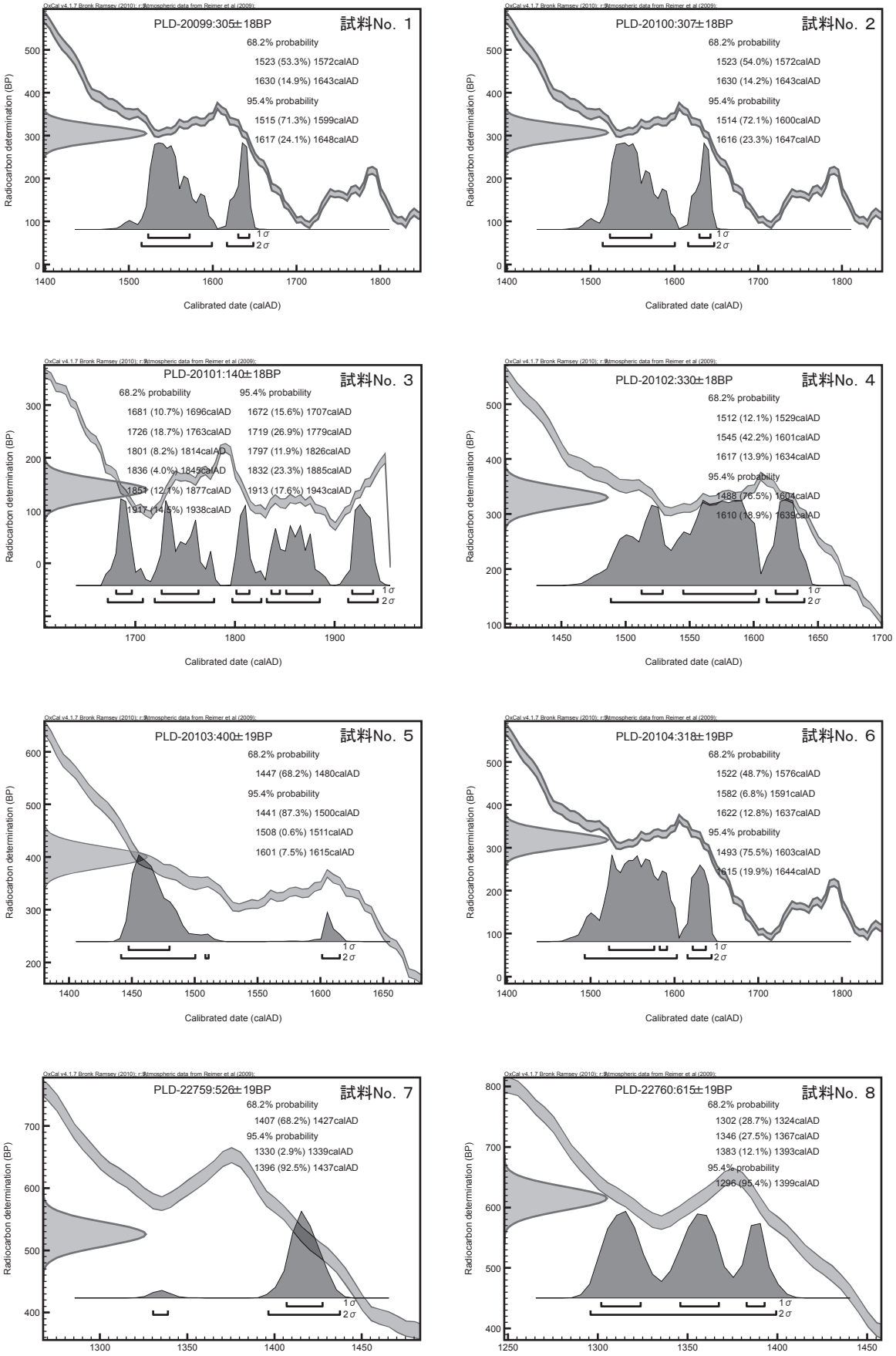

OxCal v4.1.7 Bronk Ramsey (2010); r:5 Atmospheric data from Reimer et al (2009);
PLD-20099:305±18BP
試料No. 1
68.2% probability
1523 (53.3%) 1572calAD
1630 (14.9%) 1643calAD
95.4% probability
1515 (71.3%) 1599calAD
1617 (24.1%) 1648calAD
PLD-20100:307±18BP
試料No. 2
68.2% probability
1523 (54.0%) 1572calAD
1630 (14.2%) 1643calAD
95.4% probability
1514 (72.1%) 1600calAD
1616 (23.3%) 1647calAD
PLD-20101:140±18BP
試料No. 3
68.2% probability
1681 (10.7%) 1696calAD
1726 (18.7%) 1763calAD
1801 (8.2%) 1814calAD
1836 (4.0%) 1845calAD
1857 (12.1%) 1877calAD
1917 (14.5%) 1938calAD
95.4% probability
1672 (15.6%) 1707calAD
1719 (26.9%) 1779calAD
1797 (11.9%) 1826calAD
1832 (23.3%) 1885calAD
1913 (17.6%) 1943calAD
PLD-20102:330±18BP
試料No. 4
68.2% probability
1512 (12.1%) 1529calAD
1545 (42.2%) 1601calAD
1617 (13.9%) 1634calAD
95.4% probability
1488 (76.5%) 1604calAD
1610 (18.9%) 1639calAD
PLD-20103:400±19BP
試料No. 5
68.2% probability
1447 (68.2%) 1480calAD
95.4% probability
1441 (87.3%) 1500calAD
1508 (0.6%) 1511calAD
1601 (7.5%) 1615calAD
PLD-20104:318±19BP
試料No. 6
68.2% probability
1522 (48.7%) 1576calAD
1582 (6.8%) 1591calAD
1622 (12.8%) 1637calAD
95.4% probability
1493 (75.5%) 1603calAD
1615 (19.9%) 1644calAD
PLD-22759:526±19BP
試料No. 7
68.2% probability
1407 (68.2%) 1427calAD
95.4% probability
1330 (2.9%) 1339calAD
1396 (92.5%) 1437calAD
PLD-22760:615±19BP
試料No. 8
68.2% probability
1302 (28.7%) 1324calAD
1346 (27.5%) 1367calAD
1383 (12.1%) 1393calAD
95.4% probability
1296 (95.4%) 1399calAD
Radiocarbon determination (BP)
Calibrated date (calAD)
1σ
2σ

図 88　暦年較正結果（1）

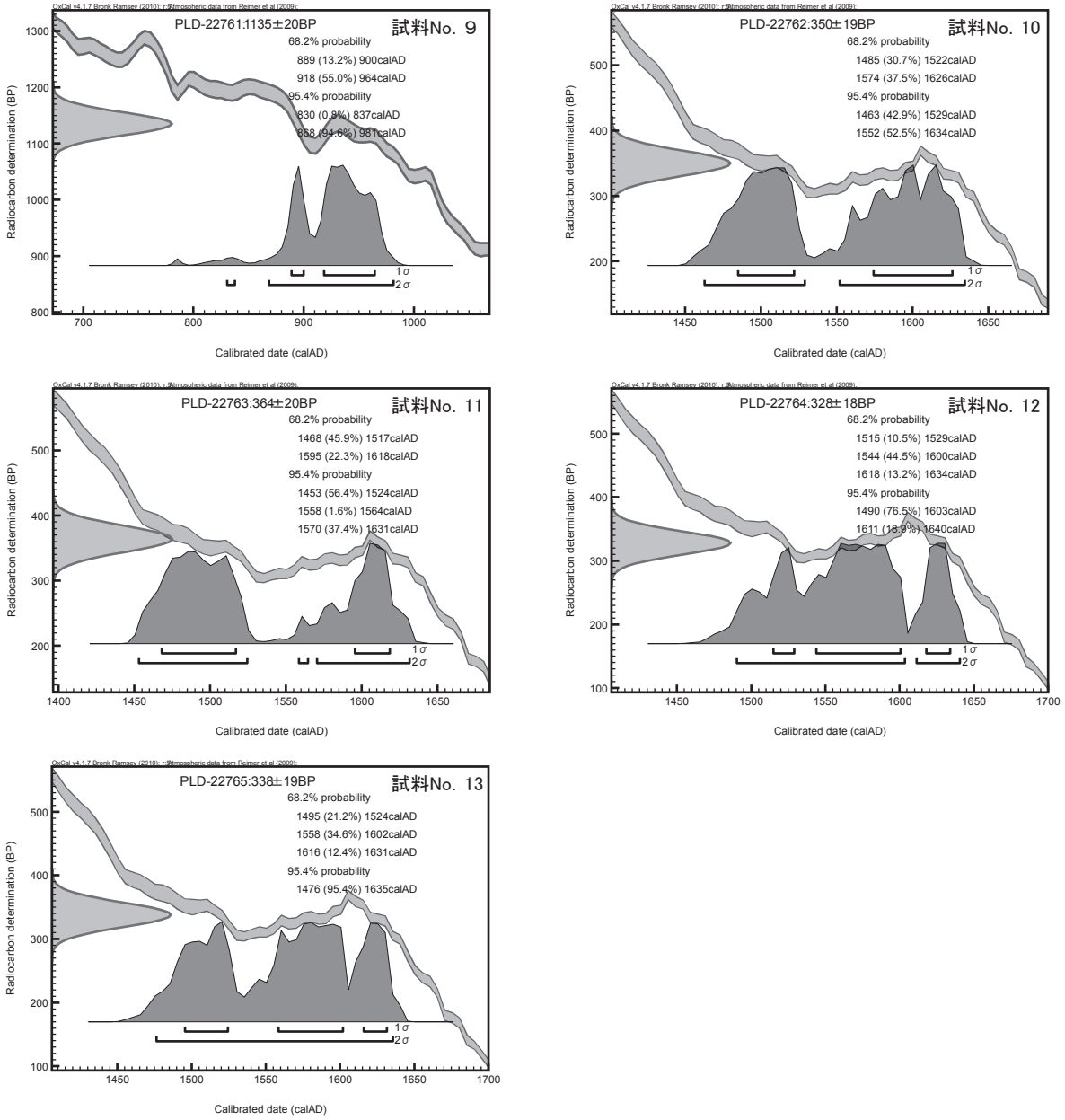


図 89　暦年較正結果（２）

り込み難い。

12土坑より出土した試料№.４（PLD-20102）は、1488-1604 cal AD（76.5%）及び1610-1639 cal AD（18.9%）となり、15世紀後半～ 17世紀前半の範囲を示した。

木材の場合、最外年輪部分を測定すると枯死・伐採年代が得られるが、内側の部分を測定すると最外部からの年輪分に応じて古い年代が得られる（古木効果）。試料№.１、№.２、№.４については、最外年輪の確認されていない試料であるため、古木効果の影響を考慮しておく必要がある。

13土坑より出土した試料№.５（PLD-20103）は、1441-1500 cal AD（87.3%）、1508-1511 cal AD（0.6%）及び1601-1615 cal AD（7.5%）となり、15世紀中頃～ 17世紀前半の範囲を示した。

11土坑より出土した試料№.６（PLD-20104）は、1493-1603 cal AD（75.5%）及び1615-1644 cal AD（19.9%）となり、15世紀末～ 17世紀中頃の範囲を示した。

29土坑より出土した試料 No. 7（PLD-22759）は、1330-1339 cal AD（2.9%）及び1396-1437 cal

AD（92.5%）となり、14世紀前半～ 15世紀前半の範囲を示した。

31土坑より出土した試料 No. 8（PLD-22760）は、1296-1399 cal AD（95.4%）となり、13世紀末～ 14世紀末の範囲を示した。なお、試料 No. 8は樹皮であり、樹種によって程度は異なるが外側に古い組織が残るため、枯死・伐採年代より多少古くなる。

32土坑より出土した試料No. 9（PLD-22761）は、830-837 cal AD（0.8%）及び868-981 cal AD（94.6%）となり、９世紀前半～ 10世紀後半の範囲を示した。

38土坑より出土した試料 No.10（PLD-22762）は、1463-1529 cal AD（42.9%）及び1552-1634 cal AD（52.5%）となり、15世紀後半～ 17世紀前半の範囲を示した。

41土坑より出土した試料 No.11（PLD-22763）は、1453-1524 cal AD（56.4%）、1558-1564 cal AD（1.6%）及び1570-1631 cal AD（37.4%）となり、15世紀中頃～ 17世紀前半の範囲を示した。

44土坑より出土した試料 No.12（PLD-22764）は、1490-1603 cal AD（76.5%）及び1611-1640 cal AD（18.9%）となり、15世紀末～ 17世紀前半の範囲を示した。なお、試料 No.12は部位不明であるため、最終形成年輪からの年輪分に応じて枯死・伐採年代より古い年代となる古木効果の影響を考慮する必要がある。

46土坑より出土した試料 No.13（PLD-22765）は、1476-1635 cal AD（95.4%）となり、15世紀後半～ 17世紀前半の範囲を示した。

〔参考文献〕

Bronk Ramsey, C.　2009　Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. Radiocarbon, 51(1)　337-360.

中村俊夫　2000 「放射性炭素年代測定法の基礎」日本先史時代の14C 年代編集委員会編『日本先史時代の14C 年代』 日本第四紀学会　3 -20.

Reimer, P.J., Baillie, M.G.L., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Buck, C.E., Burr, G.S., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Hajdas, I., Heaton, T.J., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kaiser, K.F., Kromer, B., McCormac, F.G., Manning, S.W., Reimer, R.W., Richards, D.A., Southon, J.R., Talamo, S., Turney, C.S.M., van der Plicht, J. and Weyhenmeyer C.E.　2009　IntCal09 and Marine09 Radiocarbon Age Calibration Curves, 0–50,000 Years cal BP. Radiocarbon, 51　1111-1150.

第５章　総括

「止々呂美城跡」は、摂丹山地を流れ下る余野川が造り出し、平安時代より荘園が営まれてきた、止々呂美の小さな平野を望む「尾根」である。余野川へと迫り出し、平野の南端を限っている。この尾根先端の頂部に、止々呂美城の城郭遺構をみることができる。今回、新名神高速道路の建設地となり調査を行なったのは、先端部以遠、山稜に取り付くまでの尾根部分、15,580㎡である。今後、この尾根部分は削られ平坦化されて、城郭遺構を残す尾根先端部と山稜の間に高速道路が通ることになる。今回の調査における最大の成果は、止々呂美城が立地していた、この地形を記録し得たことにあるといえる。

以下、検出した遺構、遺物を古い順から整理し、まとめにかえたい。

今回の調査で確認した最も古い遺物は、山頂の棚田造成時の盛土層から出土した、弥生土器甕片である。しかし、この時代の遺物はこれのみで、遺構も検出しておらず、詳細は不明といわざるを得ない。

止々呂美城跡で確かな人間活動が認められるのは、13世紀代である。調査地最高所である山頂頂上部に、13世紀後葉のほぼ完形の瓦器椀を持つ、長方形土坑がある。その近傍でも同様な瓦器椀が出土しており、ほかにも遺構が存在した可能性がある。

頂上部を南へ下った南面斜面上位においても、斜面堆積層内から13世紀以降のものを中心とする土器小片が出土している。そのほか、南面斜面の相対的に傾斜が緩やかな箇所でも、僅かではあるが13世紀以降の土器片が散見される。南面斜面の上位は、後述する棚田水路等を設けるために造成された箇所にあたり、遺構等が存在していた可能性もある。前述の土坑以外に遺構を検出しておらず、出土土器も小片、少量であるため、積極的に土地利用されていたとはいい難いが、13世紀頃からこの尾根に人間の活動が及びはじめたのは確かといえる。

山頂棚田部及び北面斜面上位において、火葬遺構を３基検出した[1)]。被熱痕跡が認められ、骨片と釘が出土している。２基（16・29土坑）は南の谷筋を、１基（２土坑）は奥山川の谷筋及び下止々呂美集落を望む立地である。

29土坑は平面方形で、底面に棺台の石が据えられており、その周囲に燃料かと思われる炭化材及び骨片がみられた。土坑隅には火葬後に土師器皿が置かれており、15世紀中葉の時期が与えられる。歯冠の鑑定から、被葬者は15～20歳の成年と推定される。16土坑は大きく削平を受けているが、骨片、釘[2)]のほか、棺材かとも思われる炭化板材を検出した。放射性炭素年代測定では、16世紀前葉～17世紀中葉の時期が示されている。２土坑は平面楕円形で、骨片、釘のほか、数珠と思われる珠類が出土した。前記２基は棚田造成時に削平を受けているため不明であるが、唯一埋土上に石組みを検出している。縁部に大形の石を配し、中央部に小形の石を集める。中央部の石の下に骨片が集中しており、拾骨、納骨を行ない、石組みを墓標とする墓としたと思われる。石組みを築いた後、一定の期間を経た後に置かれたと思われる土師器皿も出土している。16世紀のものである。

29土坑に近い南面斜面で、組合式五輪塔部材、一石五輪塔、石仏が出土している。棚田造成時またはそれ以降に、山頂から大形の角礫とともに斜面に投下された状況である。また、調査地内では北面斜面下位に現況で石仏が存在したほか、山頂棚田部と隣接する調査地外には、多数集積されている箇所も

含め、石塔類が複数箇所で認められる。これらの石塔類は、小畑遺跡の調査成果から、墓標であった可能性が高い。

余野川対岸の尾根に立地する小畑遺跡で調査された墓群は、203基の石組墓からなり、まさに在地の集団墓地といえる。墓壙上に石組みを伴い、内部に炭化物や火葬骨を含むものを基本とし、壁面に被熱痕跡が認められるものもある。五輪塔部材、石仏16体（うち15体が阿弥陀如来）も検出されており、墓上に設置されていたと思われる。副葬品を持つものは少ないものの、13世紀後葉～15世紀の時期が与えられる。

石塔類の存在、棚田造成による地形改変等から、墓地と呼べる規模かは別として、止々呂美城跡にも墓群が存在した可能性が高い。ただ、盛土層やその斜面流出土層から出土した遺物は極めて少なく、棚田部に限れば、中世のものは皆無であった。石塔類の出土は調査地西端に限られているが、現況での分布は調査地西部を東端として、西は城郭遺構を残す尾根先端に及んでいる。これらのことから、墓群の中心は調査地西側である可能性が高いと思われる。

小畑遺跡の墓地との関係については、火葬遺構３基がいずれも小畑遺跡の墓群の終期及びそれ以降の時期にあたっていること以外に情報がない[3)]。ただ、南面斜面出土のものと酷似する石仏を、調査地西側の尾根上のみならず、小畑遺跡の山裾に建つ薬師堂でもみることができる。このことから、下止々呂美内に、複数の墓所が同時に存在していた可能性は高いと考えられる。また、小畑遺跡の最も古い墓は、13世紀後葉の瓦器椀を持つ。先述した頂上部に立地する瓦器椀を持つ土坑について、形状は異なるものの、これと同時期の墓である可能性を指摘しておきたい[4)]。

止々呂美城に関する成果は、掘切を２本検出したことである。尾根先端の城郭遺構がみられる箇所より約300ｍ離れた、尾根が山稜に取り付く手前で最もその幅を狭め、両サイドが急峻な斜面となる箇所である。止々呂美城の「遠構え」として位置付けられる。

36掘切は、尾根筋において頂部の幅が最も狭くなり、かつ標高が最も低くなる地点に、尾根に直交して掘削されている。33堀切は、その南で幅を広げた尾根が山稜に取り付く手前でまたその幅をやや狭める箇所に、尾根に直交して掘削されている。両者とも断面形はＶ字状で、長さ５～６ｍ、最大幅2.3～2.4ｍ、深さ約0.8ｍである。

両堀切の間は約22ｍである。溝１条、ピット１基、土坑１基、被熱した可能性のある土坑１基、集石遺構を検出しているが、肝心の尾根幅の最も広くなる南部分が直上層により攪乱されており、詳細が不明である。ただ、遺構、表土層（第３層）及び斜面から谷の堆積層内も含め、遺物が１点も出土していないことから、ここで日常的な活動があった可能性は低いといえる。遠構えにおける駐留施設等の存在について、積極的に肯定する材料はない状況である。

さて、上記の遺構群を検出したのは、盛土によって造成された面（第２面）である。基盤層上に基盤層と酷似する盛土（第４層下層盛土層）が施されていた。基盤層上面（第３面）の尾根頂部には、若干の緩斜面はあるものの、平坦な面はない。特に、36掘切辺りは最も標高の低い地点であるが、以南は急に標高を上げており、堀切の南側は、急傾斜の斜面となっていた。盛土が施された後の第２面において、地形が最も変化しているのはこの地点である。斜面の低い側に厚く盛土が施され、基盤層上面に存在した急傾斜がなくなっている。つまり、盛土施工の結果、第２面の尾根頂部は、第３面で見られた凹凸が解消し、平坦になっているのである。この盛土による造成の目的は、尾根頂部を平坦化することに

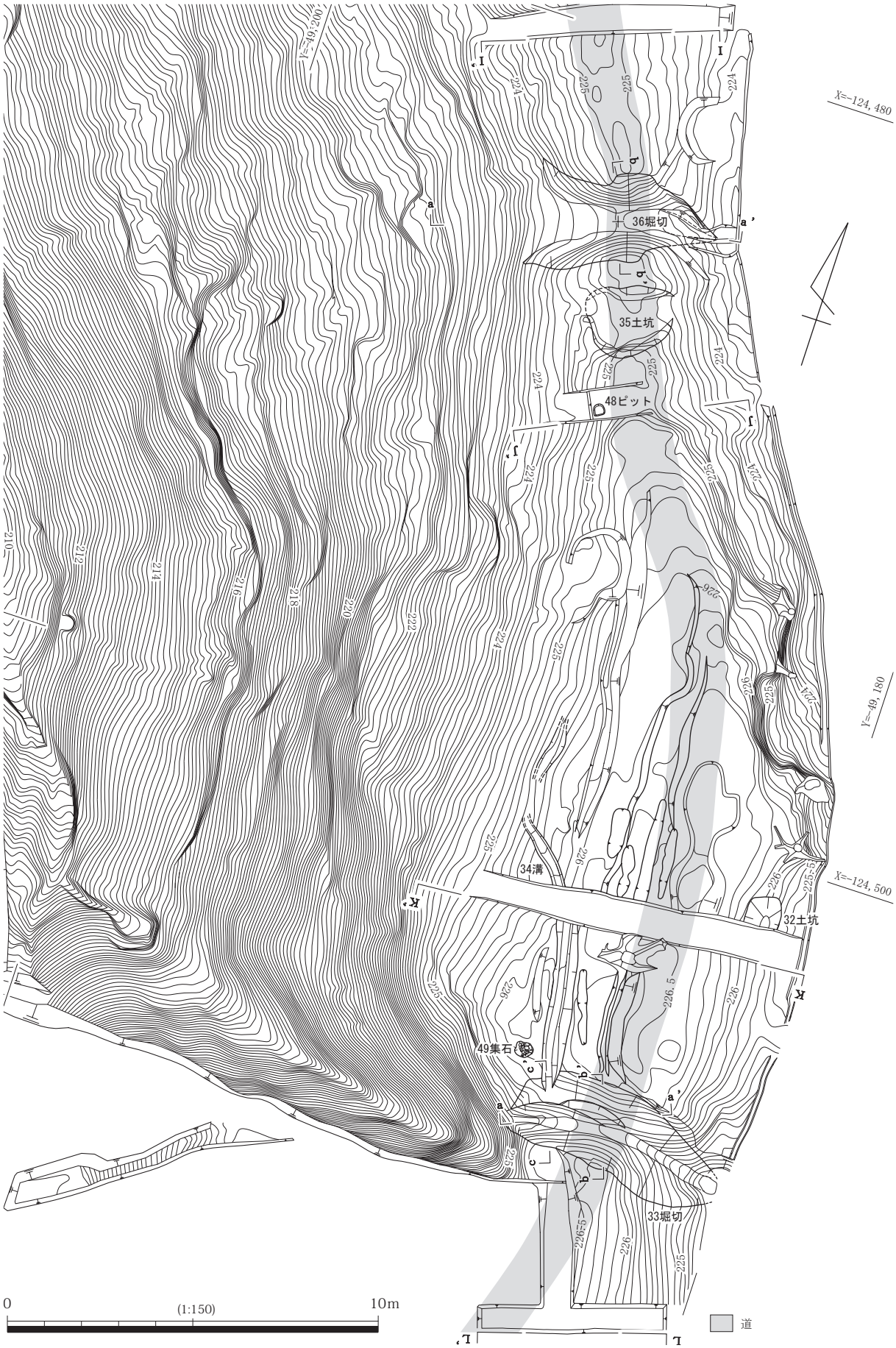


図 90　止々呂美城　遠構え

あったといえる。

造成された尾根頂部には、北部が低く南部が高いという標高差はあるものの、その間に段差等は存在しない。先述したように南部は削平を受けているため詳細不明であるが、遺構面の遺存状態が良い北部では、頂部に幅1.7ｍ程の平坦面が認められた。断面図（図35　Ｊライン断面）より、その断面形が台形状であることが確認できる。

問題は、この平坦面が設けられた意味についてである。上記の北部で認められた平坦面は、36堀切の周辺にあたるが、堀切を設けるために周囲をわざわざ平坦に造成する必要はない。むしろ原地形の急斜面を利用したほうが、堀切の遮断機能にとって効果的であるといえる。このことから、平坦面は堀切が掘削される際にはすでに存在していた、と考えるのが自然である。

この平坦面について、村田修三氏より「道」ではないかとの指摘をいただいた。この解釈は、基盤層上面に施された盛土造成のあり方、平坦面の平面及び断面形状等、これまで述べてきた発掘調査で得られたデータに照らし、肯首できるものである。[5)] なにより、遠構えとしてここに堀切を構える意義は、もとより道が存在してこそ成り立つものといえる。

南部の削平を受けた箇所も含め、等高線から「道」を復元し、図90に示しておく。なお、36堀切は、丹念に埋め戻された後に、その上面が表土化している。堀切が不要になり、この尾根が再び道として利用されていた可能性がある。

調査地内における道の行方については、遠構え部北端より頂上部へ登ってしまうと、三方急斜面となり、その先へ降りることがままならない。同じレベルを維持したまま南面斜面を通って頂上部をかわし、西部のより標高の低い箇所へ至っていた、とするのが妥当かと思われる。その先、奥山川の谷筋へと下るルートは、調査地西部の北面斜面の緩傾斜地点、または調査地西端部に隣接する里道等、複数箇所に想定することが可能である。前述した南面斜面の同レベルには、盛土、切土により造成された、棚田の水路が通っていた。盛土内に土壌層は認められず、遺物も皆無であったため、詳細は不明といわざるを得ないが、遠構え部より続いていた「道」を利用して造成された可能性を指摘しておきたい。

最後に、尾根上に営まれた棚田について触れておく。図91に、第１面として全体図を示した。尾根西部に８筆の棚田が設けられている。用水は、奥山川沿いの「奥ノ所」集落の南端に現集落の水源地があるが、そのさらに奥の地点から引かれていたと思われる。１溝は、調査地南東端以南の奥山川沿いの斜面から、遠構え部、頂上部南縁斜面を通り、棚田へ至る。排水は、北面及び南面斜面へと落としていた。

棚田及び用水路である１溝は、18世紀以降に、尾根に大規模な盛土、切土を施工することにより、造成されたものである。[6)] 当然のことながら、溜水する必要から水田面は水平でなければならない。また、流水させる必要から用水路はその設置レベルが重要となる。原地形にかなりの凹凸が存在したことは容易に想像できることであり、当時の土木技術の高さが窺える。と同時に、造成に携わった当時の止々呂美の人々の姿に、足場の悪い急傾斜の斜面で硬い礫層を掘削するため、つるはしを振るい続けた発掘調査中の作業員の姿を重ね合わせれば、いかに多大な努力があったかを慮ることができる。

この棚田が営まれていた頃の遺物として、南の谷筋で出土した「摂州豊嶋郡下止呂美村」「寛政四子（1792）年観音講中」「京六条出羽宗味作」の銘を持つ伏鉦がある。作者は、寛文９（1669）年以降百十年間ほど世襲された、京都の鋳物師「出羽大掾宗味」と思われ、上止々呂美の養谷寺にも延宝８（1680）年の「天下一出羽大掾宗味作」の銘を持つ半鐘が現存している。上止々呂美では、観音講が吉

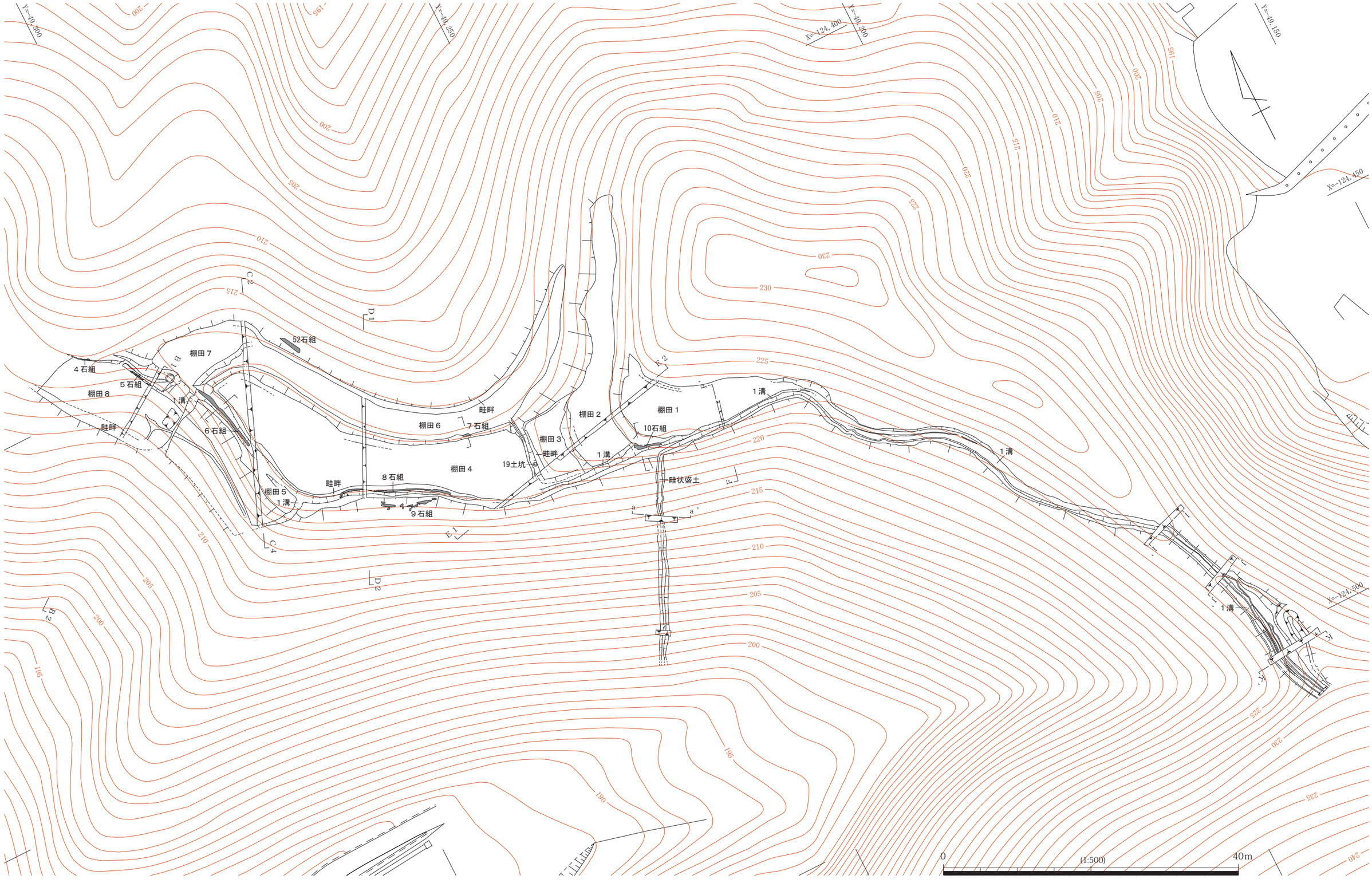


図 91　山頂　第１面　平面図

水講として毎月行なわれており、鉦、撞木と鈴を用いて年配の女性が御詠歌、吉水音頭を練習するそうである。講員は原則養谷寺の檀家という。調査地南東端部の斜面下にあたる奥山川沿いの谷筋には、「観世音菩薩」と刻まれた石碑がみられ、止々呂美の人々の観音信仰を知ることができる。

〔註〕

１）山頂棚田部及び北面斜面において、埋土に炭片を含む土坑を検出し、そのうちのいくつかでは被熱痕跡を確認している。埋土を洗浄したが骨片等は検出しておらず、火葬遺構とした３基の埋土内に含まれる骨片の量を勘案すれば、火葬遺構である可能性は低いのではないかと考えている。

２）火葬遺構３基から出土した釘について、頭部の形状が確認できるものは、すべて頭巻（かしらまき）であった。頭巻釘は、隠し釘（忍釘）として使用されたといわれており、棺に用いる釘として適していたと思われる。同じ箕面市域の粟生間谷遺跡では、中世前期の土壙墓が検出されているが、同様に頭巻釘が出土しており、より古い時代から棺にこの釘が使用されてきたようである。

３）止々呂美城との関係についても、検討する材料に乏しい。城が機能していた時期と重なる可能性もあるが、石仏をはじめとする石塔類が在地のものと類似していること等から、あくまでも在地の墓所であると考えたい。

４）茨木市所在の佐保栗栖山南墳墓群も、中世後期に展開する集団墓地であるが、最も古い墓は13世紀後葉の長方形土壙墓である。周辺地域の箕面市粟生間谷遺跡、茨木市総持寺遺跡、豊中市小曽根遺跡等でみられるように、13世紀中葉以前の中世前期には、集落内に特定個人のものと想定される墓が築かれることが多い。中世後期になると、小畑遺跡、佐保栗栖山南墳墓群のように、集落から離れた山頂等に集団墓地が展開する。13世紀後葉はまさにその狭間の時期にあたっており、墓は集落から離れた立地を選ぶが、その数は限定されており、集団墓地の呈はなしていないようである。

５）発掘調査の成果ではないが、現場での体感として、第２面調査中は堀切箇所を除いて尾根上での移動が容易であったのに対し、第３面を検出した後は、尾根上での移動に困難と危険が伴ったことを書き添えておく。

６）調査成果の棚田の項に記したが、調査地西端部以西は、少なくとも２度の造成を経て、現在みられる広大な平坦地とされた可能性がある。さらに西の城郭遺構を残す箇所との関連で重要となるので、ここに再度記しておく。

〔参考文献〕

財団法人大阪府文化財調査研究センター　1998 『総持寺遺跡』

財団法人大阪府文化財調査研究センター　1998 『小畑遺跡』

財団法人大阪府文化財調査研究センター　2000 『栗栖山南墳墓群』

箕面市文化財総合調査団・箕面市教育委員会　2002 『箕面市文化財総合調査報告書Ⅱ　旧箕面地区・旧止々呂美地区』

財団法人大阪府文化財センター　2003 『粟生間谷遺跡　古代・中世編』

豊中市史編さん委員会　2005 『新修豊中市史　第４巻　考古』

付論　発掘調査成果による止々呂美城の再評価

村　田　修　三

1．城跡中心部の縄張り

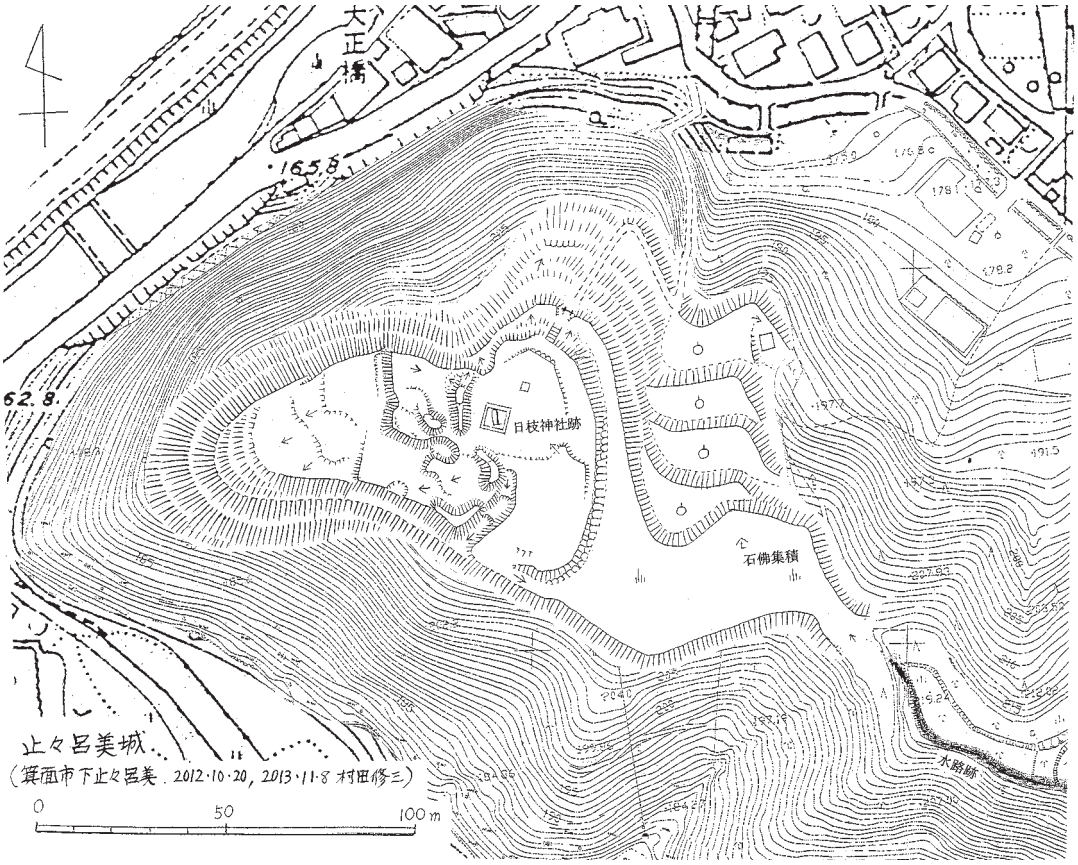
当城は余野川（下流は久安寺川）沿いの河谷盆地の南端、これより先は河岸が断崖絶壁続きになるという際（きわ）に迫り出した尾根上に位置する（第１図）。下止々呂美の日枝神社の旧境内と重複して撹乱されているが、土塁や空堀等の遺構が確認できる。『日本城郭大系』では「塩山城」の名で紹介され、「止々呂美城」は上止々呂美の宮山にあてている。[1] その典拠となった『大阪府全誌』には「止々呂美城址は（上止々呂美の）西方天神ケ尾山に接する宮山是れなり。一に城山とも呼べり。一堆の岡を為し（中略）其の背後は山嶺重畳して」云々と紹介されている。[2] 現地は山裾の緩傾斜地で二段の削平地があり、下の棚田（字「向所」）から仰ぐと「一堆の岡」と見えなくもないが、天神ケ尾山全体から見ると端末の裾の一部にすぎない。削平地は明治40年に止々呂美神社に合祀された天満神社（天神さん）の跡地だと思われる。神社と城跡が重複しても差し支えないが、この地形では城跡と判断するのは無理である。背後の「山嶺」も含めて「城山」と呼ばれた可能性もあるので、標高294メートルの山頂部を踏査したが、山仕事跡らしいわずかな削平は見られるものの、ほとんど自然地形のままであった。念のためこの山続きで上止々呂美の中心集落「上ノ所」（かみんじょ）を見下ろす複数の尾根を踏査したが、城跡と思しき地形は見出せなかった。それゆえ今回調査対象となった下止々呂美の城跡（伝「塩山城」）以外に止々呂美城は存在しないと判断し、これを地名主義の原則に従い止々呂美城と呼んで、以下考察を進める。

改めて当城の立地を確認することから始めよう。余野川沿いの止々呂美の小盆地が狭まって急崖に阻まれる際に迫り出した比高64メートル（西下川岸との差）の丘上（字「宮山」、便宜上城山と仮称）にあるが、三方は急斜面で東南だけが尾根続きとなる。丘頂は径50～60メートルの卵形の平坦面で、その西は緩い下降斜面が舌状に続き、数十メートルで急斜面に転ずる。平坦面のほぼ中央に方形の基壇跡がある。明治40年に天満神社とともに止々呂美神社に合祀された日枝神社の跡である（第２図）。基壇跡から東方にも平坦面が続くが、急に南北の崖線で比高10メートル近く落ち込む。その東方は最近重機が走ったような耕作地跡が続き、幅狭くなって今回の発掘調査地、すなわち新名神高速道路建設予定地となる。耕作地跡は米軍の空中写真でもほぼ同じ範囲が水田として確認できるが、現在の崖線は垂直に落ちて生々しいので、水田を潰して果樹園にし直すための土木工事をやりすぎて凄い落差になったと思われる。神社の参道の石段の破壊ぶりから、小型の重機をアーム使いで登らせたと見てよい。要するに、山上の平坦地が急激に落ち込んでいることに引きずられて、城域の範囲の判断を誤らない注意が必要である。本来の山容は平坦面から尾根の東のくびれまで徐々に下降していたはずで、この広い範囲内に城域を特定するためには、たしかな遺構をおさえながら慎重に踏査する必要がある。

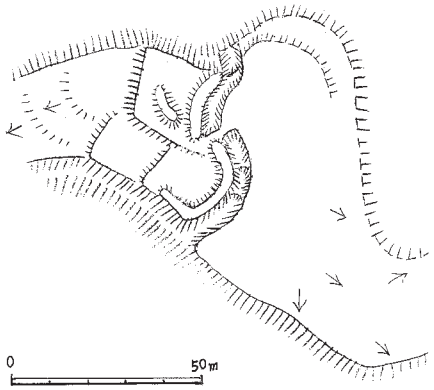
城郭の遺構としてまず目に付くのが、神社の基壇の西から南に断続する土塁、続いてその東南に接して下降する空堀である。空堀の西南端は竪堀状に落ちて平坦面を断ち切っている。土塁と空堀はセットになっていると考えられるので、このラインから西が厳義の城域、すなわち曲輪ということになる。逆に東は平坦地続きでも城外の自然地形ということになる。ここで城域は意外に狭かったのではないかと

昭和２年発行　２万５千分１地形図（一部加筆）

第１図　止々呂美城の地理的環境



第２図　止々呂美城縄張図

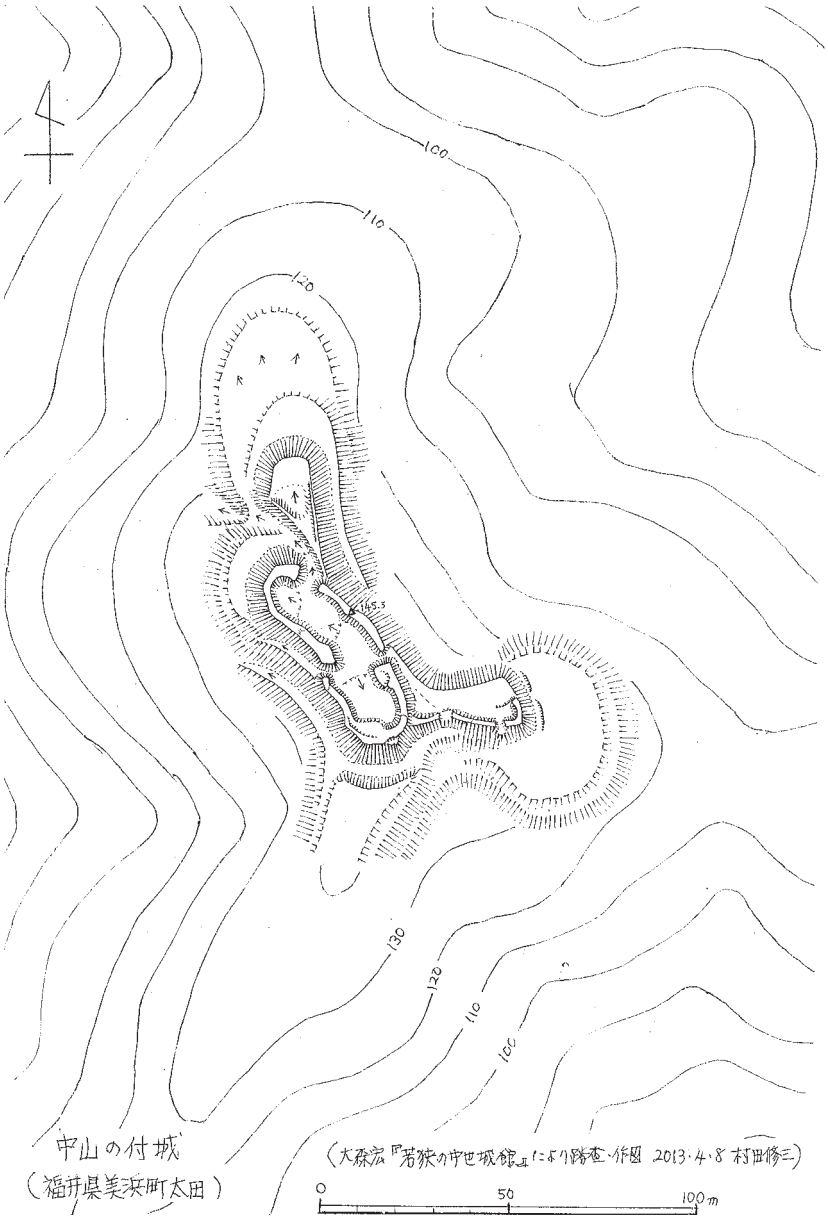


第３図　止々呂美城主体部復元推定図

気付く。北側はどうなのか。神社の基壇付近が社地造成の際に城の遺構を破壊していたとすると、西側に南北に残る土塁の東側に空堀の存在した可能性が浮上する。そこで土塁の北端付近の崖端線を観察すると、不自然なくびれ落ちに気付く。社殿建設のために空堀を埋めたと想定するとつじつまが合ってくる。発掘しなければ確かめられないことではあるが、明瞭な土塁等の遺構を生かす縄張りはこれ以外に考えられない（第３図）。

外側に空堀、内側に土塁の遮断線を復元想定するとして、そのラインが尋常でないことに気付く。S字形にカーブしているようだが、中央の間隙を無理につなげずに開いたままにしておくと、喰い違い虎口の形に似てくる。北側の土塁（櫓台）と南側の土塁（櫓台）の関係を後ろと前の関係に読み替えて、前後に適当な間隙を保って重なっていたと観察すると、喰い違い虎口の姿が浮かび上がってくる。虎口の防御を、東向きに立ったボクシングの姿勢になぞらえると、右手をジャブ、左手をパンチに構えたファイティングポーズになる。この形は安土城の黒金門で完成した織豊系縄張りの虎口の基本形である。

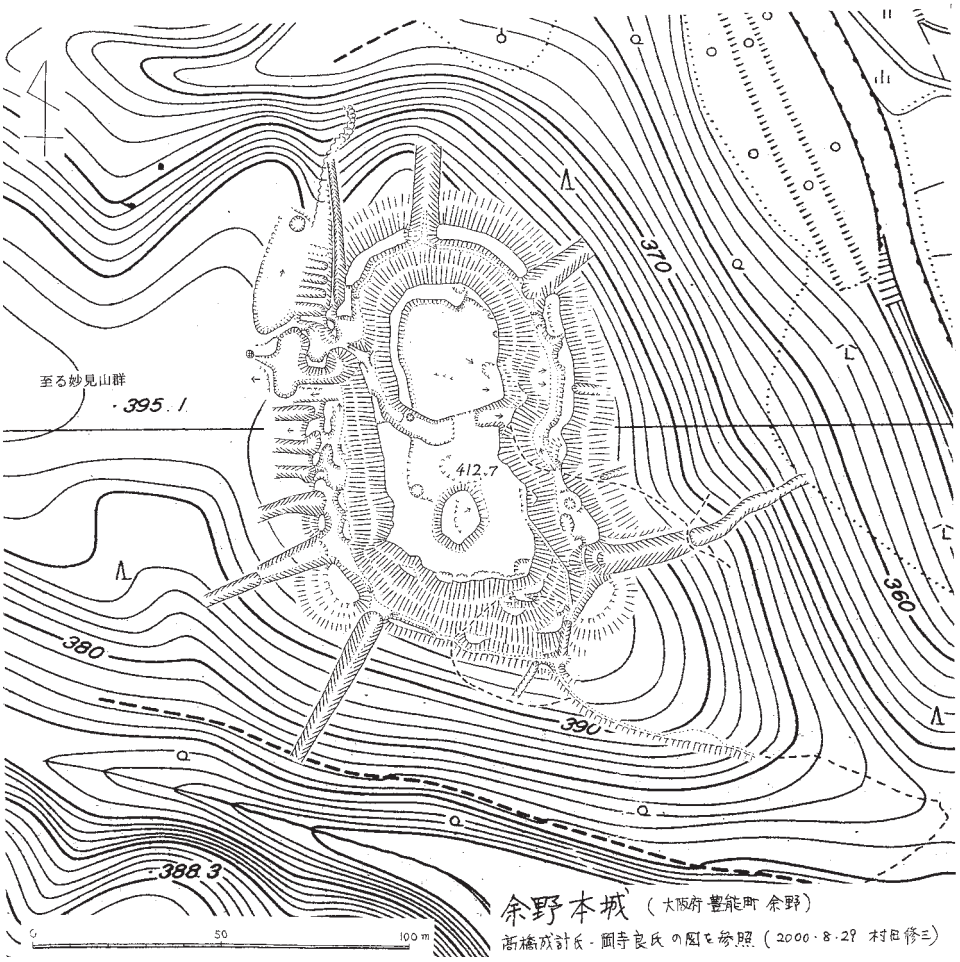
千田嘉博氏が看破したように、この虎口（出入り口）の形は防御と出撃の両面に対応した構えになっている[3)]。攻守の矛盾を克服することを迫った軍事的環境は、総力戦体制の段階に突入した特定の戦国大名の下でしか想定し得ないので、攻守両面に強いこの種の虎口は織豊権力の登場以後のものと見る向きが強かった。しかし武田氏支配領内の馬出し虎口、後北条氏領内の大横矢の虎口も同様の効果を追求し



第４図　中山の付城

たものだし、最近高田徹氏が総括した朝倉氏の若狭侵攻時の陣城群（浅井氏支援のため江北の諸城にも応用）の初原的な喰い違い虎口は明らかに安土城に先行するものである。[4)] 列強によるこれら一連の軍事技術の変革は「虎口革命」と呼ぶことができる。織田氏が安土城で抜きん出るまでの十数年間のレースでは多様な個性的工夫が見られた。例えば朝倉氏の陣城群の一つ、中山の付城の北虎口は、開口部の喰い違いはわずかだが、導入路をカーブさせて喰い違い効果を発揮している（第４図）。

止々呂美城の虎口は塁線をカーブさせることで喰い違い効果を増す工夫をしたのかもしれない。とは言ってもこの地域の勢力が「虎口革命」を強いるような軍事的環境に置かれたとは思われないので、織豊政権によって総括された「虎口革命」の知識に在地的な工夫を加えただけと見た方がよいだろう。参考までに、近郷に所在する余野本城は、戦国末期の工夫の多彩さで注目されているが、西側の出撃専用虎口は馬出しの前後の導線にひねりを加えて効果を増している（第５図）。止々呂美城にひねりの技法が導入された時期は、川辺郡の塩川氏と能勢郡の能勢氏による南北対立の決着する天正14（1586）年



第５図　余野本城

末を下限とするが、それより10年は遡らないだろう。しかしこの土塁・空堀の構築以前から能勢氏側（一族の余野氏）が交通の要衝を押さえる簡単な砦を設けていた可能性はある。

余野川沿いの街道（近世の摂丹街道）の最大の難所を西に見下ろす要衝の丘を能勢氏側が押さえる砦（境目の城）を確保する上で、丘上のダラダラした平坦地形は広すぎる。最高所に必要最小限の曲輪を確保すればよい。東方に長く続く尾根方向を効率よく遮断して防御することが肝心で、西方の尾根先は多少だらけていてもその下の山腹は急斜面なので人工を加える必要はない。こういう判断から最終的に出来上がったのが現在確認できる縄張りのようである。西方は低い切岸が設けられているだけで、その先は次第下がりの自然地形である。城域内の北側がやや高いので東西方向にも切岸が設けられ、城内は３区画以上に仕切られている。神社関連のゴミ穴その他の撹乱があって明確な曲輪構成は確認しがたいが、北側に主郭が位置したようである。主郭の東南部から西北へ土塁が食い込んでいるのは、前述した喰い違い虎口から迂回して主郭へ入り直す構えのようであるが、撹乱が激しいので確認は困難である。この土塁の頂部が城内の最高所なので[5]、物見台のような施設が設けられた可能性もある。

通常の山城の姿からすると、収まりの悪い縄張りではあるが、地上観察では以上の判断に止めざるをえない。ダラダラ尾根の東側の発掘調査地は城域外と見るのが妥当と判断された。

２．「遠構え」の発見

城跡中心部から鞍部を隔てて東方の発掘調査区の中央に聳える瓢箪形の高まり（周辺は字「岡ノ上」だが便宜上「瓢箪山」と仮称）の標高は231メートルで、城跡中心部より３メートル高い（城山の標高は空撮によるので、樹高を考慮すると５メートル以上か）。「瓢箪山」の裾には水路跡が走り、その水係り地以外は自然地形である。城山における縄張りが前述したように小範囲に限定されているので、尾根地形に依存した耕作地を隔てて聳えるこの「瓢箪山」が城跡と無関係ということになると、この先の尾根続きに城郭関連遺構を求めることは不可能と判断されざるをえない。水路跡は米軍の空中写真でも認められる水田を潅漑していた可能性が高いが、水田用に改修される以前に城の水の手として引水されたものかもしれない。そういう微かな期待を持って尾根部の調査の成果を待っていたが、結果は全く予想外のものとなった。

「瓢箪山」の南東の細尾根から二本の堀切が出てきたのである（第６図）。判断を誤った恥ずかしさを忘れて予想を裏切った成果の大きさに驚きと喜びを禁じえず、早速現場を訪れた。堀切は二本とも細い尾根幅に見合って幅・深さとも小規模だが、尾根両側が急峻で迂回できないので遮断機能は高い。城郭本体から遠く離れた場所に堀切などの防御施設があり、単独で城郭としての機能を発揮しえないようなものを、とりあえず遠構えと呼ぶならわしになっている[6)]。今回の遺構がこの遠構えの一種であることはまちがいない。

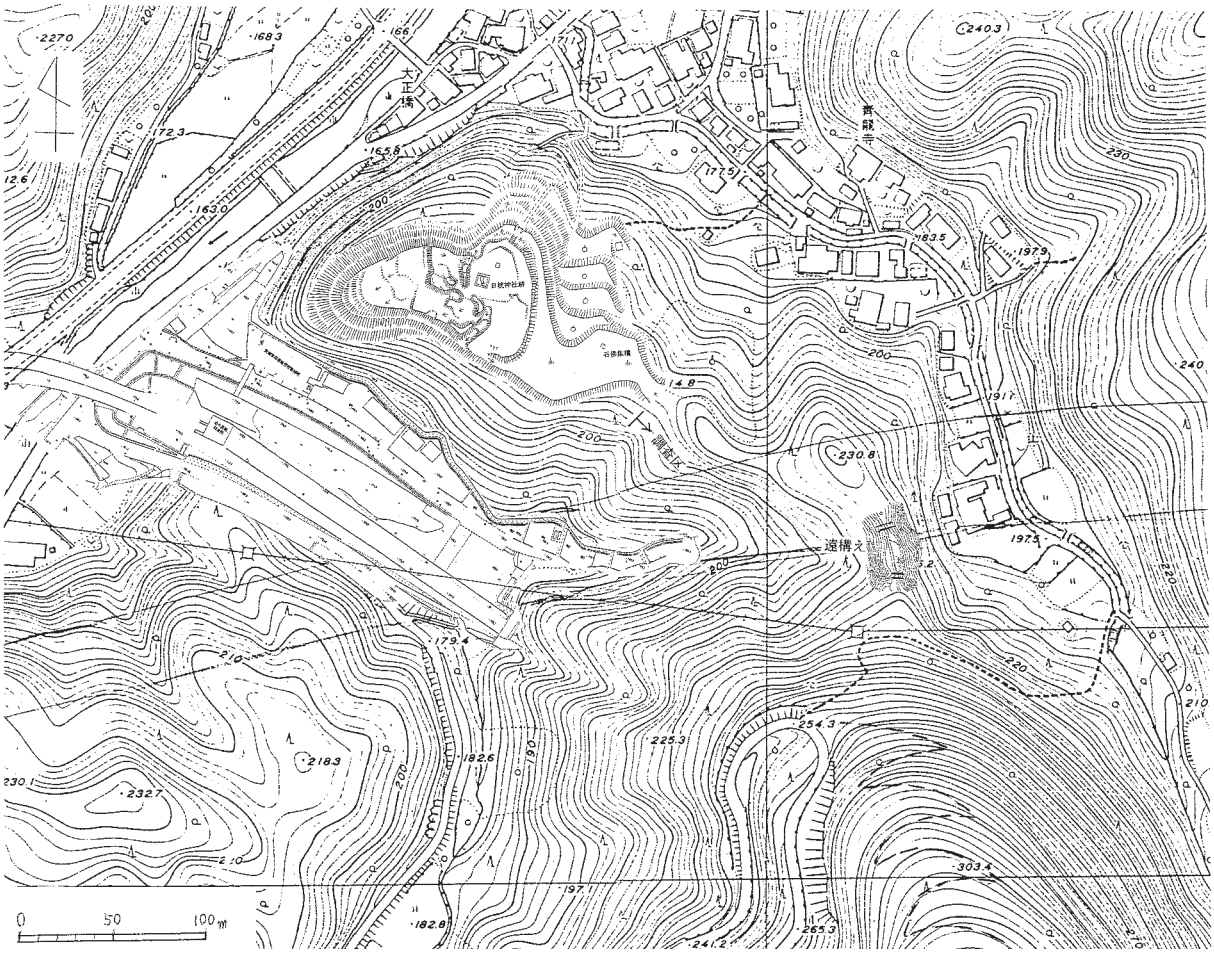
堀切が二本あるということについては、二つの解釈が可能である。北側の堀切は「瓢箪山」続きの高まりから南向きに構えて最初のくびれ部分に遮断線を設け、さらに南方、尾根の果てる際にもう一本遮断線を設けるという、二段備えの構想が一つである（並立タイプ）。二つ目は、二本の堀切に挟まれた22メートルの区間のやせ尾根を小さな陣地、尾根の付け根の隘路（中世文書に「切所」と記される防御ポイント）を押さえる足場として活用するための施設、という解釈である（陣取りタイプ）。いずれを採るかは土層断面図の解釈にも影響されるが、第２面（遠構えレベル）の測量図を見る限り、堀切とかみ合う土塁や陣取り用の削平段を設けた形跡は見出せない。その限りでは並立タイプと見るのが穏当だろう。いずれにしても尾根の付け根部分に異常な神経を注いでこの遠構えを築いたことがわかる。

遠構え一般の中で、今回の遺構が目を引くのは、城郭本体からただ離れているだけでなく、間に本体より数メートル高い「瓢箪山」が手付かずのまま介在して（妨げになって）いることである。本体を防御するためだけなら、せめて「瓢箪山」に布陣の仕掛けを設けるべきである。本体防御以外の重要な任務があればこそ、邪魔な岡を隔てた先方に手を伸ばさざるを得なかったと判断することができる。

３．「道」遺構の発見

発掘調査では、当然のことながら、堀切検出に至る過程で、まず土層断面を確認し、一枚一枚剥ぎ取りながら、ついに成果をえたのであった。あらためてその資料の中から関連するデータを私なりに整理してみる。

遠構えの北側の堀切の北（断面図Ｉライン）と南（断面図Ｊライン）及び南側の堀切の北（断面図Ｋライン）の断ち割り土層から下層盛土が検出された。堀切はこの盛土層をカットして構築された可能性が高いので、堀切すなわちそれによって機能を開始した遠構え部構築以前に盛土造成されたと考えることができる。ところで、遠構え部を陣取りタイプと想定した場合にはその域外になるＩラインにも同じ盛土が検出されたこと、また両堀切がそれぞれ個別に南向きに構えられている並立タイプと想定した場



第６図　止々呂美城と道

合には堀切作戦と関係のないはずのＪラインにも同じ盛土が検出された。このことは下層盛土が遠構え部で期待される城郭関連遺構とは異なる次元の人工物であることを示唆する。何のための人工なのか。断面図の下層盛土から浮かび上がるこの構築物の形は、上端およそ一間幅の細長いものなので、道であった可能性が高い。地形が細尾根から山腹に転換した場所で取られた断面図Ｌラインで下層盛土が確認できなかったのは、この場所では道が山登り姿勢に転じていて、位置がずれていたからだと考えるとつじつまが合う。

やせ尾根の部分でわざわざ盛土して造成された道は単なる山道ではあるまい。周辺の地理を一見すると摂丹街道（余野道、池田道とも）との関係に気付く。池田から余野川沿いに遡上して亀岡に至る街道の最難所が久安寺（伏尾）から下止々呂美の間にある。久安寺の裏の屈曲部の断崖は近代の大工事までは通れず、伏尾から数百メートルの尾根越え道でつないでいた。その北にも絶壁が続くので、大事を取って伏尾から山腹を縫うバイパスが用意されていた。このバイパスが余野川に戻る地点が止々呂美城の南下（箕面グリーンロードトンネルの口、字「今宮」）である。この山腹バイパスは山腹ゆえの崩落の危険があるので、いっそのこと池田から山（五月山）に登り尾根道で通り切ろうとするバイパスも使われた。途中に衣懸松の名所もあり、案外親しまれた道だったようだ。この尾根バイパスの下りつく場所が問題の発掘地点だったと考えられる。途中の山腹にはかなり踏み込まれたジグザグ道が残っている。この道は下止々呂美を見下ろす最高地点で高山道と勝尾寺道に分岐する。中世は能勢（余野）氏・塩川氏・高山氏・勝尾寺そして南の大物・池田氏などの諸勢力がこの道をめぐって複雑な動きをしたことだろう。[7)]

道が恵みよりも災いをもたらすものとなる戦国末期に、地形が大きく変わるこの場所で、問題の道は堀切で遮断された。しかし戦乱の隙を選んで必要な物資と人員は通したい。上幅２メートル程度の小規模な空堀なので、隠し置いた材木を敷いて通行することもできただろう。

この道は「瓢箪山」を過ぎて「宮山」との地峡（発掘調査区西限）付近で坂を下り、下止々呂美の「奥ノ所」集落へ到着していたものと思われる。城に最接近した地点で押さえることも可能だが、取り逃がさないために尾根地形に降り着いたまさにその地点でキャッチしようとして、あえて「瓢箪山」が介在する遠方に遠構えを設けたわけである。

通してもらえない人は問題の場所を見下ろす20～30メートル上の地点から方向転換して西の谷（字「今宮」）へ降ろうと努力し、やがてこちらの方が本道になった。現在のドライブウエイがこのコースを踏襲している。その途中に前述の山腹バイパスが顔を出すので、当初からこちらへ下る道を用意しておいた方がよかったとも思われるが、「今宮」の川口から下止々呂美の「下ノ所」集落へ出るまでの城山の裾が難所だった（こういう難所に臨む要害地形だからこそ築城の意味があった）。河岸の難所を避けるためにこそ用意された山越えのバイパスだったので、細尾根から集落へ下るコースが選ばれたのである。それはともかく、時代が変わり、街道の機能を失った細尾根は気兼ねなしに盛り土されて耕地化され、さらにその潅漑のための用水路が通された。発掘調査で上層盛土と下層盛土が識別されたことにより、この道の劇的な歴史が判明したのである。

４．小規模城郭の意外な機能

耕地開発以前の城山の山上は、だらだらしながら東西170メートル、最大幅60メートルあるので、標準規模の領域権力が気合を入れればかなりの大規模城郭に仕上げることができる。北摂でその規模に近い城は芥川山城を別格とすれば、山を越えて西の川西市の山下城、川辺郡北部を支配した塩川氏の本城だけである。それ以上の勢力を張ったと思われる池田氏は城下町経営を視野に入れた大規模な台地城郭を築いたので、山城には手を染めなかった。余野川流域に蟠居した余野氏の本家筋の能勢氏は、一族及び近隣の小領主を束ねて細川政権の一翼を担っていたが、彼らが競い合って能勢地方に築いた多数の城は、境目の山辺城を除いて基本的に単郭の（地形に応じて副郭を付属）小規模城郭である。[8)] そういう地域性の中で育った権力が塩川氏や池田氏と競い合って支配領域と交易ルートを確保するために止々呂美地区に橋頭堡を築こうとした場合、多少の地余りと縄張りの無理があろうとも、この止々呂美城は最適の立地であった。能勢地方の城郭群は縄張りの良さで注目されているが、それらと比べても上出来の作品ではあるまいか。しかも眼下の川沿いの道だけでなく、山越えの道に対しても十分な備えを用意していたとは！

城郭研究者の間では、小規模城郭を「村の城」論と関連させて、領主の城・支配権力側の城に対する村落住民の自主的な防衛の施設と評価する見解があるが、慎重に議論すべきである。城の規模の大小と築城主体の大小の関係は時と場合によって大きく変わる。小規模城郭論争の火付け役となった横山勝栄氏は、「村の城」と評価できる小規模城郭の地理的・歴史的環境を限定しながら論じた。足で稼いで提唱した立地論は「完結型集落」で、かなり納得できる事例を紹介している。[9)] 多くの研究者の踏査事例を私流に総括すると、村の入り口を守る物見台的な砦を火の見櫓や「村の鐘」のように使うタイプと、平坦地形を粗放に扱った避難所（「山小屋」伝承地の諸例）のタイプに区別できる。横山氏が村の小規模城郭として紹介した事例の中には村の入り口を防衛する砦であるとともに、粗放な削平段を重ねる大規

模な平坦地形が避難所として使えるという、両タイプを兼ねた魅力的な事例もある。そういう場合はどう測っても大規模になる。「村の城＝小規模」のイメージは控えるべきだろう。

村を守る各種の城を維持できる自立的な郷村はたしかにあっただろうが、地域支配をめぐる軍事的対立が激しくなるに従って、そういう「牧歌的な」風景は存続できなくなるのが現実である。北摂は武田・上杉・後北条等がぶつかりあった東国ほどではなかったとしても、三好氏が京畿を席巻して将軍が都に居られなくなる16世紀後半になると、大小の地域権力の領域固めの争いは激しさを増した。「完結型集落」の存立を許さない（世知辛い）畿内周辺では、能勢地方のように小領主の一揆的連携によってのみ小規模城郭の競い合う状況が見られたが、そのような世界でも軍事的緊張の激化を受けて縄張りが強化され、一層村人の手の届かぬ存在に転化したようである。

止々呂美城の地理的環境は「完結型集落」とは対極にある交通の要衝である。しかし軍事的対立が激化する以前の世知辛いだけの時勢においては、逆に「稼げる」場所だったと言えなくはない。喰い違い虎口を形成すると思われる土塁に近接して主郭に横たわる土塁は、前述したような内部仕切り兼櫓台として機能しえたが、そのためだけに築かれたのかどうか疑問が残る。これがなくてもこの小規模な城は十分機能を果たしているからである。もしかして以前からあった遺構の再利用ではないのか。喰い違い虎口は織豊系の知識を学んだ後の作品だと想定したが、だとすると戦国最末期になる。それ以前にこの要衝に築城しなかったはずはない。だだっ広い平坦地を持て余し、最高所に物見台を築き、その回りを単純に仕切り回すような単郭の城があったかもしれない。曲輪として防御しきれない平坦地は避難所として活用できなくはない。もとよりその当時の「瓢箪山」南方の細尾根に遠構えはなかったはずだが。

余野川地峡に臨むこの要衝の地は、16世紀後半になると能勢氏ないしその傘下の余野氏か、あるいはそれを追い詰めた塩川氏や池田氏以外に築城することは不可能である。しかしそれ以前なら止々呂美村の在地の勢力が「村の鐘」のように活用することは不可能とはいえない。「村の城」論者が主張するような大名・領主以外の築城主体をこの村から排除する自信はない。ただ止々呂美城の現在認められる縄張りと念入りな遠構えはどう見ても広域支配を争った地域権力の作品である（前身の素朴な縄張りの時代でも「村の城」の可能性は限りなく低い）。ではこの城以外に城跡が見つかったらどうなのか。素朴な縄張りの在地の城があってもいいのではなかろうか。そういう疑問に突き刺さったのが『大阪府全誌』の記すもう一つの「止々呂美城」であった。探索の結果、それは無いと分かった今、この地に「村の城」を見出すことは一層困難だと言わざるをえない。止々呂美城の主体部を発掘調査する機会が訪れる日までこの課題は封印せざるをえないだろう。

今、たしかに言えることは、道路建設から外されて残ったわずかな城跡の遺構が、北摂で最も斬新な縄張りを残しているということである。あらためて小規模城郭に秘められた歴史の面白さに興味が増す。戦国期の多様な城郭分布と縄張りの分析から判明したことは、戦国の諸階層が関わった小規模城郭に、最終段階の作戦と築城技術の鍔迫り合いが反映しているということである。止々呂美城跡はそのような戦国末期の縄張り発達の片鱗を残すだけでなく、城と道という重要テーマに類例の無い話題を提供してくれた貴重な事例である。それも粘り強い発掘調査によってかろうじて確認できたのであり、その意味でもかけがえのない事例というべきである。

〔註〕

1）1981 『日本城郭大系』12（大阪・兵庫） 新人物往来社

2）井上正雄　1922 『大阪府全誌』巻之三　大阪府

3）千田嘉博　2000 『織豊系城郭の形成』 東京大学出版会

4）高田　徹　2013 「越前朝倉氏築城術の一考察―若狭国国吉城付城を中心として―」『中世城郭研究』27

5）原地形の最高所はこの地点より少し東方にあったかもしれないが、この曲輪まで殆ど等高であったと見てよい。西へ向って下り始めるこの地点が、街道監視の城としては、最適の立地となる。

6）著名な事例として静岡県牧野原台地の諏訪原城がある。古絵図に城の南方「五六丁」を隔てて空堀と土塁を組み合わせたラインが台地を遮断している姿が描かれ、その痕跡が現在も確かめられる。なお、多様な規模と形態を有する遠構えを城域に含めるかどうか、議論し出すと果てしがないので、「作戦域」という概念を加えて処理すればよいと思う。止々呂美城の場合、当初私は眼下の街道を監視する小規模城郭・砦のイメージだけで処理しようとしていたので、「城域外」だからと東方のやせ尾根を軽視して恥を掻いた次第である。

7）前註で私は「恥を掻いた」と書いたが、恥ずべきは隠された堀切に気付かなかったことではなく、「城と道」という大問題を忘れていたことだと言い直さねばなるまい。堀切探しについては宝くじレベルの話で、分厚い盛土に覆われた上に、水路のフェイントをかまされたやせ尾根の中から堀切が出てこようとは、神ならぬ身の知る由もなかった。調査開始直前に現場を訪れた私は、「絶望的な」状況で調査に入る調査員が気の毒でならず、近代の水路を確かめるのも無意味ではない、などとつぶやくだけだった。しかし、手抜きせずに調査を敢行した「報奨」は大きかった。丁寧に層序を追っていたので、堀切が出たレベルで上層盛土と下層盛土の識別ができた。これが決定打になったのだが、堀切検出に驚くだけの私はまだこの「識別」の重大さに気付いていなかった。この「識別」を発掘区通して検討できるデータがきっちり取られていたので、堀切に直接関わる城郭遺構以外の遺構、道の可能性に後日気付くことができたのである。山越えバイパス云々の話もその時点から考え始めたことだった。それまで摂丹街道はこの城の眼下を通るものという常識しか持ち合わせていなかった。余野川沿いのバス道の難所が開削されたのが1922年だということもそれ以後に知った。本文の章別構成が発掘順と合わないのは、私の認識順を優先したからである。

8）高橋成計　1990 「中世城郭と土豪―多田・能勢地方の場合―」 私家版

中西裕樹　1997 「摂津国能勢郡西郷・東郷における中世城館構成―築城主体の性格と『小規模城館』―」『中世城郭研究』11

岡寺　良　1999 「摂津能勢郡の戦国期城館にみる築城・改修の画期」 大阪大学考古学研究室編『国家形成期の考古学』

9）横山勝栄　1988 「新潟県北部の中世の小型城郭について」 三川村立三川中学校『研究紀要』

同　1995 「新潟北部の城郭」 第12回全国城郭研究者セミナー「村の城を考える」資料集

付　　表

付表１　掲載土器・陶磁器一覧表（１）

遺物番号	挿図	写真図版	種類器種	出土遺構層位	口径（cm）	器高（cm）	底径（cm）	残存率（%）	作図方法	色調	調整等
1	17	—	染付碗	表土層 L4-8- 13O-6e	—	<2.6>	(4.0)	20 底部 50	反転復元	外：5GY8/1 灰白（釉） 5B5/1 青灰（文様） 内：5GY8/1 灰白（釉） 5B5/1 青灰（文様） 断：N8/0 灰白	外面に二重網目文 体部外面下端部から高台外面にかけて圏線３条 高台畳付に砂粒付着
2	17	—	弥生土器甕	盛土層 L4-8- 14N-1j	—	<1.8>	3.9	10 底部 100	一部転用	外：7.5YR5/2 灰褐 内：2.5Y8/2 灰白 断：N2/0 黒	磨滅著しい 内面に工具痕
3	17	—	染付筒型碗	盛土層 L4-8- 14O-2b	(7.8)	6.4	(3.6)	40	反転復元	外：2.5GY8/1 灰白（釉） 5B4/1 暗青灰（文様） 内：2.5GY8/1 灰白（釉） 5B4/1 暗青灰（文様） 断：N8/0 灰白	口縁部内面に四方襷文 外面格子文に菊花文と丸窓幾何学文 見込みに圏線２条と五弁花文 高台外面に圏線２条 高台内に渦「福」銘 高台畳付と高台内面露胎
4	17	—	陶器擂鉢	19 土坑	(36.6)	<8.5>	—	10 未満	反転復元	外：7.5YR5/3 にぶい褐 内：2.5YR5/3 にぶい赤褐 断：10R5/6 赤	擂目１条 12 本か、口縁部回転ナデ消し 口縁部外縁帯下端以下回転ヘラケズリ 胎土に小礫含む 堺擂鉢または明石擂鉢
20	26	—	土師器皿	29 土坑 ２層	(12.0)	<2.1>	—	10	反転復元	外：10YR8/4 浅黄橙 内：10YR8/2 灰白 断：10YR8/2 灰白	口縁部から体部内面横ナデ 体部外面磨滅しており、調整等不明
21	26	50	土師器皿	29 土坑 ３層上面	14.1	2.7	—	95		外：7.5YR7/4 にぶい橙～ 10YR8/3 浅黄橙 内：10YR8/3 浅黄橙 断：7.5YR7/4 にぶい橙	口縁部から体部内面横ナデ 底部内面一定方向のナデ
22	26	50	土師器皿	29 土坑 ３層上面	14.5	2.9	—	95		外：10YR8/3 浅黄橙 内：10YR8/4 浅黄橙 断：10YR8/3 浅黄橙	口縁部から体部内面横ナデ （工具使用か） 底部内面一定方向のナデ
25	32	51	瓦器椀	３土坑	12.3	3.7	4.3	90		外：N3/0 暗灰 内：N3/0 暗灰 断：N8/0 灰白	磨滅しており、調整等不明瞭 口縁部横ナデ　内面ナデ後、平行線状暗文 外面指オサエ、一部に工具痕 高台貼付粗雑　和泉型
26	32	51	瓦器椀	第１層 L4-8- 13O-3c	11.1	4.1	4.2	80		外：N5/0 灰 内：N5/0 灰 断：N8/0 灰白	口縁端部横ナデ 内面ナデ後、渦巻き状暗文 外面指オサエ 胎土に小礫混入　丹波型
27	32	51	青白磁把手	表土層 L4-8- 13O-2f	—	<2.5>	—	10 未満		外：5GY8/1 灰白 内：5GY8/1 灰白 断：10Y8/1 灰白	
38	62	52	土師器皿	第１層 L4-8- 14O-2d	7.9	1.6	—	90		外：2.5Y8/1 灰白 内：2.5Y8/1 灰白 断：5YR7/6 橙	内面平滑、口縁部から体部内面時計まわりの横ナデ上げ 底部外面の窪み方に 39 と同様の偏りあり
39	62	52	土師器皿	第１層 L4-8- 14O-2d	7.8	1.6	—	95		外：2.5Y8/4 浅黄 内：2.5Y8/4 浅黄 断：7.5YR8/4 浅黄橙	内面平滑、口縁部から体部内面時計まわりの横ナデ上げ 底部外面の窪み方に 38 と同様の偏りあり
40	62	—	土師器皿	第１層 L4-8- 14O-5f	(8.8)	1.3	—	20	反転復元	外：10YR7/4 にぶい黄橙 内：10YR7/4 にぶい黄橙 断：7.5Y6/1 灰	磨滅気味で、調整等不明瞭
41	62	—	瓦器椀	表土層 L4-8- 14O-2f- Ⅱ	—	<1.8>	(5.5)	10 底部 60	反転復元	外：N3/0 暗灰 内：2.5Y8/3 淡黄 断：N3/0 暗灰	磨滅著しく、調整等不明瞭 ミガキの幅 0.1 cm以下 ミガキの細さから楠葉型か
42	62	52	須恵器甕	第１層 L4-8- 14O-5f	—	<12.0>	—	10 未満		外：10Y6/1 灰 内：5Y6/1 灰 断：7.5Y5/1 灰	内面当て具痕をナデ消し 外面格子状タタキ後、不定方向の粗雑なナデ
43	62	—	瓦器椀	斜面堆積層 L4-8- 13O-2g- Ⅱ	—	<2.2>	(6.4)	20 底部 50	反転復元	外：N4/0 灰 内：N4/0 灰 断：7.5Y8/1 灰白	磨滅気味で、調整等不明
44	62	52	瓦質土器口付鉢	斜面堆積層 L4-8- 13O-2g- Ⅰ	(16.9)	<4.2>	—	20	反転復元	外：口縁 N3/0 暗灰 体部 2.5Y6/2 灰黄 内：N3/0 暗灰 断：2.5Y6/2 灰黄	
45	62	—	瓦質土器羽釜脚	斜面堆積層 L4-8- 13O-2g- Ⅰ	—	<13.3>	—	—		外：N5/0 灰 内：- 断：N8/0 灰白	
46	62	52	瓦質土器鍋か	表土層 L4-8- 13O-2g- Ⅰ	—	<8.9>	—	10 未満	傾き不定	外：5Y4/1 灰 内：2.5Y6/1 ～ 4/1 黄灰 断：2.5Y7/1 灰白	
47	62	52	瓦質土器羽釜	表土～ 斜面堆積層 ３区	—	<3.9>	—	10 未満	傾き不定	外：2.5Y7/2 灰黄～ N4/0 灰 内：2.5Y7/2 灰黄～ N4/0 灰 断：10YR7/3 にぶい黄橙	口縁部内面横ナデ 内面ハケ 外面ハケ（工具によるか）
48	62	52	瓦質土器羽釜	表土～ 斜面堆積層 ３区	—	<2.9>	—	10 未満	傾き不定	外：N4/0 灰～ 2.5Y7/3 浅黄 内：N3/0 暗灰 断：2.5Y8/2 灰白	内面ハケ後、ナデ 外面ナデ（工具によるか）
56	68	—	土師器皿	表土層 L4-8- 14N-2i	(8.9)	<2.0>	—	20	反転復元	外：10YR6/3 にぶい黄橙 内：10YR7/4 にぶい黄橙 断：10YR6/1 褐灰	表面磨滅気味で、調整等不明瞭

付表２　掲載土器・陶磁器一覧表（２）

遺物番号	挿図	写真図版	種類器種	出土遺構層位	口径（cm）	器高（cm）	底径（cm）	残存率（%）	作図方法	色調	調整等
57	75	54	土師器皿	２土坑石組み（３層）	7.1	1.4	—	90	一部転用	外：10YR5/3 にぶい黄褐 内：10YR5/3 にぶい黄褐 断：10YR7/3 にぶい黄橙	内面不定方向のナデ
58	75	54	土師器皿	２土坑３’層	7.2	1.6	—	95		外：10YR7/3 にぶい黄橙 内：10YR7/3 にぶい黄橙 断：10YR8/3 浅黄橙	内面磨滅しており、調整等不明
59	75	54	土師器皿	２土坑石組み	7.8	1.7	—	80		外：10YR7/2 にぶい黄橙 内：10YR7/2 にぶい黄橙 断：10YR7/4 にぶい黄橙	内面磨滅しており、調整等不明
60	75	54	土師器皿	２土坑石組み	(9.6)	2.2	—	50	一部転用	外：2.5Y7/2 灰黄 内：2.5Y7/2 灰黄 断：10YR8/3 浅黄橙	内面不定方向のナデ 外面磨滅気味で、調整等不明
61	75	54	土師器皿	２土坑２層	7.4	1.7	—	95		外：7.5YR7/6 橙 内：7.5YR7/6 橙 断：7.5YR7/6 橙	内面不定方向のナデ
62	75	54	土師器皿	２土坑２層	8.4	2.0	—	80	一部転用	外：10YR6/4 にぶい黄橙 内：10YR6/4 にぶい黄橙 断：10YR6/1 褐灰	内面不定方向のナデ
63	75	—	土師器皿	２土坑２層	(9.3)	<2.0>	—	20	反転復元	外：10YR6/3 にぶい黄橙 内：10YR7/3 にぶい黄橙 断：10YR6/4 にぶい黄橙	口縁部横ナデ後、内面不定方向のナデか
64	75	54	土師器皿	２土坑２層	(9.4)	1.9	—	50	反転復元	外：10YR6/3 にぶい黄橙 内：10YR6/3 にぶい黄橙 断：2.5Y6/2 灰黄	口縁部横ナデ後、内面一定方向のナデ
65	75	54	土師器皿	２土坑２層	9.5	2.1	—	70	一部転用	外：2.5Y7/3 浅黄 内：2.5Y7/3 浅黄 断：N4/0 灰	口縁部横ナデ後、内面不定方向のナデ
114	83	—	土師器鉢	表土層 L4-8-13N-6g	—	<2.8>	—	10未満	傾き不定	外：7.5YR6/4 にぶい橙～7.5YR3/2 黒褐 内：7.5YR6/4 にぶい橙 断：7.5YR7/4 にぶい橙	

付表３　出土木製珠一覧表

遺物番号	挿図	写真図版	出土遺構層位	高（cm）	長径（cm）	短径（cm）	小口径（cm）	孔径（cm）	残存率（%）	備考
66	75	54	２土坑２層	0.64	0.72	0.63	0.35 ～ 0.4	0.1	100	両小口平坦 側面に水平方向と楕円形の加工痕
67	75	—	２土坑（北東半部）	0.59	0.78	0.67	0.4	0.1	100	小口平坦 小口（図の下方）磨滅 側面に水平方向の加工痕
68	75	54	２土坑（北東半部）	0.58	0.73	0.66	0.4 ～ 0.45	0.1	100	両小口平坦 側面に水平方向の加工痕
69	75	—	２土坑（北東半部）	0.58	0.70	0.63	0.35 ～ 0.4	0.1	70	両小口平坦 小口（図の下方）の一部、側面の一部欠損 側面に水平方向の加工痕
70	75	—	２土坑２層	0.57	0.73	0.64	0.35 ～ 0.4	0.1	95	両小口平坦 側面に水平方向の加工痕
71	75	54	２土坑（北東半部）	0.54	0.75	0.69	0.45	0.1	100	両小口平坦 側面に水平方向の加工痕
72	75	—	２土坑（北東半部）	0.54	0.69	0.61	0.35	0.1	95	両小口平坦 側面に水平方向の加工痕 側面等一部欠損
73	75	—	２土坑（北東半部）	0.54	0.71	0.64	0.35 ～ 0.4	0.1	95	両小口平坦 小口（図の下方）の一部欠損 側面に水平方向の加工痕
74	75	—	２土坑２層	<0.82>	<0.58>	—	—	0.1	40	小口平坦 小口（図の下方）欠損 側面に水平方向の加工痕
75	75	—	２土坑（北東半部）	<0.81>	0.55	0.52	0.25	0.1	95	小口平坦 小口（図の下方）僅かに欠損 側面に水平方向の加工痕
76	75	—	２土坑	<0.77>	0.59	0.55	(0.35)	0.1	90	小口僅かに欠損 側面一部欠損 側面に水平方向の加工痕
77	75	54	２土坑	0.71	0.49	0.47	0.25	0.1未満	100	両小口平坦 側面に水平方向の加工痕
78	75	—	２土坑（北東半部）	<0.68>	0.55	0.52	0.30	0.1	60	小口平坦
115	—	—	２土坑（北東半部）	<0.7>	0.58	0.49	—	0.1	90	両小口欠損

付表４　掲載釘一覧表（１）

遺物番号	挿図	写真図版	出土遺構 層位	長 （cm）	頭部幅 （cm）	基部幅 （cm）	基部厚 （cm）	残存率 （%）	備考
5	22	50	16 土坑 ３層	4.7	0.7	0.3	0.2	100	頭巻 基部断面長方形
6	22	50	16 土坑 ３層	<3.5>	—	0.3	0.3	90 先端欠損	頭巻 頭部破損してずれている　基部断面方形
7	22	50	16 土坑 直上盛土層	<3.4>	0.9	0.4	0.3	95 先端欠損	頭巻
8	22	50	16 土坑 ３層	<3.3>	—	0.3	0.25	95 先端欠損	頭巻
9	22	50	16 土坑 直上盛土層	<2.9>	0.8	0.3	0.2	80 先端欠損	頭巻 頭部先端欠損か　基部断面長方形
10	22	50	16 土坑 ３層	<3.4>	—	<0.35>	<0.2>	70	基部断面長方形
11	22	50	16 土坑 ３層	<3.3>	—	<0.25>	<0.25>	70	
12	22	50	16 土坑 直上盛土層	<3.1>	—	<0.3>	<0.25>	70	基部断面長方形
13	22	50	16 土坑 ３層	<3.0>	—	<0.5>	<0.4>	70	基部断面長方形
14	22	50	16 土坑 ３層	<2.3>	—	<0.35>	<0.2>	60	基部断面長方形
15	22	50	16 土坑 ３層	<2.3>	—	<0.35>	<0.35>	60	
16	22	50	16 土坑 ３層	<2.0>	—	<0.35>	<0.3>	50	
17	22	—	16 土坑 １層	<1.6>	—	<0.25>	<0.2>	40	
18	22	—	16 土坑 直上盛土層	<0.9>	—	<0.2>	<0.15>	先端部のみ	
19	22	—	16 土坑 ３層	<0.7>	—	<0.15>	<0.1>	先端部のみ	
23	26	50	29 土坑 １層	<3.5>	—	—	0.35	80 先端欠損	頭巻
24	26	50	29 土坑 １層	<3.2>	0.7	0.3	0.2	80 先端欠損	頭巻 基部断面長方形
79	75	55	２土坑 （北東半部）	<4.3>	—	—	0.4	95 先端欠損	頭巻 基部断面長方形
80	75	55	２土坑 （北東半部）	3.4	0.8	0.3	0.2	100	頭巻 基部断面長方形
81	75	55	２土坑	<3.3>	0.8	—	—	95 先端欠損	頭巻 頭の折り返し部長方形
82	75	55	２土坑	<3.1>	0.9	—	0.3	95 先端欠損	頭巻
83	75	55	２土坑 （北東半部）	<3.1>	0.8	—	0.2	95 先端欠損	頭巻
84	75	—	２土坑 （北東半部）	<3.0>	0.7	0.3	0.2	95 先端欠損	頭巻 基部断面方形
85	75	55	２土坑	<3.0>	0.8	0.3	0.25	95 先端欠損	頭巻
86	75	55	２土坑 ２層	2.9	(0.9)	0.3	0.3	100	頭巻
87	75	55	２土坑 ２層	<2.9>	0.9	0.3	0.2	95 先端欠損	頭巻 基部断面長方形
88	76	55	２土坑 （北東半部）	<2.9>	—	—	0.25	90 先端欠損	頭巻か 頭部破損
89	76	55	２土坑 （北東半部）	<2.8>	0.7	0.25	0.25	90 先端欠損	基部断面正方形
90	76	55	２土坑 （北東半部）	<2.7>	1.0	0.3	0.25	95 先端欠損か	頭巻 基部断面長方形
91	76	55	２土坑 ２層	<2.7>	—	—	0.2	95 先端欠損	頭巻 頭部破損
92	76	55	２土坑 （北東半部）	<2.6>	0.7	0.3	0.25	90 先端欠損	頭巻
93	76	55	２土坑	<2.5>	0.9	—	0.25	95 先端欠損	頭巻 頭の折り返し部長方形
94	76	55	２土坑 ２層	<2.3>	0.9	0.3	—	90 先端欠損	頭巻
95	76	55	２土坑 （北東半部）	<1.9>	—	—	0.2	80 先端欠損	頭巻か
96	76	55	２土坑 （北東半部）	<1.6>	0.7	0.35	0.25	60	頭巻 基部断面長方形
97	76	55	２土坑	<1.6>	0.9	0.3	0.2	70	頭巻

付表５　掲載釘一覧表（２）

遺物番号	挿図	写真図版	出土遺構層位	長（cm）	頭部幅（cm）	基部幅（cm）	基部厚（cm）	残存率（%）	備考
98	76	—	２土坑 ２層	<1.2>	0.8	0.25	0.25	30	頭巻
99	76	—	２土坑 ２層	<2.8>	—	<0.25>	<0.25>	80	
100	76	55	２土坑 （北東半部）	<2.6>	—	<0.3>	<0.3>	60	
101	76	55	２土坑 （北東半部）	<2.3>	—	<0.25>	<0.25>	70	
102	76	—	２土坑	<2.1>	—	<0.25>	<0.25>	50	
103	76	—	２土坑	<1.9>	—	<0.2>	<0.2>	60	
104	76	55	２土坑	<1.8>	—	<0.25>	<0.25>	50	遺存状態悪い
105	76	55	２土坑 （北東半部）	<1.8>	0.6	<0.3>	<0.2>	70	遺存状態悪い
106	76	—	２土坑 11 層	<1.7>	—	<0.25>	<0.25>	30	
107	76	—	２土坑	<1.6>	—	<0.4>	<0.3>	30	
108	76	55	２土坑	<1.4>	—	<0.3>	<0.3>	20	天地不明
109	76	—	２土坑	<1.3>	—	<0.2>	<0.15>	30	基部断面正方形
110	76	—	２土坑	<1.1>	—	<0.15>	<0.1>	20	基部断面長方形
111	76	—	２土坑	<0.8>	—	<0.3>	<0.3>	10	天地不明
112	76	—	２土坑	<0.6>	—	<0.2>	<0.2>	10	天地不明

付表６　出土銭貨一覧表

遺物番号	挿図	写真図版	名称	出土遺構層位	径（cm）	孔辺（cm）	厚（cm）	重（g）	残存率（%）	備考
28	32	—	寛永通寶	表土層 L4-8-13O-2f	2.40	0.60	0.10	2.2	100	新寛永
29	32	—	寛永通寶	表土層 L4-8-13O-3e	2.41	0.60	0.11	2.1	95	新寛永
30	32	—	寛永通寶	表土層 L4-8-13O-2c	2.43	0.6	0.12	3.0	100	古寛永
49	62	51	至道元寶	表土層 L4-8-13O-8f	2.41	0.65	0.10	2.4	98	北宋
50	62	51	祥符元寶	表土層 L4-8-13O-8f-Ⅳ	2.43	0.60	0.10	2.4	98	北宋
51	62	51	皇宋通寶	表土層 L4-8-13O-8f	2.43	0.70	0.11	2.2	98	北宋
52	62	51	永楽通寶	表土層 L4-8-13O-9f-Ⅲ	2.55	0.55	0.13	3.5	98	明
54	63	—	寛永通寶	表土層 L4-8-13O-1～ 3・h～j	2.24	0.65	0.10	1.6	98	新寛永 背面に「元」字
55	63	—	寛永通寶	表土層 L4-8-14O-1g	2.24	0.60	0.12	2.5	100	新寛永 背面に「元」字

付表７　掲載金属製品一覧表

遺物番号	挿図	写真図版	名称	出土遺構層位	縁部径（cm）	鼓面径（cm）	高（cm）	残存率（%）	備考
53	63	56	伏鉦	表土層 L4-8-13O-8h	10.9	8.9	3.6 体部高 2.5	100	凹面縁部の三脚間に陰刻の銘 「摂州豊嶋郡下止呂美村」 「寛政四子年観音講中」 「京六条出羽宗味作」

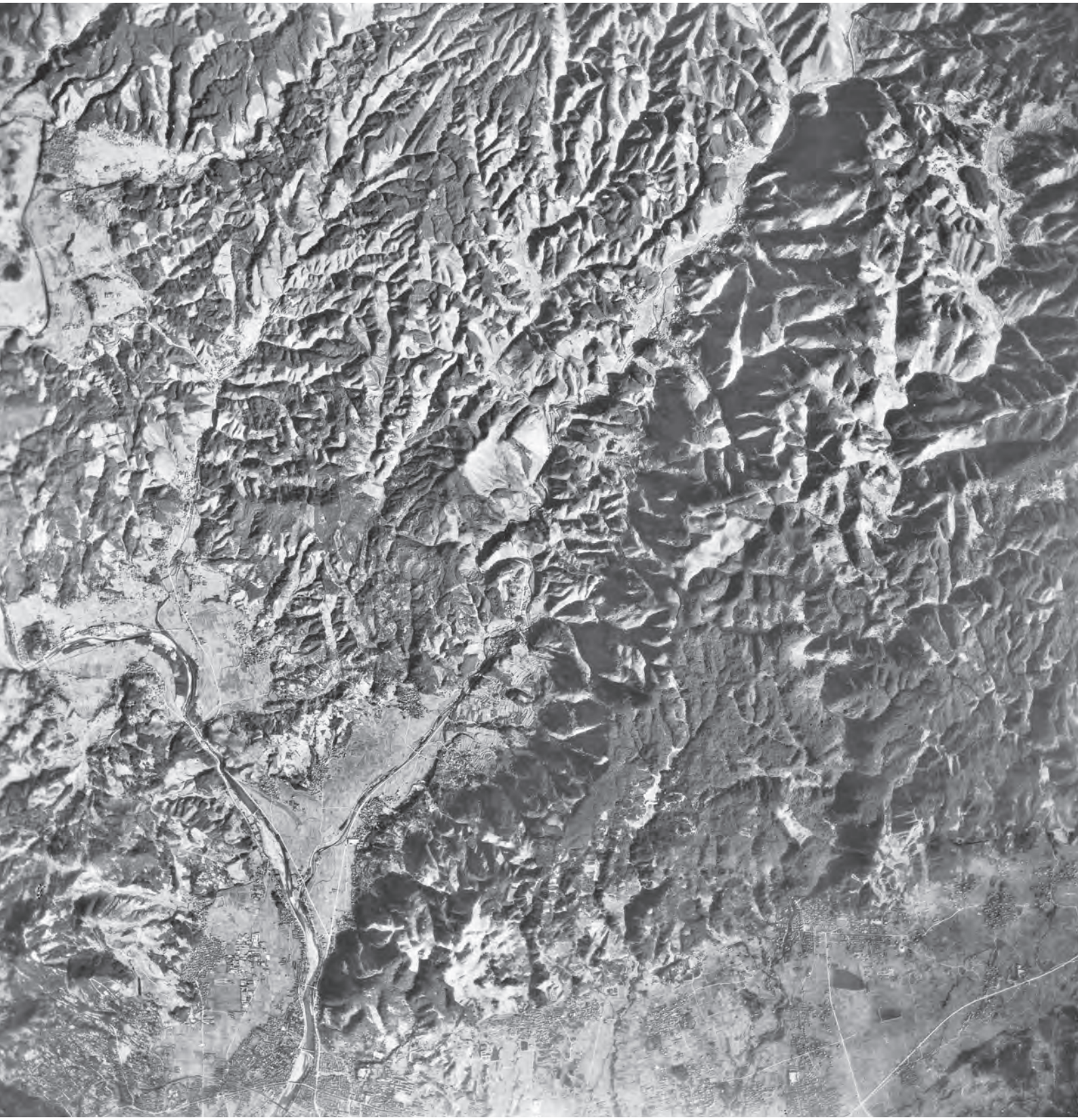
付表８　出土石塔一覧表

遺物番号	挿図	写真図版	名称	出土地点	長・高（㎝）	幅（㎝）	厚（㎝）	残存率（%）	備考
31	58	53	五輪塔 空風輪	石塔出土地点Ａ L4-8-14O-2a	高 21.0 空輪 11.9 風輪 9.1	最大径 空輪 13.4 風輪 15.0	—	95	下面径 7.8 ㎝、ほぞ径 4.8 ㎝
32	58	53	五輪塔 水輪	石塔出土地点Ａ L4-8-14O-2a	高 19.2	最大径 25.8	—	95	最大径までの高 12.0cm 上面径 11.0 ㎝、ほぞ径 4.8 ㎝ 下面径 10.2 ㎝、ほぞ径 5.3 ㎝ 下面を含め、上部以外は表面の風化が著しい
33	58	53	五輪塔 火輪	石塔出土地点Ａ L4-8-14O-2a	高 15.3	25.0	—	95	上面ほぞ穴径 6.3 ㎝ 下面にほぞ穴なし 歪みあり
34	58	53	五輪塔 火輪	石塔出土地点Ａ L4-8-14O-2a	高 12.4	21.2	—	95	上面ほぞ穴径 5.3 ～ 5.8 ㎝ 下面ほぞ穴径 5.1 ㎝
35	58	53	五輪塔 火輪	石塔出土地点Ｃ L4-8-14O-5c	高 12.0	21.4	—	95	上面ほぞ穴径 5.3 ㎝ 下面にほぞ穴なし
36	60	53	一石 五輪塔	石塔出土地点Ｂ L4-8-14O-2a･b	<47.2>	12.4	11.4	95	火輪最大幅 12.0 ㎝、最大厚 11.3 ㎝ 水輪最大幅 12.0 ㎝、最大厚 11.3 ㎝ 下部は上部に比べて風化が進んでおらず、土中に埋まっていたと思われる
37	60	53	石仏	石塔出土地点Ｂ L4-8-14O-2a	39.4	17.8	9.4	100	光背形石仏　阿弥陀如来 像容は座像、印相は定印 袈裟が垂れ下がった状態を表現 像容面に比べ、側面、特に背面の加工は非常に粗雑 頂部と背面と下端の一部は加工せず、円礫面を残す 下部１/３は上部に比べて風化が進んでおらず、土中に埋まっていたと思われる
113	81	56	石仏	石塔出土地点Ｄ L4-8-13N-6g	38.3	23.2	14.0	100	光背形石仏　阿弥陀如来 像容は座像、印相は定印 右肘部の輪郭が明瞭であるのに対し、左肘部の輪郭ははっきり彫り出されておらず、斜め右下にのびて膝と繋がっているようにもみえる 袈裟が垂れ下がった状態を表現している可能性がある 像の右側面、左側面中央部、下半部は、円礫面を残す 背面上部の加工は非常に粗雑 下部１/３は上部に比べて風化が進んでおらず、土中に埋まっていたと思われる

図　　版

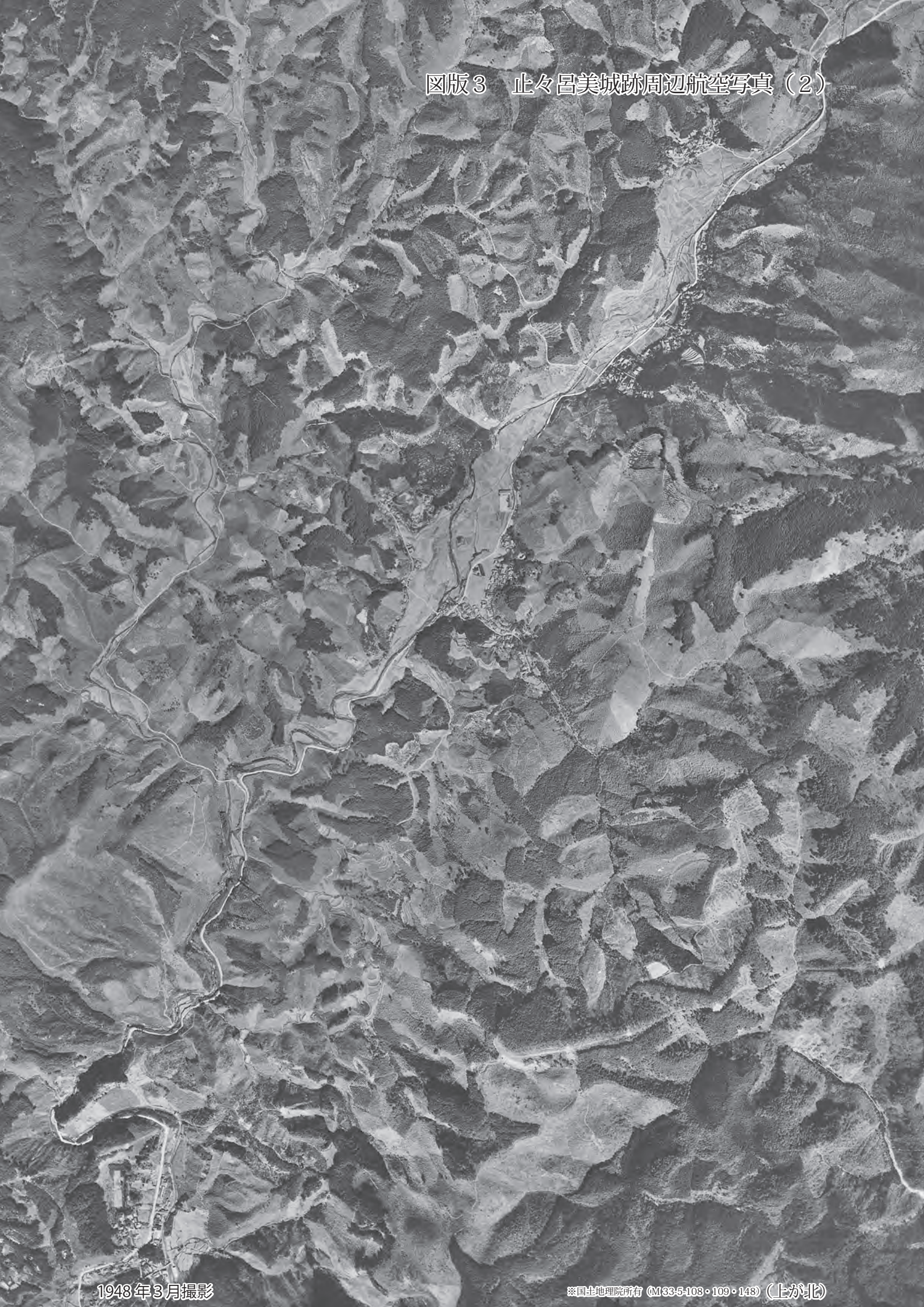
図版１　全景（航空写真合成）

図版２　止々呂美城跡周辺航空写真（１）



1948 年２月撮影

※国土地理院所有（M 796-A-18）（上が北）



図版３　止々呂美城跡周辺航空写真（２）

1948年３月撮影

※国土地理院所有（M33-5-108・109・148）（上が北）

図版４　止々呂美城跡周辺

1　止々呂美城跡
遠景
南西から

2　止々呂美城跡
遠景
北東から

3　調査地から望む
下止々呂美集落
南から

１　中央部　北西から

２　東部　東から

図版６　山頂　棚田部（２）　第２面

1　11 土坑　近景
北西から

2　12 土坑　近景
北西から

3　13・14 土坑　近景
北西から

1　15・16 土坑　近景
北西から

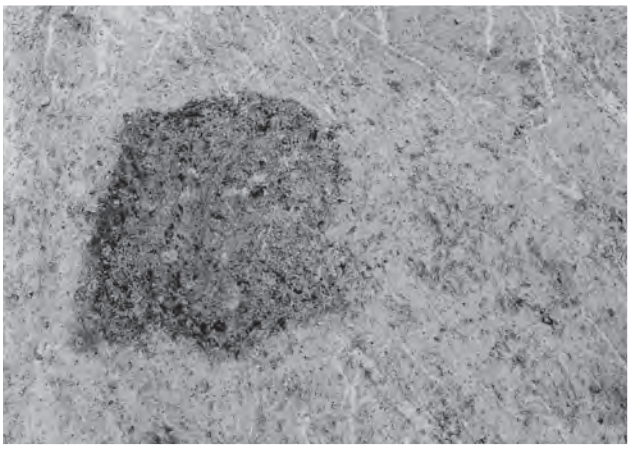
2　20 土坑　近景
北東から

3　25 土坑　近景
南東から

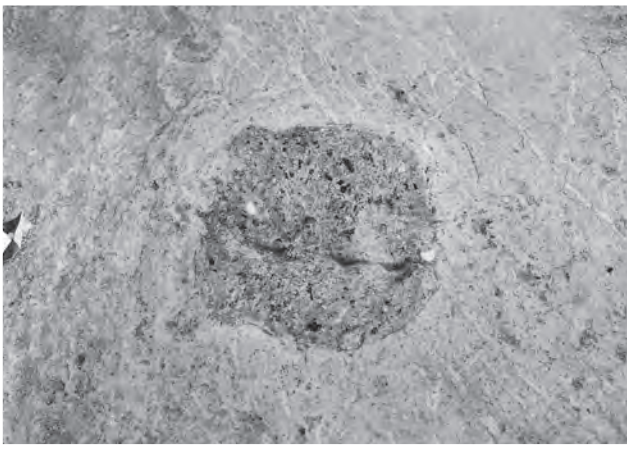
図版８　山頂　棚田部（４）　第２面

1　11 土坑　検出状況　　南から

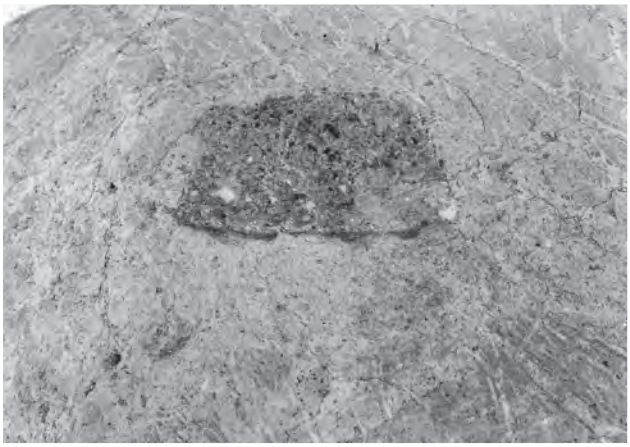
2　11 土坑　断面　　南から



3　12 土坑　検出状況　　北西から



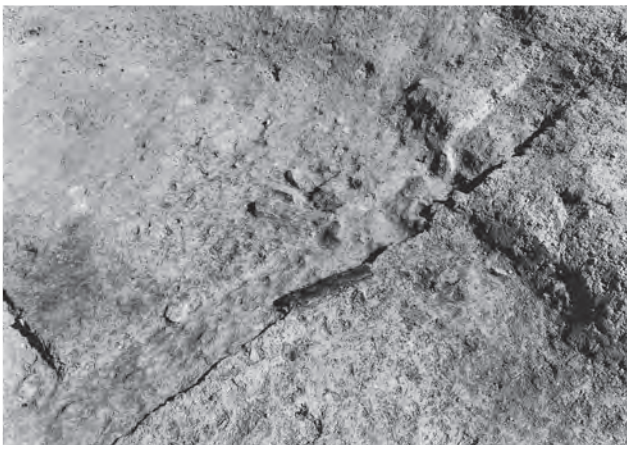
4　12 土坑　炭層（３層）検出状況　北西から



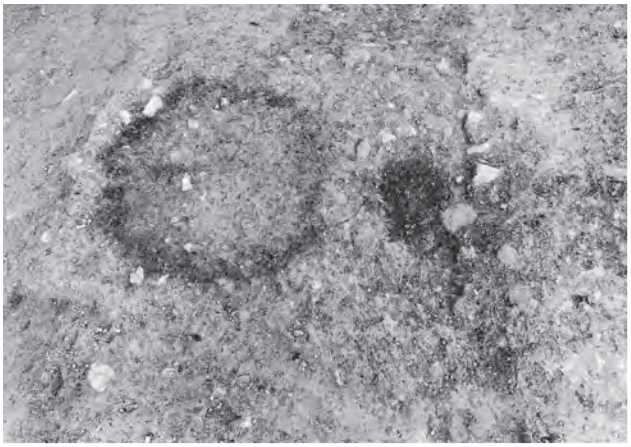
5　12 土坑　炭層（３層）断面　北西から

6　12 土坑　完掘　　北西から

7　17 土坑　検出状況　　南から



8　17 土坑　炭化材検出状況　　西から

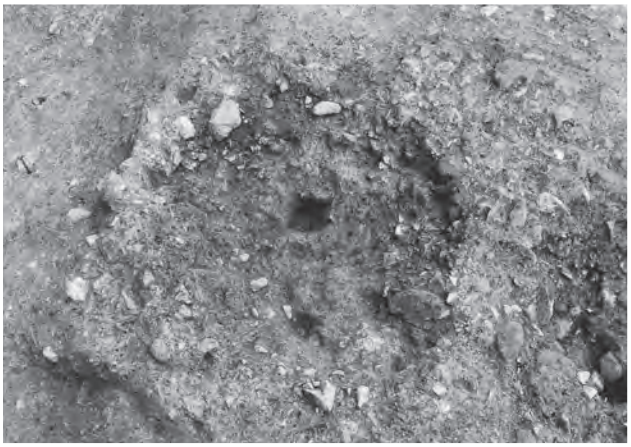


1　13・14 土坑　検出状況　　北西から

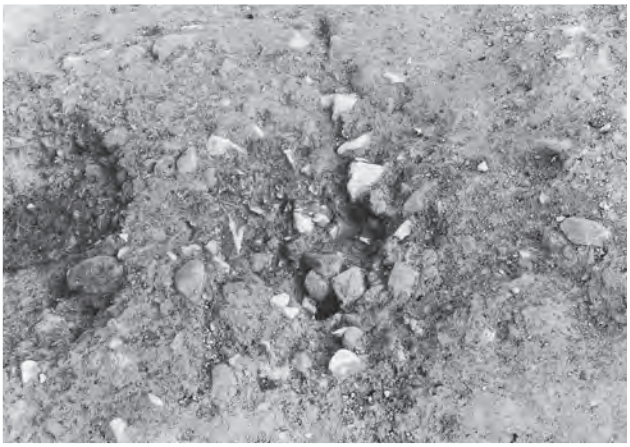
2　13 土坑　上層（１・２層）断面　北西から

3　13・14 土坑　炭層（３層）検出状況　北西から

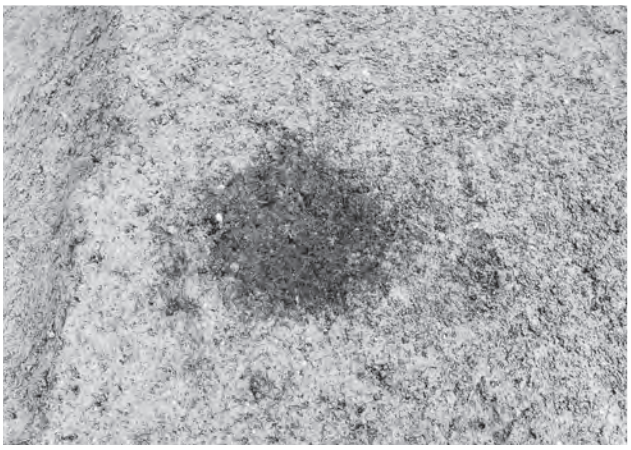
4　13・14 土坑　炭層（３層）断面　北西から



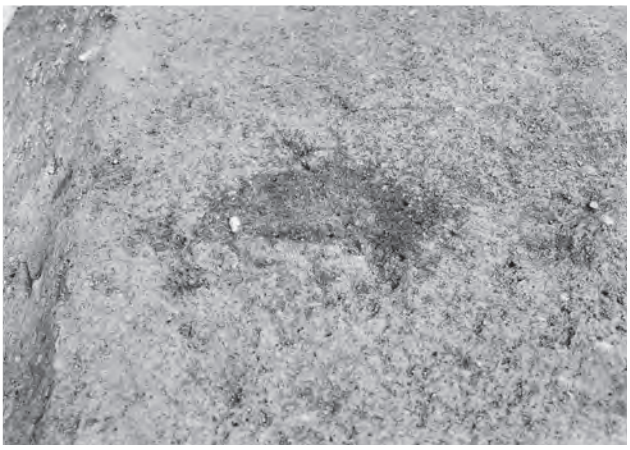
5　13 土坑　完掘　　北西から



6　14 土坑　完掘　　北西から

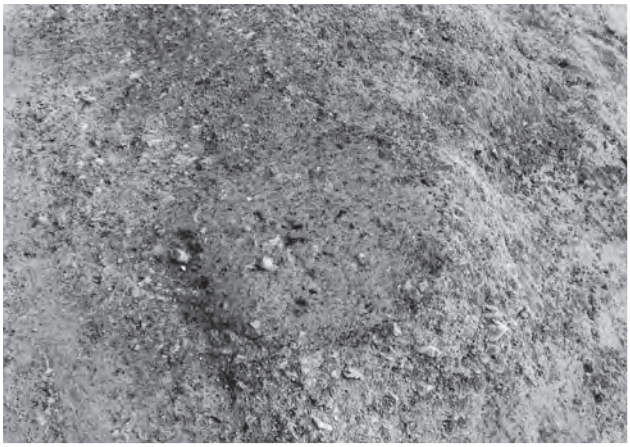


7　20 土坑　検出状況　　南西から



8　20 土坑　断面　　南西から

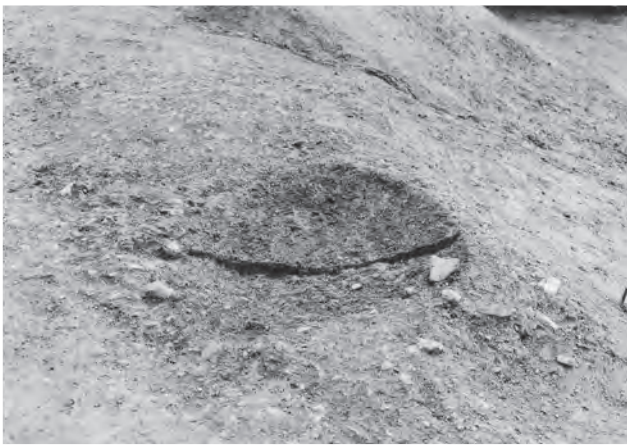
図版 10　山頂　棚田部（6）　第２面



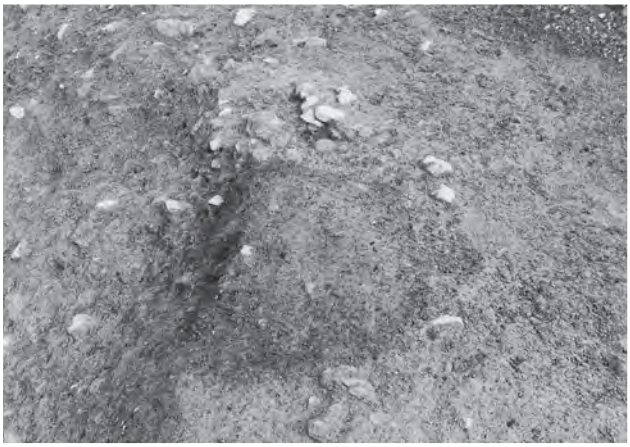
1　15 土坑　検出状況　　北西から

2　15 土坑　上層（1 層）断面　北西から

3　15 土坑　炭層（2 層）検出状況　北西から



4　15 土坑　炭層（2 層）断面　北西から

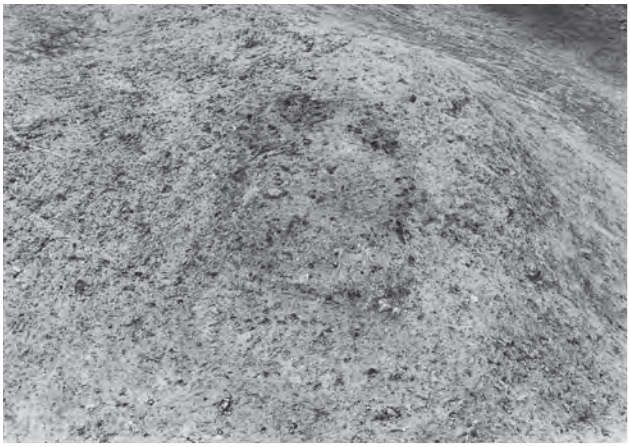


5　25 土坑　検出状況　　南西から

6　25 土坑　断面　　南西から

7　25 土坑　完掘　　北から

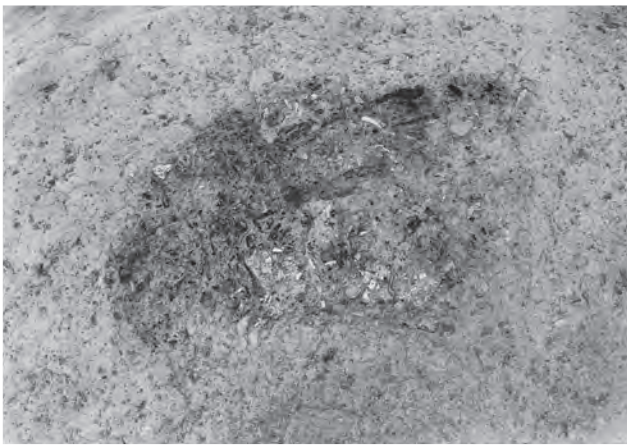
8　25 土坑　被熱痕跡　　西から



1　16 土坑　検出状況　　北から

2　16 土坑　炭層（３層）検出状況　西から

3　16 土坑　炭層（３層）検出状況　北から

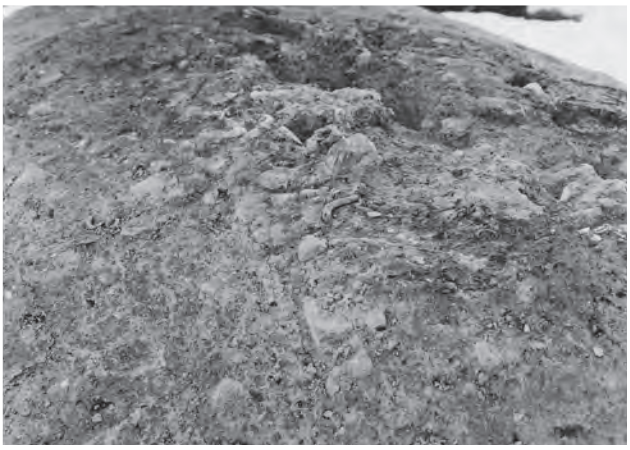


4　16 土坑　釘・骨片・炭化材検出状況　東から

5　16 土坑　釘・骨片・炭化材検出状況　北から

6　16 土坑　釘・骨片・炭化材検出状況　東から

7　16 土坑　完掘　　北から



8　16 土坑　釘・骨片・炭化材検出状況　北東から

図版 12　山頂　棚田部（8）　第２面

1　29 土坑　炭層（3 層）
検出状況　北東から

2　29 土坑　炭層（3 層）
検出状況　南西から

3　29 土坑　完掘
南西から

1　29 土坑　近景　　北東から

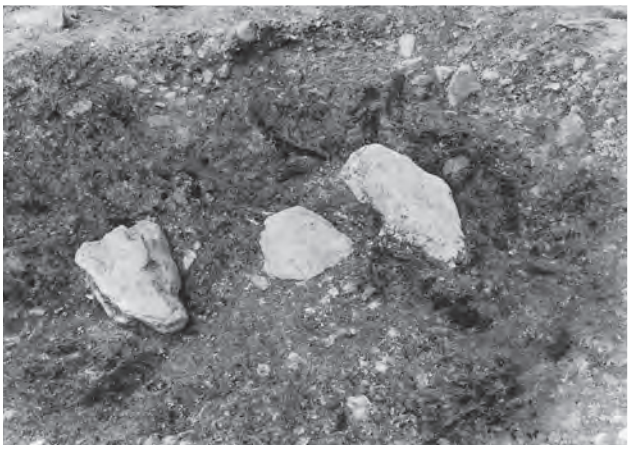
2　29 土坑　検出状況　　南東から

3　29 土坑　炭層（3 層）上面　土師器皿出土状況　南東から

4　29 土坑　炭層（3 層）上面　土師器皿出土状況　南東から

5　29 土坑　上層（1・2 層）断面　南西から

6　29 土坑　炭層（3 層）断面　南西から



7　29 土坑　石周辺　骨片・炭化材検出状況　南東から

8　29 土坑　被熱痕跡　　南西から

図版 14　山頂　頂上部（1）

1　全景（航空写真）　南東から

2　全景（航空写真）　北西から

1　全景　　南東から

2　南東部　　南東から

図版 16　山頂　頂上部（3）　第 1 面

1　１溝周辺　調査前状況
北西から

2　１溝
北西から

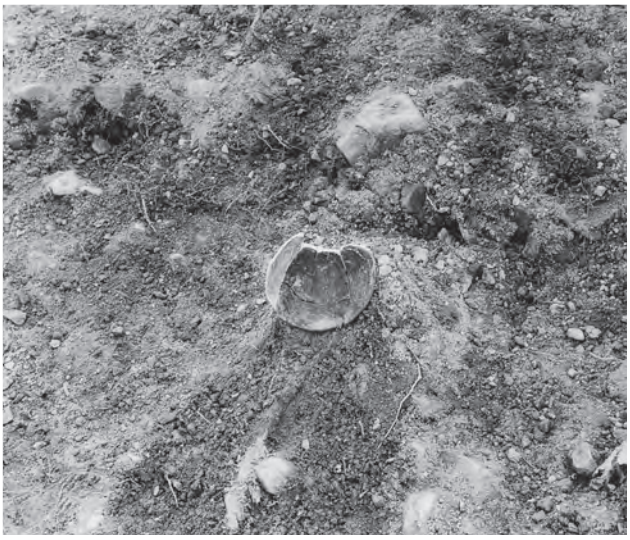
3　１溝　南東部
北西から

1　３土坑
北西から

2　３土坑　　西から

3　３土坑　断面　　北東から

4　瓦器椀（26）出土地点　　南東から



5　瓦器椀（26）出土状況　　北東から

図版 18　山頂　遠構え部（1）

1　調査前状況
北西から

2　調査前状況　遠景
北西から

3　第２面　遠景
北西から

1　全景　南東から

2　全景　北西から

図版 20　山頂　遠構え部（３）　第１面

1　１溝　南東から

2　１溝　断面（Ｉライン）
北西から

3　第２層下面溝等
検出状況
北から

1　全景（航空写真）　北西から

2　全景（航空写真）　北から

図版 22　山頂　遠構え部（5）　第２面

1　全景　　南東から

2　全景　　南から

1　全景　北西から

2　全景　北西から

図版 24　山頂　遠構え部（7）

1　Kライン　断面
北から

2　Kライン
（東斜面部）
断面　北から

3　Kライン
（頂部）
断面　北西から

1　Kライン
（西斜面部）
断面　北から

2　Nライン　断面
北西から

3　Oライン　断面
北西から

図版 26　山頂　遠構え部（９）

1　Ｉライン　断面
北から

2　Ｊライン
第１・３層
断面　北西から

3　Ｊライン
第４層
断面　北西から

1　32 土坑　南から

2　32 土坑　南東から

3　32 土坑　断面
南から

図版 28　山頂　遠構え部（11）　第２面

1　33 堀切　　南西から

2　33 堀切　遠景　　西から

1　33 堀切
北西から

2　33 堀切
東から

3　33 堀切　南北断面　　東から

4　33 堀切　東西断面　　南東から

図版 30　山頂　遠構え部（13）　第２面

1　33 堀切、34 溝　　南西から

2　34 溝　　南から

1　35 土坑
北西から

2　35 土坑　断面
南西から

3　48 ピット　断面　　北西から

4　48 ピット　　北西から

図版 32　山頂　遠構え部（15）　第２面

1　36 堀切　　南東から

2　36 堀切　　北西から

1　36 堀切
北東から

2　36 堀切　北西 - 南東断面　南西から

3　36 堀切　肩部盛土層断面　南西から

4　36 堀切　南西 - 北東断面（南西部）　南東から

5　36 堀切　南西 - 北東断面（北東部）　南東から

図版 34　山頂　遠構え部（17）　第２面

1　36 堀切より城域（左奥）を望む
南東から

2　33・36 堀切　遠景
西から

1　49 集石　南東から

2　49 集石　南から

3　49 集石　断面
東から

図版 36　山頂　遠構え部（19）　第３面

1　全景　　南から

2　全景　　北西から

1　全景　北西から

2　全景　北西から

図版 38　南面斜面から谷　斜面部（1）

1　全景（航空写真）　南西から

2　全景　南西から

図版 39　南面斜面から谷　斜面部（2）

1　中央部　　南西から

2　東部　　西から

図版 40　南面斜面から谷　斜面部（3）

1　石塔出土地点Ａ
断面　南東から

2　石塔出土地点Ａ
出土状況　南東から

3　石塔出土地点Ａ・Ｂ
出土状況　北東から

図版 41　南面斜面から谷　斜面部（4）

1　石塔出土地点Ａ・Ｂ
出土状況　南東から

2　石塔出土地点Ｂ
出土状況　南東から

3　石塔出土地点Ｃ
出土状況　南西から

図版 42　南面斜面から谷　斜面部（5）

1　37・38 土坑
炭層（2層）
検出状況
南西から

2　37・38 土坑　検出状況　南西から

3　37 土坑　断面　南東から

4　38 土坑　被熱痕跡　南西から

5　37・38 土坑　近景　北東から

1　全景　　北西から

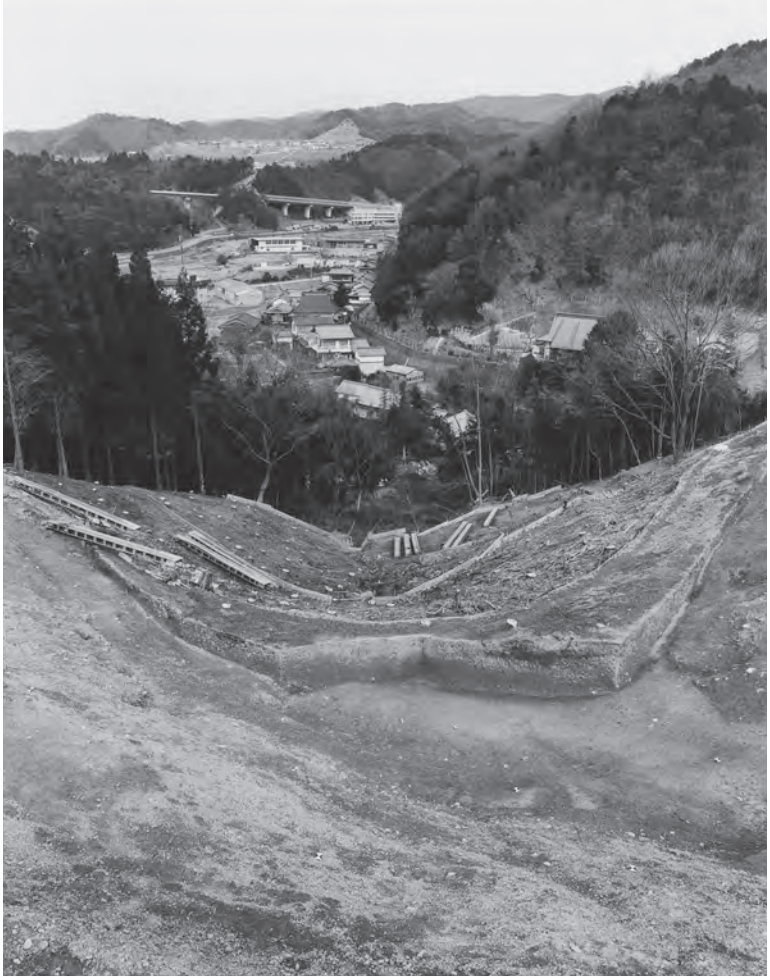
図版 44　南面斜面から谷　谷部（2）

1　南東端最奥部
調査前状況
北西から

2　南東奥部　第３面
北西から

3　第３面　全景
北西から

図版 45　北面斜面　上位から中位部（1）



1　中央部谷筋　南から

2　中央部谷筋　南西から

図版 46　北面斜面　上位から中位部（２）

1　２土坑　遠景
南東から

2　２土坑　遠景
南東から

3　２土坑　遠景
南東から

1　２土坑　２層に伴う土師器皿、石等出土状況　北から

2　２土坑　石組み検出状況　北から

3　２土坑　石組み検出状況　北東から

4　２土坑　石組み検出状況　北東から

5　２土坑　土師器皿（58）出土状況　北西から

6　２土坑　土師器皿（59）出土状況　東から

7　２土坑　下層部断面　西から

8　２土坑　完掘　北から

図版 48　北面斜面　上位から中位部（4）

1　50 土坑　断面　　北西から

2　50 土坑　完掘　　北から

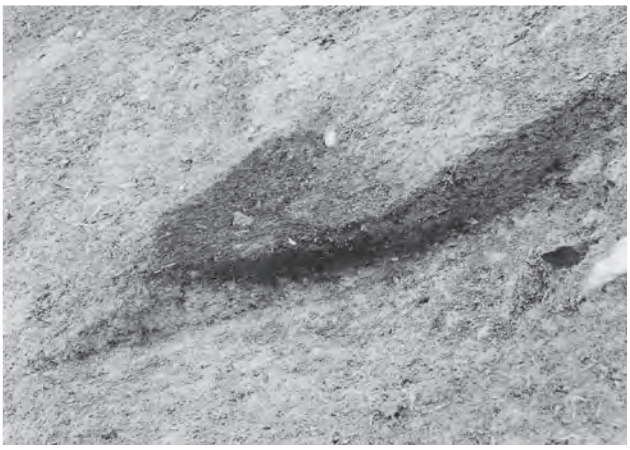
3　57 土坑　近景　　東から

4　57 土坑　検出状況　　北西から

5　57 土坑　断面　　南西から

6　57 土坑　完掘　　北西から

7　58 土坑　近景　　南西から

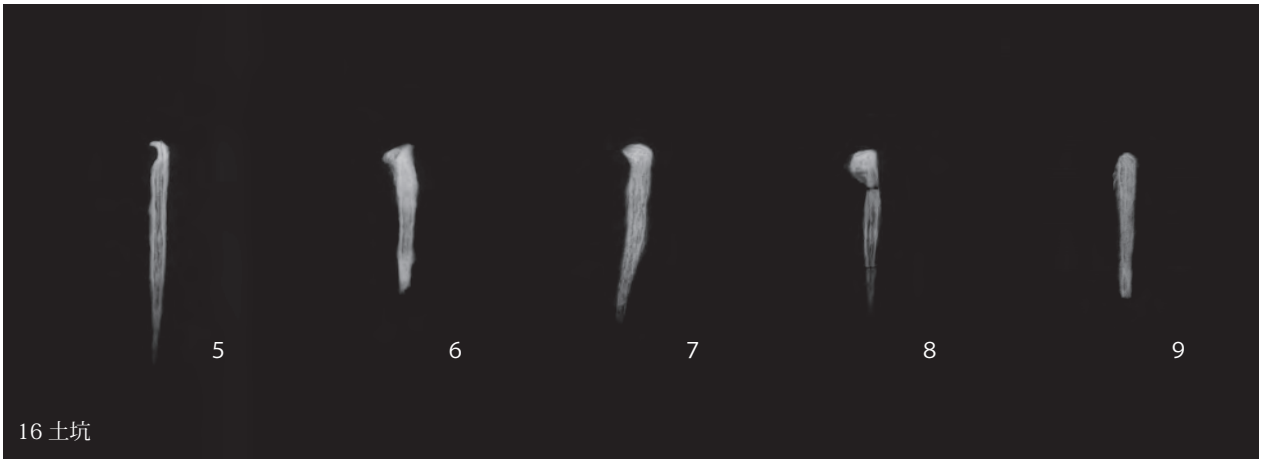


8　58 土坑　断面　　北西から

1　全景　　南西から

2　全景　　南西から

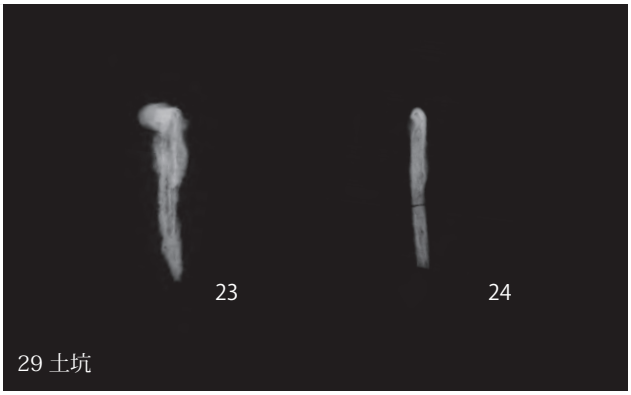
図版 50　山頂　出土遺物（1）



16 土坑

16 土坑

16 土坑



29 土坑

29 土坑　21

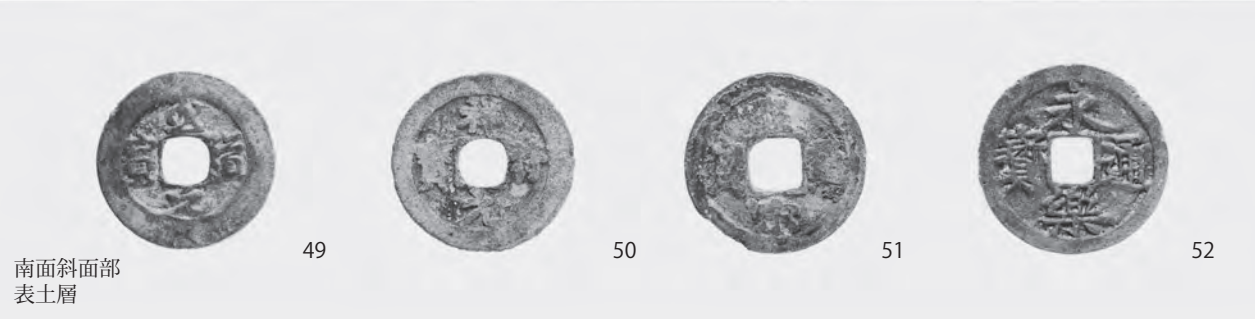
29 土坑　22

図版 51　山頂　出土遺物（2）　南面斜面　出土遺物（1）

山頂頂上部
第 1 層　26

山頂頂上部
3 土坑　25

山頂頂上部
表土層　27



49　50　51　52

南面斜面部
表土層

図版 52　南面斜面　出土遺物（2）

第 1 層　38

第 1 層　39

第 1 層　42

斜面堆積層　44

表土層　46

表土～
斜面堆積層　47

表土～
斜面堆積層　48

図版 53　南面斜面　出土遺物（3）

石塔出土地点 A　31

石塔出土地点 A　34

石塔出土地点 A　33

石塔出土地点 C　35

石塔出土地点 A　32

石塔出土地点 B　36

石塔出土地点 B　37

図版 54　北面斜面　出土遺物（1）

石組み（3層）　57

3’層　58

石組み　59

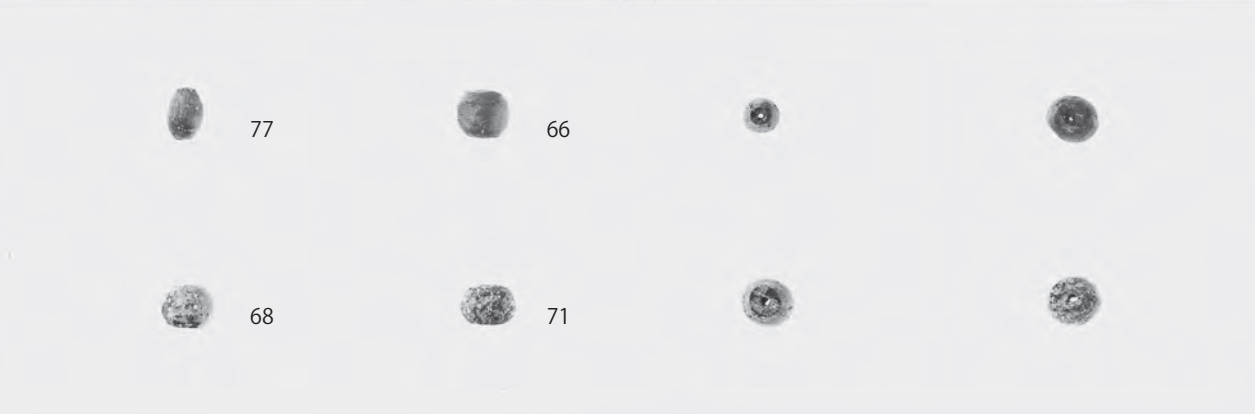
2層　62

2層　61

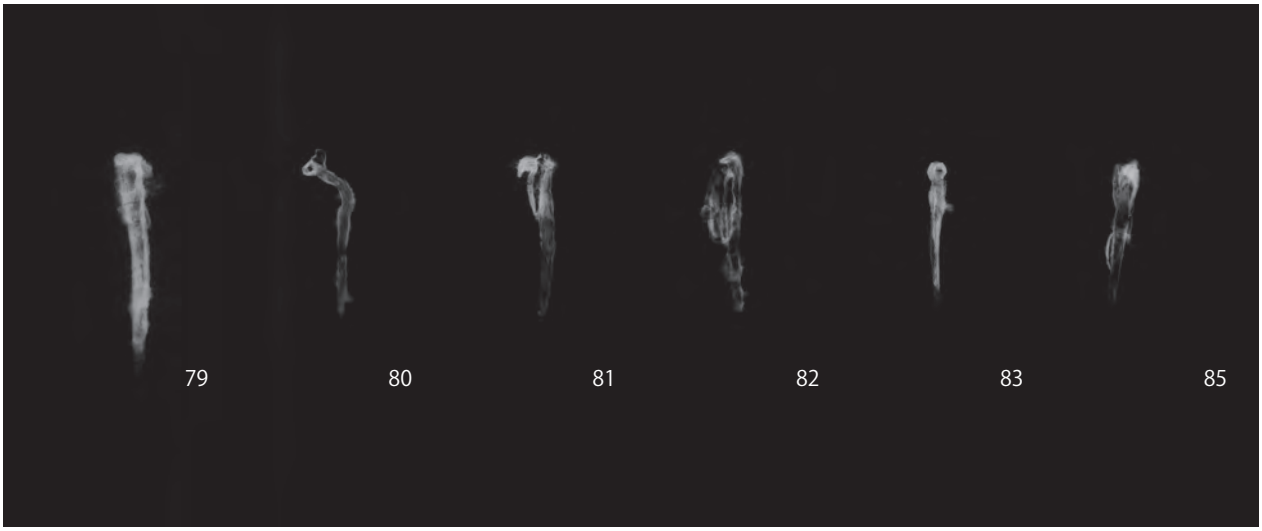
2層　65

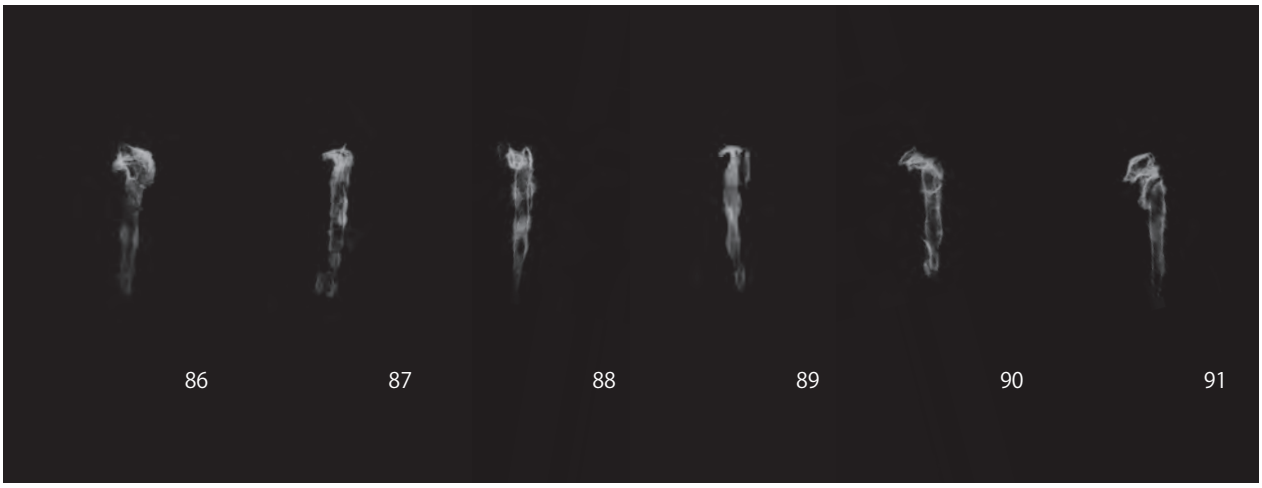
2層　64

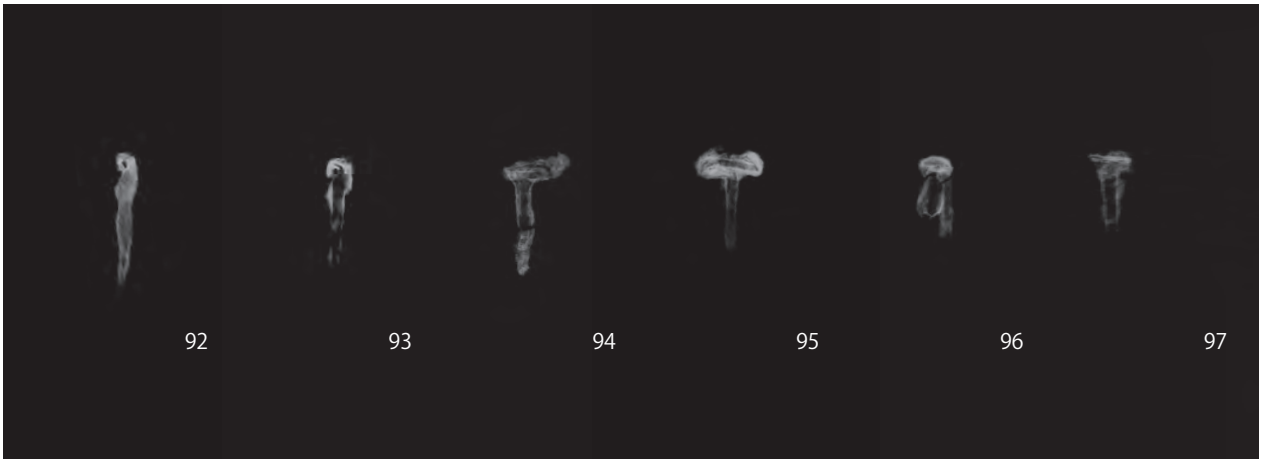
石組み　60

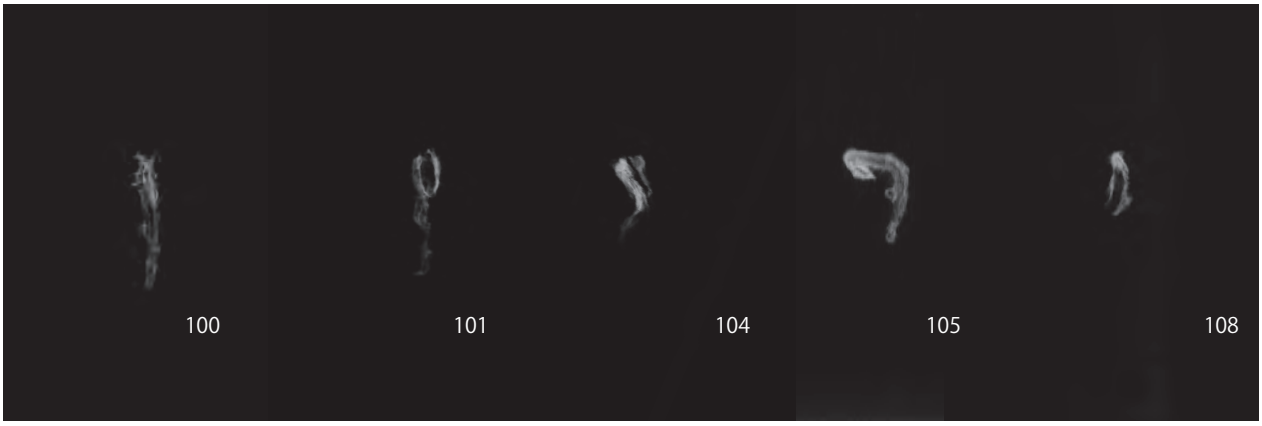


2土坑（1）


79
80
81
82
83
85


86
87
88
89
90
91


92
93
94
95
96
97


100
101
104
105
108

２土坑（２）

図版 56　北面斜面　出土遺物（3）　南面谷　出土遺物

南面谷部
表土層

53

北面斜面下位部
石塔出土地点D

113

報 告 書 抄 録

ふりがな	とどろみじょうあと
書名	止々呂美城跡
副書名	高速自動車国道近畿自動車道名古屋神戸線建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ名	公益財団法人 大阪府文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第246集
編著者名	信田真美世（編）　安部みき子　村田修三ほか
編集機関	公益財団法人 大阪府文化財センター
所在地	〒590-0105　大阪府堺市南区竹城台３丁21番４号　電話072-299-8791
発行年月日	2014年３月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		緯度・経度	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号				
とどろみじょうあと 止々呂美城跡	おおさかふ みのおし 大阪府箕面市 しもとどろみ 下止々呂美	27220	22	北緯 34°52′38″ 東経 135°27′38″	2010．03．25 ～ 2013．04．30	15,580	高速自動車国道近畿自動車道名古屋神戸線建設事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
止々呂美城跡	城郭 墓	中世	堀切・火葬遺構・焼土坑等	土師器皿・瓦器椀・銭貨・釘・伏鉦・木製珠・石仏・組合式五輪塔部材・一石五輪塔等	止々呂美城の遠構え 堀切２本検出 中世後期～近世初頭の火葬遺構

要約	・山頂において、中世後期～近世初頭の火葬遺構を検出した。棚田造成の際に削平を受けているが、斜面堆積層から石塔類が出土しており、墓所であったと思われる。 ・尾根先端の城郭中心部より約300ｍ離れた、尾根が山稜に取り付く手前で、堀切を２本検出した。止々呂美城の「遠構え」として位置付けられる。尾根からの道を遮断していたと思われる。

公益財団法人　大阪府文化財センター調査報告書　第246集

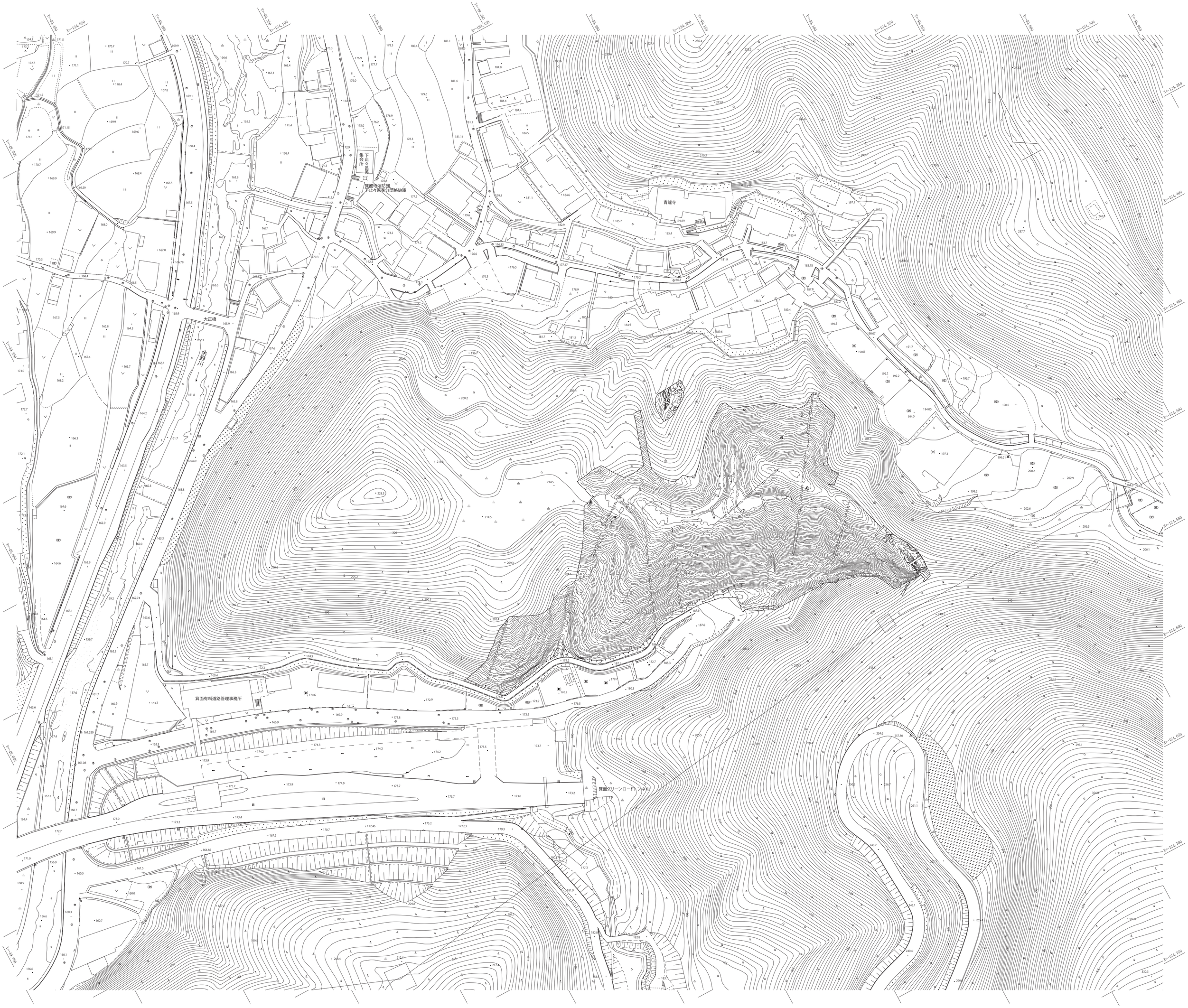
止　々　呂　美　城　跡

高速自動車国道近畿自動車道名古屋神戸線建設事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

発行年月日／2014年３月31日

編集・発行／公益財団法人　大阪府文化財センター
大阪府堺市南区竹城台３丁21番４号

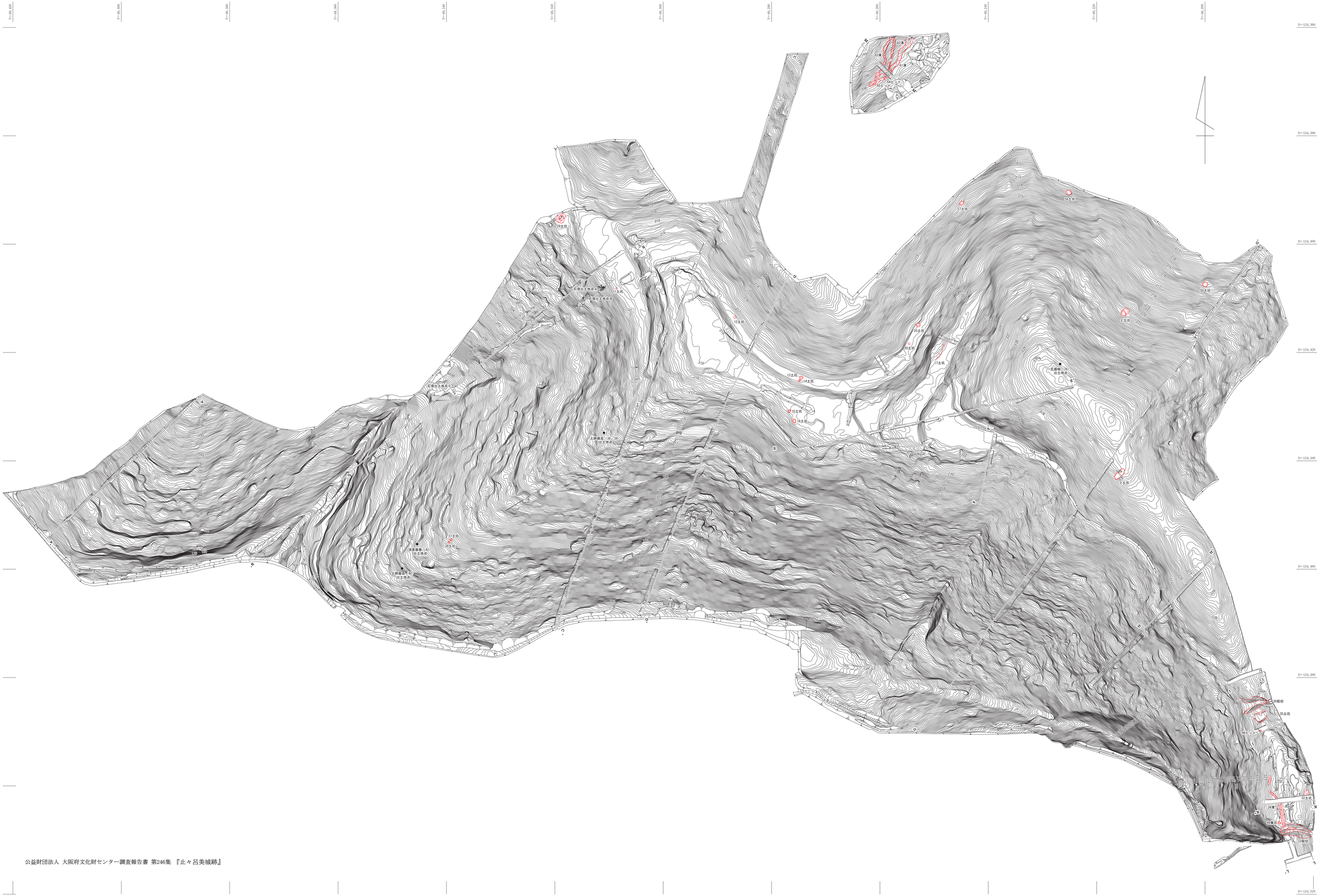
印刷・製本／株式会社　明新社
奈良県奈良市南京終町３丁目464番地



公益財団法人 大阪府文化財センター調査報告書 第246集 『止々呂美城跡』

※調査地内の等高線は0.5m間隔

付図１　止々呂美城跡　平面図　（Ｓ＝1:1,000）


Y=49,420
Y=49,400
Y=49,380
Y=49,360
Y=49,340
Y=49,320
Y=49,300
Y=49,280
Y=49,260
Y=49,240
Y=49,220
Y=49,200
X=-124,360
X=-124,380
X=-124,400
X=-124,420
X=-124,440
X=-124,460
X=-124,480
X=-124,520
61溝
62溝
64土坑
65土坑
66土坑
67土坑
68土坑
69土坑
70土坑
71土坑
72土坑
73土坑
74土坑
75土坑
76土坑
77土坑
78土坑
79土坑
80土坑
81土坑
82土坑
83土坑
84土坑
85土坑
86土坑
87土坑
88土坑
89土坑
90土坑
91土坑
92土坑
93土坑
94土坑
95土坑
96土坑
97土坑
98土坑
99土坑
100土坑
101土坑
102土坑
103土坑